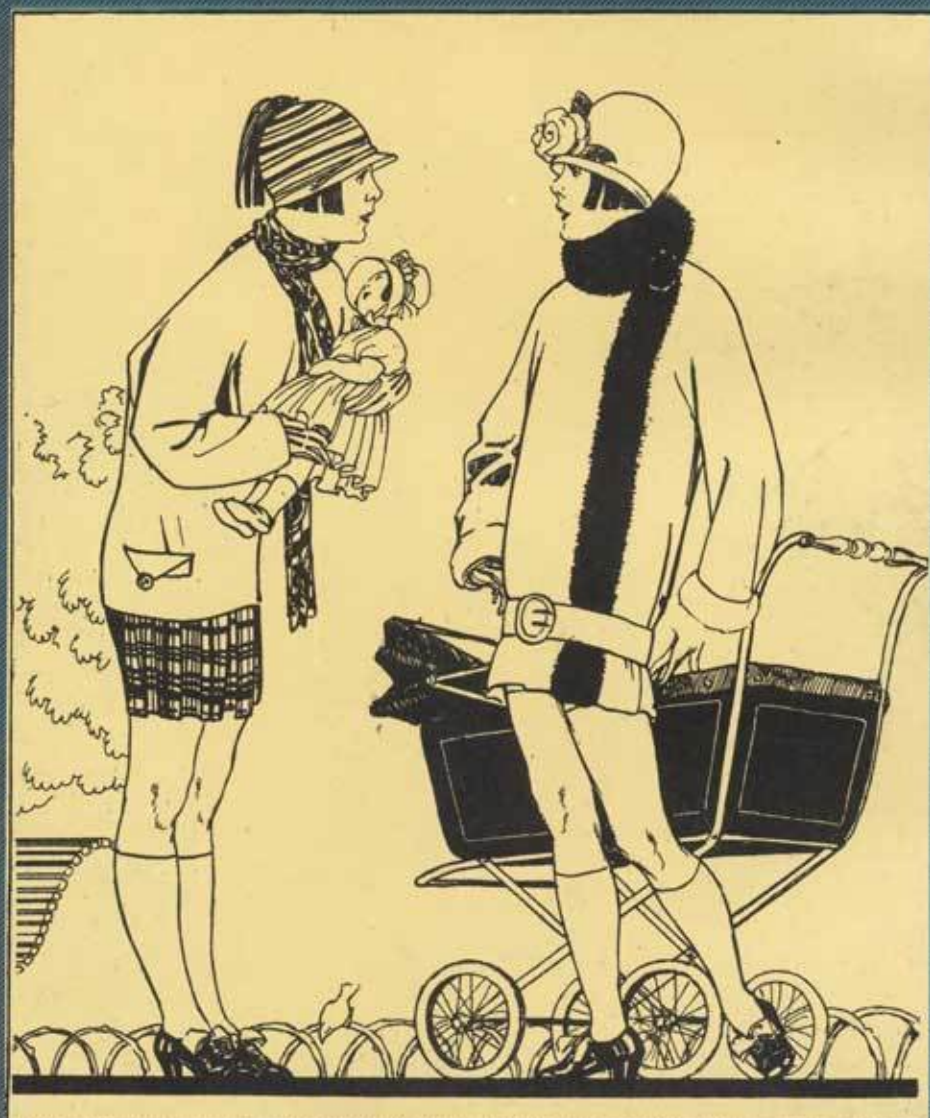


奇譚クラス

新しい風俗文獻誌



1962・12

新鋭・十二月号

昭和三十一年四月二十日印刷 昭和三十一年四月二十日発行 十一月号（第十六巻 第二号 毎月一回 一日発行）

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日国鉄大崎特製紙承認 第一二二号

奇譚クラス

12月号

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



日本版
サド侯爵虐絵巻

21種×15種(本誌の大きさ)
九枚一組五〇〇円(送共) 略号「さ9」

の一般書店にては一切販売いた
しません。願ひ非直接お申込み下
さるよう。お願ひ致します。

内容はサド侯爵と自称する或る
億万長者の青年が、その巨大なる
富を背景として訓練し、美貌のう
る女性を飼育して訓練し、嗜好する
という華麗にして熾烈なサド・スト
リーの完全絵画化であります。



いだが、その真白い肌をくねら
せて踊り狂うのだ。
六、浴室の女神（むつちりと肉のつ
いた女体にグルグルと巻いた太い縄
が水を吸って縮み、足を釣られた女
神の後ろを放つ清純な美女がムチうたれ
七、蛙腹の実験（水道の蛇口からゴ
ボゴボと否応なしに口に注がれ、き
のやなお腹が妊婦のように膨らむ
八、アクロの舞（アクロバットの前
歴をかってボクは君に、こんな奇妙
な恰好を強要している。闇に輝く女
体は素晴らしい舞踊だ）
九、排泄の図（さあ、鏡にうつった
お前の姿をよこして抱っこされてオシツ
コするのだよ。さあ、オシメカパー
をはずしませようね）



M
フォト三十態

注文略号 (末30)

若々しくハツラツとした美しい女性の豊かな尻に敷かれて、あらゆる羞しめを与ええられるM男の生感を馬上の美女を主体として描いたMFオト集です。マゾモデル募集に応じて合格したこのM男は、さて、どんなようにして虐められるでしょうか。全部未発表のとおきの資料を提供いたします。凄い迫力で注文殺到の(ま30)を是非どうぞ！



ふよかな真白い脚で首を絞められて、息もとまるような恍惚感におぼれて、白羽二重のような足の裏でぐつたりと顔を押さえつけられて、絶息の瞬間の感激を味わい塩からい足の指の汗をたっぷりと舐めさせて頂く倒錯感の絶妙。

身も心も、骨のずいまでも屈伏させられたという被虐感を、いやという程叩き込まれるポリウムのある美女の臀部は、どっしりの頭の上に据えられて、顔がひしげてしまうのではないかと思うほどの荒々しい馬の乗り様、背中に乘られて逆にとられ



た後の痛さが、更に一層の屈辱感をもつて迫つて男の自尊心を踏みにじつて了う。

顔乗り、馬乗り、尻敷き、足抵め、踏みつけ、鼻ひしやげ、首締り、胴締め、ヘッドロックと、美女によつて痛めつけられる、汚辱といやという程植えつけられる場面が三十三態にわたつて、女王様の勝手気ままなふるまいによつて、次々と派手に展開されてゆきます。

Mマニアの要望によつて構成したた第一回目のMフオト集です。もののは試し、一度ごらんになつては如何ですか。

連続吊り責フオートの決定版、未発表の秘蔵版

梨花悠紀子吊責写真特集

第一集

逆エビ吊り
略号(りつ1)

A5判 (21×15 糎) 感光紙焼付
十枚一組 五〇〇円(送共)

第二集

逆胴吊り
略号(りつ2)

A5判 (21×15 糎) 感光紙焼付
十枚一組 五〇〇円(送共)

吊責にあえぐ美人モデル 梨花悠紀子嬢の裸身があますところなく、あらゆる角度から鮮鋭なるレンズによってキャッチされた、その全身の悦虐の表情を、皆さまの目のあまりに見ていただくために、A5判(21糎×15糎)の大きさに廓大いたしました。宙にういた梨花嬢の悶悦の姿態は、大きな画面と相まって刻明に手にとるように眺めることが出来る吊責フオートの圧巻であります。この全写真は、吊責愛好の梨花悠紀子ならではの到底実行できないであろうと思われる強烈なものばかりであります。



全身をぐるぐる巻きに縛られて吊り責めにされてみたいというのは、マゾヒスト梨花悠紀子嬢の第一の念願でした。彼女の願う強烈にして苛烈な本格的な吊責。彼女の思うままに、何ら手心を加えることなく、S派の第一人者辻村隆がピシピシと縛り上げて滑車により吊上げた連続場面です。

余りの強烈さと刺戟の強さに口絵としての使用を遠慮されていたものですが、ここにマニヤの強い要望により分譲品として同好家の方に限りお譲りすることにしました。梨花悠紀子嬢の均整のとれた姿態が吊責という妥協のない緊縛方法によって決定的な効果を打ち出していることを信じます。



第一集(逆エビ吊り) 十枚一組

両手首は後手に括られて、曲げた両足首と共に逆エビに緊縛された梨花嬢の肌には深々とロープが喰い込んでいる。ギリギリ、ギリギリと滑車を引き上げるとううう、と、思わず彼女の口から悲鳴が洩れ、じりじりと全身が浮き上って、苦悶の表情が彼女の顔面から、次第に足の爪先にまで伝ってゆく。高々と吊り上った美しい逆エビの裸身――。

第二集(逆胴吊り) 十枚一組

ヒューツという悲鳴も口にかまされた猿ぐつわによって、くぐもってしまふ。縄は徐々に滑車によって巻き上げられて頭を下にした全身は宙に浮いてきた。二の腕に、太股に、胴体にひどい程埋れてしまふ縄目。宙ぶらりんとした裸身が吊り縄を中心として、ゆるく回る。時間が経つにつれて苦痛が次第に増してくるが、彼女はまだ頑張っている。

凄絶！とっておきの未発表吊り責め写真の秘作、ここに堂々発表乞御期待

法悦境表情集

塚本鉄三・撮影・構成

一 ヤ 若妻マニヤ恍惚の表情……………関谷富佐子
ラビ 悦唐の表情とその刹那……………梨花悠紀子
第 グ 陳列窓の縛り女体……………大塚啓子
憂囚の麗人のあるポーズ……………絹川文代

絵口頭巻

四馬孝案並に画「コケシの笛」(新案サルグツワ)……………四馬孝画
責画「人參の嵌口具」……………四馬孝画
女体切腹「女賊の腹切」……………滝れい子画
マソの構図「足の裏責め」……………滝れい子画
アイデア画「オムツと浣腸」……………四馬孝画
力作二題「ゴム長靴の水」……………四馬孝画
「ベビー・カー」……………四馬孝画

緊縛場面摘要

杉原虹児・構成

ニヤ 臍窩の愛嬌……………梨花悠紀子
ラビ 縛られた柔軟な姿態の種々相……………絹川文代
第 グ エビ責めと逆エビ……………水本茂美子
祭壇のいけにえ……………大塚啓美子
縄目アップセレクトション……………水本茂美子

絵と文「煙草責」の構成とアイデア……………洗井保(34)
首シリーズ「研究資料」……………築地一郎(38)
女武者の討死と生首……………築地一郎(38)

緊縛フォト撮影の実際

(若妻をモデルとした構成)

塚本鉄三(48)

△告白△女装に魅せられて……………朽木博(54)
未完の告白 渦(私の自己愛序説)……………畑晃一(60)
「通信」夫婦のSMプレイ……………新宮明夫(64)

「奇譚三十九夜」物語(第二十夜)……………辻村隆(66)
アブチック・ショート 或る日の三事件……………桂慶一(80)
△読者の手記△女サジストの記録……………針井美香(82)

「奴隷国探検」サルジニア探訪記……………阿留品又怒(88)
(浣腸に関する裏話) 看護婦さんとの会話……………山岸操(96)

連載小説 女と蛇 ③……………花巻京太郎(100)

MS対話 芝居の稽古……………中野三郎(111)
長篇SM小説 宇宙のどこかで……………佐治麻造(114)

△アブ随筆△ お臍のあれこれ……………南方佳男(132)
「懸賞告白」 刺青恋慕……………宮島悟郎(136)

映画時評 松竹「切腹」に就いて……………渡部かね(142)
女体切腹の構想 保険勧誘員の腹切……………須藤律夫(144)

マソ芸術考「女性男装管見」……………田島直士(148)
(読者投稿) ゴムマニヤの弁……………斎藤七郎(154)

小説 深い山荘のアトリエにて……………中原勲(156)
映画に観るアブ空想の世界「斬る」……………中西均哉(168)
緊縛カレンダー「一年の女」……………大忠(170)
フィクション「ガラスに憑かれた男」……………二木良雄(172)



画の大きさ A5判

(21 纏×15 纏) 感光紙焼付
六枚一組 五〇〇円、略号 (か6)

一、組上のいけにえ、(台上でエビのように二つ折りにされた全裸の女体に今まさに加えられようとする浣腸器の悪魔のような跳梁をじっと耐える彼女。)

二、高圧空気浣腸、(百ワットの電光に明るく照らし出された女体に、高圧ポンプの先から、空気がドンドン送り込まれる恐怖が鮮やかに描き出される。)

三、蛙腹の注水実験、(手と足を鎖に吊られて宙に浮いた白々とした女体。その鼻孔にはイリリガートルの嘴管が水をどくどくと腹の中へ注ぎ込んだ。)



四、浣腸責の最高頂、(竹の棒によって、両足を八の字に開かされたイケニエは、目の前にある恐ろしい器具に、思わず全身を硬直させてしまった。)

五、排泄に耐える、(豊満な張りきれるばかりの女体を一本の柱に宙じばりにされて、浣腸の洗礼を受けた彼女が便器を前にして耐えに耐えぬく悲壮感。)

六、奇妙な便器、(彼女の体内には、五〇CCのグリセリンが注入されて荒れ狂っている。奇妙な型の便器が彼女の使用を待って、あざ笑っている。)

画に並案・孝馬四

女体浣腸嗜虐場面図

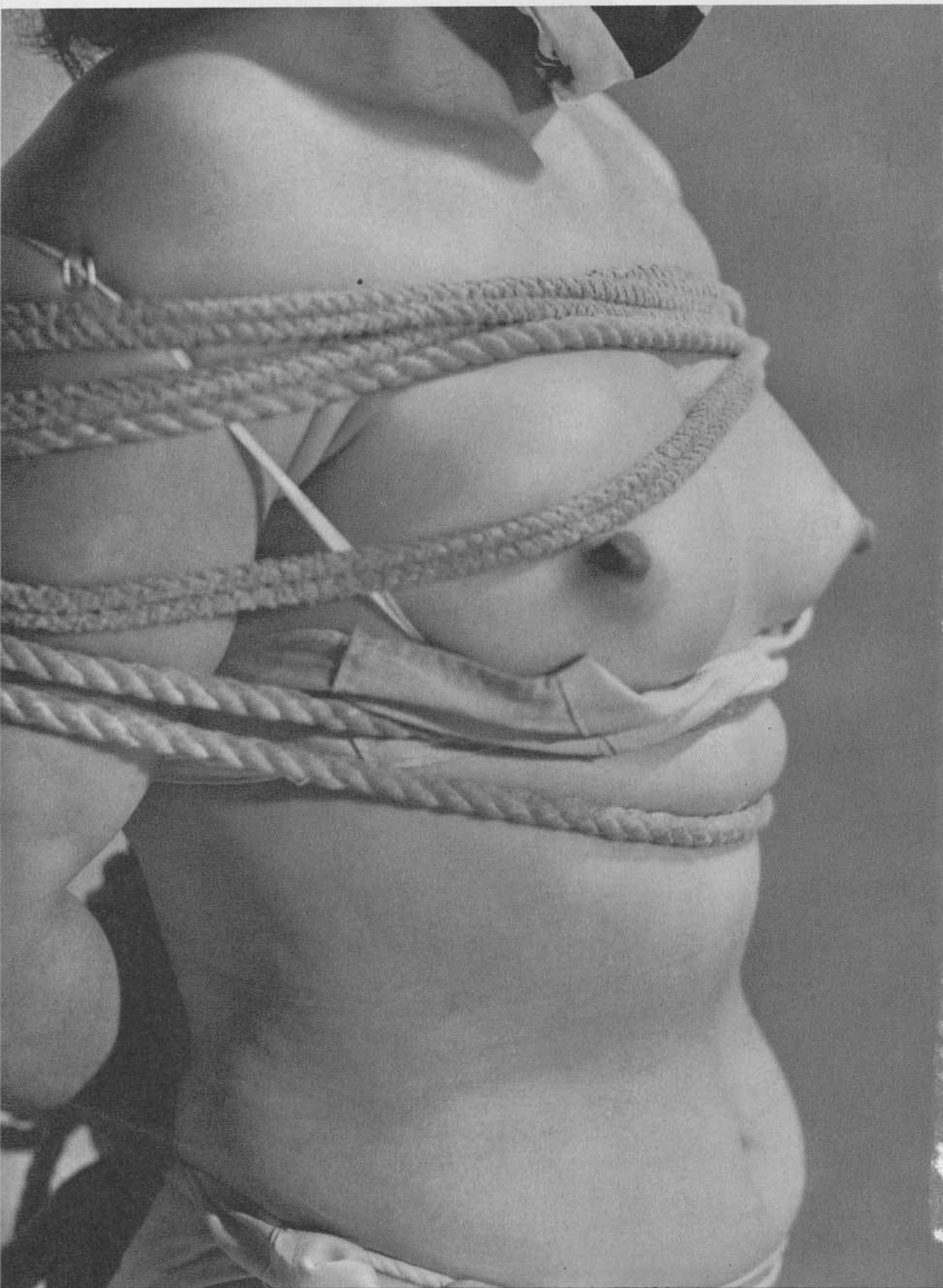
(うら若き麗人、強制的に浣腸を施される図)



◎浣腸愛好者のために、特に浣腸を主題としたショッキングな場面ばかりを四馬孝画伯の豊富なアイデアによって描面して貰った力作揃い、従来兎角口絵から締め出され敬遠され勝ちだった浣腸のテーマを、ここに見事に完全に絵面化されました。

女性に對する浣腸について大きな関心を抱いている方々から、の久しい間に亘っての要望も、まいろいとの制約のため成果に得見果てぬ夢の一端でも満足して頂こうと、この四馬氏を煩して数々の変化ある姿態、背景、小

道具等によって、美しい画集として完成して頂きました。浣腸マニヤの方は勿論のこと、Sマニヤの方にとっても、非常に興味がある画面の展開がたのしみです。どうか、浣腸マニヤのため、特に作成したこの画集を、支援下さるようお願いいたします。

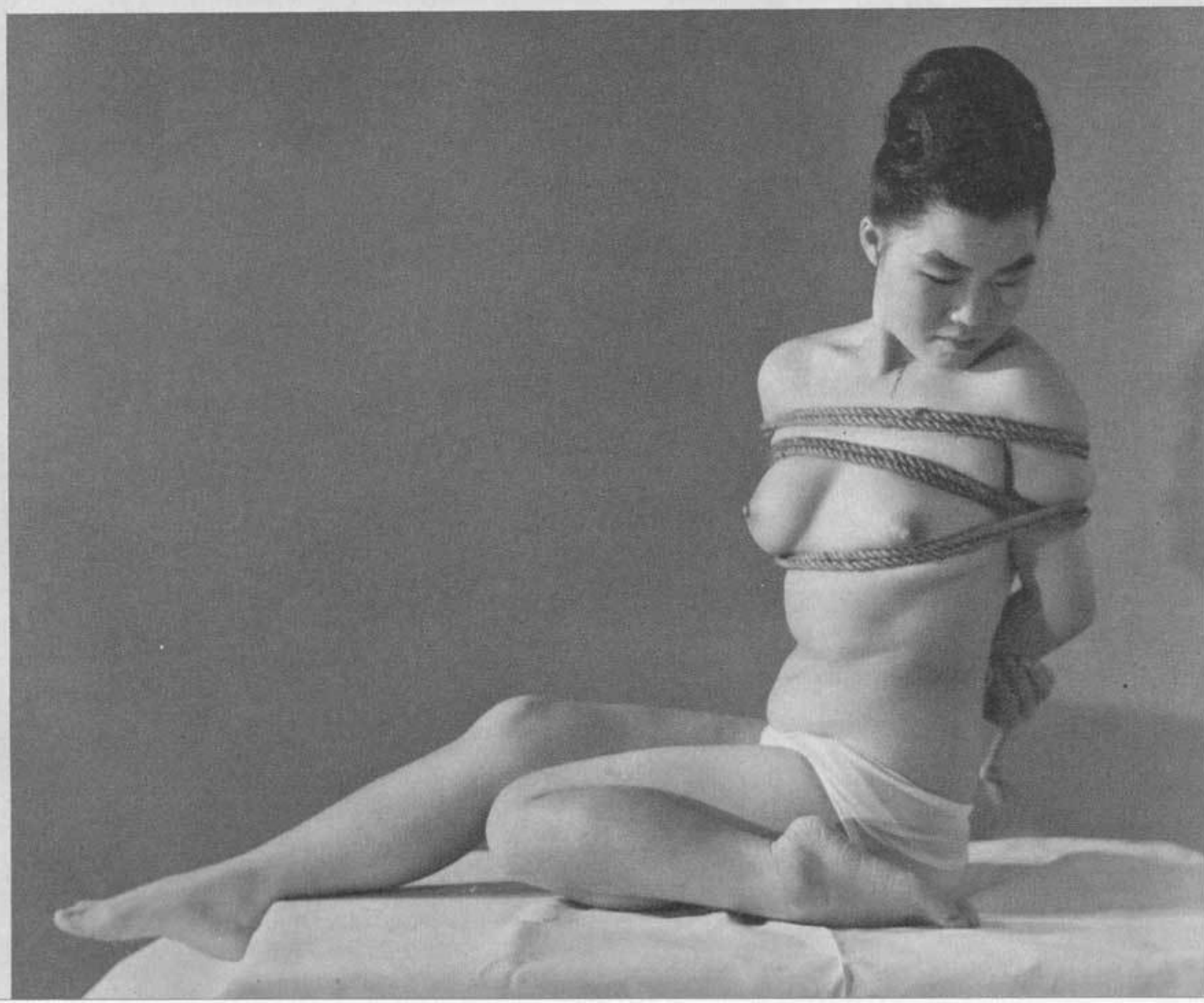


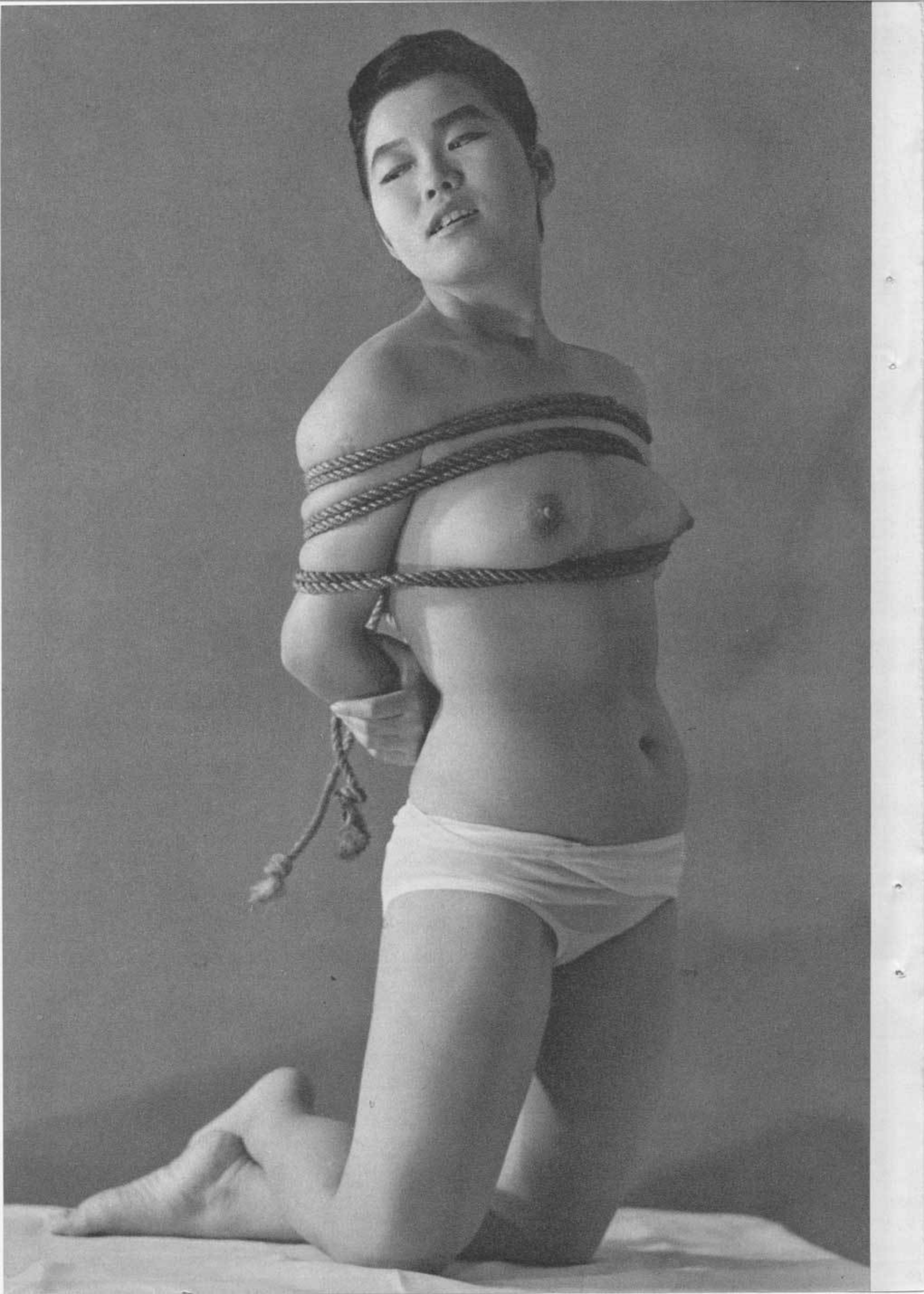














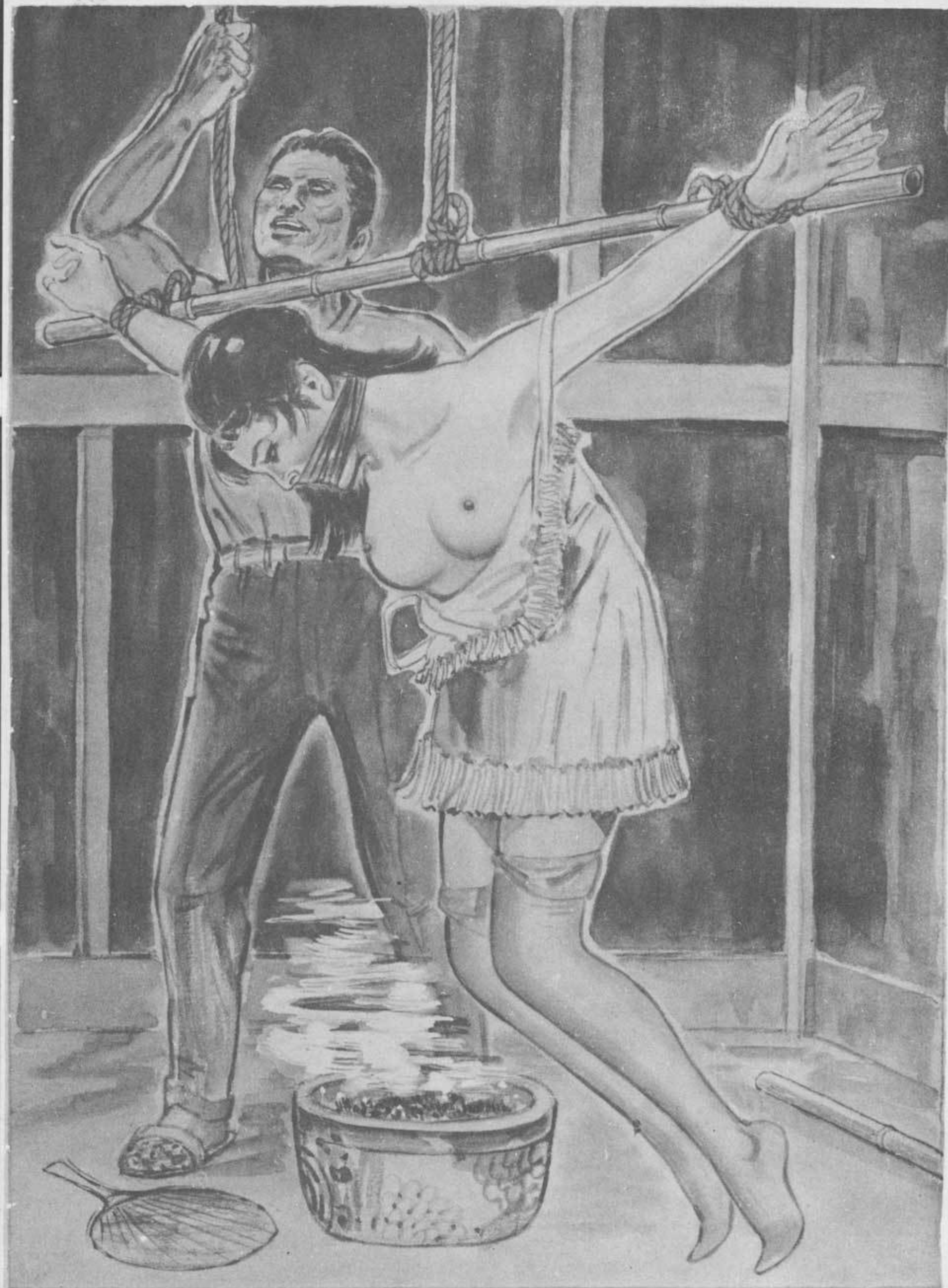
コケシの笛

四馬 孝・画





人參の嵌口具



あれよ今
女賊腹切る
大屋根の
片割れ月は
血の色に
凍あし



女賊の切腹

足の裏責め

瀧 れい子・画





おムツと浣腸

ゴム長靴の水

四馬 孝・画



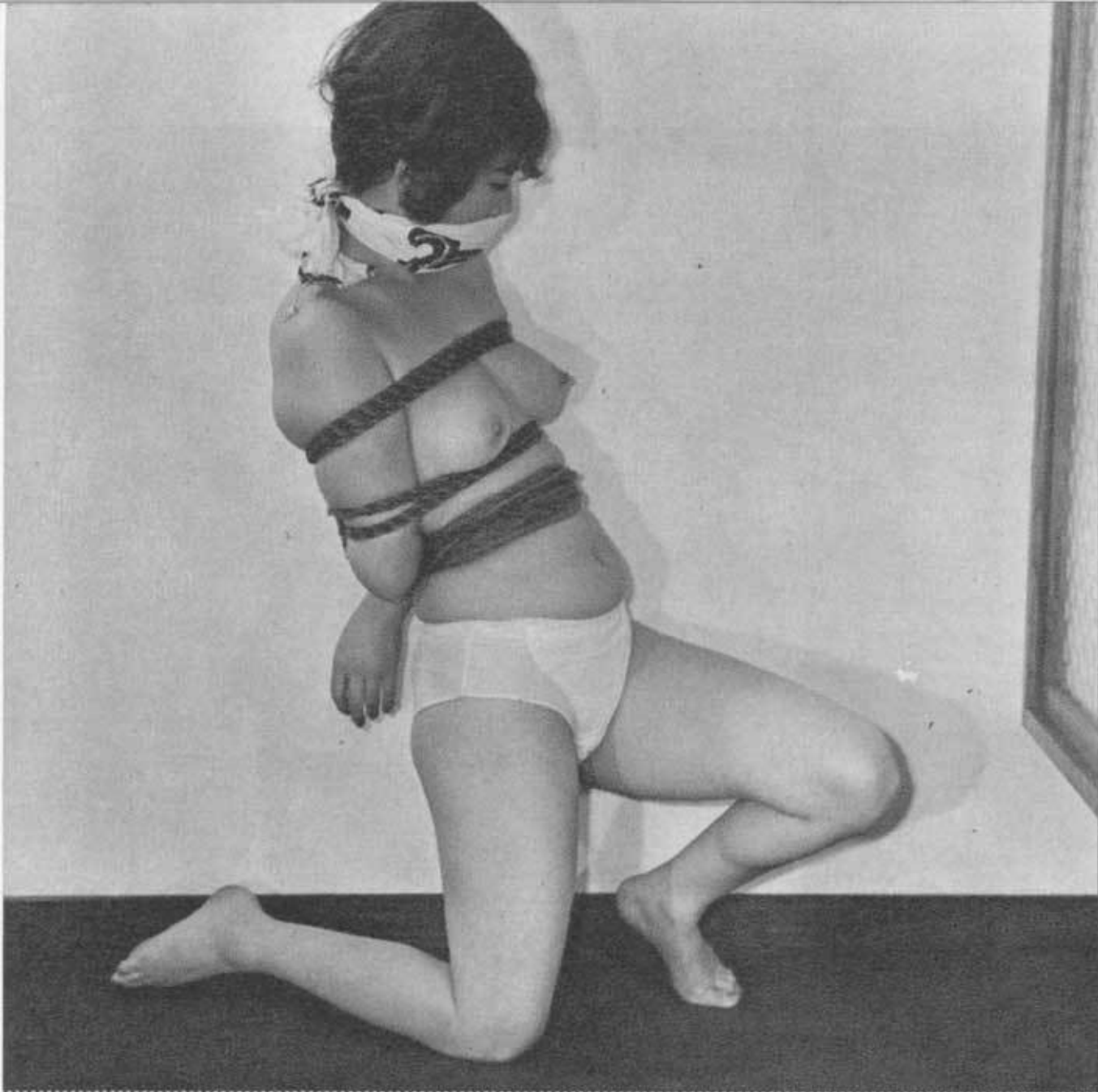
ベビー・カー

四馬 孝・画

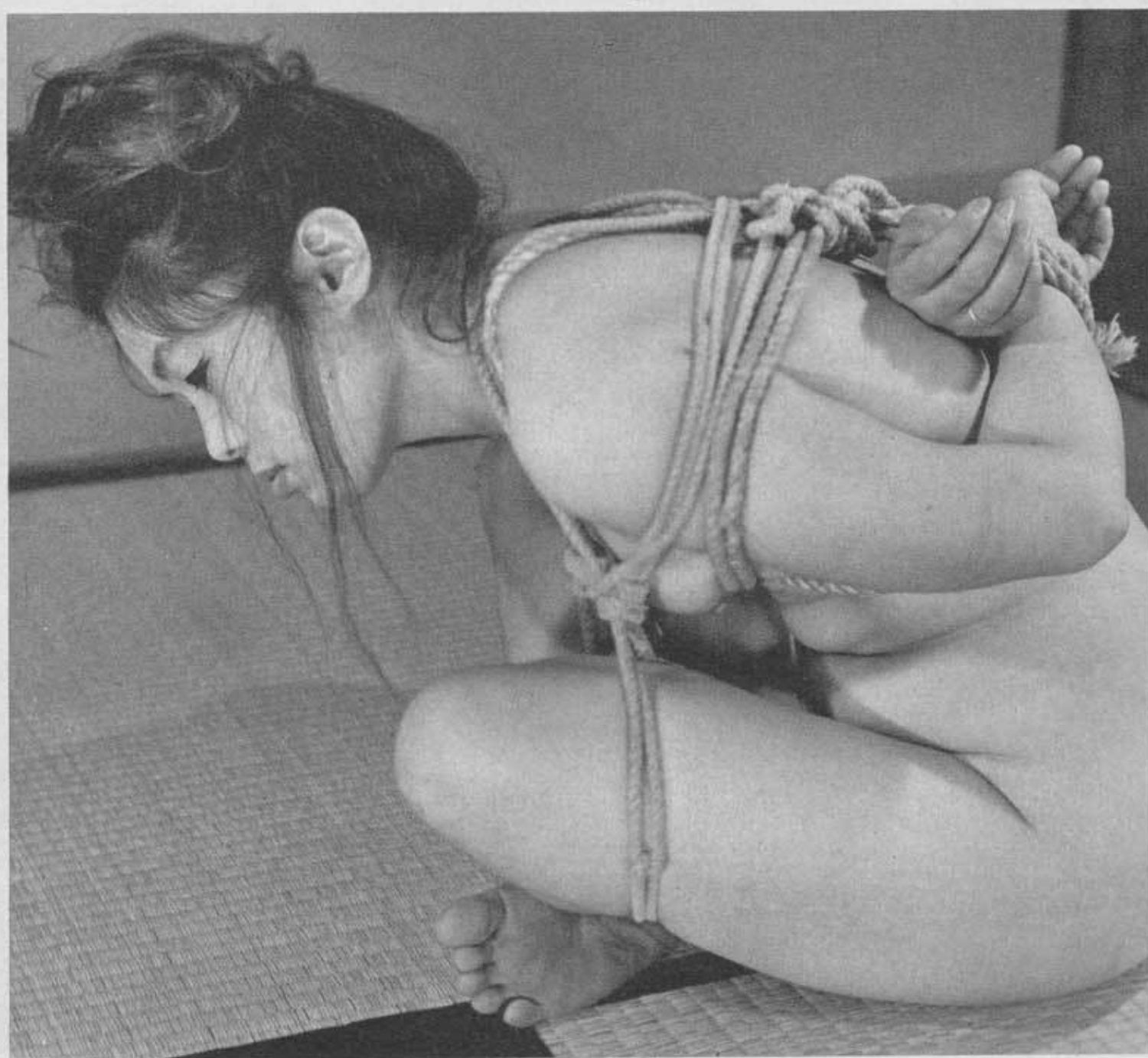


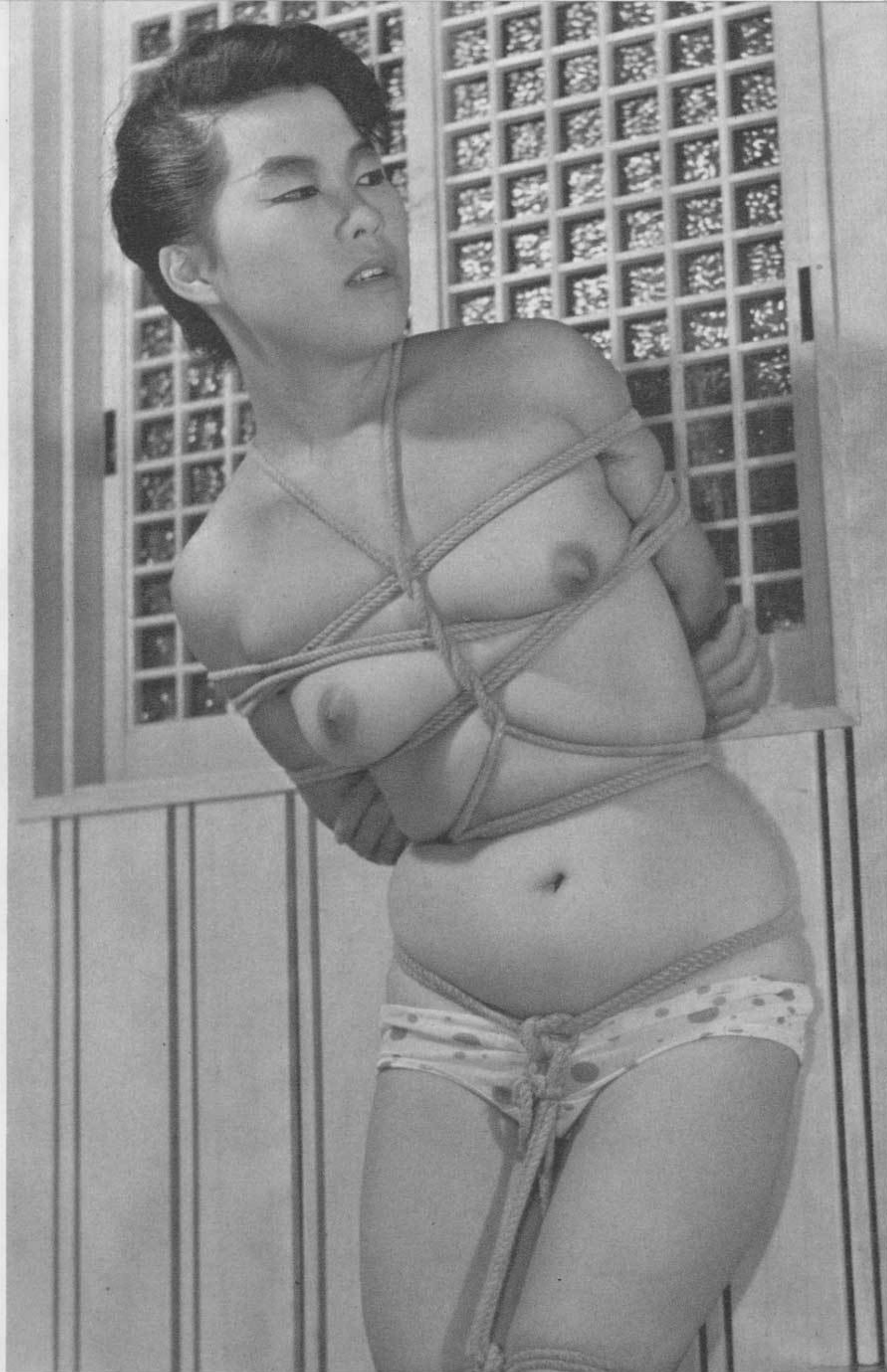


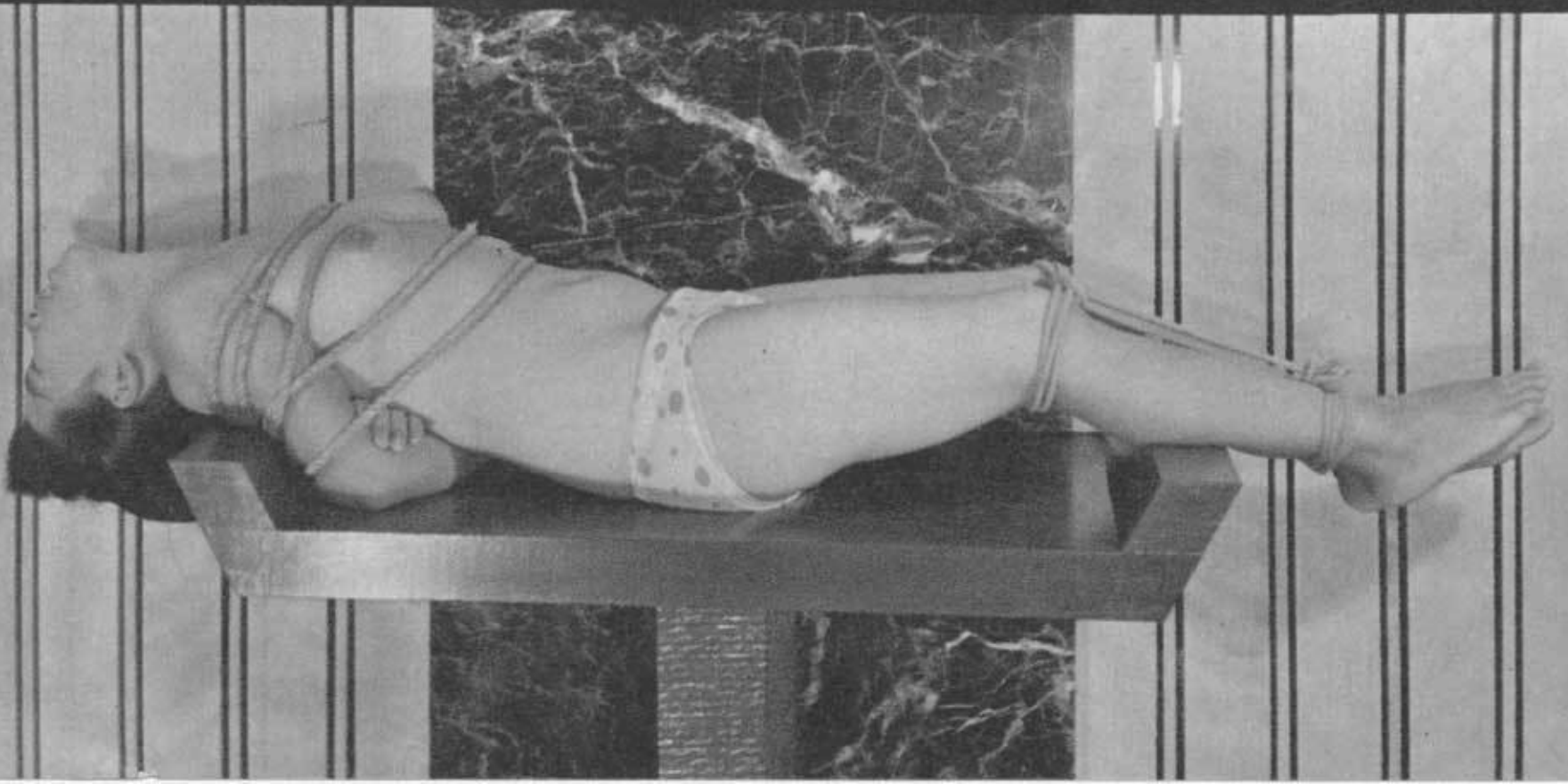
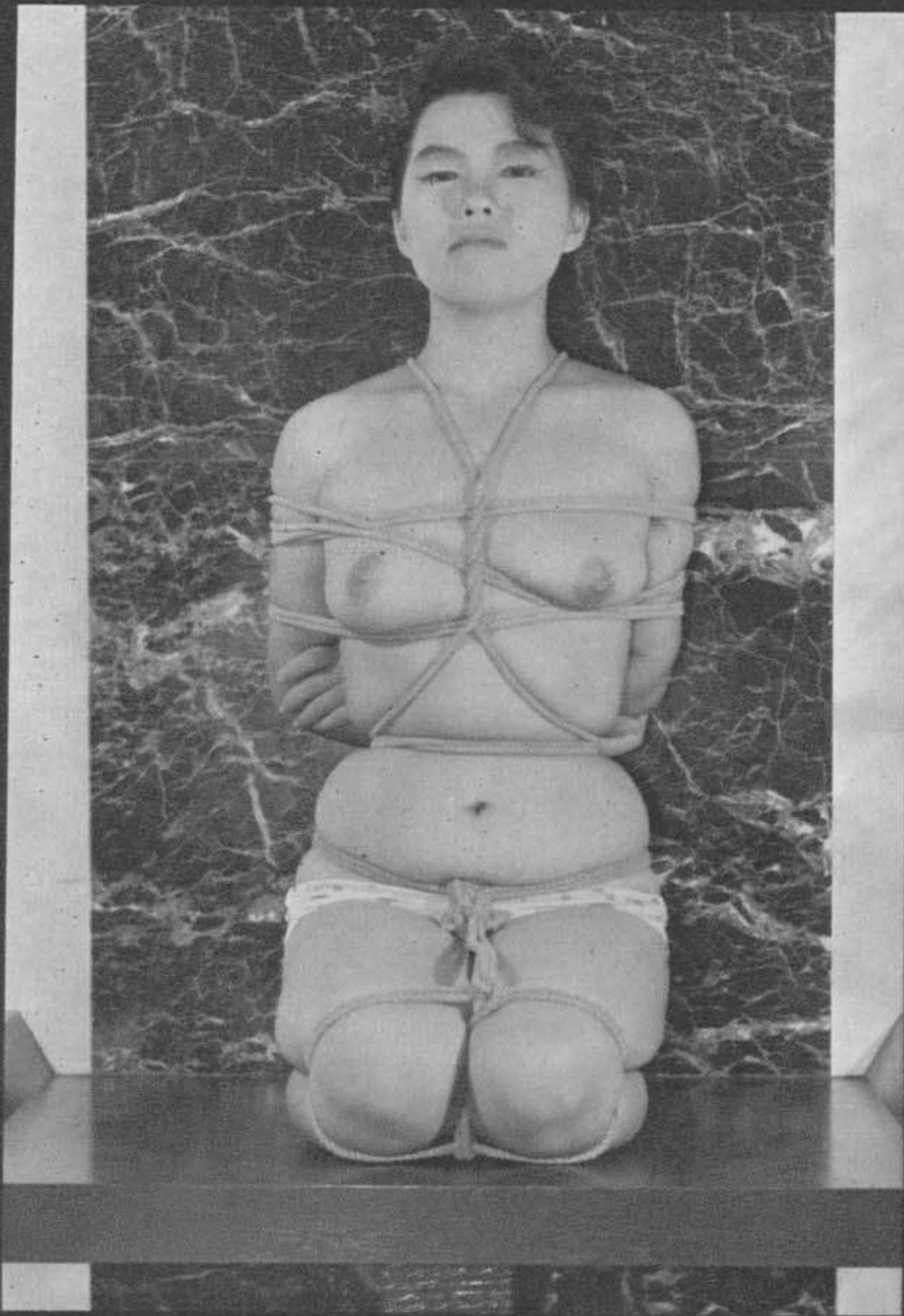


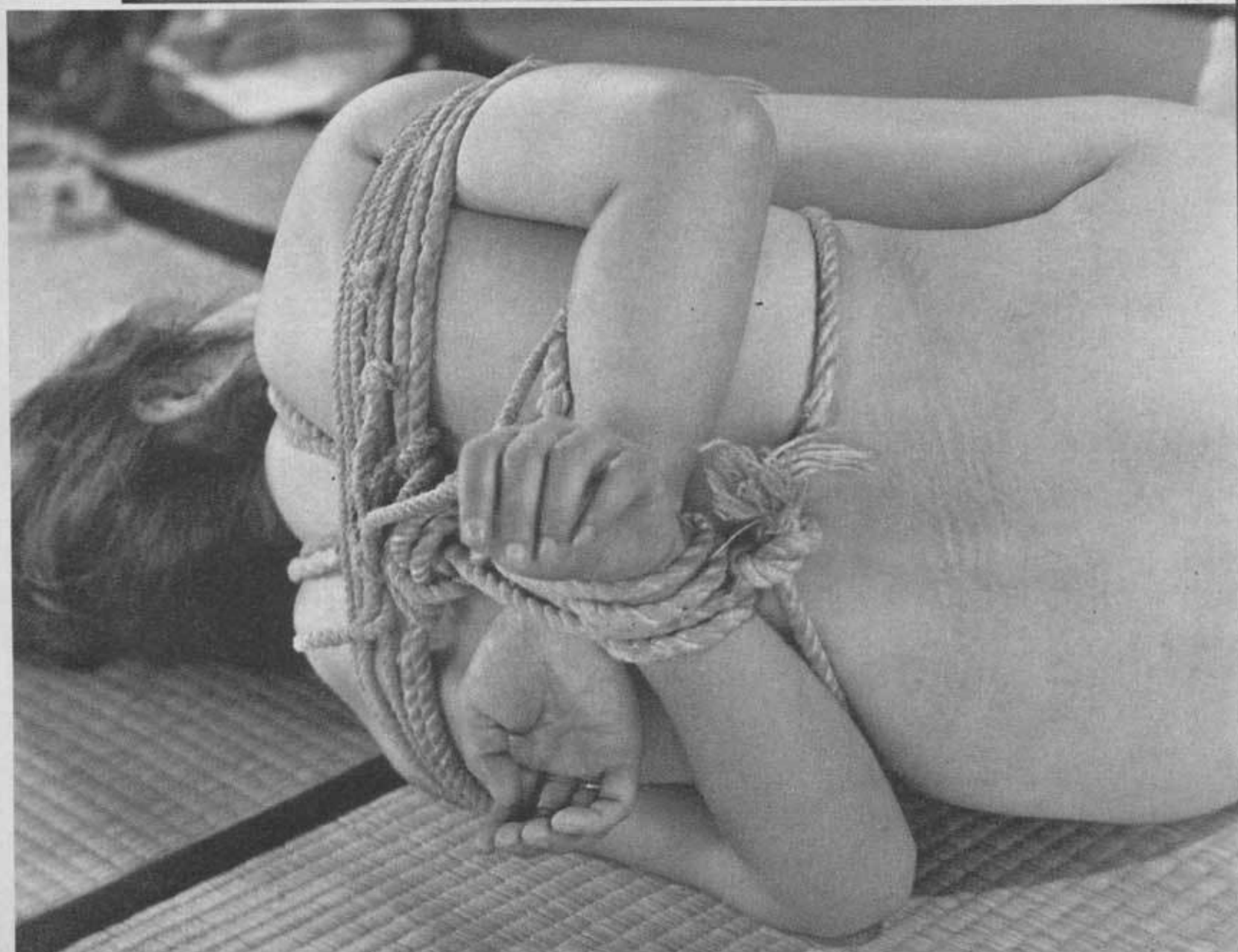












新しい風俗文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1962年 12月号

(第16巻 第11号 通刊 第171号)



緊縛モデルの一表情 大塚 啓子

煙草責の 構想とアイデア

文と画

洗井保

○「煙草責」のイメージ

或る小さなホテルの一室で、家出してきたらしい二十才前後の美しい娘が、ホテルのマダムと何か口論していた。

突然、娘は座を立って奮然として帰ろうとすると、マダムは心得えた様に手前のベルを押した。あらかじめ成りゆきは如何にと外で待っていた大柄な女中が二人、出てくる娘の腕を乱暴につかんで、マダムのいる室のリノリウムの上に押し倒した。

力の限り暴れまわる娘のワンピース、ブラジャーを剥ぎ取りパンティー一枚にしてしまった。殆ど裸に近い姿にされてしまった美しい娘を、すかさず細引きで後手に、そして、ふくよかな乳房の上をも、二重三重にと、ぎりぎりと縛り上げ、マダムの前に縄尻をとって引き据えた。

裸の娘が泣き叫び、身をよじってもだえるのをマダムは銀ギセルでよい煙草をすぱりすぱりと吸いながら、冷やかに正面から見つめていた。その間も娘は女中達に縄尻をしめら

れてヒイヒイ悲鳴を上げている。

突然、マダムがキラリと目を光らせたかと思うと、娘のつんと上を向いた恰好のよい鼻をギョッとつまみ上げると娘はウウツと、うめいて顔を振った。

女中達が左右から髪の毛をぐっとつかんで娘が動けぬ様に上向きに顔を引き据えた。泣いて息が早くなっている上、鼻をねじり上げられているので可愛い赤い唇がぱっかりと開いた。その美しい口へ、マダムはやにわにくわえていた銀ギセルを手にとり、ぐっと差



し込んだ。

娘は反射的に息を吸い、唇を閉じ、丁度キセルをくわえた恰好になった。煙草の煙が娘の口の中へ入る。声にならないうめき声をあげ、後手に縛り上げられた縄も切れよとばかりむせぶと、キセルが口から落ち、太股にがん首が当たってジジッと焼け、娘はとび上る。マダムはキセルに新しく煙草をつめ、娘にくわえさせて又吸わせる。

遂に美しい裸で縛り上げられた娘の口に、



後手に縛り上げられた縄尻を引っばられて中腰のままキセルをくわえさせられている娘。

キセルがくわえさせられると娘は嫌ってキセルを落した。女中が縄尻の余りで娘の豊満な尻、乳房の上に一撃を加えて、パーマの髪の毛をつかんで冷たいリノリウムの上をひきずり回した。

娘も観念した様に銀ギセルを唇の四分の一の所に少し横向きにくわえた。それ以上の恐ろしい拷問から逃れるために……。

マダムは娘のくわえているキセルに煙草をつめて、マッチで火をつけた。女中が縄尻を

しめ上げると、娘は苦しそうに首を前に伸ばしながら、ほほをつぼめた。煙草の火が一段と明るくなった。白い煙がキセルをくわえた赤い唇のすき間から、もくもくと出て来る。やがで娘はキセルの代りに旦那の好きな葉巻をくわえさせられて白い煙を吐きながら、縄尻を二人の女中に左右からとられて、裸のまま廊下を通り、階段を昇って旦那の待っている部屋へと引き立てられていった。始めから言う事を聞いておれば、こんな事にならなかったのに……。

○私が「煙草責」に興味を持つに至った理由

前記のショート、ストーリーは「煙草責」に興味を抱いている私が、殊に好んで描いているイメージですが、女体責の構想の中でも私が何故「煙草責」に関心を持つようになったかと言いますと、終戦後すぐ、丁度私が中学一年になったばかりの頃、今では想像もつかないのですが、煙草も他の一般の必需品と同様に配給制度だった頃です。

隣家の娘さんが親の配給をふやすために、無理に皆の前でキセルで煙草を吸っているのを見てから、ゾクゾクとするような衝撃をう

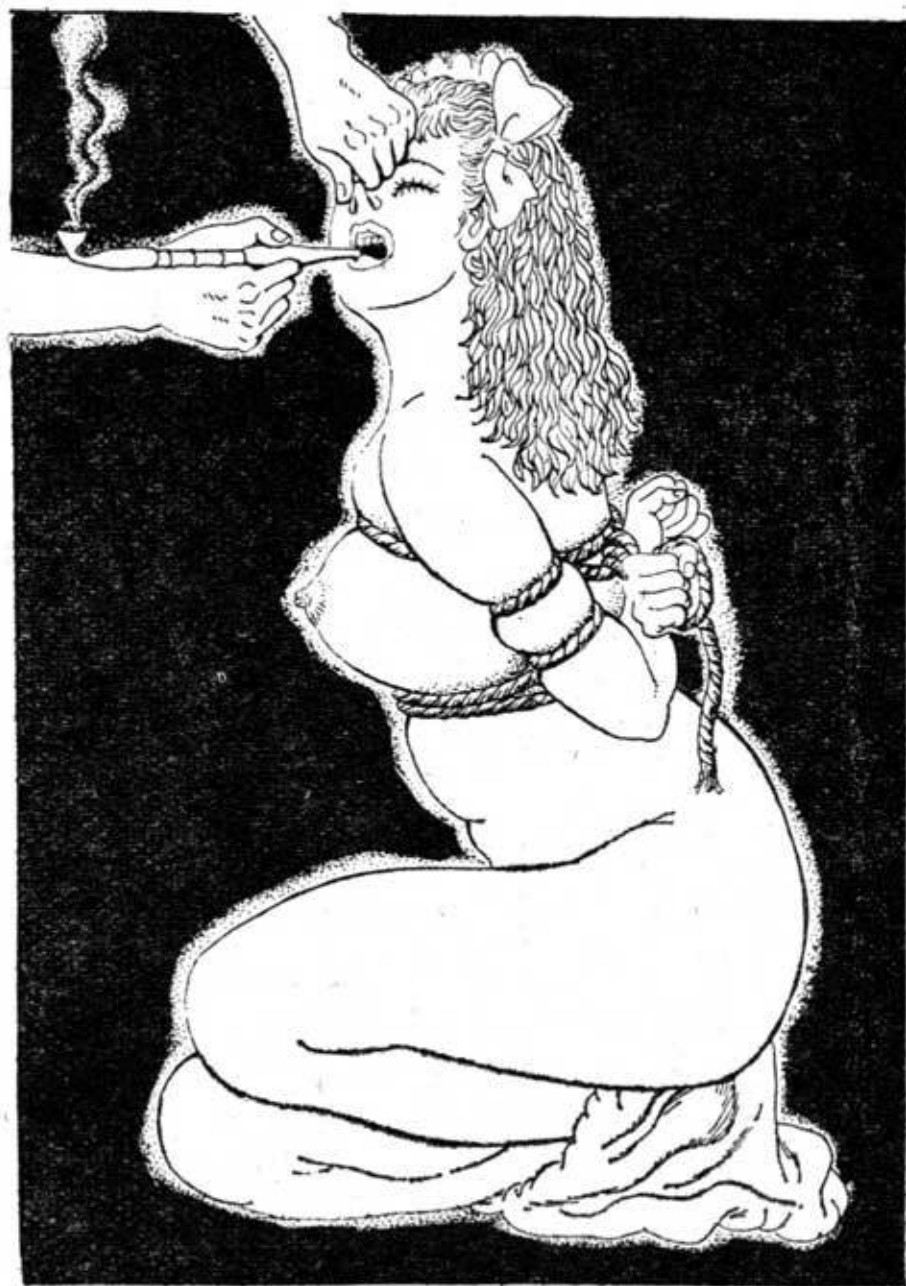
けたことがあります。どういう原因かわかりませんが、若く美しい女の人が煙草を吸っているのを見ると、たまらない気持ちになってきます。これに縛り上げた女というテーマが結びついたというわけです。

高校三年の頃、自分の煙草を吸うようになって、仲よくなったガールフレンドの同級の女子生徒に吸わせて喜んでいました。

大学に入ってから、そういう機会もないまま、全裸の女を縛り上げて無理矢理煙草を吸わせるといった絵を自分で描いて僅かにうっぶんを晴していました。

大学を卒業後、社会人となってからは、特別の仲になった女性が幾人かおり、殆ど縛り上げ煙草を吸わせるプレイを楽しんで現在に至りましたが、最近は又実際のプレイよりも、ファンタスティクな絵の方が楽しくなり専ら絵を描いています。

御誌の絹川文代さんの煙草責めのフォトを



拝見いたしました。あの様にやはりリアルなものになってしまいます。出来れば、更に梨花さん、大塚さんを「煙草責」で責めて下さい。私の経験ではバックを黒くして煙の吸える女性に演出させると、第一に煙の吐き方を知っているの、フォトにする場合、煙にもだえている姿が美しいようで、吸えない女性はどうしても、堅い表情になり易いようです。

鼻孔へ煙草を差し込むのは、シガレットの

短くなったものか、キザミがよく、巻煙草の長いものはよくありません。

○「煙草責」のアイデア

「煙草責」に対するフォト、アイデア又は絵画アイデアとして、二、三の愚見を掲げてみます。

喫煙の経験がないか又は経験の浅い、若い女性をパンティー一枚、若くはシュミーズ一枚にして後手に縛り上げます。

横縄は二重位で乳房の上下にするか、前菱本縄縛りにし、縄尻は必ず柱に結ぶか手に持つようにしてほしものです。完全に自由を奪ったとは云えないので。

唇の中央又は少し横に煙草又はキセルをくわえさせます。歯と唇の二点で支えられますから、相当重いもの迄くわえることができます。

煙草の種類は、女性が普通使用しない喫煙具が一層面白いです。例えば若い女性に対し

て長ギセル、ナタ豆キセル、葉巻といったたぐいです。

女学生スタイルにキセル、BGスタイルにマドロスパイフ、若奥様には葉巻がよくマッチして妙味があります。又、女学生スタイルにシガレット三本位くわえさせるのも面白いようです。

ベッドに全裸又は半裸の娘を大の字に縛りつけ、髪の毛を結んで首が動かないようにして、ごく短くなった葉巻をくわえさせ。キセルの火で乳首や腋毛を焼く図。



若い女性を海老責めと縛り、上向きにころがして口を煙草で責めるのもよいでしょう。

○「煙草責」の絵について

ここに私が最近描いた絵を四枚同封いたします。先に書きましたように私の嗜好としての「女体責」の中の「煙草責」はプレイから始まって絵に移り、再び対象を得てプレイに戻りましたものの、最近に至って再び絵に入り、拙いながらも自作の画によってこの特異な嗜好を昇華させております。

します。

そして口には、若い女性には不似合なキセルがくわえさせられ、息をするたびに煙がパツパツと口から出ています。若しくわえたキセルを口から放すと、火のついたガン首が裸の太ももを焼け焦すでしょう。

第二枚目は、ショート、カットのBG風の若い女性、後手首から二の腕、それに胸にも二巻き、いわゆる高手小手といった縛り方で括られ、その縄尻を引き上げられているので中腰になっています。

第三枚目は豊富な肉体を誇るお嬢さん風の女性。キセルをくわえるのを嫌がるので、仕方なく、鼻をつまんでやりますと、思わずしらず息をしようと口を開けたところへ、火のついたキセルがくわえさせられるのです。きっと喫煙の経験がないのでしよう。煙にむせながら、タラタラ涎を流すことでしょう。

第四枚目は女学生服の少女。長いキセルをくわえているだけでも口がだるいののに、尚その上、煙草のけむりが入ってくるのです。一服すい終ったら又一服と「煙草責」は続いてゆきます。

第一枚目は最もオーソドックスなもので、後手首のみを括った美しいポニーテールの少女、その美しさを最大限に発揮させるため、絵画的なイメージとしてはこのように下着を足首の方にまでずらして汚れなき裸身をむき出した方が、一層ぴった

以上は私自身のアイデアで好みに従って描いたものです。

生首シリーズ 研究資料

女武者の討死と生首

築地 一郎

はしがき

貴誌に毎号婦人の切服に関する貴重な記事が掲載してあるのを、何より敬服して愛読して居る一人です。しかし、筆者が此にも劣らない継続事業にして戴きたいことが一つばかりございます。それは女武者の研究です。女武者の一人一人の史実の調査へ集団としての娘子軍の活動から女軍の一切に渡った研究。初陣、活動期、退陣期、討死の年令の婦人の膂力、武技、化粧、服装、打物業、組討勝負の適性、対男性の性欲、どの項目も精査して

戴けたらと思います。此の種の研究に向いて居られる貴誌で、今まであまり取り上げられて居ないのは淋しいことです。所で本誌が生首シリーズの計画を発表されると伺って此の上もなく喜んで居ります。女武者の生首の研究が生首論の一つの重要な課題になるからでそれはすぐ女武者の討死の穿鑿とつながって来るからです。勿論筆者は深い知識を持ち合わせて居りません。唯年来の願望を吐露して大方の賜教を待つだけでございます。

女武者の生首の意義

ここに申しますのは、討死を遂げた女武者の生首です。戦で渡り合って相手を倒せば首を掻く。此が戦国の戦争の習いで、本邦の戦史に明瞭なことです。これには別に註釈もありません。戦国の男女が太刀討しても組討して相手を押えて首を掻いても、例外はありません。ましようが戦の道徳が支配して居て、そこには美しい礼儀がありました。武人のこうした業績を殺人と誣告したり、首を掻くのを未開人の首狩りに比べたりする浅人には此の間の消息はわかる筈はありません。春秋に義戦がなかったとか、本邦でも義戦と言える戦争は

多いとは言えませんが、たとえ戦争は非難される性質でも、そこに働く一人一人の将士の拳手投足は廉恥心が支配して居た事実を目をふさいで居る徒輩は問題でありません。相手を取って押えて首を掻くにも礼譲がありました。本邦の武人が長い歴史の裡に修養を重ねて来た結果で、未開人の首狩との比較論等は沙汰の限りです。

首を掻くのは名誉をかけた行動でした。首を討つにも首の主に対しての敬意を忘れない行動でした。でも男が男の首を討つのは唯それだけでした。そこには尊敬があるだけでした。所が女が美々しく装って陣を掛け始めて

から、首掻きの風趣に大きな変化が起きました。かりに男がよその奥様を組み敷いて奥様の生首を掻いたとします。美しい奥様の生首はそのまま至高至貴の美術品でした。その上戦争の礼儀が奥様の生首を掻く恩典を下したので、組み敷かれて首を取られても奥様の恥辱ではございません。たとえ雑兵がふだんなら手を触れる所か顔も拝めなければ第一に近寄る機会もない高貴の夫人の首を掻いたにしても、その生首はどこまでも、その夫人のもので、雑兵の玩弄品になったものではありません。逆に夫人が雑兵を組み伏せて首を掻いたら雑兵に取って恥辱どころか此の上もない名

誉です。戦国の世では大剛の勇士が美しい奥様に首掻かれても、少しも男の恥ではありませんでした。しかし、ここで主眼とするのは奥様の方の、女武者の生首です。奥様の討死の風情の床しき、奥様の生首の美しさが娘子軍出現後の戦史、空前の美花を咲かせたのです。

生首審美論

女武者の生首は女武者の持つ一切の美の絶頂です。それこそ読んで字の通り女武者のしるしです。女武者の生首を家苞にすると聞いた言い方を男が合戦で見えたどこかの奥様にしたと言う記事がありますが、これも善諱ならよいとしても、美しい奥様の生首を玩弄視した言葉でしたら武人の風上にも置けない破廉恥なことです。実際に女武者と行き逢って挑み合い首を掻いた男武者に対する尊敬と愛情で一杯でしたらうと想像出来ます。

男でも女でも組討勝負となれば相手を押えて首を取るほか方法はありません。しかし女武者が男を刀の錆にしたような際は、やはり大抵の女人は折り重って男の首を掻きましようが、掻かないで斬り棄てにしても女武者の裁量まかせで別に非難はされませんでした。



所が打物で女を倒した時は、例外なく男は女にまたがって首を刎ねました。乱軍の中で誰の太刀を受けたか分らないで首を搔かれもしないで立派な奥様が倒れて居るのを見掛けますと、敵でも味方でも構いません、美しい首をその奥様のむくろから斬り離してあげるのでございます。討死した奥様の首のついたままのむくろを人馬にかけたりする失礼を避ける意味も大きいようです。それよりも美しい奥様を見ると首を刎ねないで居られない男の恋情でした。男の好色がそこにありました。しかし男の好色にのぞかれて生首の始末をされるのが奥様の本望でもあったようです。

女武者の方から男の首にこうした恋情をかきたてる事実はずっと少いでしょう。ないこともありませんでした。寿永三年正月の琵琶湖畔の木曾の最後の戦に御台所巴御前に首取られた内田三郎家吉を第一に思い出します。六十人力の大剛が馬上が御台所に組み敷かれて討死しました人ですが、絶世の美男と世に歌いはやされ、生きて居た間に何十人の美女を愧死させたと伝えられた家吉でした。雪を欺く色の白さ、明眸皓齒、隆鼻丹唇まで絶世の貴婦人、空前絶後御台所と区別がつかなかったと伝えられた内田でした。多分それまで

何十人何百人の男に逢っても心を動かさなかった御台所の二十八女が同じく二十八の家吉と引っ組んではうずいて居ませんでしたろうか。内田に劣らない位の美男の夫君旭將軍には二人の交搏がどう見えたでしょう。

どうも御台様は内田との組討勝負に手間取ったようです。前の陣地で僭越にも御台様の鎧の裾を犯しかけた弁慶や和田や和田の郎等西脇七郎の徒輩を馬上で一蹴したやり方とは雲泥の差です。八尺余の弁慶の巨体も西脇の鋼鉄の腕も塵ほどのねうちもなく姫の纖手にひしがれ、わけても哀れなのは西脇で馬ぐるめに投げ棄てられる体たらくでしたのに、内田には念入りの組討でした。

しかし、こうした例は随分少いことでしょう。女は例外なく美しいが男はそう行きません。女の生首が皆男の目を眩ますばかり美しかったのは、不思議のようで不思議ではありません。美人しか陣を掛けなかったからでした。男に取って押えられ首を搔かれた時、こんな顔してと思われる位女に我慢出来ないことはありませんでした。どんな男勝りの大力でも武技の名手でも、十人並の器量では女は鎧を着る勇気が出ませんでした。陣を掛ける自信の奥様は皆天成の麗質の持ち主でした。

広告しないでも男は女武者の容色に引き寄せられました。

一体に美しい奥方が花やいだ男と組んで火花を散らう激闘をして鎧だったとは言え体温を感じ合い、白肌五体に熱い血のかけめぐるのを相手に知られて色情を起さないで居られる男女はありますまい。しかし男の色情と女の色情は違います。男の色情は一図によその奥様に組みついて思う存分人妻の匂を嗅いだ上に夫君にも捧げなかった奥様の生首を戴くことです。

女の色情はもっと奥があります。男と引っ組んで男の身体に攻めたてられ情熱の眸を身体中に注射されては、いくら淑徳の奥様でも男の色情にゆすられ屈服して情欲の下燃ははげしく揚りましようが、女の色情の奥にはもっと底光りのする深部があります。男の色情を、これほどかき立てる人妻の容色、何某の妻の風情を男に誇示するのが女の色情の第一義です。男に美しい女体を思う存分に組ませむんむんする人妻の匂にむせ返らせ、その上に首まで搔かせても、人妻の威厳は微動もありません。男は人妻の首を搔いても人妻はどこまでも人妻で自分の妻にしたことにはなりません。男に嗅がせる匂は何某の妻の匂です。

男に押えられてさしのぞかれる花顔は何某の妻の花顔です。顔の薄化粧も何某の妻の薄化粧です。掻き斬った生首も何某の妻の生首です。男は人妻を取って押えて首を刎ねた瞬間に討死を自分の手で遂げさせた人妻の奴隷となります。女武者の討死の強味に敵対出来る男はありません。女の生首は、こうした人妻示威運動の総計です。女は別にそうした箇条を計算する要はありません。女武者の本能のままに動いて自然にそうなります。女の生首は女の美の絶頂です。

女がどれほど男と組んで羞かしい情欲を起しても討死すれば女の操守に男は一指も触れられなかったこととなります。逆に女が男を押えて首を掻けば色情も鎮静の路を辿るでしょう。首をかけた男女の勝負ほど不思議なことはありません。しかも女に有利に出来て居ます。女武者の生首は何某妻の宣伝でもあります。何某妻の美の完成でもあります。同時に相手の男の色情の貴い記念にもなります。

女武者の生首は事実、いろいろ陰翳のある表情を見せます。軽く蛾眉を払った若奥様の首、凛とした若衆風の力味を見せた腰元の首、男を知った矜持を見せ、少しの妖気の立った感じの大奥様の首、男に組み敷かれた途端む

むねーんと叫んだかと思われる、後れ毛を朱唇に噛んだ女猛者らしい首、悦楽の世塵を吹き払った涼気を見せた中年の艶妻の首、眉をつり上げた愛妾風の首、派手な大年増振りを出した身分のあるらしい妻女の首、つましい波味の粧いの裏に幽婉な美色を隠した姫様風の首、あたりをあかるくする位かがやいた女將軍の首。年令も身分も性情も品格も風趣も生首位卒直に話して呉れるものはないと思います。

女盛りの討死

今まで女武者と言うのに奥様奥様としきりに言っただけで、処女武者、姫武者を言わなかったのはわけがございます。豊薩軍記に出て居る阿南氏の姫君のように未婚の女武者も探しますと随分あるかも知れませんが、奥様武者に比べますとまず稀少事件でした。

一体に女武者が初陣を掛けるのは二十二三から四五が多く、人に嫁して何人かの子女を育てた後でした。男の初陣は十五六から早いものは十一二と言うのもあり、男女の年令は大変な違いです。女は同年の男より身体も心もふけ勝ちですから、初陣同志の男女が顔を合わせれば精神年令まで入れて言うとなの方

が十四五も年上なり、まるで姉様武者と言うより母様武者でした。

戦争は不思議な所です。人妻としては、とうの立った大年増が子供位の若武者と組んで挑み合っても初々しい風情を見せるのでした。それに女が美々しく鎧に身を固めると不思議に花やいで娘娘しくなります。二十六頃で初陣して十八九の少年に首を取られると言った奥様も少なくなかったようです。そうかと思つと二十二才の初陣奥様が剛勇で鳴った敵の大将を美しい黄金飾りの膝頭に押えつけて首を取る光景もありました。身体におぼえのある奥様は容色さえ衰えなければ四十を越えても陣を掛け人によりますと五十の声を聞くこともありました。大抵は三十五六がとまりで、その年配で生命のあった人は女武者の列から身を引きました。男に首を取られた際、こんな年でと言われるのが、たまらなく嫌だったわけです。女の色香の盛りの年がやはり女武者の活動期だったのです。

随分大力と言われても、男を知らない処女が出陣して組討勝負したりすると事実討死する率が多かったようです。時にはかなり姿を見せた処女武者も、こんな事情で段々姿を消し、娘武者の首などは落城の際でもなければ

あまり見られなくなりました。男にしても花の蕾を押えて散らすのは痛々しすぎて気が進まなかったでしょう。取って押えて花顔をのぞくにしても、生首を掻くにしても二十三四の奥様美の爛熟した相手でしたら、男には此の上もない消魂事でしょう。奥様の討死の手配も大抵は二十三四から三十五六の間でした。一体に人妻は組み敷かれて相手に顔をのぞかれた際位美しく見える時はありません。

女武者愛好癖の筆者は何とかして今日に女武者の面影を見たい願いを起して割合にこの渴望を医して呉れるのは婦人柔道家と思い、伝手をたよっては柔道奥様や柔道令嬢に組んでいただきました。そうした一人一人の交搏の味をいつまでも忘れませんが、今まで組み敷いて真向からのしかかって、のぞいた奥様方の顔ほど世に美しいものはございません。職業婦人の某奥様を組み敷いた時など、ほんとうにふるいつきたい美しさでした。妻は柔道などにまるで縁のない女でしたが、筆者の趣味に感染して二十六才から柔道を習い出し今では一かどの愛好者になって居ますが、私は妻を組み敷いた時に、やはり妻の顔が一番美人に見えます。

少し前、某専門家の招待で、その高弟の一

人と妻が試合しました。衆人環視の裡に随分しっかりした試合振りを見せて呉れましたが寝業になりとうとう妻が下になりましたが、きつと目を張り口を閉じて暫く無言で相手を見上げて居た妻の顔を、こんなに美しいものかと感じました。少し経って「参りました」と白い手で畳を叩いて立ち上った態度も堂々として居ました。

帰宅してから感想を聞くものですから「大名の大奥様の討死振りだったよ」とからかいました。「自分の奥さんが、よその殿方になんかに組み敷かれてどうですの」と言うものですから「あなたはあやしい気になったか」と反問しますと「そんな女と思っていらっしゃる」と眉をつり上げられました。前に申しましたように女は男に組み敷かれた際に一番人妻を見せにかかるのです。体内に色情をもやしても人妻の示威運動のある限り大磐石です。この時の妻の顔に戦国女性の討死の風趣を味読した思いでした。

最大限に人妻の風趣を見せる、これが奥様武者の万事です。こう見て来ると奥様の心の底には妙に討死したい、男に生首を掻かせて誰の奥様だったのを知って貰いたい衝動さえあると言えないでしょうか。堂々とした大奥

様が相手に不足な少年等と組んでわざわざ下になって首を取らせた事実もかなり多かったと申します。

落城の際の城主の奥方や女城主等が随分相手不足の若武者の手にかかった例はいくつでもあります。遠江でしたか某城の女主人高階民部卿の未亡人を攻めた寄手の中に花田伊織と言う花武者がありました。城門で未亡人に出逢い組み敷いて首を掻き賞讃の的となりました。所がこの未亡人が何回かの出陣で勇名があり、討死の前にも寄手の大剛太田治部を組討で首取って居た所から、夫人を知って居た人達は首を譲ったのだらうと想像しました。伊織も美しい夫人を討ち取って気もそぞろでしたが、後度々の出陣で戦の情偽がわかって来ると夫人の組み敷かれたのは伊織の体力に屈したのでなく、女を見せるためだったと悟り、人にもよくそのことを述懐したそうです。女盛りに人妻の高貴な薫りをまき散らしあたり一面を匂わせながら討死する、女に取っては何とも言えない誘惑でした。

組討色模様

筆者はつくづく思うのですけれど女武者は過去の事件と言うだけでない気がします。前

に妻の柔道を申しましたが、何も柔道と言った特別なことは考える要もない。世の中の人妻は例外なく女武者ではないでしょうか。言いくいことですが、夫婦の営みは戦国の男女の組討勝負と何も変わった所がない気がするのです。

でも夫婦の生活は正常で、どんな熾烈な色情も、そこでは端正な色情です。乱倫を嫌う自然は男からよその奥様を、奥様からはよその主人を始から引き離して雲煙万里の距離を持つ別々な殿堂に閉じ込めました。礼儀のかせが嚴重なだけに男は、よその奥様の匂いに心をひかれ、奥様と言う奥様は誰々の妻の匂いを他人の主人に嗅がせる誘惑を感じるものがあっても一概に不道德と言い切れないものがないでしょうか。男が妻にする組討勝負を公認の所で礼讓の方式で自由によその奥様相手に出来たら、どんな歓楽境がそこに実現しましょう。

男女間の柔道試合等は十分とは言えますまいがその一端です。首をかけた嚴肅味は、そこにはありませんが、戦国男女の組討勝負の現代版と言える一面があります。礼儀に統制された色情の一点では昔の男女と多分違いますまい。今まで組ませていただいた何人かの

若奥様令嬢方との体験が大層勉強になりました。何と申しまして男の色情は露骨で私も同様です。自制して最後の礼讓の一線は破りませんが、よその奥様等と組んでことに寝業で捻じ合って居る際の奥様の体温、肉感、女体から発散する匂、薄化粧、どこからえても男を色情の虜としないでは居ません。「重忠は巴と組んで手を洗い」でもありませんが某奥様は手から腕の附根までべっとりとお白粉を刷いて一度転び合うとこちらの手まで俄化粧です。令嬢方には大抵は遠慮しましたが、奥様と組むと男は恥かしく好色の度が高まって寝業に引き込みたくてむずむずして参ります。

昔の女武者も、こんな風でなかったでしょう。しかし何と云っても討死を控えて居た昔の婦人はもっと何十倍か嚴肅でしたらう。真白な頸をすほうに染めて首を搔かれる苦痛を知らない婦人柔道家の勝負には、それだけ遊戯の要素が多いわけです。大抵の勇婦は討死はいやでなかったのですが、首を搔かれる瞬間は「うーん」とか「キュー」「キアーアッ」「ぎえーっ」と言った一期の絶叫を空に上げたと言われて居ます。男にして見ると男勝りの勇婦が組み敷かれると「無念」と叫

んだり、首を搔かれると、「きえーっ」と悲鳴を上げるのが又たまらない魅力でした。女が下になった時、無念等と口にするのも戦闘の一つの裝飾語で、くやしがつて言うとはきまって居なかったようです。「無念」「むむねーん」も「これほどの女を組み敷いて」と言った風の相手に送るお世辞でもあったようです。

討死はよくても寸前には当時の勇婦にも音を挙げさせるまでの苦痛があります。苦痛を抑えて音を挙げない嗜みの女人も居たでしょうが、それは稀でした。絶叫も女の討死の一つの修飾です。その大苦痛にいつでも直面して居た奥様方の出陣好きは唯の遊戯ではなかった筈です。唯の色情でもなかった筈です。婦人柔道家のことを申しましたが、色情の一点でも昔の男女は討死を目の前にして居るだけに深刻の度が勝って居ました。

天文の頃、九州の龍造寺の家臣生田右京と言う士の妻、お婉と云うのが二十で初陣して四十五才まで十五回出陣し甲首二十三も取った女豪で、それも大力で自分より年弱の男に一度だって跳ね返されたことのない組討巧者でした。所が島津との合戦に敵方の細井主水と言う二十才の若武者と大童に組んで上下

になり、勇婦と美少年の組討と言うので両陣の目を見張らせました。とてもお婉にかなうわけはないと誰が目にも見えて居ましたが、何としたか無念の声は草をしだいて臀重げに押えられたお婉の口から出しました。

のしかかった主水は「小童に組み敷かれたのが御無念ですか」と聞きますと、「女を羞かしがらせるものでない、早く首掻いて」とせき立てます。とお婉の艶色にポツとなった主水は「奥様のおん情を」と飛んでもないことを口走りました。四十五の大姥桜ですが妖麗な奥様振りは主水に年を感じさせません。

「好色者」と一喝しましたが、思い返して「よい妾の首刎ねてから肌なりどこなりと勝手にするがよい」と教えるのでした。主水が掻き首の用意をしますと、その手の鎧通しを見てお婉は「その小刀では女の首は掻けない妾の鎧通しをあげるほどに使いやるがよい」と主水に鎧の帯をさぐらせ「妾の鎧をよく膝で押えて甲のしころを巻き上げて襟足を長めに掻くのですよ」と注意するのです。

紫電一閃雪の頸を払うと、それこそ「うう、きえっ、えーっ」と絶叫。襟足の斬り口からドーンと滝のように流下する血潮の生首、一瞬呆然としたが、やがて生首は鞍につ

り下げます。首掻かれた痛味に二三転した奥様のむくろに狂気のように取りすがった主水、お婉の鎧の帯釈いて直垂をはだけ下襲の白綸子を剥ぐと抜けるほど白い股をわざと汚したお白粉の壁塗、鎧下の化粧の秘義と伝えられた股化粧でした。

男に比べますと女性の仕方は何とも情感がありました。弘治年間に信濃の村上と隣国の姉小路の間に合戦が起き、村上の老臣落雁寺右馬亮の妻女お八重の方と言うのが出陣して姉小路方の若水采女を組み敷いて首を掻こうとしましたが、采女の美少年振りに敦盛を押えた女熊谷の気がして名や身分を聞き十九才なのにまだ無妻なのを知り、女を知らないで討死するのをふびんに思つて、わざわざ落馬した上で采女の鎧を脱がせ自分も鎧を釈き下まではだけて采女に男女の道を知らせた上に静に鎧を着せ自分も鎧を直して改めて采女の首を掻きました。

落雁寺の大奥様と勇婦の聞えの高かったお八重の方は当時五十一才でしたが四隣に響いた国色の水も滴る美貌で、采女にはやっと十余り位の姉様武者と感じたろうと世に伝えました。采女の首を持って脊の君に弁護して罪を待ちましたが、右馬亮は却って夫人の深情

を賞嘆しましたとか。

討死の風情

女の生首が人とりどりの品格を見せて居ますように、女の討死のし方も高家の内室は貴女らしく、城主の北の方は北の方らしく、老臣の妻女は身分ある妻女らしく、奥方つきの女小姓は女小姓らしく、腰元は腰元らしく、愛妾は愛妾らしく、一つ一つ趣を見せます。

女武者のふだんの心得に首取られる寸前の一念の修養をやかましく言われました。その時本懐と感じたら生首の平静な表情にそのまま出て居り、恥かしい気がしたら生首に羞恥が出ます。ある手練の奥様が二十何回か男と会つて女振りを謳われましたが、ある時の合戦に敵を何騎か手につけた後に敵方の剛勇の大太刀に薙刀を合わせ何十合と斬り合つても勝負がつかない中に、その婦人は立ったまま薙刀を棄てて「もうこれ位でよいでしょう、さ首を掻いて」と申しますので、相手の男は驚いて「打物で駄目なら組みますか」と聞くと女は「よいわ、組んで」と言うので組みつくと捻じ合いもしないで男の押すままに倒れて「跳ね返さないか」と聞いても莞爾として「これでよい」と言うので仕方なく首を取り

ました。その生首はほんのり薄化粧を匂わせましたが、何となく生きるのに厭きた感じが出て居たと伝えます。

これもどこかの落城の時寄手の勇士が城の奥の方に這入って行くと立木の陰にうら若い女性が血にそんだ鎧を脱ぎかけ、見れば甲は木にかけてあり、甲の中に包み込んだ黒髪を背に垂らして自殺の寸前と言った風でした。

この婦人が討ち取ったらしく土の上には男の甲首が二つ転って居る上に柄まで血に染った大薙刀の先には別な男の首が刺してありました。その勇士は近ずいて「御自害遊ばすなら御介錯申しあげましょうか」と聞きます。静に顔をあげた女性は式台して今まで討死をと思ったが恰好な相手にめぐり合わないまま自害の用意をしたがよい方にお逢い出来てうれしいから待つてほしいと言って、脱ぎかけた鎧をつけ帯をきりりとしめ直して男に向います。「さあ薙刀を」を男が申しますと「殿方は女にお組みになりたいのでございせん」と申します。恥かしいが、その旨答えますと「妾も一期の思いに殿方に組まれて討死しとうございます」と籠手はずれの白い手を延べ心得て組んだ男としばらくは上下になり、一旦は男を押え込んで動かさなかったが又跳ね

返され、二度三度反撃して男を組み伏せましたが、先刻からの働きに疲れてかとうとう下になり、「お跳ね返し遊ばせ」と勧めたが「よい方にこれまで組んでいたのがうれしい。首掻いて」と申します。躊躇する男を「首掻いて」とせき立てます。男がそれでも動きませんのを「さ首掻いて」とくり返し、男も仕方なく首を取りましたが、白臘のような面には淋しい満足の表情が漂って居ましたとか。名も知れないので帯を釈いて下襲の白綸子を見ると水茎の跡も妙に名と生年を書きつけてあり城主の姪で北の方の弟御の内方とのことでした。城主も夫君も北の方も少し前に討死し、ことに北の方の大名の御夫人にふさわしい堂々とした討死振は敵方の涙さえ誘ったと申します。

それかと申しますと討死まで命を惜しがった女性も多かったでしょう。今まで女武者と言えば討死を喜んで居るような言い方をしましたが、それが全部ではありません。木曾の愛妾などには死にたくない討死をして御愛妾の討死と艶名を挙げましたが本意でなかったようです。礪波山の合戦に自慢の大力に物を言わせ摂津判官盛澄を押えて討ち取り奮戦途中で矢傷を受け尾張判官貞康に組み伏せられて

討たれましたが「傷を受けたためにこんな男に」と齒噛みしながら首取られましたとか。緋威のバツと燃え立ったような色に首のないむくろがすぐわかりましたが、後になって首は加賀の安宅河原に木にかけてあったのをわざわざ討死の箇所を持ち帰ってむくろと一緒に首塚にしたのが、今残る礪波の葵の松で御台所の巴御前は何でもなかったのですが、並べて巴の松と言ひ伝えて居るのが今もございます。一念と言うか葵女の生首は時が立っても生きたようで生前の艶色もそのままでしたが、討死の口惜しさをありありと残して居たと伝えます。どちらにしても討死の際の感情は虚飾がありませんから、生首に出るのは自然でしょう。

これは平生の修養だけではきまりません。育ちの裡に氏があるようです。信濃の依田氏でしたか、ある大名の夫人が出陣して討死しました。その首掻いた男は何と言ってよいかわかりません。その夫人の大柄で高雅な討死振りに深く心をゆすぶられて、ああした討死は大大名の夫人でなければ出来ないと後々まで人に話したと申します。夫人の鎧った亡骸はすぐ家臣が収めて城に帰りましたが、夫人の生首は化粧を直した上に寄手の主将の実検

に入れた後鄭重に城中に送られ夫君は涙の対面をされたと伝えます。

奥床しい討死を遂げた人の首は時々その家に首取手から送られる習いがありました、ことに奥様の生首の時に、その例が多かったことでした。

組討勝負ばかり申しましたが、勿論一方では女武者の斬死も多かったことでした。しかしこれは組討勝負のように男女の花情の介入する余地が少いので討死も掻き首も肉感が減じます。それで打物の勝負で始っても少し長引くと男は組討したがりしました。礼儀から申しますと男女が逢って女から組討を望んで来たら男には本望でした。女が言い出さなければ男の方から組討勝負でよいかどうかを聞き、女が承知すれば始めて女体に組みつきます。もし女が不承知でしたら不本意でも太刀討で行かなくてはなりません。女が始から打物で寄って来た時も同断でした。男から組討を挑むのは失礼とされて居ました。打物で勝負を始めてどれ位長引いても男から組討勝負に移る希望を言うのも礼儀ではありませんでした。言い出しても女が承知しなければ打物業を続ける外はありませんでした。こんな時男が強引に組討に持って行きたさに打物を

棄てて「組討つ」等と呼び掛けても、女の方でしたくなければ頭を振って「さ打物をお取り遊ばせ」と待ってもよいのですし、そのまま構わないで斬り掛けて打ち棄てにしてもよいのです。しかし誇りの高い女武者は男の誘いに乗って組みつく人もありました。斬り合いながら男が女の打物を巻き落した時は、女が一步すすって差し副を抜くのを待つか、組討の声を掛けるか、それまでにしないで隙もなく女に組みついても礼儀に戻りません。女にしてもこの際は男の組討をことわれませんでした。逆に女が男の打物を巻き落せば女はそのまま付け入って男を斬り下げてよいのですし「打物お取り遊ばせ」と待ってもよいのですし、男に組討を許しても勿論よいのです。しかしこの際男から組討を希望しても許さないでもよいのです。組討好きでない婦人が、こんな時婦人に有利な礼儀を使わないで女の名誉心から組討に応じて討死する人も随分あったようです。

先の柔道婦人に類似の話ですが、よく剣道の習業を婦人もしてますし、男の剣道と婦人の薙刀の試合もあるようです。筆者の知り合いのある奥様がやはり剣道場に通って居ますが、よく男の人に体当りを掛けられ、組みつ

いて道具はずしに出られて困ったそうです。仕方なくその奥様は師匠の奥様から剣道の組討を習われ、一方柔道に通われてから面をはずされる心配は減ったそうです。それまでは男の体当りの度によるめき、組みつかれては二三度は上下になってもすぐ押え込まれて面をはずされたとのことでした。

師匠の奥様は鎧組討の専門家の娘さんなので少年の頃から父君に組討を習われ母君もその方は免許の腕前で、ごく小さい時から両親の組討の勝負を見て居たそうです。両親が人交ぜもしない組討勝負をした揚句母君がとうとう面をはずされて薄化粧した匂やかな顔を出されると父君がよく首を掻く真似をされるので、子供の時は何か悲しかったそうです。その奥様は二十の頃はもう母君以上になり、二十五六になると十回に六回は父君に勝つようになり二十九の頃は父君も手が出なくなりました。この方は兄君もあったのですが、兄君は剣の名手でも鎧組討は母君よりずっと弱く、母君はこの兄君と剣の立合いで歩がわるくなると組みついて行き、その都度兄君は母君を跳ね返せなかったそうです。まして妹君には歯が立たなかった話です。

筆者の先輩の某氏ですが剣の名手でいつで

したか、その方の旧主にあたる男爵夫人に呼ばれ夫人の薙刀に太刀で御相手したことがあったそうです。夫人の薙刀も随分筋がよいそうですが、その日は試合中に某氏の剣の一閃で夫人の薙刀は落されました。失礼と挨拶しようとして居る中に籠手を脱いだ夫人にいきなり組みつかれ困りましたが、控え目に応戦して居ると夫人は耳に口を寄せて「面を取るか取られるか組討で行きたい、女とか旧主と違って手加減してはおきますよ」と言うのだそうです。こうなると引けなくなります。華曹界でも麗人の名の高い美貌の、しかも旧主の姿体を押しつけられ、むせ返るような貴女の匂と香料に気もうつろな有様で、それでもやっと床に押しつけて面を取ったそうですが「やはり女は駄目ですね」の一言が男爵夫人の述べたそうです。ここでも昔の貴女の討死を連想しないでしょうか。

一つの設問

箱根の塔の沢を通った時でした。ある家の前面に硝子箱に入れた大きな極彩色の絵がありました。通行人に見えるように飾ってありました。何と言うか絶艶の女の切首の絵でした。滴った血を襟足から下にべっとりと流して顔にも点々と紅をはじかせ深々と白い麗容

しかも目を吊り上げた凄愴な首でした。空想か誰かの話を絵にしたかまるでわかりませんが筆者はこれを討死した女武者の生首と見たかったのです。これが女を唯斬殺した首ならば筆者は興味を感じない所か嫌悪しかありません。しかし鎧った女武者にもとついて居た首で討死して掻かれたものでしたら何と云ってよいか幽婉な悲愴美をそこに見るのでございます。ここには男と組んだり斬り合った一連の絵巻が想像の裡にあるからです。

今まで男女の色情にばかり焦点を当てて討死の相手は男ばかり見て来ましたが、女が女の首を掻くことも勿論あったわけです。奥様が陣中でよその奥様と逢って奥様同志の斬り合い奥様同志の組討勝負もあったことでしよう。奥様がよその奥様を薙刀の刃先にかけて倒れた所につけ入って首を掻く。奥様がよその奥様と上下になり合った揚句相手の奥様を取って押えて首を掻く。何と凄絶な色模様でしよう。奥様同志でも例外なく首を掻いたと思います。いや奥様こそ、よその奥様の首を掻きたくなるでしょう。勝ち姿の奥様は相手を押えて「奥様の首は何某の妻某がいただきますわ」と囁いたでしょうか。男女の間と違わないのは、首掻かれた奥様の凄艶な鎧のむ

くろから立ちのぼる爛熟した人の匂い。生首の白面の美。首掻き手の奥様の立ち姿の、人から見なければ気づかれない淋しさ。

男女の間と違って居る要素は、ずっとずっと多いと思います。第一の大差は奥様がよその奥様を組み敷いても生首を掻いても男女間のような色情はありません。某奥様がよその奥様の首を取っても男がよその奥様の首を掻く時のような色情から来る悲愴感もなく肉感も薄いでしょう。

前の柔道婦人の話ですが男と組討しては手足を触れただけで電撃のような羞恥が身体中つきぬけると申します。男でも同じです。柔道奥様の弾力のある五体に当たっただけで色情にふるえます。所が女同志ではどんなにげしい寝業をしても羞恥に堪えられない程度のものではないそうです。でも婦人同志の柔道試合ことに寝業は外から見では男女の試合より華麗です。昔の奥様同志の組討勝負も同じでなかったでしょうか。ここで男女間の色情に更なるものは何でしょうか。想像出来る点も二三はありますが、男の筆者よりずっと精到な解釈を御婦人の研究家に出していただきたいので無責任ですが質問を出しただけで、ここは搁筆させていただきます。

緊縛フोट撮影の実際

△若妻をモデルとした構成▽

塚 本 鉄 三

このところ、私の「緊縛フोट撮影の実際」も一寸一休みという恰好です。いろいろの制約のために、折角苦心して写真を集めても掲載不能になったりして、氣勢がそれ、必然的に次の制作意欲も起らないということになってしまいました。

ところが、本誌の十月号で編集子が編集後記で一寸モデル募集のことについて言及されたことから、若い女性読者の方から、モデルになってみたいという通信が投ぜられ、その中から素晴らしいグラマー女性の緊縛ポーズの撮影に成功しました。

正味にして僅か一時間ばかりの時間で、しかも初めての第一回撮影という悪条件でしたが、余りにも素晴らしいモデルだったため、今回は特に私の方から頼んでこの「緊縛フोट撮影の実際」に掲載して貰うことにしました。もっとも、彼女もグラビヤや本文に発表してほしいという切なる希望を持っていたが――。

○
九月十八日、私は一通の手紙を見せられて「どうだ、欺まされたと思って、一度当ってみないか」と云われました。

その手紙というのは――

突然このようなお手紙を差し上げる失礼をお許し下さいませ

私は結婚後一年半になります人妻でございます。夫は私と結婚する以前からの貴誌の愛読者だったらくし本箱には、相当古くからのバックナンバーが揃っております。

夫は私には見せてはくれませんでした。夫が出勤してから部屋を掃除しながら時々見るようになりました。

そして、いつとはなしに夫とすることにつ



いて話し合うようになりました。ここに同封しました四葉の写真は、夫が私をモデルとしてうつしました写真です。全く拙い作品ですが、もしお目にとまることがありましたら、ぜひ私をモデルとして写真をとっていただけないですか。

私のような異常な感覚の方はいないだろうと思っていましたところ、貴誌を愛読させて頂くようになり、又、主人よりお話を聞いてやっぱりと同じ感覚の方の居られる事を大変嬉しく思いました。

そして大変欲張った夢でございましたが、貴誌のグラビアのモデルとして使って戴ければどんなに幸福な事だろうと思つたのでございます。そして、貴誌のグラビアによってマゾの私を沢山の愛読者の方に見て戴きたいと思ひます。

只今の私は、全身をぎりぎり縛り上げられ、責め拷問を受けることに無上の喜びを感じるようになっておりますので、もしお許しになって私をモデルに使って下さるなら、私の体は貴男様の御自由にして下さいませ、その時の激しい感情を写真にしてグラビアに載せて下さいませ。

私は一度他人様（男の方）にきびしく縛り上げられ、思いきりきつい打ち、拷問、逆さ吊り、流腸責めなどにしてほしいと願っております。きつければきつい程私はうれいのでございます。

全身みうごきも出来ないくらい強く縛り上げられて、ところきらず操り責めにあって叩きもだえる私の姿を見て頂きたいと願っております。足の爪先に至るまで、あますところなく責められて苦しむ私の身体中を眺めていただければ本望でございます。本当にぶしつけで、一方的なお願ひでございますが、何卒よろしく御配慮下さいませ。

理解ある男の方に御指導して頂ければ、御言葉のまま一生懸命に貴男様の御気持にそうことをお誓ひします。

日頃私の考えております夢物語を長々と書かせて頂きました。この夢物語が只なる夢ではなく、現実のこととなりますことを私は心から願っております。

このことは主人にも話をして諒解を得てありますので、少々の縄の痕ぐらいでしたら差支えございません。御連絡下されば早速御指定の場所へ参上いたします。

時間の希望といたしましては、主人が毎日六時半頃帰宅いたしますので、午後二時から五時頃までの間でしたら、毎日いつでも結構でございます。

貴誌の御発展により、私の夢を育くんで下さることを心からお願ひ致します。

九月十五日

兵庫県西宮市甲東郵便局止

関谷 富佐子

この便りを読んだ私は、思わず「うーん」とうなってしまう。水茎のあともうるわしい達筆な文字からは、気品のある若々しい新妻の雰囲気がありありと読みとれます。

同封された四葉の写真は、六六判の密着焼きで、一灯ぐらいで室内でとったものでしょうか、光線のまわりが不十分で、ハイライトだけの黒っぽいものでしたが、それでもものびやかな若々しく張りきった肢体が縄にあえぐさまが、匂うように感じられます。

私はなんとにはなしに、ゾクゾクとするような身ぶるいを感じると、「よし」と掛声をかけて早速返事を書くためペンをとりあげていました。

○

九月二十一日（金）午後一時五十分

私は指定した苦楽園駅前に車を停めて待っていました。

車の型、色、ナンバーは既に知らせてありますから、すぐわかる筈です。

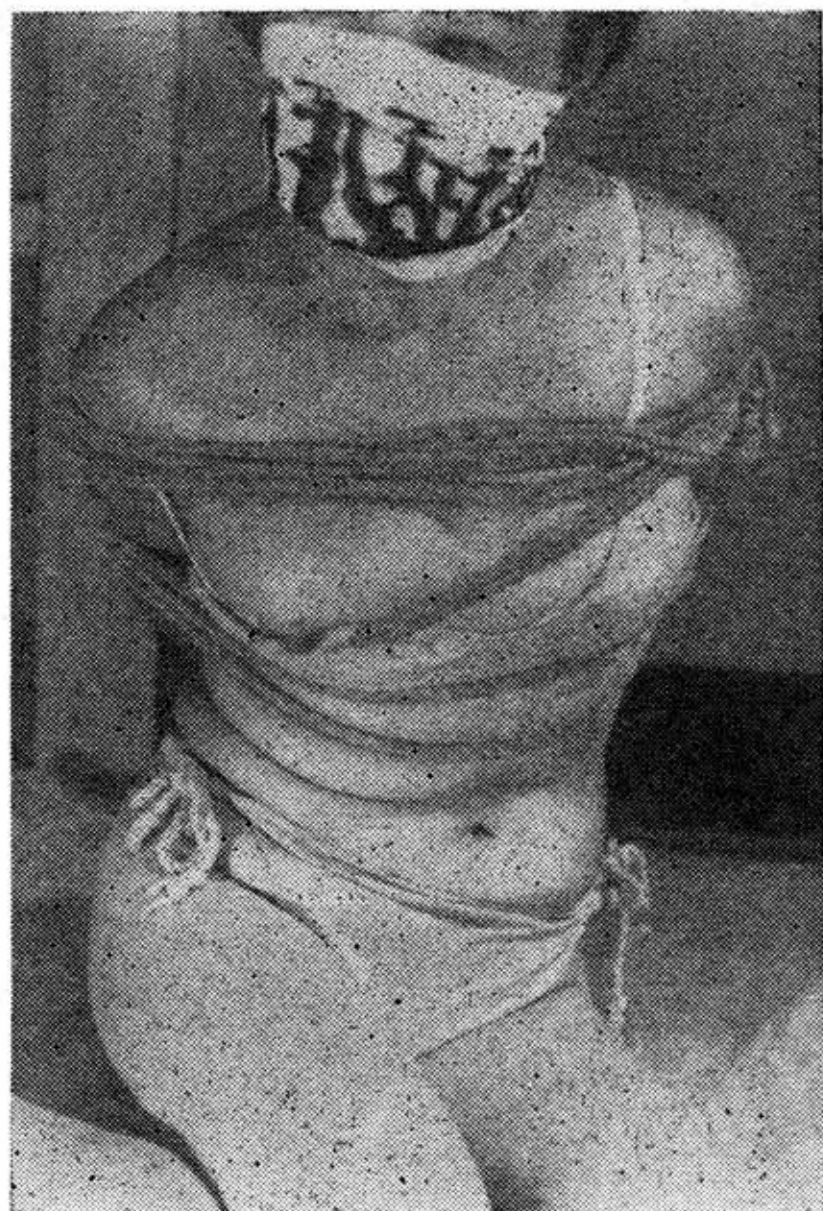
気温は二十八度近いでしょうか、彼岸の中

日を明後日に控えていささか残暑がきびしいようすが、さわやかな風が窓から吹き込んでくるので、さすがに秋だなということが如実に感ぜられます。

電車が着くと、ぞろぞろと人が改札口から出てきますが、ラッシュアワーがはずれてい

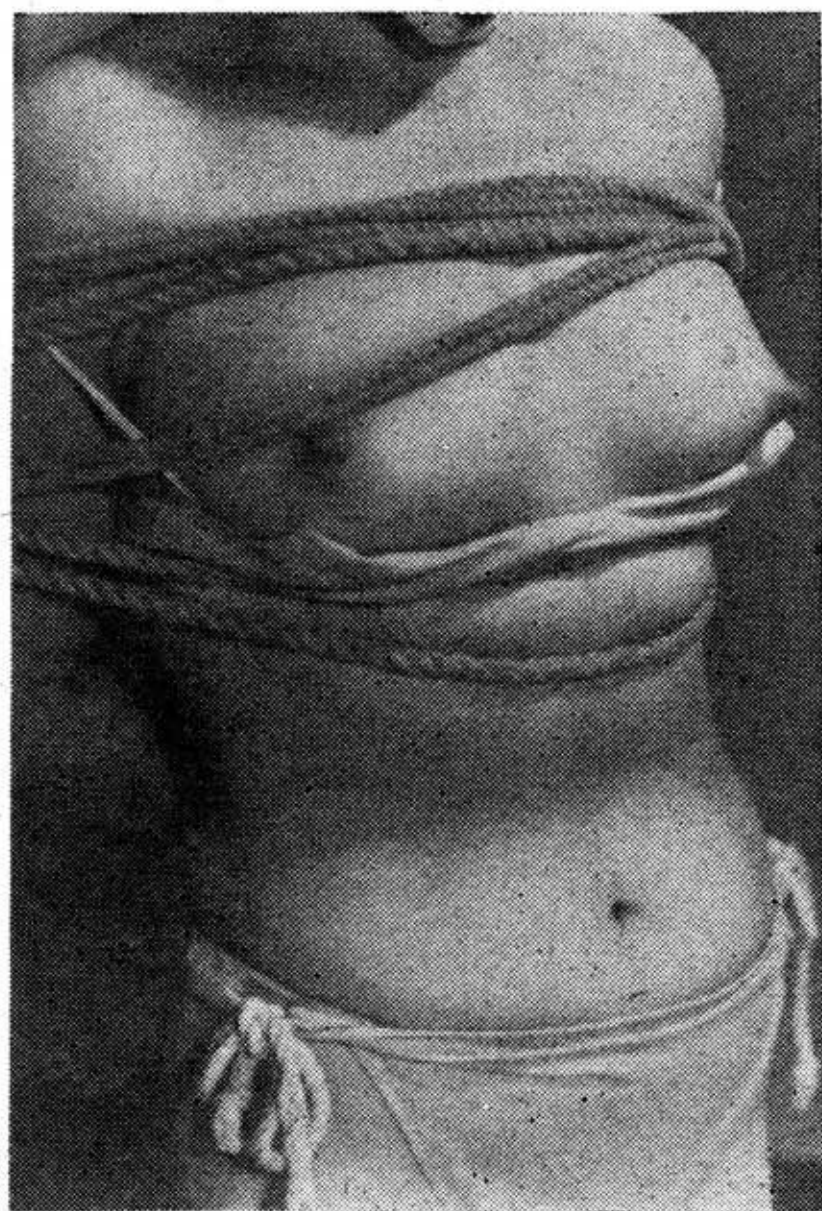
るので人数も多くなり、すぐ人影がとだえてしまいます。駅の前の道は広い舗装路で余り車の往来もありません。ポストの横にスバルが一台駐車しているきりで車も待っている気配がありません。どこからでも見通しの場所なので見落すこともないでしょう。

もう八年も前のことですが、やはり今回と同じように局留で連絡して浜寺の駅前で待合せをして、すっぱぬかされた苦い経験がありますので、今度もそのではないかと一沫の不安が兆します。



然し、同じケースで辻村隆氏と一緒に撮影にまで運んだ読者も何回かありました。モデルとしての身体的条件がよくなくて誌上には発表できませんでしたが、さすがのベテラン辻村隆氏も僻易したあの強烈なマゾ女性も、たしか局留から連絡をした筈です。

～僅か十分足らずでも待つ身になってみれば長いものです。まして、その相手があの水茎のあともうるわしい女性ともなれば、気もそぞろに胸もわくわくするのも当然でしょう。私は気を落ちつけるべくスポーツ新聞をひろ



げましたが、目は活字を読むどころか視線は駅の改札の方へ向い勝ちです。

と、黒い影が窓をよぎったかと思うと、「塚本さんですか、私、関谷ですの、大変おそくなりましてー」

鈴を鳴らすような涼しい声が耳元でしました。私は反射的に腕時計に目をやりました。針は丁度二時五分を指しています。

「いいや、約束の時間から五分過ぎただけですよ」

私は彼女を隣の席へ迎えて思わず知らず、

その横顔をのぞき込みました。真白い顔はやや上気してピンク色に輝き、額の生え際には、うっすらと汗さえにじませています。ふんわりと香水とも体臭ともつかない匂いが私の鼻をくすぐります。

「急いで来ましたものですから」

彼女はハンカチを出して一寸顔を押さえる仕草をしました。歩いてきたので暑いのでしょう。私はキーを入れるなり洗ったようにきれいなアスファルト道を疾走しました。

いくら改札口を注意していても見えない筈

でした。彼女は近くまでタクシーで来たか、バスか、或は案外この近くに住居があるのかもしれません。しかし、今の私にとっては、そんなことはどうでもいいのです。

グレイのスーツをぴっちり着こなしたこの美しい若妻を、希望通り

にグラビヤの祭壇に捧げる準備をしなければなりません。私は写真のことや、御主人のことなど、いろいろ訊ねてみました。

彼女はよく聞き透った歯ぎれのよい上品な言葉で、ききもしない御主人の仕事のことなんかも控え目に語ってくれました。

私は実のところ、この辺の地理には余りくわしくはありません。といって、今から大阪市内まで足を伸していると、行きはよいとしても帰りは丁度阪神国道のラッシュアワーの魔の刻におつかって、それこそ車の渦の中へ巻き込まれて、にっちもさっちも身動きができなくなってしまうかもしれません。

二十分ばかり走って、彼女にそのことを聞いてみましたが、勿論心当りのあろう筈ありません。ええままだよ、とばかり、やはり車の少い方向を狙って阪神国道を西へ西へと突っ走りました。

芦屋、御影と過ぎて迫る六甲の山脈を右にして神戸の山手を目の前にした時は、すでに時間は三時に近くなっていました。もう、あれこれと場所を選んでいる暇はありません。電車道から少しはずれた樹立の中に並んだホテル街へ車を乗り入れました。

やっと六帖の部屋へ落ちついた私は、冷た

いサイダーを一飲みして、カメラの準備にかかりました。落着いた上品な物腰、どんなことでも嫌味なく答えてくれる奇麗な声、私はこの初対面のモデルに対して、何のともないもなく、のびのびとした気持で準備をすすめてゆくことが出来ました。

三脚にカメラをすえ、配線、配光の準備を終った頃には、彼女もすっかり洋服を脱ぎ、持参のブラジャーにバタフライという姿で待っていてくれました。

彼女の肉づきのよい、それでいて均整のとれた素晴らしい肉体を見たとき、私は二度目の嘆声を「うーん」と発していました。胸から腹部にかけての素晴らしいポリウム。真っ白い肌は健康美に輝いています。もし水をかけたなら、きっと水晶のような水滴となって全身の肌で弾きかえされることでしょう。

私が縄を持って立ち上ると、彼女は無言のまま両手を背後で交差しました。見事なポリウムを見せた両肩口の肉がぐっと盛り上って桃色に色づいています。

『私はきつければきつい程うれしいのです』という彼女からの手紙の文句が、一瞬、私の頭の中をよぎりました。

訓練されたマゾ女性としての関谷富佐子、

彼女は私の手による厳しい拷問を望んでいるのです。縄を持つ私の手もふるえるばかりの期待が胸の中に燃え上っているのですが、端正で美しい人妻という対象が、私をして、ごく普通のありきたりの高手小手縛りに落つかせました。

ブラジャーに包まれた胸は、布もはちきれぬばかりに盛り上っています。私の視線は彼女の全身を舐めまわすように射すくめ、評価しました。殊にお臍を中心とした前面のカーブが気にいりました。ムチ打ちの激しさにも耐えるという彼女の両の臀部も魅惑な膨らみを見せています。

薄いピンクのマニキュアした足の指も、エビ責にしてアップで撮ったら、きっと美しいでしょう。背後の両の手首は思いきり肩口へしぼり上げたので、二の腕あたりが赤く充血しています。

全身、半身、とレンズは狙いをつけシャッターが切られてゆきます。私は新しい日本手拭をとり出すと彼女の口と鼻を大きく掩い猿ぐつわをしました。別に彼女が要求したわけではないのですが、嗜虐感を出すには、この方が効果的だと思ったからです。

「目はつぶっていた方がいいですよ」

猿ぐつわをする直前の彼女の涼しい声がしました。何かきつくいいじめてやりたい、痛くしてやりたい、苦しめたい、といった心をいたく刺戟する、まかせきった声音でした。

心の中では、そういう激しい嗜虐心かられながら、口では「痛くないか」といたわってやりたい、いとして気持で一杯でした。だから、特別にきついことをしようという気は起らないのです。この矛盾した気持、それでいて、この矛盾は心の中で快い調和を保っているから不思議なのです。

私が彼女の髪の毛を掴んで仰向けに倒そうとした時、彼女のバタフライの片方の紐がとけて、太股の肉づきがあらわになりました。猿ぐつわの中で息のくぐもった「ううむ」という彼女の初めての呻めきを耳にしました。マゾ女性と自称する彼女の法悦の表情を、その時の瞬間、私は自分の目ではっきり見ました。しかし、その一瞬間をカメラのレンズが果して捉え得たかどうか。

私は、二度、三度、同じ動作を繰り返して遂に彼女を仰向けに転してしまいました。フィルムを入れ換えること三度、数十ポーズは、あっという間に撮り終えていました。

時計を見ると四時十五分すぎ。



私はもっともっと撮りたいという意欲を自制して、彼女の縄を解いていました。

猿ぐつわをとったときの上気した彼女の顔は、神々しいばかりの美しさは今でも忘れることは出来ません。彼女の身体の隅々まで撮るまでには時間が許しません。心残りでしたが私は急いで後片付けをして外へ出ました。

初秋の心持ち淡い斜光線が、街路樹のプラタナスの葉を透してさしています。

車上の人となった富佐子は、緊縛ポーズをとっていた時とは、ころっと違ったなごやか

な顔つきをしています。ぴったりと身についたスーツは、着細りしているといっているのです。裸になったときのあの素晴らしい肉づきは、洋装の彼女のどこから見受けられません。

この淑やかな物の腰の上品な女性の裸身のすみずみまで、私はすっかり見てしまった。そして、縄にもだえるさまも、刻明にフィルムに印してしまったのだ。という満足感が心の中をひたしていました。

「これは些少ですが、今日のお礼のしるしですから、どうぞお受取り下さい。」

「あら、そんなもの頂くつもりは……」

彼女はこぼんで受取ろうとはしません。私はモデル料の入った封筒を彼女のハンドバッグの口金に挟んで車をスタートさせました。

「写真が出来ましたら、送って下さいね」

彼女の尻上りの歯切れのよい声音が、私の耳に快い音楽のように響いてきます。

「ええ、今日これから帰ったら現像しますから、明日お送りしましょう。で、次はいつが御都合よろしいですか。なんでしたら写真はその時にでも持参しましょうか」

私は二回目の撮影を早くやりたくて、うずうずしていました。彼女の返事によっては明日でも明後日でも、という気持ちでした。

「それは又、改めてお手紙を差し上げますから、写真はお送り下さいませね」

はっきり彼女からそう言われてみると、それ以上、強く言い出せない私でした。車は西国街道に入って東進すると、間もなく出発地点に到着しました。予定の午後五時に十八分前。あわただしい撮影行でしたが、とにかく素晴らしい緊縛姿態をキャッチできたことで私は満足でした。早く現像して結果を見たいという気持ちが私を急がせました。

彼女の後姿が駅のホームへ消えるのを見届けると、私は線路に沿った道を南へ指して一散に駆けていました。

彼女からの美しい文字の手紙が早く来ますようにと念じながら。

(おわり)

告白

女装に魅せられて

朽

木

博

(一)

私は身長一七〇糎バスト七八糎ウエスト六五糎ヒップ八二糎の会社員で、すでに妻子のある身ですが、結婚してから妻の衣服に異常に興味を感じはじめ、妻が留守の時、それを身に着けて見たのが始りで、今では殆ど女装に夢中になっています。勿論、妻はこの事を知らず、私も強いて知らそうとは思いませんが、人に知られない秘密のあることは何かしら楽しい事です。

もともと私は男の服装と言うよりは、むしろ肉体的に又精神的に苦痛を与える様な服装を女に着せるのを強制する事に非常な興味を

感じ、異常な刺激を感じていました。従って例えば、ジャンヌ・ダルクや巴御前のように女の身に重い窮屈な鎧、胃を着ける事、ゴム製の防毒服、宇宙服等を着せられる事(今年のお正月映画「宇宙大戦争」の安西郷子の様に、又テレビ映画「挑戦」でよく見られる様に)、革ジャンパー・乗馬ズボンに革長靴のいでたち(本誌藤山秀緒氏がよく書かれる様に)、飛行服に身を固める事(アメリカ映画にあった「ロマンス・ラインレのカスリーン・ヘプバーンや「ジェット・パイロット」のジャネット・リーの様に)等等。

この点さきに記した藤山秀緒氏や飯田靖子

氏の文章は私には大きな共感を呼ぶものです。また、かつての古川裕子氏の文章もあゝ意味で共感を呼びます。ところで難しい事は抜きにして簡単に、この考えを男女取り換えたとするとどうでしょうか。ピッタリと胸、腰、ヒップを締めつけるブラジャー・ウエスト・ニッパ・コルセット、ぬめぬめしたナイロンストッキング・歩きにくいハイヒール、そんなものを男の身に着けさせられる事は精神的にも肉体的にも大した苦痛であると思います。ましてやこの姿にブラウス・スカートを着せられ化粧して街頭に出されたらどうでしょう。此処に私の女装愛好の遠因があ

／＼女装写真の一例／＼

川中志乃さん



る様に思います。私はいつも想像しているのですが、ある女性肌着専門店の売子にやとわれ女装でお客と応待させられたらどうだろうか、アルバイトサロンの女給をやはり女装でやらされたらどうだろうか、全くゾクゾクする気持になります。それはとも角として女装は理屈でなく現実のものとして、私の心をゆさぶり、その為に日夜人知れぬ苦勞をしている次第です。第三者から見ればそれは全く馬鹿げた事かも知れませんが。しかしこの醜

醜味は女装愛好家でないと思われぬものと思えますが如何でしょうか。

さて、前置きはこれ位にして私の女装のやり方から記しましょう。前から妻のものをひそかに身に付けていましたが、どうもピツタリせず、結局はどこかで不満ながら妥協せざるを得ませんでした。しかし幸か不幸か、この春、会社の都合で転勤し、しばらく別居生活の止むなきに至りましたので、この間に日頃思っていたものを苦心して大急ぎで買い整

え、目下は一人身の気楽さから殆んど毎夜楽しんでゐる次第です。その購入の苦心談は後に述べるとして女装のやり方をまず記することにします。

(一)

先ず第一に男性の身体的特徴を除く手段として、ひげや体毛をそることから始め

ます。私はもともと足など人一倍毛が濃い方なので相当念入りにやります。しかし。余りツルツルなのはかえって不自然で、一度きいにそって二三日位した頃が一番良い様に思います。眉毛も細目にしますが、こめかみのいわゆるモミアゲは、そのままに置きまします。これは女はたいいてい此処を男の様に刈上げたり、一直線にそり落したりしていたいからです。なお、首筋等もきれいにすることは勿論です。

これだけしておいて愈々ファンデーションに取掛ります。最初はコルセットですが、私のは総ゴム編製のパンティ型Mサイズで出来上りウエストは六十糎以下になります。コルセットは総ゴム編製ですから、成可く汚れない様に下にナイロンの赤い水玉模様の女性用ブリーフを着けます。こうすると滑りも良く具合が良らしい。次にブラジャー・ウエストニッパを兼ねたスリー・イン・ワンを着けます。これは肩の吊り紐と背中の中フックで固定する総ナイロン製ボーン入りの六六糎用のものです。これでウエストは六十糎くらいになります。相当きついですがその緊迫感には格別です。なおブラカットはナイロン靴下などを入れた上にします。最近になってヒッ

プパッドを購入しましたので、これを着けます。コルセットの下に着けることもあります。普通はコルセットの上に着けます。これで一応ファンデーションは出来上ったわけで、その時の出来上り寸法はトップバスト八七糎、アンダーバスト七八糎、ウエスト六〇糎、ヒップ八九です。女性にしては貧弱な体になります、やせ型の女性でしょうか。

次にナイロン・ストッキングが、これはやや濃い目のトリコット製のものを着け、どうしても薄いと地肌が見えるので止むを得ないでしょう。ストッキングはスリーインワンのガーターで吊ります。次にナイロン製のスリッパ兼用の半袖シャツとやや長目のパンティを着けます。この上からスリッパやペチユートを着けることもあります。

下着は以上で、後は淡紅色のバルキセーター・暗灰色のソフトデニムのスカートそして赤い五糎のハイヒールで鏡の前に座ります。

いよいよお化粧です。まずアストで肌をひきしめその上からカラーファンデを鼻の下、あご等にやや濃い目につけ残りは適当にのばしてつけます。同色の粉白粉をパフではたき頬紅もぼかしてつけて口紅を引きます、口紅は引きようで感じがグッと変る事を発見して

驚いています。私は白粉にしる口紅にしる余りケバケバしいのは避けています。と申しますのは、自然な色の方が人に見破られにくく、またその方が反って普通の女性に見えるからです。所で最も困るのは髪です。もともとオールバックにして髪は長くしています。女の人は全然刈り方が違いますし、ピンカール等も不器用でうまく行きませんので止むなくザツと前に垂らしこれを横に向けて前から見ると女学生のオカッパ頭に近い髪にしています。スカートを充分注意してかむれば、まあ一応一寸見には女の顔になりますが、しかし毎回どうしても髪だけは意に満たず困っています。これは矢張りカツラを買わねばならないと考えています。

白いビニール・レザーのカーコートを羽織りバンドをウエストでキュッと締め、ウーリナイロンの白い手袋をはめて万事終りです。私は周囲の様子を伺いながらぼの暗い屋外に出ます。商店の明りに、自動車のヘッドライトに、そして出会う人にドキドキしながら無限に体内に湧き上る女装の喜びをコトコトと言うハイヒールの音に載せて足を運ぶのです。朽木博は朽木ヒロ子になったのです。

(三)

ここで私が女装して初めて昼間しかも市街を歩いた経験を告白させて頂きたいと思ひます。さきにも記しました様に私は目下独身寮に生活していますので、一週に一度や二度は夜女装して寮の付近を歩いています、南氏の文章を読んで何とかして一度昼間出歩いて見たいと思い、そのやり方を研究していました。

それは四月のよく晴れた暖かい日曜日の事でした。私はかねて計画していた昼間女装外出を今日こそ実行して見ようと決心し、いつもの様にファンデーションと下着を知けその上からスポーツシャツとズボンを着けました。やや胸のふくらみが気になりますが、まず外見上はその下が女性の姿とは一寸気がつかぬと思います。ハイヒール・スカート・セーター・カーコート・スカートをこれに化粧道具一切は小さな旅行鞆に入れ何食わぬ顔で寮を出ました。

Y市に昼過ぎに着き比較的空いている映画館に入りました。もちろん上映時間をよく見た上で、丁度、映画が始ってまもなくの頃です。胸をドキドキさせながら婦人便所をそつと覗きますと幸い誰も居ません。すばやく入り鍵を落しました。まず第一段階は成功で

す。この映画館はY市でも一流ですから便所も仲々きれいです。その代り入場料も高かったですが、これは致し方ないでしょ。

鏡を前に立て掛け早速お化粧に取りかかります。何時もの様には手が震えて仲々うまく行きません。やっとの事で髪も整えスカーフをつけました。ズボン・スポーツシャツを手早く脱ぎ、鞆からスカート・スエータを出して着けます。ハイヒールを履き男物はすべて鞆に入れカーコートはわざと無雑作にガバツと羽織りました。もう一度鏡でよく見直し、まず大丈夫と確めて鞆を片手にソロリと鍵を外し一歩踏み出します。まだ誰も入って来ません。入口の横に全身がうつる鏡があります。それに私の姿がうつりました。白いカーコート。淡紅色のスエータの胸がこんもりとふくれています。暗灰色のスカートの下からナイロンのストッキングに包まれた足が見えます。そして赤いハイヒールがやや内股にあります。赤い口紅に一寸小首をかしげています。私はしばらく見とれました。もう完全に女です。朽木ヒロ子です。私は鞆を持ち直して便所を出ました。出会い頭に一人の女性とすれ違いましたが、相手は何とも思っていない様子です。私はホッと胸をなで下し暗い客

席に入りました。暗い事も手伝ってか私は次第に大胆になって来た様です。男の人のごく近くに腰を下し足を組んでスクリーンに目を向けました。しかし人中では始めての女装です。すから、とても映画のストリー等に頭に入りません。とも角終り近くになって私は鞆片手に映画館を出ました。ハッと明るい日ざしに私は思わずたじろぎました。しかしもうどうしようありません。今更男の姿に戻る事は不可能です。私は大急ぎで裏通りを公園の方へと歩を進めました。一人二人……と通行人と出会います。私はややうつむき加減につとめて女らしく肩を落し内股でコツコツとハイヒールの音をさせながら歩きました。「ワァー」と呼びたい様な気持、ショウウィンドーに白いカーコート・暗灰色のスカートの女が浮び上ります。もう男じゃない。あたしは女なのだ。朽木ヒロ子なのよ。足にまとわりつくナイロンストッキングの肌ざわり。少し前屈みに歩かねばならないハイヒールの履き心地。「キューキュー」とかすかな音を立てるビニールレザーのカーコート。そしてグッと肌を締めるコルセット・スリーインワンの緊迫感、白粉の匂い、口紅の味、ああ私は次第次第に息苦しくなってきました。人気の少い

公園のベンチに腰を上したとき、私の額には汗がジットリとにじみ出ていました。しばらく休んでいた私は、鏡を取り出し再び化粧を直し今度は本通りの方へ足を向けました。歩く事に自信を得たので少し大胆になったのです。

本通りは日曜日なので相当な人出です。私は前よりも余計にドキドキしながら、それだいて一層の興奮を感じながら歩き廻りました。吹く風にスカーフが飛びはしまいか。鼻の下やあごにひげの後が出ていないか。肩がいかつくなっているか。私はそんな心配をしながらも、凡そ小一時間も歩いたでしょうか。ハイヒールの足に痛みを感じた私は再び元の映画館の横に出ました。そこから安い料金の地下劇場に入って男に戻ろうと考えたからです。

入場券売場であらかじめカーコートのポケットに入れておいた五十円硬貨を出し黙って入りました。うまく男子用の便所が空いているかが問題です。もし誰かがいたなら男子用に入れないのです。そうなれば私は再び女装のまま映画館を出なければならぬかも知れないのです。私はブラカップでふくらんだ胸の中で神に祈りながら男子用便所を見まし

た。誰もいません。周囲を見廻して人のいない事を確めた私はそれこそ風のように男子用の便所に飛び込み鍵を下しました。全くヤレヤレです。私はゆっくりとスカート・スエーター・ハイヒールを脱ぎ、スリーインワンの背中のフックを外しました。それから用意してあったビニール袋の中から濡れ手拭を取り出し顔の化粧を落し髪をかき上げました。スポーツシャツ・ズボンに着換え、女物一式を鞆の中に入れたときは全くホッとしました。やおら便所から出た男の私は休憩室の椅子に座り煙草を一服付けました。何とその味のうまかった事でしよう。ゆっくりと女装の気持ちを思い浮かべながら、私はいつまでも座っていたのです。

本誌に既に発表のあった方々に比べれば、まことに貧弱な経験告白ではありますが、一人の女装男性の身を以て体験した話として、お聞き願えれば幸いです。

(四)

女性用のもの、それも肌着を男性が買うのは真に骨の折れることです。ある場合には殆んど実行不可能のものもある様です。村田、南両氏もその事については色々と触れておられ、その方法も二三記されていますが、私た

ち女装愛好家にとっては非常に価値あるものだと思います。私は和装には余り興味がありませんので、専ら洋装をする事にしています。私がどのようなにして女性洋装用品を手に入れたかを次に記して見ようと思います。同好の人々に何か参考になれば幸いです。

私の場合すべて男姿で購入しました。と申しますのは女装にはそれ程自信も無かったし今でも余りありませんのでつとめて男姿でしかも変にならずに買うことを考えました。

まず、パンティ・シャツ・スリッパ等の肌着ですが、これは投売り専門の個人店で(どこにもあるとは思いますが私の近くに二三軒ありますので)運動会の景品にするののだかと言って買いました。金額の事もあり、こんな投売店で買ったのですが、肌着専門の個人店でならうまく買えると思います。大体千円位の予算だが、とか言えば一通りのものは店員がそろえてくれます。景品と言えば相当派手なものも買えますから便利です。この際、オレは止むなくこんな使いをさせられているんだと言う顔を忘れないことです。私はパンティ二枚・ブラカップ一組等で七〇〇百位買いました。なおスリッパやブラジャを買う時はうまくサイズを合わせておかないと後で困

ります。

次にコルセット・ウエストニッパー(私の場合はスリーインワン)・ヒップパッドは閉店間際の百貨店で買いました、予め手帳にサイズを書いておいて妻のもののだが、これに合うものをくれと厳肅な顔で言いますと、いろいろ見せて説明してくれます。私の場合は総ゴム編製コルセット六〇〇円・ナイロン製スリーインワン一五〇〇円・ヒップパッド八〇〇円でした。この時もサイズが合わなかったら替えてくれますねと念を押す事を忘れないことです。そうでないとサイズが間違っていた事が後で着ける時に判り困る事があります。なおファンデーションはキャミソール型のブラジャと高目のコルセットでも良く、ブラジャ・ニッパー・コルセットでも良く、またオールインワンと言うこれらが一つになったものでも良いと思いますがヒップパッドはどうしても入用でしょう。以上いずれでも一式二〇〇〇〜二五〇〇円位かかります。しかしこれは男の体を女の体にするため元手のかかるのは致し方無いと思います。ブラジャ類は特価品等にもありますし、投売の店にもありますが、コルセット・ニッパー・ヒップパット等はやはり百貨店か専門店にしか無いと

思います。

この辺までが買う時に一番難しいのでは無いでしょうか。私の場合残りは簡単でした。

靴下は百貨店で文数を言って買いました。最近では女の人の足も割合大きいため十文半位と言っても別に怪しれません。これも特価品等でもありますがフルファッションは少く、又フルファッションでないと女らしくなりませんので定価で買いました(四五〇円)。

スカート・セーター・カーコート・スカーフ・手袋等は適当な年令を言って妻とか妹とか恋人とかの贈物ということにすれば至極簡単に買えます。スカートやスラックスはウエストに特に注意することです。私の場合はソフトデニムのスカート一〇〇〇円、淡紅色のパルキーセーター七〇〇円、ビニールレザーの白いカーコート一五〇〇円、デニムスラックス五〇〇円と言った具合です。セーターやカーコートは冬物処分市で買いました。

次に靴下ですが、私の場合思わぬ事で古着屋で見つけて買いました。赤い五センチのハイヒールと白いレインブーツでいずれも何気なく足を入れるとピッタリなので買った次第です。どちらも一八〇円という安値でした。多少履いてあるので無理もなく履けて至極快

適です。これは実際掘出し物でした。

後は化粧品ですが、これも妻のものと妹のものとか言ってポマードや歯みがき粉などと一緒に買うと簡単です。カラーファンデ、粉白粉、口紅、パフ等含めて三〇〇円位でした。以上で総額八〇〇〇円位でしょうか。とに角これで女装が一応楽しめます。後、私が買いたいと思っていますのは細身のジャジーのスラックス・カッターシューズ・レインコート・ブラウス等で、それに出来るならカラです。

私は女装しましても始めに記しました様にやや男性的な女装を好みますのでビニールレザーのカーコートは是非欲しく実に三週間も探し廻ったものです。と申しますのは春になってこの種の冬物も早や無くなっていったからです。ある店で冬物一掃のやや汚れたカーコートを見た時、全く嬉しく有金全部投げ出して悔が無い気持でした。

ところで本誌を見ますと女装愛好家が相当おられる様に思いますが、恐らくいろいろな苦心談、体験談があると思います。どしどし発表して頂きたいものです。それと共にこうして苦勞して女装されている方々が一度集って女装のつどいを催したいものです。私達は

男娼などとは全く違うものであり、社会等に何等迷惑をかけない様に心掛ける事は勿論ですが、ともすれば変に見える世間殊にジャーナリズムですからその開催には充分注意する必要があると思います。しかし熱意ある所決して不可能とは思いません。是非開催したいものです。そして誰に気兼ねする事無くのびのびと女の姿で街を歩き廻りたいと思います。終りに蛇足の様ですが私がかねがねやりたいいろいと思っている姿を列記して筆をおかせて頂きます。

- 一、細身チェックスラックス・タートルネックの大柄スーター・白いカーコート・白いブーツ―スポーティな女
- 二、赤と黒のあらい格子のスポーツシャツ・灰色のフレヤスカ―・赤い中ヒール―タウンウェアの女
- 三、ササールコート・スカート・赤いレインブーツ―雨の日の女
- 四、淡桃色のシャツブラウス・黒のツープス・黒のハイヒール・白手袋―フォーマルな女
- 五、セーラ服等の女学生の制服姿
- 六、同じくそれにレインコート・レインブーツで雨の日の女学生。
- 七、デニムの作業ズボン等で働く女

(以上)

未完の告白

渦

う
ず畑
晃
一

私の自己愛・序説

私は、実は別のペンネームを明らかしたら
知っ居る人は知っているだろうし、知らない
人は知らないだろうが、それでも小説をかい
て飯を食って居る一人である。

私は、奇譚クラブの復刊を知らなかったの
だが、昨日、偶然復刊九月号を見つけて買っ
て来た。その中で門田奈子さんの「自己愛」
には深く共鳴した。彼女は「恋愛」について
語って居るのだが、その中で、自己愛という
言葉が四回も出て来る。

自己愛——とは、何と美しい、何と尊い言
葉であろう。人間は、誰でも自分に対する愛
情を持って居る。（若し、持って居ない、と

いう人があれば、お眼にかかりたい）その自
己愛を自分自身に向ける人、世間では孤独主
義者とか、エゴイズムとか呼んで居るものを
多量に持って居る人は幸福な人である。その
意味で、奈子さんは世界一、とは云わないが
非常に幸福な人だと思う。

他人のことはどうでもいい、これから、私
の男性としての自己愛を書いてみようと思
う。と、いうのは、非常に強い自己愛を持っ
て居て、それを表現出来ないで、（自己愛の
所有者は、人と協榮することが出来ない、だ
から、独身主義とか、オールドミスとかにな
る。）苦しんで居る人達があると思うのだ

が、その人達に幾らかでも安心感を与えれば
よい、と思うのである。（私は、旧号時代
に、長瀬昭子さんに対する一文を投じて置い
たら、「復刊第二号」に、それが掲載され
らしい。自分では何を書いたか覚えて居ない
が、どうせ、何か下らないことを書いたので
あろう。唯、あの中で敏子——という名を使
ったと思うが、本名ではないので——のこと
を書いて居ると思うが、私の自己愛に対する
唯一の理解者である彼女のことを書く必要が
出て来ると思うので、ここにこう書きそえて
おく。」

私の自己愛、を語るのには、先ず私の生い

立ちを語る心がある。

私は、東京のH区で生れた。本名は、書くのを止める。二三の私の本名を知って居る友人——学校時代の——が、奇譚クラブを読むことを知って居るから。（それから、これは編集部の方にお断りしておくのだが、文芸年鑑で私の本名を探されても無駄である。私はペンネームを本名の如く見せかけて使っているのだから。この位、細心の注意をしないと自己愛は完成しない。）

H区、というのはお邸町で、学者町でもある。だが、私の家は、代々呉服屋であって、店は日本橋にあったのだが、住居はH区S町にあった。（今は、両方ともない）

母は家つき、父は養子で、私は長男、妹が一人居たのだが、彼女は十一の時、流行性感冒で死亡した。

少年時代の私は孤独な子供であった。妹は名を明子と云った——としか遊ばなかった。

大抵は、妹の云うなりになって遊んだ。明子は私とは五つ違いだから、彼女が物心つく頃は、私は既に学校へ上って居たが、学校の友達もつくらなかった。いや、一人居た。私の家とは、市電で二丁場程離れた、矢張りH区のK町に住んで居た。お父さんは弁護士で、

彼は五人兄弟の末っ子だった。男、男、女、女、男の順の兄弟だった。その彼——名を山下信男と云った。——は、学校の帰り（私達は城南にある、私立大学の附属小学校に通って居た。）によく家で遊んで行ったものである。

私達の遊びと云ったら、妹の注文でままごとが一番多かった。私がお父さんと、明子がお母さんと、山下信男は赤ちゃんだった。明子が自分よりもウンと大きい山下を「オウ、ヨシヨシ」などとあやして居た光景が今でも目に浮ぶようである。

私と山下とが小学校三年の時に支那事変が始った。昭和十三年六月二十八日には、木綿の使用、販売、製造が禁止され、また、昭和十五年七月には、贅沢品禁止令、所謂、七・七禁令が公布されて、私の家でも商売を続けることが不可能になったのである。その時、私の、唯一人の友人と云ってもよい山下が急に大阪へ行くことになったのである。以来、私は、彼に会っていない。彼はどうしたかなあと今でも思う。

それから私の孤独は始まった。私が、自分の孤独を慰め、それを忘れるために、一番先に考え出した手段は、本を読む

ことと、その主人公を私にあてはめることであった。だから、夢の中では、私はある時は源義経であり、或時は宮本武蔵であり、ある時はアレキサンダーであり、ナポレオンであった。私の好きな英雄達は皆強かった。そして、それよりも、私があこがれたのは、この人達が何でも自分の好きなことをする、ということであつた。

私は、可成りわがままに育った。ほしい物があると、買って貰うまで泣いて居るといった子供であつた。然し、時代の移り変りは、私にわがままを許さなくなって来た。家の台所が不如意になりつつあることは、子供の私にもよく判った。五人居た女中は、三人になり、二人になり、やがて、明子の乳母が一人残った。父は多忙であり、母は病身であり、明子は小さく、友達も居なかった。今まで、わがまま一杯に育って来た私は、自分の対象を自分自身に向ける外はなくなって仕舞った。こうして、私が小学校五年生の夏頃から私の自己愛は始まるのである。

私が小学校五年生と云えば、昭和十四年である。昭和十四年といえば、ノモンハン事件の起った年であり、また、第二次世界大戦がヨーロッパにおこった年であり、また、九、

一八物価停止令といわれる価格等統制令が公布施行された年でもある。

私はその頃、二階で一人寝て居た。本当は明子も寝る筈だったが、彼女は母の側ではかり寝て居たので、自然、私は一人で寝ることになったのである。

その頃、私は色々の自虐を試みるようになった。或いは極く初歩の位のことかも知れない、が、私は真剣だった。その方法は色々あったが、その二三の例を挙げよう。例えば、

(話がきたなくなる事を許してほしい) 今日なら今日から三日間、小便は何回行ってもいいが、大便是行ってはいけない、と決めるのである。何だか、カスが腹中に充満したように、実に感じの悪いものである。それから夏の一番暑い夜を選んで成べく厚いフトンを三枚くらいかけて寝る。体中汗でビッシヨリ、寝衣が肌について気持の悪いものである。余り気持が悪いので一遍で止めたが、便所へ行かない方はおいおい進歩して、私は、今も一週間や十日は大便へ行かないでも何でもない。

よく、話題にのぼる浣腸を始めてされたのも、私が以上のような自虐を試みるようになってから間もなくのことだった。私は、例に

よって、三日ぐらい便所へ行かなかったのがその時、学校で虫下しを吞まされたのである。が、全然腹が下って来ない、それを母に訴えたので母は私に浣腸をしたのであった。私は、泣いていやがったが、母と女中とに手足を押えられて浣腸をされた。この時の浣腸は唯いやであったことだけを覚えて居る。が以来、この浣腸を誰かにやって見なくなったのは、私自身が、自分をサジ五分、マゾ五分と考えて居る。確かにサジズムの芽生であったのだろう。

その機会は割合に早くやって来た。然し、対象は人間ではない、二三軒先のMさんという家で五六匹生れたうちの一匹の黒と白の斑の子猫であった。私は、昆虫採集の道具を一揃い持って居て、それに水を入れた。そして明子に、猫の手足を持たせて、お尻からその水を注射した、驚いたのは猫である。明子が押えて居た手から飛出して仕舞ったので、切角の実験の結果は成功であったか不成功であったか、今もって判らない。これが、判ったなら、大目玉だが、注射器を持って居るのを母に見られて、お医者ごっこだとごまかして仕舞ったが、少くも明子はそう信じて居たらしい。

明子と一世一代の大喧嘩をやったのも、この頃だった。明子は私より五つ下だが、早生れなので、もう小学校へあがって居た。その喧嘩の原因が何だったかは、もう忘れて仕舞った。が、私が明子を押えて、グイグイ髪の毛を引っ張った。その時に、二三十本の髪の毛が抜けたので、あわてて手を離し、仲直りをしたことを覚えて居る。年が五つ違って居たから、明子との喧嘩の思い出は唯一度であるが、私がレスリングというものが好きなのは(断って置くが、私は柔道も相撲も好きではない。レスリングは例外である。これは、相手を組み敷くことに原因があると思う。)この時の体験が潜在意識になって居るからではないかと思う。

谷崎潤一郎の『少年』を読んで感激して、あのシーンを自分の手でやって見たいと考えたのは、矢張り小学校五年の秋から冬であった。(あの、サジズムとマゾヒズムの入交った古典的な価値のある『少年』の趣きを解して、その実行を思いついた、というのは、我ながら、早熟であった、と苦笑せざるを得ない)それに、例の猫にやりそこねた浣腸もやってみて見たかった。そこで、何をして、何処から苦情の来ない子は居ないかと、随分探

した結果、とうとう適当な相手を探し出した。私の店の番頭の娘で、家の家作——直ぐ近所の——に住んで居た、幸子、敬子の二人の姉妹であった。姉の幸子は六年生で妹の敬子は三年生、二人共近所の小学校に通学して居た。何と云って呼んだか忘れたが、二人共直ぐやって来た。男の子が居ないのは不満だったが、幸子が男の子のような娘だったのでまあ満足に近かった。

私達四人がやったことをクドクド書くと長くなるし、この文章の目的に反するから、ここでは書かない。唯、一つ、目新しいかも知れない責めのアイデアを覚えて居るので、それだけ書いておこう。

それは、彼女等の身体の上半身だけを脱がすのである。そして、芝生に転がしておく、それで、犬——名をメルといって、秋田犬の大きな犬であった——を伴れて来て、彼女らの身体をペロペロなめさせるのである。これには男まさりの幸子も参ったらしかった。

こんな思出を書いて行ったら際限はない。そこで、私を自己愛へ追いやった出来事について書かねばならないようである。だが、その前に、少年時代の私のことについて、もう少し書いておく必要がある。

私が思春期の転帰を迎えたのは矢張り小学校五年の秋であった。従って、この年、昭和十四年という年は、私にとっては非常に重要な年である。私は主として時代小説を書き綴って居るが（責めを主とした時代小説を、私はいつか書くことをお約束しよう）その根底の出發は実にこの年であった。と云って過言ではない。

昭和十四年といえ、数え年十二である。

矢張り早熟だったのかも知れぬ。が、これは私の家の伝統とも云えることである。私の父は、養子で、実家も相当に大きな薬種屋だが父が始めて「女」を知ったのは、数え年十五の時であった、と云う。母方の祖父は十歳前後から吉原に出入したと云う。私自身も、商売女は不潔らしくて好かないから、未だお眼にかかったことはないが、——宴会などで芸者が来たり、女給が来たりするが、あれは別である——始めて女を知ったのは、父よりも一年早く数え年十四の十一月であった。先に書いた幸子と敬子とが七・七禁令のために店を縮小して田舎へ帰る彼女等の父と共に東京をたつ前々日の午後、二人共に提供して呉れたものである。彼女達の学校は、Yの三業地に近かったから、特に、幸子はそういう点で

はませて居た。彼女は、主家の子たる私への贈物として、自分達の一番大切なものを呉れ、私も平然とそれを受けたが、幸子十五、敬子十二、私は十四であった。

時に、私は中学一年、幸子は高等科二年、下町ッ子は大体早熟であるが、上野の側とY三業地に近い学校へ通って居た幸子が早熟であったことは、改めて書くまでもない。私自身もまた、私で十八代目という下町ッ子であったから（私達が当時住んで居たのは、往昔は店の寮で、それを父が改造して住居にしたのである。私は、小学校へ上るまで日本橋に住んで居た）色々なことを見聞して、或る程度の知識は持って居た。日本橋といっても、芳町に近く、しかも、家が呉服屋だったから芸者などの出入も多かった。いつであったかその本で手許にないので判らないが、確か松井頼子さんが書いて居られた芸者屋の折檻、あのような折檻を見たことも何度かある。

私は、この日の光景を昨日の出来事のように思い浮かべることが出来る。かくして、私の一生涯の一つのピリウドがうたれたのである。

私の、幼ない時代の思い出はこれで終る。然し、私はもう少しつけ加えよう。

それから約一年後、昭和十五年十二月十五日、私の唯一の同胞である明子はこの世を去った。享年十一歳、

同年、私はフラフラと陸軍幼年学校を受験した。そして、入学した。

翌年、敬子が山形で病死した。死因は腹膜炎、彼女は十四歳、

そして、同年には、太平洋戦争が始まった。

私が本当に自己愛ということを考え始めたのは、明子が死に、敬子が死亡した頃であった。それまで、私は、本能のままに、自覚することなしに色々なことをやって来たのであるが、私は、私自身を深く深く愛するようになっていった。

私が、数え年十六から二十までの年月は、戦争、戦争で明け暮れた。私は、幼年学校から士官学校へ上り、その二年の時に敗戦を

通信

夫婦のSMプレイ

新宮 明夫

私がまだ独身で下宿生活をしていた頃、近所の古本屋でふと奇クを発見して以来、すっかり奇クの虜になってしまい毎月号が待遠くてなりません。もっとも私自身の心の奥底にくすぶっていたSMが奇クによって引き出されたという方が本当かもしれない。結婚後しばらくの間は恋女房の手前遠慮して奇クもなるべく目につかぬ所に隠して、こっそり一人で楽しんでいたのですが、夫婦の生活で隠し通せるものではなく意を決して妻を仲間に引入れることにしました。この過程を手記にしますと一編のS

M小説が出来るのですが、なにぶん文才のない私なのでお許し願います。しかし二年後の今日、妻も共にプレイを楽しんでいることから御想像願えると思います。そこで或夜の私夫婦のプレイの一端をお知らせして先輩である皆様の御指導を賜りたいと思います。

『八畳の部屋を六十ワットの蛍光灯が明るく照し出しています。裁判官である私は床の間を背にして丸い小椅子に腰をかけています。私の前には白い囚衣を着せられ後手姿の女囚が引据えられてうなだれていま

迎えた。家では母が死に、家は店も住居も両方共焼けた。父は、気がぬけたようになり、自然、私が家の商売をやるようになった。幸い、幸子の父の故郷の山形に貨物列車にして三台分の衣料が運んであった。その衣料を山形で売り始めたのが当って、二十一年の暮には、当時の金で七百五十何万というものが、私の財産になった。

私達は上京した。幸子姉妹の父は死んで、その未亡人、幸子、私、父は山形に残った。彼は、市の近在の農家の未亡人と再婚した。

私達は芳町に近いもとの家の焼跡に旅館を建てた。が、内々は料理屋であり、連れ込み宿だった。幸子の母、志津は、板前、幸子は女中頭の格、私は帳場に座っても見たが、直ぐに飽きて、K大学に通い始めた。

それから、一年後は無事であった。上に、極めて……と、云う字をつけてもいい位であった。唯、幸子との関係はつづいた。彼女の母は見えて見ぬ振りをして居た。やがて幸子は妊娠した。然し、三月程で流産した。

私は、すっかり自分自身がいやになっていた。金のあるにまかせて酒を飲み歩いたのもこの頃である。十日に一度も行かないのに、女を囲ったのも矢張りこの頃であった。一時

す。この女囚は結婚間もない新妻ながら夫を殺害した殺人犯で、今から判決を云渡されるのです。

私は厳かに立上り「今から判決を云渡す。被告人を夫殺しの重罪により獄門に処す。」と云渡します。「お慈悲です、お許し下さい。」ならぬ、この国では夫殺しは重罪で容赦はならぬ。裁判官は云渡すとささと引上げてゆきます。女囚は不自由な身体の儘泣伏します。この国の死刑は絞首、斬首、股裂、串刺、といろいろの処刑方法がありますが、この女囚は獄門を云渡されたのです。判決云渡は正午に行われ夕刻には処刑される事になっており、その間は町の中央広場に設けられてある梟場で梟されるのです。

泣き伏す女囚は無理に引き起されて裁判所の玄関まで引立てられ、玄関先で後手の手錠をはずされると囚衣をひきはがれ荒縄で高手小手に縛り直されます。これは死刑の判決で総べての権利を剥脱された事を示すのです。

そして羞恥のために前かがみになり勝ちの女囚は、その度に竹の笥で尻を叩かれ梟場に引立てられてゆきます。梟場には一本

の柱が立っており、その下部に一本の横棧が取付られていて女囚はその柱に縛りつけられ両足は左右に一杯に開かれ横棧に固定されるのです。やがて処刑の時刻が迫った頃、首を切られた後粗相をして刑場を汚さない為その儘の姿で浣腸をうけるのです。

刑場(庭)には既に首穴が掘られ荒むしろが敷かれ準備は出来ています。荒むしろに引据えられた女囚に再び立会人から「只今から刑を執行する。」と告げられ白布で目かくしをされます。そしてぐったり俯向いている女囚の尻を蹴って女囚がはっとのび上った瞬間、首を前の穴へ打落すのです。

……

その後その首を梟台に運び獄門にかけるのですが、妻も高校時代演劇部にいただけあって表情たっぷりに演じます。その外絞首刑や串刺刑も同じような手順で行っています。そして時には私が死刑囚になり妻が執行人にもなります。この様子をカメラに収めたいと思うのですが、この町ではDPにも困るので目下のところはプレイだけで楽しんでいます。他にも御夫婦でプレイされていらっしゃる方がいらっしゃるようですが何卒御指導下さい。

は、自殺すらをも考ええたことがあった。然し、私は死ねなかった。だから、こうして生きて居る。とも云えるのであるが、それには一つの転期があった。幸子の二度目の妊娠、子宮外妊娠による幸子の死亡、そして、敏子との出会い。かくて、私はいよいよ自己愛の砦にたてこもることになる。

(以上は、人物の名前を変えた外は全部真実です。或いは、真実とは見えないかも知れない。然し中川与一は「天の夕顔」で云う。

「信じがたいと思われるでしょう。信じるという事が現代人にとって如何に困難かという事は、わたくしもよく知っています。それでいて、最も信じがたいような事を、最も熱烈に信じているという、この狂熱に近い話を、どうぞ判断していただきたいのです。」――

実際、私の場合もそう云えるのです。他人には作りごとのようであっても、その本人には最も信じること、真実であることはこの世に存在するのです。私は、今、病床にあり、この原稿以外に頼まれた原稿は山積し、思うにまかせず、殊に、後半は意にまかせず、病床で寝て書いたものです。

「奇譚三十九夜」物語

~~~~~(第二十夜)~~~~~

辻村

隆

秋の気配が日一日と、ビルの谷間にも爽やかに流れこんで来る今日此頃です。

メンバーは例によって八人――。

退屈男達が始めて顔を合せて以来、既に二年足らずの歳月が、いっとはなく経っていたのです。猟奇を求める人々にとって、三十九夜のクラブでのつどいが、日頃の憂さを忘れさせる、何ものにも換え難い、珍重すべき存在であったのでしよう。

常に聞手に廻る、寡黙派のライカ氏が、今日は珍らしく、自ら進んで、今宵の口火をきったのでした。

――謹聴々々……――

誰かの揶揄めいた声に、ピタリと雑談は納まり、やや照れ気味

に、ライカ氏はしきりにひたいの汗を拭うと、斯う切出しました。

第四十七話 お菊の亡霊宙に迷う

「私は昔から幽霊と云うものの存在は信じてない方です。無念の霊魂が、凝り固まって何らかの働らきをするとは思いますが、これは所詮、女の執念深さを、誇大に描く後世の作家のつくり話ではないかと思うのです。」

先日、八月廿九日のサンケイ新聞朝刊に、「番町皿屋敷」で有名なお菊の亡霊は、ここがホンモノだと名乗り出たニュースがありました。

私はかねて、井戸に縛られて吊され、滅多斬りにあつて死んで行く、お菊に非常に興味をもつて、昔の錦絵のたぐいや、種々の伝説、史実を調べて見ましたが、未だにどれがそのホンモノであるか判然としなないので。

江戸の番町、播州（兵庫県）の姫路、江州（滋賀県）の彦根、兵庫の尼ヶ崎、それに今度名乗りを挙げた上州（群馬県）は妙義山麓と、お菊の亡霊が都合五ヶ所で活躍していて、夫々が、我こそはホンモノと、銘々もつともらしい史実が残されているのです。

共通の点は、お菊がどの個所に於ても惨殺されていることです。皆様に聞いて戴いて、果してどのお菊が、一番ホンモノに近いかを採択して貰いたいと思うのです。

一、番町皿屋敷説

番町（麴町）の青山播磨守長治の邸に行儀見習いに上つたお菊と云う娘は、その当時の江戸名代の大盗賊向坂甚内の忘れ形見と云われている。青山播磨のお役は火附盗賊改めだったから、役柄に於て既に因縁めいている。

青山播磨は、このお菊に横恋慕したがいつかなウンと云わない。

武士の専横で、わざと皿をかくして色々と責めたてた。

お菊の責めは、雪景色の井戸前と相場がきまつているが、これは愈々最後の土端場であつて、それまでも随分色々と、手を変え、品を変えて責め上げている。

伊藤晴雨好みの雪庭、での折檻や、髪や裾を乱した座敷牢でのお菊の責め場も残されている。

遂には井戸に吊されて滅多斬りとなつて、ドボンと転落するのであるが、一説には、この井戸は、その昔、吉田御殿の千姫が、数多

の男を引込んで弄んだ挙句、次々と男を惨殺して投げ込んだ井戸と云われている。

享保年間の、『江戸砂子』と云う本には、『その念この井戸に残りて、夜ごとに菊女の声して、一つより九つまで、十をいわで泣き叫ぶ。声のみありてかたちなしとなり。よつて皿屋敷とつたえたとあり、牛込御門内の傍に社あり、皿明神と云うとぞ。菊の霊を祀りたりという。それよりして、その事なしと也。この社は稲荷の社也』とある。

お菊が殺されたのが元文五申年二月十六日で、その墓は、彼女の十三代目の子孫が住むと云う、平塚市新宿の、俗に代官墓地と云う処に立てられている。

巷説によると、青山播磨は青山主膳となつてゐる。お菊の墓には「貞宝菊秀信女」と云う戒名が刻まれている。

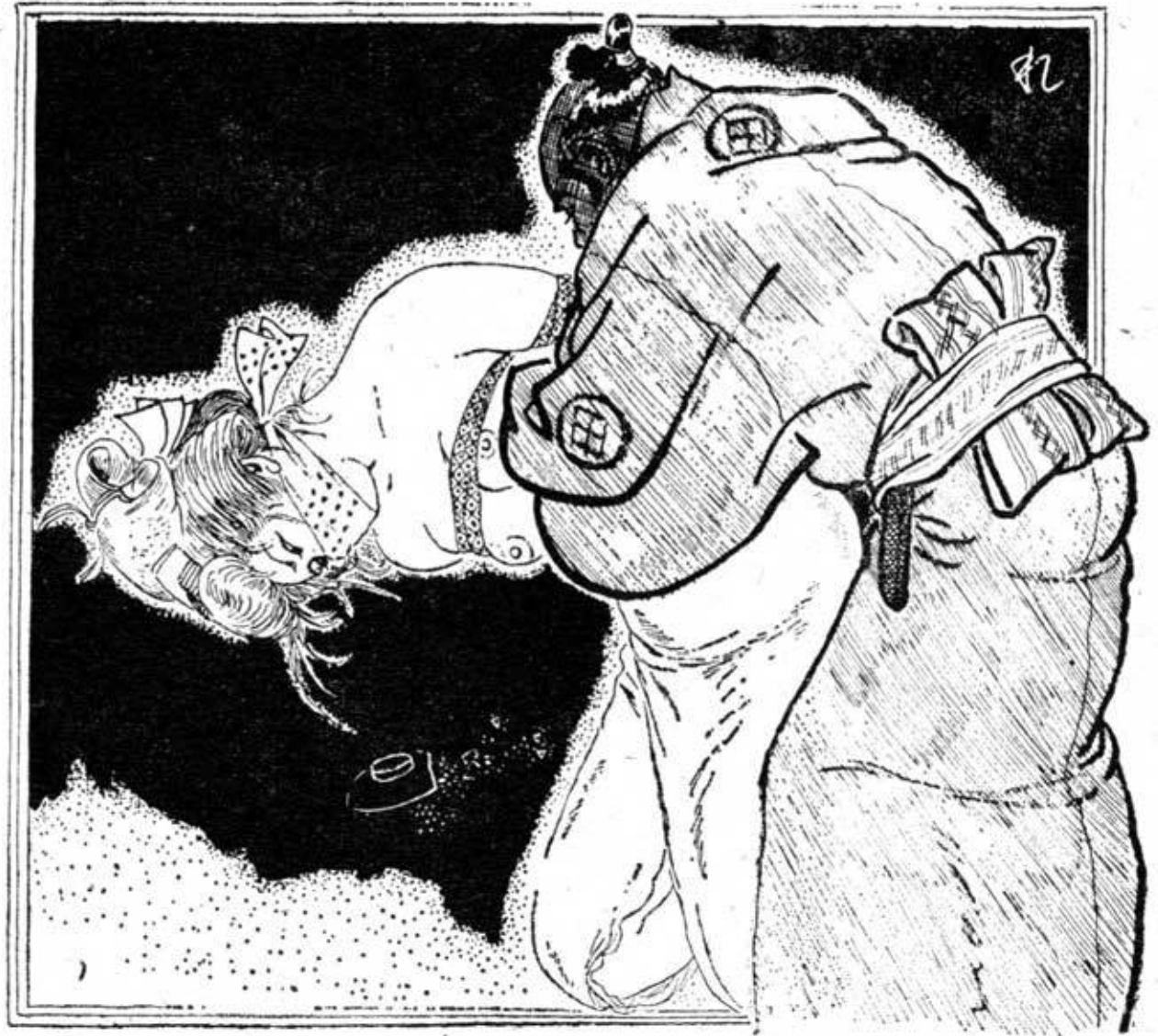
二、播州皿屋敷説

こちらは家騒動がからまつてゐる。

姫路の城主小寺伊勢守が、明応二年の春、疫病に罹つて、生死の瀬戸際の時、お附の腰元のお菊が、十二所大明神に祈願し、水行したりしたので、伊勢守の病は不思議に平癒した。伊勢守は感激して、お菊と割なき仲になった。併し閨の睦言も束の間で、永正元年の二月伊勢守は没する。

小寺家横領をねらう青山鉄山と云う家老の仕組んだ毒殺とも云われている。

嫡男左京進が相続したが未だに幼ない——お菊は恋しい殿御の為懸命に幼君を守るが、家老一派の魔手はのびて、お菊の父の一寸したあやまちで、嫌応なく、青山鉄山の召使いにされてしまう。



お菊の美しさにぞつこ惚んれ込んだ鉄山は、色と慾とで、お菊をわがものにせんと日夜つきまとうが、主君の仇の悪家老に何条許す気振りもなく、非道い肘鉄である。

鉄山がお菊に執心するのを知った鉄山の奥方は、憎いはお菊と、

事ごとくにネチネチと辛らく当り、毎日が針のむしろに坐った様なお菊の日常である。

或る日、片づけものをしていた彼女が、十枚一組の皿を一枚誤まって割ってしまった。さして値打ちのある皿でもないが、これを楯に、鉄山は日頃の恋の恨みをはらさんと、お菊を腰巻一枚にして荒縄で縛り、散々に責苦を与える。お菊は唯もう泣いて詫びるだけである。胸に一物の鉄山は、そんなお菊を座敷牢へとじこめた。命だけは助かったと思ったのも束の間、その夜座敷牢へ来た鉄山は、逃げまどうお菊に挑みかかる。遂にお菊は彼に組みしかれ、抵抗出来ないように猿轡をはめられ、しっかりと両手を後手にしごきで縛られて仕舞う。

あわやの瞬間、物音を聞きつけて座敷牢へかけつけたのは家老鉄山の奥方だった。

間一髪、鉄山から遁れたが、所詮は鬼が蛇に変わっただけで、嫉妬に狂った奥方は、形相も凄まじく、お菊に馬乗りになると、

——憎いこの顔が……憎い……——

とギラリと懐剣を引抜いて、お菊の顔を滅多矢鱈に切りさいなんだのであった。

必死になって、お菊は両手を縛られた儘、奥方を押しのけ、開いてあった座敷牢から庭先へ遁れ出たが、奥方は眦も裂けん許りに追い縋ってくる。お菊は逃場を失って、庭の古井戸の井桁にとうとう押しつけられ、奥方の懐剣が胸にせまった時、身をのけぞらせ、呀っ瞬間、古井戸に転落してしまった。

扱、こののち、古井戸にお菊の亡霊が現われる様になった。

最初の発見者は庭番の爺さんで、夜更けの庭先から、かぼそい声

が流れてくるので、声を頼りに近附くと、髪はおどろ、血まみれのお菊が恨めしそうに一枚、二枚と皿を数え、十を数えられぬその怨みが、かすれる様に陰にこもり、屋敷の隅々まで泌み通って行く。お菊の亡霊は、正義の侍、花房長門介の許へも現われて、青山鉄山の陰謀を囁やく。

夜毎のお菊の亡霊で半狂乱となった鉄山と奥方が、花房長門介一味の努力で誅された時、幼君左京進はお菊の忠節と苦衷をあわれんで、お菊神社と云うのを十二所大明神に建立したと云うことである。

姫路市忍町には、名勝於菊神社と大きい石碑が立っている。

又『菊嬢由縁松』と云って、元はお菊井戸のそばにあった松が、その霊を慰さめる為、於菊神社の境内に移されている。

現在も、姫路城旧二の丸の広場にある『お菊井』は青山鉄山の屋敷の跡として、当時お菊が身を投げた井戸として、八角の石杭の囲いをして保存されている。

三、尼ヶ崎の皿屋敷説

ここでは元禄九年の出来事になっている。

尼ヶ崎城主青山氏の家老に木田玄蕃と云う男がおって、お菊は、この家の腰元として仕えていた。まめまめしく働らくお菊に、木田玄蕃は年甲斐もなく恋の炎を燃やしたが、お菊には家中の若侍に意中の人がいて、柳に風と受け流していた。性来短気者の玄蕃は、何か折あらば、お菊をとちめて、我がものにしてくれんと、虎視眈々とその機を窺がっていた。

或る朝、食膳に向った玄蕃が、納豆をほうばろうとした時、この納豆の中に一本の縫針がまじっていて、玄蕃の唇をついた。

「不埒者！拙者を針で殺す気か！」

玄蕃は今こそと、泣いて詫びるお菊の言葉もものかわ、夜になるまで、一室に監禁し、責めて責めて責めぬいた。お菊が玄蕃を受け入れる気なら、彼とても許すつもりであつたろうが、案外強情なお菊は、その事になるとどうしても首をたてに振らない。青竹の先がサラサラになる迄打ちすえたが、腹が癒えない玄蕃は、髪を振乱し、後手に縛られて落花狼藉の姿のお菊めがけて、いきなり手許にあつた家宝の皿の一枚をパツと顔めがけて投げつけた。

十枚一組の皿の一枚が、お菊のみけんに当ってただけ飛んだ。彼女のみけんは割れてタラタラと鮮血が流れている。

自らで皿を割っておき乍ら、家宝の皿のわれたのを見て、尚更逆上した玄蕃は、瀕死のお菊を裸にし足を掴んで、ズルズルと庭に引曳り出し、井戸の前まで引曳ってくると、冷めたい寒中の井戸水を、ザブリザブリとお菊に浴びせた。井桁にずぶ濡れのお菊を荒縄で縛りつけ、明朝再び折檻する気で彼は屋内に戻ったが、身を果敢なんだお菊は、井桁の縄をどうにか解いて、井戸へ身を投げたのであつた。

それ以来、木田家には妖しい事が次々と起つた。夜井戸へ水を汲みに行くと、ボーツと井桁に髪をおどろに振り乱したお菊の亡霊が荒縄で縛りつけられているのである。

更に澄んでいた井戸水は段々と赤く濁り始め、到底のめなかつた。玄蕃が食事をしようとすると、どんなに注意をしても、食べ物のかに針が含まれていた。玄蕃は段々とノイローゼになって、あらぬ事を口走るようになる。

これが青山藩主の耳に入つて、木田家は改易となり、お菊の亡霊を葬つて、木田家の跡は源正院という寺になったが、この寺には、

いくら菊を植えても、絶対に花が咲かないと云う奇怪さである。

寛政七年の夏、井戸替えをした時、この井戸の中から、女が裸体で縛られた様な恰好の小虫がザワザワと這い出てきたと云うことである。

四、彦根の皿屋敷説

彦根馬場町孕石主膳と云う、禄高の可成り高い武家が住んでいた。

お菊はその孕石家の腰元を勤めていた。不義はお家の法度であるが、お菊は孕石家の若侍青山数馬と割りなき仲になっていた。

一方若侍の数馬は又、孕石主膳の兒小姓として、彼の寵愛を受けていた。今日で謂うゲイボーイである。

主膳は寵愛する数馬が閨の伽に、とんと身が入らぬので、不審に思い、それとなく調べさせると、お菊と出来ていることが分った。

男色家の主膳はお菊を早速成敗したかったが、そうなると自然、その相手の青山数馬も同断にしなければならぬ。数馬だけを何とか手許に残して、お菊をバツサリやる方法を陰険に考えていた。女に不自由せぬ地位の男が、もっぱら男色に没入しているのだから、考えることが妙にいやらしい。

一方青山数馬も年頃の水もしたたる美青年である。主人と思えばこそ中年肥とりの主膳のお相手を詮方なくつとめているが、気立の優しい、美しいお菊がいにきまっている。

主膳は、数馬の気持を取り戻そうと、遂に老獪な手段を考えついた。

美人で奥方の受けもよし、それにまめまめしく働らくお菊に、なかなか文句のつけようがなかったからである。

或る夜、主膳は数馬に酌をさせ乍ら、食事の給仕をお菊にやらせ

て、これ見よがしに数馬を抱き、頬をよせたり、体を触わったりで殊更に、挑発的にベトベトとこれでもかこれでもかと、お菊の純な心を刺激した。数馬の迷惑この上もなかったが、宮仕えの悲しさで、つよい態度にも出られない。仕方なく、主膳のなすが儘にされている。努めて眼を避けようとするお菊であるが、心ここに非ず、恋しい数馬のこの仕儀を眼前に見せつけられては、物思い千々に乱れ、ハッと思う間もあらず、主膳に差出そうとした、料理をのせた皿の手を外して仕舞った。料理が散乱して、皿はあえなくもくだけてわれていた。

「無礼者——その皿を何と心得る。いやしくも家宝として、伝来の大切な皿じゃ、それを割りおって——。それへなおれッ！」

主膳はこの時と、憎々しげにお菊をにらみつけて怒号し、青山数馬に命じてお菊を犇々と高手小手に縛らせた。

「この痴れ者を、責めて責めて責め上げる！」

主膳は数馬に命じてニヤリとした。

主命もだし難く、主人の云う儘に、お菊を梁より吊し、弓折れで叩くが、如何ともせん彼の手は鈍る。お菊の恨めしげな顔に彼の心は、主に生きんか、恋に散らんかと攪乱する。

「ええい、手ぬるい奴め——。女を井戸に吊しさげい——。拙者がじきじき責めてくれる！」

主膳は顔を真赤にさせて、裸にむいたお菊を井戸の滑車に吊り下げ、数馬の目前で、彼の反響を楽しむ様に、真剣でチクリチクリとお菊の肌を一寸刻みにさし、遂になぶり殺しにして井戸へはめてしまった。

不思議や、残っていた九枚の皿は、すべて数条のひび割れと共に

割れていた。

主膳はこれらの欠皿をすべて井戸へ捨てさせたが、この夜から、お菊の怨霊が、夜な夜な主膳と数馬がたわまれる枕頭に現われて、髪を乱し、血まみれになって、恨めしげにじっと二人を見つめている。

その頃から、屋敷内に妙な妖虫が見かけられる様になった。形態は揚羽蝶の蛹のようであるが、恰度女が後手に木にくくりつけられている姿に似ているところから、孕石家の使用人は、お菊の生れ変わりだと、お菊虫お菊虫と呼びならわして、妖虫の姿を見ると悪寒や寒気を感じるようになった。

孕石家は主膳の男色の性かどうか、世継がなく、それに乱心との噂もあって、遂に断絶した。青山数馬は、お菊の霊を深く慰さめる為出家して遁世し、山で一生を過ごした。

井戸をさらえた時、この欠皿が十枚現われて、今も彦根の長久寺に、お菊の皿として伝わっているが、満足な皿は一枚もない。

妖虫・お菊は其の後、噂は噂を呼んで、江戸時代の『雲錦隨筆』にもその事が記せられている。場所は違え、尼ヶ崎も彦根も軌を一にして、女の怨念が妖虫に化しているのは、果して偶然の一致であろうか。

五、上州皿屋敷説

最も新らしく、ホン最近ホンモノだと名乗り出た人がある。

東京都千代田区四番町。公和タクシー運転手の神宮節次郎さん（五五）がその人で、その説によると、皿屋敷と云うのは上州では女を囲っておく屋敷のことだそうである。

上州は妙義山の麓で、或る御殿様の寵愛を一身にうけていた美人

のお菊が、奥方や同僚の嫉妬を買って、ある時、お菊が殿様に差出す料理の中へ針を入れておいた。

何も知らずにそれを食べた殿様は、針の入った料理を見つけ、てっきりお菊の仕業だと思い込み、奥方や同僚もその言葉尻にのってお菊を責めたので、逆上した殿様は、お菊を、蛇や百足一杯はいったオケに入れ、遂に喰い殺させた——と云う、何とも井戸吊りにも況して惨虐なお話である。

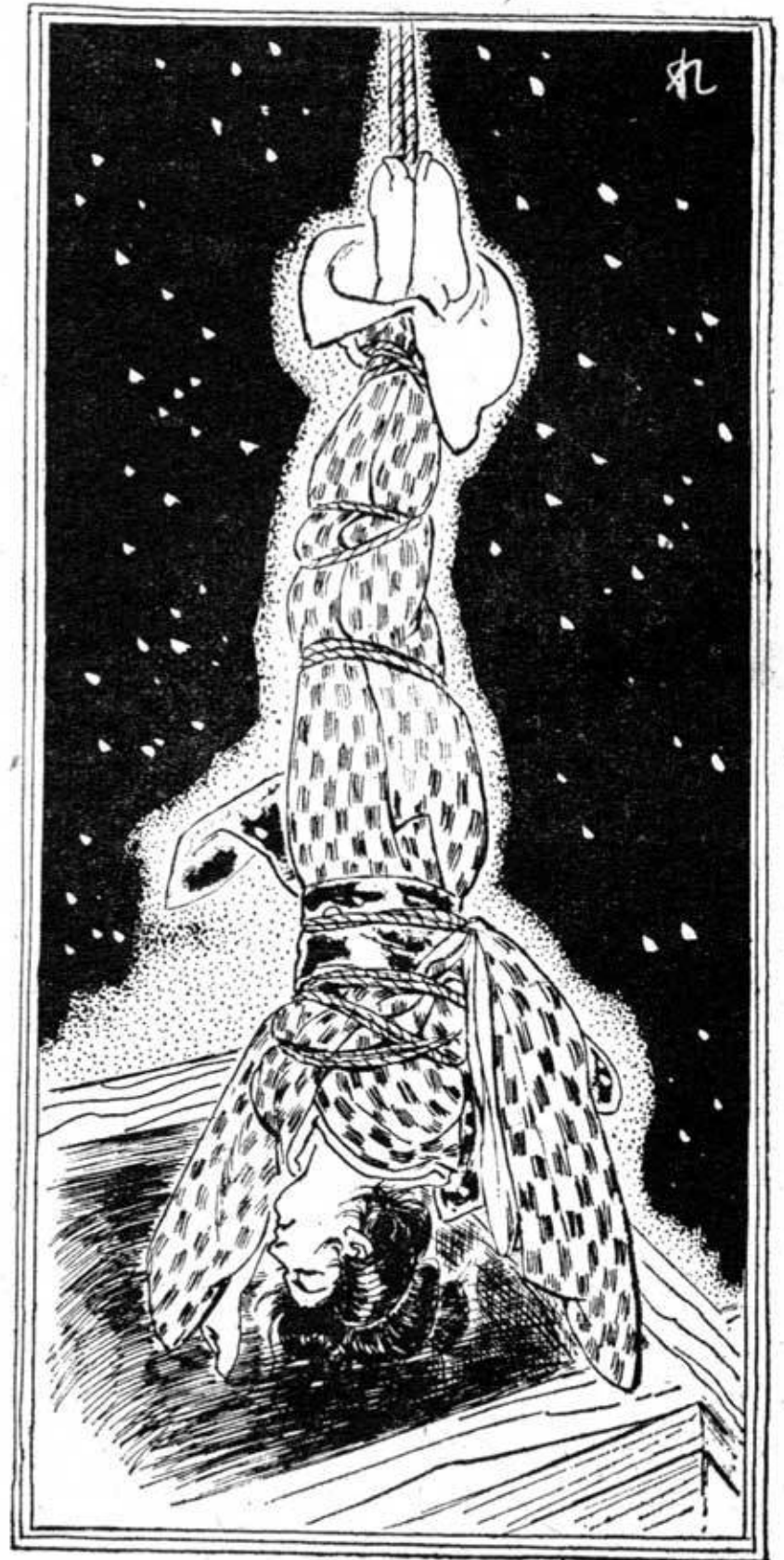
神宮さんは、コツコツ集めた古い文献や、遺跡の写真などの資料を、おエラ方に鑑賞して貰い、その結果で文部省に史跡としての指定を申請すると云うのだから、あながち根拠のない事でもない——。

「扱、皆さん——。この五つのお菊の皿屋敷のお話——、どれが最もホンモノだと思われますか——。どのお話にも、一脈どこか相通じたものがあるようです。唯今説明しましたうち、江戸の番町皿屋敷だけは、岡本綺堂作「番町皿屋敷」で、余りにも人口に膾炙し、既に誰方も御存知と思い、極く簡単に、史実めいたものだけを端折って申し上げました。

狭い日本で、お菊さんの亡霊は、今も、東京、姫路、尼ヶ崎、彦根、群馬の五ヶ所で迷っておられるようです。何処までが本場で、何処までが嘘なのか——たった、一つである真実にも、この様に尾鱈のついてくるものが、兎角怪談ではないでしょうか……」

ライカ氏は眼をショボつかせると、そう云って口を閉ざしました。「お菊なんて平凡な名前だから、あちこちに五人いたのじゃないかな——」

ワイン氏が膝を乗り出して、妥協案を出しましたが、誰もとり合わなかった様です。



沈潜した空気を破る様に、ドクター氏が大きく咳払いして——切と改まりました。

「お菊に憑かれた皆さんを、現代に引戻す為に、私がほんのトットきのお話を致しましょう……」

第四十八話 ヴイナスの足

「数年前の事です。私と同郷で、Q大出身の医学博士である山内公成が、突然、何の前触れもなく、シブドクターとして船に乗ったと云う報せをうけて、私は彼をK病院に紹介した成行上、已むなく、彼の外科部長の後釜として、後輩の跡部八郎太を急拠K病院に世話

です。

跡部八郎太の書翰

『前略、挨拶を抜きにして、私は先生に当病院の、誠に怪奇なる事実を御報告せねばならなくなりました。早速本題にはいります。

当市には、湖畔都市在住のインテリ層によって構成された、なぎさ会と云う社交的なクラブの会合があるのですが、私はその月、院長が所要もあり、ひとつは市の有力者との顔つなぎの意味もあって、院長代理として出席する事になったのでした。

湖畔のレストラン、レクサイドのスペシャルルームで、籐椅子にもたれたこの市の名士たちが二十人許り、賑やかに談笑していまし

をしたのでした。

幸い、彼は私の斡旋を快諾してくれて、新婚間もない夫人を同伴し、M大内科教室の助教授の職を辞すと、この湖畔都市の外科担当の医長として赴任して呉れたのです。

その一つには私立であるK病院の待遇が、大学の助教授辺りにくらべてズバ抜けてよかったせいもありましょうが、私は兎も角責任を果してホッとしました。

簡単な着任の葉書の礼状を受取って内来、一ヶ月振りに、私は珍らしく部厚い彼からの手紙を受取ったの

たが、新らしく加入した私を歓迎して、和やかな雰囲気の中に雑談の花が咲きました。

さて、その夜の会合で夜の更けると共に、蒸し暑さも手伝ってか、誰からともなく、怪談めいた、幽霊とか霊魂とかの話が持上って来たのです。

十年近く市役所の衛生課長をしている山田氏が、咳一咳急に改まると、

「新聞には書かないで下さいよ。これは実話なんですから……」

と市の新聞社の編集長に微笑みかけ、何故ともなく私にも奇妙な陰翳のある笑いを投げかけたあと話し始めたのです。

——皆さんも御承知の如く、衛生課には、火葬場の管理事務という、余りパツとしない仕事があるのですが、これはその火葬場での怪談です。

去る日、最近迄黙々として真面目に働いて来た火葬人の吉川君が、何の前触れもなく、病氣退職を願ひ出たのです。何事かと驚いて会って見ると、二三週間前に見た時にくらべて、ひどく痩せ衰え、眼ばかりギョロギョロとする感じで、判っきりノイローゼの症状を呈していて、落ちついた彼が、まるでオドオドと物の怪につかれたようです。

私はその原因を問いつめました。吉川君は非常に困惑げに口ごもっていました。私の性急な問いに、思い切った様にポツリポツリと話を始めたのです——。

山田課長は、ここでコカコーラを一本、一気に呑み乾して、再び私をじっと凝視したあと語り続けたのです。

——何でも今から四十日程前のことだと云いますから、そうそう

夏めいて来た頃の或る晩、K病院から、同院内の看護婦の遺体が運びこまれたのです。吉川君は型通り死亡診断書、火葬許可証を確かめた後、附添の人々の手で、棺桶を第六号釜に入れ、死者の親友の看護婦さんに点火して貰いました。

病院から火葬場へついて来たのは、船医となってK病院を退職せられた山内博士を始め、四五人の看護婦達だけで、一看護婦の死とは云え少し淋しかったと吉川君は云っておりました。

付添の人の話ですと、死んだ看護婦さんは急性腸捻転から、腸閉塞となり、名医と云われた山内博士の執刀も効なく、数時間後に息を引きとったとの事です。何でも身寄りのない娘らしく、病院で葬儀万端の世話をした上、運び込んで来たそうです。

付添の人々が帰って十分後、吉川君は、焚口から釜へ火を投じました。

事務的に吉川君は、耐火ガラスを嵌め込んだ円型の覗き窓から、カマの中の火の廻り加減を覗き込みました。

火の廻りは案外早く、棺桶を包んだ白布がメラメラと燃え出し、棺桶に早くも火は移っていました。その刹那、いきなり棺桶がグラグラと揺れ動くように感じて、呀っと眼を凝らした瞬間、棺桶はぱつと火勢にあほられて、バラリと割れたのです。

壊れた棺桶が濛々たる白煙に包まれ、チロチロと舌なめずりして行く火焰の明滅の中に、二十才前後の大柄な白衣の娘が、クワツと眼をみひらき、何か叫ぶ様に口を開き乍ら、両腕を激しく動かし、スックと中腰の姿勢で立上ったのを、火葬人吉川君は判っきりと見たのでした。彼は驚天して危うく気を失うところでした。

併し、更に彼を驚愕せしめたのは、その火の中で半身を起しても

がく娘の白衣が、焰になめられたはづみに体からすっぱりと脱げ落ち、忽ち全裸の美女が火中で、両手を躍動させて身悶えを始めたことです。

そして彼は、美女の片脚が、すっぱり鼠蹊部から切断されていて、その生々しい切り口は暗桃色に肉が捲くれ、太い白骨が中心部から覗き、斑々たるどす黒い血糊が、べっとりと女の下半身に無残にもこびりついているのを見て、流石に隠亡稼業に馴れた吉川君も、ヘタヘタと其の場に座り込んで気を失ってしまいました。

吉川君は無理矢理辞職届を私の机におくと、気もそぞろに立去ったのですが、数日後完全なる神経衰弱となり、謔言を云って、或る夜、雨の降る晩フラフラと外へ出て、湖にはまって溺死してしまいました――。

山田氏が語り終った時、一座の空気はシーンとなり、何かしら肌寒い恐怖の予感が、轟々と私の身を湖上の夜風と共に取り包んだのです。

先生――、私はその時、予感を感じたのが、これは山内博士の渡航と何か一抹の連脈があるのではなからうかと云う一事でした。

今になって、私は山田課長の、あの話す前の奇妙な微笑に思い当たりました。

何か黒い謎が、一看護婦の死に関連しているに違いないと、疑問の波紋が、静かな池に一石を投じた様に、私の脳裡に徐々に拡がって行きました。

新任の私は、相槌の打ち様もなく、況してや、その看護婦の名前すら知りませんでした。

K病院の医師である私が、当然受けねばならぬ一同の視線を全身

に感じて、そそくさと立上りました。

死亡診断書も完全な一看護婦の死が、ほんの一抹の感傷と共に葬り去られ、K病院では四十日以前の出来事は、人々の口の端にも昇りませんでした。

私はカルテを探し出し、彼女が小川美沙子と云う二十才の非常に不遇な、身寄りのない准看である事を知りました。戸籍抄本によると、両親は広島で原爆に逢い、彼女は身寄りの伯母のいる田舎に疎開して助かった、いわば原爆孤児でした。

私はレストランから一直線に病院に帰って、これだけの事を調べ、十一時頃かつては山内博士が寝起きしていた宿舎に帰りましたが、何かひどく疲れた様で、直ぐ家内に床をとらせて横になりましたが、どうしても寝つかれませんでした。

それは私が、小川看護婦の死について、さまざま恐ろしい推理を積み立てては崩し、崩しては積み立てていたからです。

しかし如何に推理を逞しくしても、犯罪の証拠となるものは何一つなく、小川美沙子の若く美しい小麦色の肉体は、とうの昔に一握りの灰と化しているのです。

私は雑然と書類の投げ込まれてある事務長の机の抽出の中から、二葉の彼女の写真を発見して、秘かに持ち帰っていました。

二葉とも、むちむちと張り切った小川美沙子と、彼女の親友の松山須美子が二人並んだ、白衣の屋上で写真でした。

その写真は、彼女の遺族もない儘に、戸籍抄本やら保険証等と共に、ハトロンの大型封筒に納められ、表に墨で小川美沙子（未整理分）と書かれてあったのです。

私は二葉の写真を枕許に並べて、この写真から、私の推理を裏付

けるような事実を懸命に手繰り出そうと果敢ない努力を試みていました。

突然、船医となって、遠く外国に船出した山内博士に私は疑いを持ち始めたのですが、それは私の誤った推理でしょうか——。

若し仮設を組み立てるとして、小川美沙子と山内博士が相思相愛の仲だとしたら、博士は愛人を殺す様な、無残な所為が出来得るでしょうか——。

私自身の考え方がアブノーマルかも知れませんが、併しジギル博士とハイド氏の例もあります。博士の突然の渡航から見て、疑えば疑える点がいくらかもある様な気もするのです。

推理の黒い蝙蝠が、生々しい女の片脚をかかえて、私の脳裡を飛翔するのです。

私は朝方になって、うつうつとまどろみ、幽明の境いで、妖しい幻想の世界に誘い込まれたのです。

見遙かす湖のさざ波から、若い女の片脚が、足首を上にして水をきって盛り上って来たかと思うと、豊満なふくらはぎの肉のふくらみが、足首の辺りでくびれ、拇指の先から、高く真ッ赤な血を噴き上げているのです。

真ッ赤な血は、天に向って勢よく噴き上り、かと思うと、忽ちさざ波が揺れて、大腿部の付け根を中心に円周を描いて、紅蓮の炎がメラメラと、白いピチピチと張り切った、腿に胫に、踵にと這い登って行くのでした。

頭の重い日曜日の朝を迎えて、私は愛妻の淳子と二人っきりの食卓を囲みました。

軽い朝食をすませて、アイスクリームを口にした時、ポトリと何

か滴りでもしたような微かな物音と共に、

「まあ——きたない！ 貴方蛆が天井から落ちて来ましたわ——」

と淳子の不興な声が響きました。

成程デコラ張りの食卓に、灰白色の小さな蛆が、食卓塩の瓶の横に、コロコロとうごめいているのです。

私は天井に視線を注いだのですが、それは私の赴任前塗り替えた、ビニール塗料の白さが少しあせただけの、何の変りもない塗天井でした。中央には飾りの蛍光灯が少しほこりをかぶって下っているだけです。

私は妻をなだめ乍ら、蛆の発生の原因を考えて見ました。鼠でも死んでいるのかな——とそんな想念も働きましたが、見上げれば、白いビニール塗料でおおわれた天井は、ヒビ割れもシミもなく艶々と鈍い光沢を放っているのです。

併し私は、小川看護婦の急死に不吉な疑惑を抱いていましたから、山内博士のこの食堂兼応接間の天井から落下した蛆に対して、無関心ではいられませんでした。

妻には何気なくよそおって、私は朝食後二階へ上って見ました。二階の応接間の真上は書斎になっていましたが、山内博士の残っていた医書が、未だ押入れに荷造りされて残った儘になっておりました。

念の為押入れの戸を閉して、眼を凝らすと、真暗の床板の隙間から、ほんの微かな光が差く込むのです。私は大急ぎで床板を剝しにかかりました。床板の一枚が飽気なく外れて、その光は拡大し、それは恰度、応接間の蛍光灯を取付けたコードの穴の部分に当ることになりました。ここから蛆が落ちたのだな——。私は懷中電灯をとり



長さは三尺足らず、幅七八寸、深さ四五寸と目測したその箱は開き蓋になっており、片側を丈夫な蝶番で止め、その反対側にはポストンバッグにつける留金具がついていたのです。

私は心臓の凍る思いで、その留金具を外し、そっと蓋を開いて見ました。

呀っと私は一瞬息をのみました。

果して、それは私の予想通り女の生々しい片脚が横たわったのです。

箱には耐震ガラスが張っており、その大腿部から切断された片足は、まるで蠟細工の標本のように、色も形も生体その儘に納まっていたのです。

大腿部の豊かな膨らみが軟らかな曲線を描いて膝関節につづき、しっとりと凝脂を浮かせた純のような小麦色の皮膚をおおううっすらと短かいふ毛も、全てがたった今切りとったとしか見えぬ程にいきいきとしているのです。

私は妖しい真夏の夢ならぬ、真昼の悪夢を見ているような、名状しがたい衝動にかられました。

そして箱蓋の裏側には、小さい紙片が貼られてあり、それには

「ガイナスの足、愛するM・Oの永遠の追憶のために」と山内博士独特の、あの癖のある肩上りのペン字で書かれてありました。箱蓋の裏には尚、セロテープではりつけられた。一枚の封筒が眼につきました。テープを剝して取り上げて、光をかざすと、封筒の表書

に書齊へ戻り、改めて、天井裏を光で物色したのです。

と、どうでしょう。黒塗の長い箱がそこに置いてあるのを発見したのです。その箱から一尺許り隔てて、新聞紙にくるんだ一塊の汚物らしいものを見つけました。

私は勇を鼓して、静かに天井裏に降り立つとその新聞包みを開いたのです。そこには、黒い血でカチカチに乾燥したガーゼや脱脂綿や血まみれの汚物がさらけ出され、既に蛹化した灰白色の蛆が、もぞもぞとうごめいていたのです。

背筋を冷くし乍ら、私は改めて、黒塗りの木箱に光を当てました。

には「これを見つけた親愛なる貴下へ」とあり、裏を返すと唯一字、小さく「Y」としたためてあったのです。

嚴重なめばりをした封筒を手にして、私は屋根裏から、明るい書斎へと這い出しました。何故山内博士が、小川美沙子の死体から片足を切断したのだろうか？ 何故天井に秘めた儘渡航したのだろうか？、果して、小川美沙子は生きた儘、火葬に附されたのだろうか？私の渦巻く脳裡を、博士の告白は、幾分整理してくれ様です。私の推理が、或る程度正鵠を得ていた事は、博士の告白文を同封することによって、先生に充分御理解願えると思うのです。

ヴィナスの足をどう処分したかを御知らせする前に、先で、博士の手記を読んで頂きたいと思うのです。

× × ×

医学博士山内公成の手記

『この発見者が親愛なる院長先生であるか——、又は私の後任者であるか——、将又、刑事諸君であるか——いふなれば誰であったにしろ構わないである。私は意を決し、最も愛すべきヴィナスを失った日本には、二度と帰らぬ決心で異境に旅立ったのであるから——』

君がこれを読む時、私は世界の片隅の何処かで、美沙子の肉体を思い、ヴィナスの足を偲んで、そぞろの感懐に頬に涙していることであろう。

私は何から語ってよかるう？……。

そうだ、兎も角、私と美沙子との馴れそめから語るのが話の順序だ。

美沙子が外科の担当となって私の前に姿を現わしたのは、一年半

前だった。

頭もよく、テキパキと仕事をする彼女に、私は親密程度の好意を抱いた。

或る夜、急患のアップ（盲腸炎）のクランケが飛込んで来た時、宿直のプレは美沙子であった。アップの手術位、私にとってはホンの煙草一服の間である。手際よく使うメス捌きに、美沙子はまるで憑かれた者の様に私の手許を凝視していた。黒耀石のような瞳をキラキラと輝やかせ、手術が終ったあとも、放心したように、手術台の傍らで立ちつくしていたのだ。

私は彼女のそうした姿に、激しい意慾を感じた。私は手を洗い乍ら声をかけた。

「どうしたの——ばかに感心しているじゃないか——」

彼女はゆるゆると私の方を振り向くと、ウットリとした様に、「とっても素敵——、あのぬめぬめした腸の奇妙な赤さ——すーつとメスで切り開かれて行くときのむずむずする心地——ああ、私もアップになりたいわ……」

私は大胆な美沙子の言葉に些か度胆を抜かれた。と、急に、美沙子の腸内をきり開いて見たい衝動にかられたのである。

毎日毎日数人の男女の肉体を切り刻む、外科医師と云う職業が、大方はそうでなからうが、少くとも私は加虐的な精神をしらずしらず持ち合せるようになっていた。

「腹をきってやろうか——、虫様突起は健康なうちに切除しておいた方がいいんだ。やるかね——」

不意に私はそう云ってしまつてハツとした。

この言葉は、医師と看護婦の限界を超えて、私の加虐性を満足さ

せる為に言った様に、私は思えたからだ。

意外にも美沙子は眼を輝やかせた。

「先生——切って下さい。私、先生ならどんなにされてもいい様な気がするの——お願い——切って下さい。明日にでも……」

私は自分の言葉に、自分で慌てた。

思いつめたような美沙子の口調にたじたりとなり乍ら、一方、克蘭ケでなしに、気楽に切れる美沙子を発見した事に、疼く様な歎びを覚えた。

手術は翌日の深更、人氣もなくガラソとした手術室で行った。宿直のプレにジュースに睡眠薬を入れて眠らしておく、私は唯一人執刀にとりかかった。

「日頃見なれた、手術台が、人の氣もなくてこうして見ると、まるで拷問台の様ですわ。」

「じゃあ、手足を台に縛りつけてやろうか」

「……………」

美沙子は首をすくめて舌を出すと、コクリとうなづいた。
私は美沙子の体を台上にのせ、両手足を皮の縛帯で四方に束縛した。

剃毛のあと、局部麻酔をかけると美沙子はうつとりと眼を細めて、まるですっかり私に任せきった様だ。明け暮れ手術に没頭し乍ら、これは又何と云う新鮮さであろう。

私は充分に消毒し、器具に手落のないことを確かめた上、美沙子のピチピチと張り切った腹部に妖度下幾をたっぷりと塗布し、しばらく彼女の腹をなでさすっていたが、スツと軽くメスを走らせ始めた。

腸は微かに蠕動していた。それはまるで別の生きものの如く、美沙子の体内で、うごめいている。美沙子は眼を閉じて、この刹那に没入しているかに見える。

真赤な花片のような肉の一片をきりとると、私はそれを彼女に示した。そして縫った。

くどくどとアッペの横様を書いて申訳ない。私と彼女はこうして深い仲になった。私の加虐性は美沙子を得て、拍車をかけられた。

親聖なるべき手術台が、しばしば私達の快楽の場となり、拷問台に使用された。

彼女の体内に潜行していたマゾの性癖が、私によって惜しみなく摘出された。

私は、世の常のプレイに墮せず、医師の本能を発揮して、さまざまの医療器具を、最大限に加虐用に適用した。

ゾンデが体内をかけ巡り、鉗子が交錯し、メスが、胸や腹に走った。

小川美沙子が私の宿舎から帰った朝に限って、脚や二の腕に紫色の内出血の痕跡が痛々しく痣となつてついていると云う噂が、院内一杯に拡がった頃、彼女ははからずも私の種を宿していた。

私は彼女からその事を打明けられた時、気軽にアウスする氣になつた。これが取帰しのつかぬ一事をまねいたのである。

夜更け、私は手術台に、例の如く彼女をねかしつけた。

最愛の彼女のアウスに際し、私にフト加虐性が覗いた。私は鉗子を使ううち、必要以上にそれを深く突込みすぎた。

そして、医師としてあるまじき失態を招いたのである。

私はしらずしらずプレイの様な氣になつてゐるうち、迂かつにも

ウテルスを穿孔したのであった。穿孔口から腸を引っ張り出した瞬間私の血はさっと引いた。

看護婦と当直医を起し、私は偽って、腸捻転だと皆に伝え、早速開腹手術にとりかかった。

局部麻酔を施したが、その注射はまるでききめがなく、改めて全身麻酔をしたが、麻酔はすぐさめて、美沙子は前にも決して苦しみ始めた。私は彼女が異常体質であることを始めて知った。突嗟の間に、私は彼女との数多くの加虐的な行為のうち、最初のアッペをも含めて、今迄打っていた麻酔がすべて効力なく、美沙子は激しい苦痛をこらえて、自らをマゾの痛歎の境地に低迷していた事を悟った。

辛うじて私はウテルスを縫合し、開腹手術を終った。

「患者はしばらく動かせないが、万事は僕が引受けた。皆休んでよろしい」

と私は医者や看護婦を遠ざけ、彼女と二人つきりになった。

美沙子は極度の激痛の為、既に言葉もなかった。そして脈膊が徐々に衰え、心臓の鼓動は弱りつつあった。

私は私自身の一寸した不注意によって、最愛の美沙子を失おうとしていた。

強心剤を次々と打ったが、それも一時凌ぎで、死期の迫るのが分かった。

——この儘、彼女はむくろと化すのか、せめて、彼女のほんの一部分なりとも、永遠の思い出にとっておきたい——

私は美沙子に縋りついて声なき絶叫を続け乍ら、フト、フランシスコザビエルの腕を思い出したのだ。

そうだ。カトリックの聖人の列に並ぶ、宣教師フランシスコ・ザ

ビエルの片腕が、四百年近くも経った今、腐りも乾きもせず、色も形も変化せず、ガラス張りの箱に納まっているではないか——。私が全知全能を傾むけて行なえば美沙子の肉体の一部分を永久に保存することも可能に違いあるまい。

時計を見ると午前二時半——。

起床して看護婦達が現われる五時半まで、丁度三時間はある。

「美沙子——手を尽したが、もうどうにもならない。私はお前の体の一部分を永久に、愛するが故に身につけていきたいのだ。くれるね」私は涙して云った。

美沙子の頬に涙が止め度なくつたい、彼女は判っきりうなづいた。

麻酔なしの大腿部からの切除——。

これは到底、茲に書き得ない無惨さである。

切除半ばにして、美沙子は美しく昇天した。私は悲嘆にくれてばかりはおられない。大急ぎで切断の作業をつづけ、午前五時に漸やく大仕事をなしとげた。

外科医長が私なので、左足が一本なくなった事は誰も気づかず、しかも勤務中の発病であるとして、殉職同様の扱いで、私が死体を一時宿舎に引取って、火葬までの委細万端を、誰にも気附かれず執行する事が出来たのだ。

私が学生時代、死体の防腐保存に関する論文を書き、ひとしお、ミイラや死蠟の研究に一時期を過した事が今になって役立って来た。いや、言い換えるならば、こうした研究を続けた過去があったればこそ、ヴィナスの足の作成に踏切れたのかも知れない。

私は火葬場から、その足でS家具店へ行き、至急を要する外科医療用の器具箱と云う名目で、たった二日間で、黒塗りの木箱をつく

らせた。

「ヴィナスの足」は完全に防腐保存されて、さながら生ける美沙子の足の如く、箱に納まった。夜が明けては足を眺め、就寝前には足に魅入った。

その私が、何故、命の次に大切な足を捨てて船に乗ったかを、貴下は疑問を持たれる事と思う。

外でもない。折あらば耽溺した手術台に、クランケがのる時、私はそれがすべて美沙子に見えてくるのだ。

私はメスに自信を喪失し、危うく幾度失敗しかけたか知れない。美沙子の靈魂が手術台に凝集して、絶えず私に微笑みかけてくるのだ。私は悩んだ。そして、美沙子の魂のこもる手術台に別れをつけて、船にのる決心をしたのだ。

「ヴィナスの足」は私の精魂こめた作品だ——恐らく、天変地異の起らぬ限り、何十年いや何百年——、生々とした、太く張り切っ

た、続のような小麦色の皮膚を保って行くことだろう。

——我が愛するM・Oの追憶を永遠ならしむるために——我は敢えて悪魔に魂を売ってこの造化の妙を地上に残したのである。

新愛なる貴下よ——願わくば「ヴィナスの足」を永久に、保存してくれ給え——。

× × ×

「そして数年——「ヴィナスの足」は今もK病院の奥にひっそりと永遠の青春と、限りなき肉体の神秘に息づくかの如く、頼に魅力を加えてきつとあるとの事です——山内博士の消息は、その後杳として知れません」

ドクター氏の長い話は終わりました。人々は彼の話を反芻するように暫し沈黙を守り、そして誰からともなく、一人又一人、このクラブの席を立てて行きました。(完)

一

去る八月二十六日、十四号台風も大した被害をもたらすこともなく過ぎ去って、再び残暑のきびしい朝。

堺筋の電車通り、道頓堀電停を東へ、大通りから狭い道へ入った途端、門さきで洗濯をしている素晴らしい美人に出逢った。

電気洗濯機はならしく、昔風のやり方でタライの中に両手を突込んで、何やら黒っぽい布をしきりに洗っている。朝とはい

え、夏のさ中だから、彼女は胸の大きく割れた洋服を着ている。しかも、しゃがんでいるので、当然、胸元の方が前に垂れ下り、真白いスリップの間をぬって、乳房ばかりか可愛い乳首までがまる見えになっている。

前かがみになっているせいか、あまり乳房豊かには見えなかったが、真白い肌はウブな小生の心を昂ぶらすには十分であった。手を動かすたびに、乳房もいきもの

ように舞う。眺めている小生の視線も知らぬげに。

夏にはよく出くわす場面だが、こんなに若くて美しい女に逢ったのは初めてだった。小生は出来るだけゆっくりと歩いた。やがて通り過ぎて、ふりかえって見たが、彼女はまだ一心に洗濯を続けていた。

二

その日の夕方、家の近所の知りあいの女子大生が、道端でスピッツと遊んでいた。



アブチック・ショート・ショート

或る日の三事件

桂 慶 一

じやれついでくる犬の足を両手に受けて、しゃがんでいる彼女のスカートを、折柄の風がさっと吹き上げた。

勿論彼女は、あわてて裾を押さえたが、小生の眼には、肉づきのよい太股にぴっちり喰い込んだ下着の白さが、何十分の一秒かの早さで網膜に焼きついてしまった。

その瞬間、小生は思わずウツというような声ならぬ声を発して眼をそらしてしまった。(えッ、どうしてかって? 考えても見給え。小生はまだ純情な青年だよ。もっとも後で随分後悔はしたが) 彼女はやっと小生の存在に気づき、顔を赤くしてはにかんだ。その時の小生の胸は早鐘のようだった。ああ、今日ほど幸運に恵まれた日はない。

しかし、その幸福の思いも、その後すぐに簡単に破られた。と言うのは、それから、十分も経たない頃、アパートの前で、年令三十五六才のギスギスに痩せた女に逢った。色が黒くて痩せていても一向に構わないのだが、これは又、「この私の醜い身体を見て下さい」といわんばかりに、下着がすけて見えるくらいの薄いブラウスにショート・パンツのままで悠々と買物に出かけてゆく。

脳ミソの出来具合がおかしいのではないかと疑わざるを得ない。このように思ったのは小生ばかりではなかった。その証拠には、彼女を見た大抵の人は、ふりかえりふりかえり笑っていた。

しかし、勇敢? な彼女は、そんなことな

ど一向おかまいなしに、貧弱な身体を揺り揺り市場の方へ歩いていった。

このショートパンツのことで、古い貴誌の記事の中で、絹川文代氏の話を思い出した。氏もショートパンツの姿で買い物に出かけたそう。もっとも、氏が真白い脚を太股のつけ根までむき出しにして小生の前にあらわれたとしたら、小生はきっと卒倒していたに違いない。

とにかく、この醜女の出現で小生の楽しい気分が一遍におちこわされてしまった。我々は、わずかのチャンスに楽しむことしかできないが、貴社のカメラマン諸君は、その点、甚だ幸福であると思う。我々と違って、毎日のように楽しんでいるに違いない。

職につくならカメラマンか医者になることが、人生を最も快樂のうちに過す最善の道ではあるまいか。カメラマン諸君、如何。

小生はいつも、貴誌の辻村隆氏や塚本鉄三氏を羨ましく思っている。一度でいいから替ってくれないだろうか。もし、替ってもらえるものなら、小生は何物もほっていても、とんでゆくことを声明する。

(職業、会社員)

△読者の手記▽

女サジストの記録

針井美香

私は女のサジズムは受動的なものではないかと思っています。

私はいま、高等学校時代の級友だった針田秋子と二人で、貴誌に二、三のマゾ体験記を発表して皆様にはお馴染の恒川文彦という男を飼育していますが、もともと私は彼に依って開眼させられたのですし、秋子などは、どちらかと云えばM傾向のほうが強いのです。

私には生れつきサジズムの素質はあったようでした。これが芽生えかけたのは、高等学校に入っているんですが、勿論その頃には男

を対象として考えたことはなく、もっぱらその相手役は秋子でした。

私は家庭の事情で、高等学校を二年と少しで退学し、秋子とは四年近く疎遠になっていました。最近偶然の機会から、再び切っても切れない糸で結ばれました。勿論、高等学校時代と違って、同じサジスチン仲間としてですが――。

恒川と知り合ったのは、半年程前、私がヌード喫茶に勤めるようになってからのことでした。私が母の入院費に困って、思案の余り

彼に相談したのが始まりで、今では拔差しならない関係になってしまったのです。

初めてホテルへ一緒に入って、彼にせがまれ、仰向けになった彼の口に、足指を突っ込んだときは、本当に泣き出した程でした。今では足舐めはおろか、もっともっとひどいことでも平気でさせますが、そのときには、無我夢中で、やっと終わったときには、逃げるようにしてホテルを飛び出したものでした。秋子と街で会ったのは、それから四カ月程経ったある日です。秋子が結婚したのは、そ



のとき始めて知りました。しかし秋子の結婚生活は、そのとき既に破綻寸前でした。結婚した相手がマゾヒストで、秋子はその要求にたえかねていたのです。

私はこれから、その後に起った波瀾に満ちた体験を書いて見たいと思います。それは最近ややもすると、マンネリ化して来た恒川とのプレイに飽きていた私には、刺激に満ちた生活の記録でもあります。

私は秋子の良人が、ただのマゾヒストとばかり思い込んで、性的不能者とは知りませんでした。ですから秋子から悩みを聞いたときも、秋子にサジズムの楽しさを教えてやればそれで一切解決出来ると信じていました。

秋は恒川に話して、秋子を一夕私のアパートに招待しました。

ラジオの音を高くし、恒川の洋服を脱いで天井から吊り下げたとき、恒川は初対面の女の前で責められる屈辱に興奮し、秋子は好奇心と不安で眼をまるくしていました。このときの感想を秋子は日記にこう書いています。

六月三日 晴

夫を会社に送り出すと、約束通り美香のアパートを訪れる。昨日、美香から聞いていた恒川という男は既に来て待っている。色の黒

い男と聞いていたが、成程色が黒い。秋子から紹介を受け、しばらく雑談してから準備にとりかかる。男がパンツ一枚になると、美香がその両手を細紐で縛って、天井のカーテンのパイプに縛りつける。やわいパイプだから、まともに吊り下ったら、パイプが曲るか、縁の止金はずれてしまうのだろう。美香はラジオのスイッチを入れるとパンティ一枚になる。パンティと云っても、私などのより、うんと短い、まるでストリップのつけるようなのだ。可愛いおへそをまる出しにして、女の私でさえまぶしいくらいだ。

半裸の美香は皮の鞭を振って、びしっ！びしっ！と男を折檻する。男は随分痛そうだ。身体を弓の様にそらして、歯を喰いしばっている。「秋子、やって見ない？」

美香は鞭の手を休めて私に云う、私は首を振って見せたが、美香はしばらく男を折檻してからまた私にすすめる。私のために懸命になっっている美香に済まない気がして、私は鞭を受け取る。こんなことはしたことがないから、頭がぼっとして、膝ががくがくする。私は夢中で男の背を打った。びしっ！びしっ！鋭く鳴る鞭の音も、どこか遠い処で聞いているような気持だった。

「秋子、なかなかやるじゃないの」
私から鞭を受け取るとき、美香は悪戯ッぱい眼で笑った。私は始めてあわれもない自分を発見して顔が熱くなった。

男の手を解いて、横にさせると、今度は足舐め、その頃には私もだいたいぶ落着きを取り戻して、美香のする通りに、男の口に足指を突っ込む。でも少し恥かしい。呻き声を上げ、血走った眼で私を見上げる男が、野獣のようで、気味が悪い程だ。

足舐めが済むと、美香は男をベッドの上に。ベッドは十字の方向に仰向けにさせ、両手を大の字に開かせて、ハリツケにした。

今度のお仕置はヒップ責め、美香の大きなヒップに顔を踏み敷かれて、男は必死になってもがく。私はふと高等学校時代のことを思い出す。美香にわざと悪戯をしかけ、袋小路になっっている講堂裏に逃げ込んで、よく美香に踏み敷かれたものだ。こうして、もう一度美香のヒップで踏け敷かれたら、どんなにか楽しいだろう。

「今度は秋子の番よ」

私は肩を振ったが、美香は強引に私の服を剥いでしまう。ストリップ一枚にされ、私は思いきって、男の顔にお尻を据える。

やっと責め終ったときは、まだ責め足りないような気持もする。私にもサジストの傾向が多少はあるのだろうか。

昼を御馳走になって、帰ろうとすると、男が先に立上ったので私だけ残る。

「秋子、久し振りに二人だけで遊ばない」

美香は悪戯ッぽく笑う。私には勿論異存はない。パンティ一枚の美香を背に乗せて、這い廻ると、学校時代にかえたような錯覚を感じる。でも美香は女の私には、あまり手荒な真似はしない。どうして、さっき男にしたようにヒップ責めにでもしてくれないかと、少しもどかしくなる。でも美香とはこれからいつでも会える。今日はこれくらいで満足しなくてはと自分に云い聞かせる。

その次の日、秋子は夫が性的不能者であることを始めて私に打ちあげました。彼がありふれたマゾヒストと信じていた私は、秋子の離婚話に反対していたのですが、性的不能者と知っては、離婚に賛成せずにはいられません。私は恒川を電話で呼び寄せると、三人で対策を協議しました。

問題は家が秋子のものであることでした。若し離婚が成立すれば、男にすぐ家を出て

行って貰わねばなりません。それも話を切り出したら、その日の中に一切のカタをつける必要があります。協議の結果、その日を次の日曜日と決めました。男の休日を選んで、一発にカタをつけようという計画です。

その日は朝から秋子を私のアパートに呼び、男との接衝は私と恒川とで当りました。話を切り出すと、男はさすがに驚いて、秋子に会わせてくれと頼みます。それを半ば脅迫的にハンコを押させると、手廻しよく頼んであったトラックで、男の荷物を積み出してしまいました。

その夜は秋子の家で祝宴をはりましたが、秋子がさすがに気がとがめるのか、沈みきっていますので、彼女の気を引き立たせるために、恒川のお仕置をすすめました。

私は恒川を一度逆さに吊り下げて見たいと思っていました。秋子の家の庭の物干場は、恒川を吊り下げるのに絶好の場所です。秋子にロープを持って来させると、男を逆さに吊り下げました。男の両手を後で縛り上げると最初は秋子にまかせました。

秋子の鞭は雑念を振り払うかのように、かなり痛烈でした。恒川は鞭と、足首に喰い込む縄の痛さに、悲痛な声を上げてのたうちま

わります。私はそんな彼を、サンダルを脱いだ素足で、顔を蹴とばしました。

二人で交互に十分程も責めたでしょうか、縄を解いてやったときには、さすがの彼もぐったりして、しばらくは声も出ない程伸びていました。

一人で歩けない彼を二人でかついで部屋に戻ったとき、秋子の父が、仲人さんと二人で血相を変えてやって来ました。もう数分、時間が喰い違ったら、とんでもない場面を見られてしまう処でした。

秋子の父は、高等学校時代に二、三度会ったこともあり、私はまだ顔をよく覚えていました。私の印象では話のよく分る小父さんと思っていたのですが、その日の彼は、娘の氣持を解さない、無理解さをさらけ出していました。別れた男が、彼の取引先の会社に勤めており、仲人がその上役であることが、一層事態を深刻にしたようで、私からもよく事情を説明しましたが、分ってくれようともしませんでした。

親娘の縁を切ると宣告され、沈みきっている秋子を残して帰ることも出来ず、その夜は秋子の家に泊り、彼女の頼みで、翌日アパートを引き払って、彼女の家に移りました。

別れた男、篠田が訪ねて来たのは、その翌日、私がお店に出勤してからでした。秋子の知らせで家に戻ると、篠田は私に台所の隅にでも置いてくれるように、くどくどとした調子で頼みました。ひどい仕打をされ、尚未練をすてきれない男の態度に、私はふと恒川に對するときの惨酷な気持がこみ上げて来ました。私は別室に秋子を呼んで、無理に承知させると、彼を庭に連れ出しました。

彼はかえって、それを期待していたようでした。物干場の下に立たせ、両手を後手に縛って、首に輪をかけて犬のように繋ぐのを、なすがままにしていました。

「大丈夫かしら？」
部屋に戻ると、秋子が心配そうに云いました。

「心配なら、あんた解いてやるといいわ」
私が皮肉をこめて云うと、彼女はうらめしそうな顔で私を見ます。

「苦しくなれば自分で縄を解いて帰るわよ。そんなにきつく縛ってないから」

私は秋子を安心させ、寢室に彼女を誘いました。彼女はぐったりとして、早目に眠ってしまいます。

私が庭に出て見ると、篠田はあわれな姿で

繋ったままでした。私は少し可哀そうになり、目的を達せずに戻ろうとしますと、

「美香さん！」

と、呼び止められました。

「何か用？ 縄を解いてほしいの」

彼の顔を覗き込むと、まぶしそうに視線をそらしながら

「いえ、もっとひどい眼に合わせて頂いてもいいんです」

と、恥かしそうな声で云います。

「そう」

私はどんなお仕置をしてやろうかと考えました。深夜ですから、あまり音を立てるわけにはいきません。むしろを持って来て、男を仰向けにさせると、定石通り足舐めから始めました。足指を男の口に突っ込んでやると、男は歓喜の呻き声を上げました。秋子に内緒で彼女が夫として仕えたことのある男に、屈辱を加えてやることに、云い知れぬ刺激と喜びを感じます。私は彼の口に踵を当てるとぐいと踏みにじりました。口を一杯にこじあけられ、彼はううっ！ と妙な呻き声を上げます。私は全体重を片足にかけました。

「う、あああ！」

と、彼は私の足首を掴んでもがきました。

しかし、私が力をゆるめると、訴えるような眼でもう一度要求するのです。二、三度同じことを繰返してから、私は彼の胸と口の上に両足を開いて仁王立ちになりました。

「ああ！ ああっ！」

彼は野獣のような声を上げました。

「駄目よ。大きな声を出しちゃア」

私がたしなめると、声を押し殺して、相変らず唸り続けました。

寢室から洩れてくる淡い光を受けて、彼の眼は異様に血走って胸がふつふつと波打っていました。

私は彼の上からとび降りると、ネグリジェの裾をたくし上げました。

「この脚がほしいんでしょ？」

白い脚を見せると、彼は眼を一層輝やかせて、身体を起しました。

「下から順に舐めるのよ。最初はくるぶしのあたりからね」

云い終らないうちから、彼は私の脚にじゃれついていました。まるで犬のように、長い舌を駆使しました。私はふと秋子に対して、良心の苛責を感じましたが、それを振り払うように、ネグリジェを脱ぎ棄てました。下はお店に出るときに着用する薄いバタフライー

枚だけでした。私のまるい踝のあたりの舐めていた彼は、歓喜の唸りを上げました。まるで狂ったように顔が激しく動き廻りました。

彼は私の膝頭のあたりまで丹念に、舐め、ときどき猫のような眼で私を仰ぎました。私には勿論、彼の気持は分っています。しかし、邪慳に首を振って見せると、あきらめたように、同じ処をペロペロ舐め廻しました。

「どう、今度はお尻を嗅いでみない？」

私はくりりと背を向け、お尻をつき出しました。彼は顔をすり寄せ、くんくん鼻を鳴らし始めました。真剣になっている彼に私は悪戯気を出し、お尻で力一杯顔を突きとばしました。彼は仰向けにひ

っくり返りましたが、すぐ身体を起して来ます。数回同じことを繰返し、今度は前を向いて胸を蹴とばしますと、仰向に倒れた彼はうつりとした表情で私を見上げていました。とろけそうな彼の顔を見ると、私はもっともって屈辱を加えてやりたくなりました。

それから三十分間、私はありとあらゆる屈辱を彼に加えました。彼がポケットを探って煙草を出すと、悠々と煙を吐き、彼が少しで



もなまけると、額に煙草の火を押しつけ、頭髪をじりじり焼いたりしました。

彼はよほど参ったのか、私が立上っても、まだぐったりとなっていました。

「どう？ 参った？」

足で頬を突ついても、うつろな眼で私を見上げているばかりです。

「こんなにされても、まだこの家に住みたいと思う？」

「ええ」

と、彼はうなずいて見せます。

「どうして？ 秋子さんにまだ未練があるからなの？」

「いえ、今は違います。さっきまでは、そうでしたが」

「今はどうして？」

私には既に彼の気持の変化は分っていましたが、意地悪くたずねました。

「それは、その、あなたがいらっしやるからです」

「そう！」

私は彼の言葉に満足しました。彼を助け起して、再び物干場の下に連れて行くと、首に輪をかけて、両手を縛りました。

「朝までの辛抱よ。朝まで我慢したら、秋子さんに話をし、この家に戻れるようにしてあげるわ」

寝室に戻ると、秋子は何も知らず眠りこけていました。私はそっと自分のベッドに身体を横たえました。

私は始めから篠田を家に戻す気持はありませんでした。私としては、秋子と二人で、恒川と篠田を共同で飼育するというのが夢でし

たが、秋子には、前に夫として仕えた男を、そういう眼に合わせることは、出来そうもありません。

私は翌朝篠田に私の気持ちを伝え、秋子にはあくまで内緒で飼育することにしたのです。私はいま、秋子と共同で飼育する男をもう一人ほしいと思っています。お金があり、社会的に地位のある方なら尚結構、秋子にはまだこのことは話してありませんが、若し御希望の方がありましたら、二人でうんとサービスしてあげますわ。

恒川と同様、物干場に逆さに吊り下げて、顔を蹴とばしたり、鞭でひっぱたいたり、ベッドに仰向けにして、ヒップ責めにしたり、もっともっとひどい目に合わせてあげてよ。お仕置に疲れたら面白い遊戯も考えているんです。秋子と二人のハイヒールを並べておくから、それを恒川と二人で、眼隠しして、匂いと舌の感覚だけで、指定するのを咬えて来るのよ。当たたらごほうびに二、三分くらい御好みの御馳走というのは、どうかしら、そのかわり外れたらスリッパでビンタよ。年令はいくつの方でも構わないけど、どんなひどいお仕置でも堪える自信がなくちゃ駄目よ。

二週間前、恒川を鞭打したとき、秋子が恒

川の手首の筋を痛めてしまったの。まだ手がぶらぶらして、急に治るかどうかわらないけど、手や足くらい片端になっても構わない覚悟はしなきゃ駄目よ。片端になったら一生飼いに殺してあげるわ。トイレの中にも、白いタイルの首枷をかけて、食べるものは無料のものでね。

私は五尺三寸、十四貫、秋子は五尺二寸、

十三貫、自分で云うのも何だけど、私も秋子も十人並以上だし、恒川に云わせれば、マゾ好みのする容貌だそうよ。

私と秋子に逆吊りにされたい方、ヒップの下に顔を差し出して圧迫されたい方、口と胃袋を喜んで私達のために提供出来る方は、すぐ名乗りを上げなさい。

斯道愛好家に贈る

定価 一〇〇〇円 (送共)

悦虐写真集決定版

B7判 百枚一組 プロマイド (略号「プロ」)

◆本誌モデル嬢の中、最近活躍しました左記の諸嬢の中の緊縛姿態の最も優秀なものばかり百態を集録いたしました。全く素晴らしい緊縛姿態集の圧巻であります。

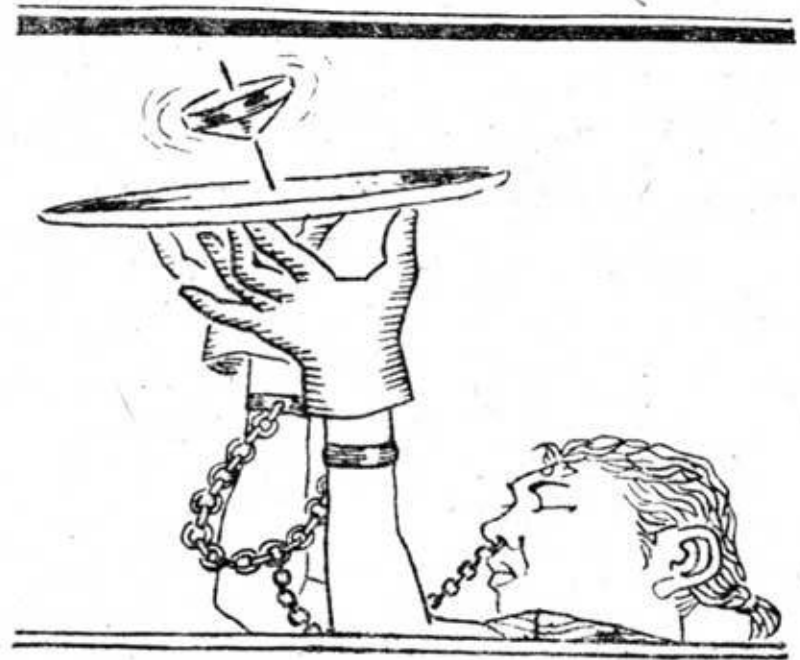
出演モデル嬢

絹川文代、桜井葉子、愛川悦子、梨花悠紀子、平野笑子、大塚啓子、須川令子、東浦ひかる、加茂良子、花本京子、四方清美、若原明子、竹野ひろ子、熱海容子、花坂道子、田中芳代、田原美佐子、岩井知子、前本妙子、大井小夜子の諸嬢。

◆本写真集は一切書店売りはいたしません

ん故、何卒直接天星社宛お申込み下さい。

◆これは、永年女体緊縛ポーズを手掛けてきました本誌が、自信を以て作成し、自信を以て提供できる写真ばかりです。コレクション・マニヤの方はきつとお気に召すと存じます。最初、印刷物にするつもりでしたが、途中で急に予定を変更して、一々コピーをとる方式に変えました。ため、量産できないウラミはありますが、直接感光紙に焼付けたものですから、稀少価値は凄く増す筈です。貴重な資料としては是非お求めの上、末永くお手元で御愛玩下さるようお願いいたします。



〔奴隸国探検〕

サルジニア探訪記

(第三回)

阿留品 又 怒

ナハール君は、女体安楽椅子に腰かけたまま僕を迎えた。

「どうだった？ 拘置所は君の興味を惹いたかい？」

僕はうなづいたのみだった。

「そろそろ、あれを外してやろうか」

ナハール君は女監督に合図して、そり返らせられた女奴隷を、その姿勢から解放させてやった。

そしてその奴隷は、再び首枷、腰枷、手枷、

足枷をつけられ、太い鎖で連結された後、女監督に首の鎖を曳かれてナハール君の前へつれだされた。その足許はふらつき、首は奇妙な具合にゆれていた。

女奴隷は鎖を鳴らせてナハール君の前に膝まづいた。

「おしおき有難とうございました。」

ナハール君は冷たく見下したまま云った。

「おまえは発電の仕事をせい。金髪と思ってベッドにしてやったのだが、外見ほどには心

根は美しくないに見える。性根をため直すため奉仕の仕事をするがよい。」

女奴隷が、あたらしい仕事のお礼を云わされ、

女監督にひきずられて去ると、ナハール君は女体テーブルの上に置かれた食物を口にしながら僕に云った。

「あの奴隷はヨーロッパのどこから知らんが誘拐されてきたものらしいね。誘拐団のいんな組織を転々として遂に僕のところへ売

られてきたのだけど、検診の結果奇跡的に処女だということが分ったのでベッドにしてやったんだよ。年齢の若さと幸運が、かの女の身を護ったのかも分らんが、発電の仕事をしている中に奴隷としての魂に、すっかり植えかえられることだろう」

ナハール君は次いで女監督に命じ、器物破棄奴隷を連れてこさせた。

かの女らは、僕が先刻見たように、鉄の手袋をはめられ、それを首枷に固定され、更に腰枷と足枷を結ぶ太い鎖に縛られ、その上首枷と首枷を太い鎖で珠数つなぎにされ、ナハール君の前に並んで膝まづかせられた。

「御主人の大切なお持物をこわした不とくきものでございます。どのようなおしおきでもよろこんでお受けいたします」

かの女たちは、順々に同じことを云わせられた。

ナハール君は長い棒をとりあげ、鉄の手袋を次々に激しく打った。

金属音と、苦痛をおしこらした悲鳴。

「ありがとうございます」

女奴隷たちは、打たれて手袋の刺にうめきながら、あえぎあえぎ油汗を流してお礼を云った。

「おまえたちは今後、手は要らぬのじゃ」
ナハール君はおそろしい顔付で云った。

「その手袋のままで、しばらく独楽を支えておれい。落せば懲戒するぞ」

女奴隷たちは手袋と首枷の鎖を解かれた。そして鉄の手袋のまま大きな重い盆を頭上にささげさせられた。

それだけで女奴隷たちの顔は苦痛にゆがんでしまっていた。そして捧げる盆はぐらぐらゆれていた。

やがてその盆の上に、女監督の手で紐を引けば回るようになっていく。重々しい鉄の独楽がのせられ回された。

独楽の回転の顫動が、鉄の手袋の刺を伝わり手首にひびいてきた。

「あー、うー」

女奴隷たちは、一様に苦痛のうめきを発した。そしてますますゆれ動く盆を支えるのに歯をくいしばって精一杯の努力をした。油汗が全身をじっとり濡らせていた。

独楽はぐらりと傾きゆれ動き、盆にたいする震動を強めながら、なかなか止ろうとはしなかった。

その度に女奴隷は、「あー」とか「つー」とかいった悲鳴をあげ、落した時の懲戒をお

それで、蒼白い顔を更に蒼白にして、一生懸命、腕を上げつづけていた。緊張状態が長びいたせいか、その腕は既にブルブル顫えていた。

遂に一人が盆を鉄の手袋からすべらせるように落してしまった。

おどろきと恐怖が、その女奴隷の面上をかすめた。そしてあわてて盆と独楽を拾おうと努力したが、鉄の手袋のゆえにそれは無駄なことだった。

かの女は手袋の不自由さもかまわず、独楽をはさんで盆の上へのせ、更に盆を持つと苦痛をしのいで努力していたが、遂に不可能と分ると、「お許し下さいお許し下さい」とおろおろ声で云いながら泣きはじめた。それは混血児らしく、髪の毛は黒いが、眼鼻立ちを整った美しさを持つ、小柄な人形のような女奴隷だった。

そしてかの女は泣きじゃくりながら、盆を捧げようと、なおいたずらにあがいていた。

他の女奴隷の捧げる盆の独楽は、やっと意地悪い回転をとめた。

女監督が、なお捧げている盆を受けとってやると、その二人の女奴隷は精も根もつきはてたように、ぺったりしゃがみ込んでしまっ

た。そして痛そうに鉄の手袋のはまった両手を胸の前にだらりとたれ、激しく肩で喘いでいた。

僕はその時、テーブルや安楽椅子、そして女人犬にされてナハール君にからかわれている女奴隷の眼差しが、自分でなかったことの安堵と、いつふりかかるか分らぬ同じ運命にたいする恐怖に、大きく見開られていたのを認めた。

しゃがんでいた女奴隷は立たせられ、ナハール君の前に膝まずかせられ、おしおきのお礼を云わされた後、やっと鉄の手袋を脱がせられた。

薊にいじめられた手は無残にはれ上り、傷つき、血を流してさえた。

「おまえたちは、立ち馬にしてつかわす。落度なく庭を駆け回るがよいぞ」

ナハール君は宣告を下して、その二人の女奴隷を引きたてさせた。

残された女奴隷は、なお鉄の手袋で盆を捧げようとあがいていたが、女監督に鞭で手袋を蹴られ、すさまじい苦悶の悲鳴をあげた。

「お許し下さいませ。」

かの女はナハール君の前に膝まずかせられるまでの間も、その後も、幾度となく同じ言

葉を涙声で云った。

「奴隷が許しを乞うなどとは僭越なやつじゃ」
ナハール君は眉をしかめて云った。

「そのような性根じゃからこそ、器物を毀し、懲戒にも最後までこらえることができんのじや。このような様子では鉄の手袋も当分外してやるわけにはゆかぬぞ」

「お許し下さい。」
「未だ云いおる。」

女奴隷は、女監督の手によって大きな嵌口具をはめられてしまった。

「おまえのような奴隷は籠の中に入っておるのが良いじゃろう」

女奴隷は後ろ手に枷でとめられ、ゴムのパソティを穿かされ、三つ折りにされ、鉄の檻に押し込められ、部屋の隅に吊り下げられてしまった。

もちろん後ろ手にされた手首に、残酷な鉄の手袋がはめられたままだった。

「さて、次は喧嘩をしおった奴隷だな」

ナハール君は独り言とも、僕にともなく云った。僕は黙っていた。

「こいつは池の上でやろう。趣向が違うのでね」

僕はナハール君にうながされるままに輿に

乗り、一緒に庭に出た。

そこで待っていたのは、背に鞍をつけられ、両手首の枷を腰枷に短い鎖で固定され、しゃがんでいる女奴隷だった。

「これが立ち馬なんだよ。」

それは先刻宣告された器物破損の女奴隷とは違った顔をしていたが、似たような罪で両手を使えなくされ、脚だけで奉仕を強要されている奴隷には違いなかった。

僕はナハール君に見ならい、女奴隷の腰枷と手枷をつなぐ鎖に足をかけ、鞍の上へおぶさるような形で尻を落着け、くつわの鎖と、首枷から出ている安定棒を左右の手でそれぞれ握んだ。

執事がナハール君と僕に鞭を渡した。

立ち馬は立ち上った。そして気がついたのだが、その足首の枷にはきれいな音色をたてる鈴がつけられていた。

ナハール君が鞭をふるって立ち馬の尻を打ったので、僕もそれにならって軽く打った。

立ち馬は歩きはじめた。

「男の身体をのせて割としっかりしているじゃないの」

僕がナハール君に驚きを告げると、彼は微笑しながら答えた。

「これも訓練のたまものだよ。きびしい、血のするような訓練が、安楽に馴れただぶだぶの身体を引きしめるんだよ。こいつらの脚はそれはそれは堅くしまっているよ。最初は水と脂肪でぶよぶよしていたものだが、女人馬訓練所で重い荷物を背負わせられ、一日中鞭と電気棒に追っかけまわされ、駆けずり回っている中に、すっかり贅肉がとれ、引きしまったゆくんだよ。ここまで訓練するには最低半年はかかるし、その間に役に立たぬのと、そうでないのがより分けられてゆくんのだ。役に立たぬやつは負い馬にされて荷物を背負わせてやるんだよ。そいつが耐えうるギリギリ一杯の荷物をね。倒れたって荷物なら人間ほど非道い被害はないからね」

僕たちは立ち馬に乗ったまま雑談し、執事をはじめとする、たくさんの方女奴隷を従え、やがて池のほとりまで着いた。

そこには既にナハール君と僕とが座る女体椅子が組まれ、女体テーブルの上には料理が盛られ、そしてその前には、女監督たちと、二人一緒に檻に入れて運びこまれた、いさかいをした女奴隷が引きすえられていた。

ナハール君と僕とが椅子に腰を下ろすのが合図かのように、二人の女奴隷は檻から出さ

れ、膝まずかせられた。

「わたしめらは奴隷の分際もわきまえず、身勝手にいさかいなど、とんでもないことをいたしてしまいました。分に応じた御懲戒をお願い申し上げます」

ナハール君が黙って合図を送ると、かの女たちは一度、腰をめぐる鉄の棒や、手枷と足枷をつなぐ鎖を解かれて立ち上らせられた。

長いあいだ腰を折った無理な姿勢を強いられていたもので、かの女たちは立ち上った時、解放感から思わずのびをした。

「なんだい、その姿勢は」

女監督の鞭が直ちに飛び、女奴隷は頓え上って悲鳴をあげ、真っ直ぐつつ立った。

やがてかの女たちは、ゴムのパンティを脱がせられ、互いになめあうことによって、パンティの汚れた部分をきれいにさせられた。

その恰好が滑稽だといって、ナハール君は声にだして笑った。

ナハール君を笑わせたことで、女監督は得意になっている様子だった。

「さあ、これを着るんだよ」

女奴隷たちは黒いビニールの水着をつけさせられた。そして直ちに両手首の枷を背後に固定されてしまった。

次に着けられたのは、長さ一メートルほどの棒のついた腰枷だった。それで女奴隷は、腹部から腕を一本つき出しているように見えた。鞭が再びかの女たちの太股にふり下ろされ、命じられたままに、かの女たちは歩きはじめた。

池には一本の太い棒が浮かべられていた。女奴隷たちは向かいあって、その上に立たせられた。

丸太棒は池の中程まで押しやられ、それがゆれ動き、時に回転するので、女奴隷たちは悲鳴をあげて平均をとるのに、必死になっていた。

「そこで落としあいをするのじゃ。勝ったものは許してかわすぞ」

ナハール君は果物をつまみながら、愉快そうに大声で云い、僕にツアイスの双眼鏡を渡してくれた。

女奴隷たちは後ろ手に枷でとめられ、長い棒を腰につけられた不自然な姿勢で、ぐらぐらする丸太棒を気にしながら、許されるため互いに腰を振り、棒を接触しはじめた。

その姿は滑稽でもあり、またあわれなものだった。

「どうだね。すこしは気にいったかい？」

ナハール君は、自分の双眼鏡で女奴隷の、懸命なあらそいを見つづけながら云った。

僕は、これも双眼鏡を眼にあてたまま「うんうん」などと生返事をした。

女奴隷の一人が腰を振って相手の棒を一撃した。打れた相手は、腰に響く衝撃に、あやふく落ちそうになり、枷だけで鎖のついていない足を激しく動かし、辛うじて平均をとった。そのため丸太棒は、急に回転しはじめた。すると今度は、打撃を与えた方が狼狽した。急速な丸太棒の回転によって池へ投げ出されないため、かの女もあわてて足を動かしはじめた。

「見ている方にはなんでもないようだけど、あれでなかなか骨の折れる仕事なんだよ」

ナハール君は、一刻も双眼鏡をはなすことなく云った。

女奴隷たちの腰につけられた棒は、ぴくぴくんと動き、その黒いビニールでおおわれた腰と尻は、鈍い光を反射しながら、時々小さきみに、時に大ぶりにゆれ動いた。

そして双眼鏡で見る女奴隷の表情は、口を大きく開け、相手を落そうとする必死な敵意に燃えていた。

しかし、相手を落そうと力むあまり、自分

の腰を強く振れば、却って自分が落ちなければならぬ破目に陥ることを知る女奴隷は、見た目にはがゆいような緩和な動きをしかしなかった。

僕は後ろ手に枷で縛られ、水に落ちた時の残酷さは想像できたが、動きがゆるやかなので、多少物足りない感じを免れることはできなかった。

そして、その結着もあっけなくついた。触れあって棒の衝撃に、遂に平衡をうしない、女奴隷の一人が大きく足をあげて水中に転落してしまっただからである。

もう一人は激しくゆれ動く丸太棒の上で、大きく腰を振り、身体をくねらせていたが、後ろ手に縛られた身の不自由に、遂に水中へこれも転落してしまった。

後には未だ回転をつづける丸太棒と、浮き沈みする二つの女奴隷の頭があるばかりである。

かの女たちは、水中で、すこしでも身を浮かせ、丸太棒に顎をのせかけ、空気をすう時間ですこしでも長びかせようと努力するのだが、そのたびに丸太棒は、あらたな回転を加え、あわれな女奴隷を水中に沈めた。鉄の枷の重さが、かの女たちを水中へ引きいれよう

とする力を加えていることは明らかだった。後ろ手でなければ、せめて丸太棒にしがみつこうとできただろうに。

やがてボートが出され、女奴隷たちは引き上げられた。

そしてナハール君の前に引きすえられた時には、もう半死半生の態たらくで、激しく肩をあえがせながら、ぐったりしてしまっていた。濡れたビニールの水着は、異様な光艶を放って顫動していた。

「なんだい、そのさまは。しっかり座るんだよ」

女奴隷の背に鞭が鳴り、かの女たちは悲鳴をあげてやっとこさ正座した。そして腰の棒のついた枷が外され、上下座させられ、懲戒のお礼を、あえぎあえぎ云わせられた。

「両方落ちたのじゃから、勝負はお預けじゃな。いずれあらためてあらそわせてつかわさう。ビニールの水着は多少うきの役目もはたして、その方たちの生命をたすけたのじゃから、当分着ているがよい。感謝して、大切に。あとまで残ったものには、勝てなかったものの、恩賞をとらせてつかわすぞ」

ナハール君は冷酷に云い放ち、肉の一切れをくちやくちやに噛み吐きだしてやった。

貰った女奴隷は、いざり寄って、あわててお礼を云うと、口でそれを拾った。

「檻と手足の連鎖は許してつかわそう。しばらく水汲み場で働くがよい」

ナハール君と僕は、立ち馬にまたがり、金の鎖を鳴らすたくさんの女奴隷や女人犬を後にしたがえ、邸のほうへ引きあげていった。

立ち馬の足に鳴る金の鈴の音は、それらの物音の中でも、とりわけはつきりと、冴えた美しきで響いていた。

僕はナハール君が宣告を下している水汲み場だとか発電の仕事場などが気になって仕方なく、是非見せてくれるよう頼んでみた。

ナハール君は僕にたいする時にだけ見せる微笑で云った。

「未だ小さい罪を犯した奴隷どもや、反抗した奴隷を懲戒しなければならぬのだが、君が敢て望むなら予定を変更するのはかまわないよ。もっともそうなると反抗奴隷はゴムのズボンの中へもう一日排泄していなければならないし、鉄の箱から出してもらうのが、長びくわけだけど」

僕は拘置所の恐しい鉄の箱を思い出した。箱から出されたところで、奴隷の分際もわきまえずに反抗（といっても具体的にはちっと

も分っていなかったのだが）などしたのだから、それよりもっと楽な仕事が続いているとは限らぬし、更に恐れられている矯正所へ送られる運命が待っているのだから、鉄の箱の中にいる時間が、長びくのが良いのか悪いのか、僕にはよく分らなかった。

「反抗した奴隷というのは一体鉄の箱の中になん日くらい入れられていたの？」

僕が訊ねると、ナハール君はあっさり云った。

「もう十日ぐらいにはなるだろうね」

「そのあいだゴムのズボンは一度も脱がせてもらっていないのだろうか」

「もちろんだよ」とナハール君は言下に云った。「そのためのゴムのズボンだからね。排泄が自由に許されるくらいなら、そんなものは必要ないじゃないか」

僕は反抗奴隷の足首を締めあげていたゴムのズボンの裾口を思い出した。そしてその中に貯っている十日間の排泄物を想像した。

「いいよ」と僕は云った。「やっぱり予定通り反抗奴隷の懲戒を見ることにしよう」

「どちらでも僕は一向差し支えないよ。僕が指一本動かさば、お膳立ては執事が全部ととのえてくれるんだからね。どんな難題だって

鞭と電気棒が奴隷共をふるいたたせ、力を出させるんだよ。君が予定通りを望むなら、この儘邸に帰ろう。そしてその後で三人女馬に乗って水汲み場や発電所を見物させてあげよう。更に望むなら六人曳きの車に乗せて、矯正所の見物にも連れて行ってあげよう」

邸に着くと、僕たちは広間の女体椅子に腰を下した。そして女体テーブルの上に置かれた料理を平らげていると、やがて鉄の箱から引き出された反抗奴隷が、鎖に曳かれてやってきた。いや、連れ出されてきた。というのは、かの女たちの顔は未だ除かれていないので眼が見えず、女監督の鞭に追われ、鎖を引かれて、やっと僕たちの前に到着したからである。

その拘束は、拘置所で見たのと同様、首枷に後ろ手にされた手枷が鎖でつられ、がっしりと太い、重々しい腰枷には、足枷をつなぐ鎖が腰を曲げねばならぬようにして吊られていた。

足許ばかりか、身体全体がぐらぐらゆらいでいるのは、鉄の箱の中の不自然な姿勢や枷の重さからして当然のことだった。そしてその穿かされているゴムのズボンは、十日分の排泄物をたたえて大きくふくらんでいた。

そして、かの女たち二人が、鎖とガバゴボというゴムのズボンの音をさせて膝まずかせられるのを見るに及んで、僕は口にしていた料理が急に不味くなるのを感じないではいられなかった。

しかし、ナハール君は平気で、焼鳥の足を手づかみでむしゃむしゃやりながら、顔枷をとるよう命令した。

顔枷をとられた二人の女奴隷の容貌は美しかった。いや恐怖に蒼ざめ、顫えているがゆえに却ってそう見えたのかも分らない。光を遮られた鉄の箱の中での生活が、その皮膚を透けるような白さにしていた。

一人は明らかにヨーロッパ系の顔立ちをしていた。金髪、碧眼、高い鼻稜、整った容貌そしてもう一人は日本人ではないかと思われるような典型的な東洋系の顔をしていた。

「わたしめは、奴隷の身分もわきまえず、反抗などという大それたことをしてかしてしまつた愚か者でございます。どのような御懲戒をもよろこんでおうけいたします。そして心根をすっかりため直して下さいませ」

膝まついて、額を床にすりつけるようにしてそれぞれが云う女奴隷の態度は、反抗という、人間としての多少の誇りと勇気を必要と

するようなことをしてかした奴隷とは思えぬほどに神妙なものだつた。

「鉄の箱の中での住み心地がよかつたと見えるな」

ナハール君は満足げに見下し乍ら云つた。

「その方たちはおのおのむさい恰好をしておる。わしに姿を見せることすらはばからねばならぬほどの姿じゃ。別室できれいにして出直してくるがよい」

二人の女奴隷の面上にかすかな喜びが走つた。ゴムのズボンをやっと脱がしてもらえろと思つたからででもあろう。

しかしナハール君は意地悪くつけ加えた。

「水の使用はまかりならぬぞ。その口でお互いが拭いあうのじゃ。どちらが多くなめとるか競争じゃ。たくさん残した方は電気棒であぶつてつかわす」

たちまち、女奴隷は悲しげにうなだれてしまった。しかし、直ぐナハール君の命令が実行されるため、女監督によって、鎖とゴムのズボンの音をさせながら、引きたてられていった。

僕はそれを見送りながら、ナハール君にそつと訊ねた。

「そんなことをして、病氣にならないだろう

か？」

「そう、そういうこともしばしばあるね。発熱と下痢状態がつづくんだよ。それで参つてしまふものは奴隷として資格はないんだよ。

その身体は矯正所や水汲み場や発電所で働いている奴隷の餌になるんだよ。しかしその発熱と下痢に耐えた奴隷はおどろくほど頑強なものになるんだ。少々のものを食わしたって全然平気だし、全部消化吸収するようになるんだよ。これも一つの訓練なんだ。鉄壁の胃や腸を持たせるためのね。そしてそうなる、どのようなことがあつても生きたいとねがうようになるんだよ。念のため僕は矯正所では薬品を使わせ、奴隷の自殺を防がせているが、矯正所から出てきた奴隷にはそれはもう必要でなくなっているんだよ。薬品の効果が持続的なので、鞭の痛みを幾倍にも感じ、死を怖れつづけているということもあるが、訓練の成果は否定すべきでないね。犬畜生のたぐいで自殺するやつはいないだろう。いやむしろ人間から見れば、いささかあさましい程の執着で生命にしがみついているだろう。それは野性の生活がもたらした強靱な生命力のせいなんだ。奴隷が一つの試練を経て、その強靱な生命力を得るようになれば、もうと

でも自殺など考えるどころの話ではないよ。どのような苦しい目、恥しい目、おそろしい目にあっても、必死の執着で生命にしがみつこうとするようになるんだよ。雑草ほど強いというのは上手く云ったものさ」

ナハール君は鳥の足をしゃぶりおえると、悠々と葡萄酒を飲み干した。断っておくが、彼はいたって酒には強い方であり、食事中の葡萄酒に酔うなどということはおそらく絶対と云って良い程にないはずである。したがって、奴隷にたいする今迄の懲戒のたぐいも、酒に酔っての上でなく、日常茶飯的な、普通の心境の下におこなわれたものである。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

〈復刊号の部〉

復刊号の分は漸次売切れの分が増加してまいりました。左記に掲げましたものは、現在在庫にありません。お申し込み願います。特に復刊号に限り、定価の半額に奉仕いたします。

復刊第33号	復刊第32号	復刊第29号	復刊第28号	復刊第27号	復刊第25号	復刊第24号
(昭和33年10月号)	(昭和33年9月号)	(昭和33年7月号)	(昭和33年6月号)	(昭和33年5月号)	(昭和33年3月号)	(昭和33年2月号)
定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円	定価二百円

僕は殿下という敬称で呼ばれるナハール君を友に持ったことを幸福に、そして誇りに思いつながら、同時にその魂にやさかなならぬおそれを抱かずにはいられた。それなかつた。

その時どこからともなく、おしこしたようなうめき声がした。

ナハール君から投げ与えられる餌を待っている女人犬でもない。まして金の鎖と枷をつけた料理を運ぶ女奴隷からでもなければ、椅子やテーブルからでもない。

彼らは神妙な顔付きで、大人しく、じっと控えている。

かといって、今しがた連れ去られた反抗奴

隷からでもない。うめき声はもっと近いところでおこったはずなのだ。

そして僕は、それが吊り下げられた籠の中で、不自然な姿勢をのたうたせて、はめられた嵌口具のあいだから、懲戒されている女奴隷がうめいている声であることを、やっと覚った。

「入れ墨が効いてきたんだな」

ナハール君、はそれを見ながらつぶやくように云った。

(未完)

復刊第55号	復刊第54号	復刊第56号	復刊第57号	復刊第58号	復刊第59号	復刊第60号	復刊第61号	復刊第62号	復刊第63号	復刊第64号	復刊第65号
(昭和35年2月号)	(昭和35年3月号)	(昭和35年4月号)	(昭和35年5月号)	(昭和35年6月号)	(昭和35年7月号)	(昭和35年8月号)	(昭和35年9月号)	(昭和35年10月号)	(昭和35年11月号)	(昭和35年12月号)	(昭和35年1月号)
定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円	定価三百円

この欄に掲載の分は売切れです。御承願願います。

特に定価の半額に奉仕いたします。



〔浣腸に関する裏話〕

看護婦さんとの会話

山岸 操

御近所にお住いになる佐川さん、時々方のお買物の折に、スーパーマーケットなどで御一緒するところから、お近づきになりました。お勤めはN病院で看護婦をしていらっしやるとのこと。最近結婚されて近くのアパートにスイートホームを築かれた方です。

夜勤明けの非番の日など、私も主人を送り出し、坊やも昼寝をしてしまえば全く退屈な毎日、おさそいした所、よく遊びに来られるのです。

「昨夜は夜勤なんでしょう。大変ですわね。」

御主人と朝、すれ違いなんて、お気の毒みたいですよ。

「いいえ、もう馴れっこですわ。だって婚約の時から約束ですもの、共稼ぎでなくちゃあ、食べてゆけませんものね」

「まあ、あんなこと言って、残って残ってしやうがないんじゃないの」

「とんでもない、主人の稼ぎがしれていますもの、オホホホ」

とりとめのない挨拶からはじまって、女二人きりの話ともなれば、一寸筆ににくいよ

うな思いきった方にも発展します。これも既に世帯を持ったが故でしょうか、花恥しい乙女の頃には、想像もできなかったようなことまでも――。

許される範囲で、今日はその一端を御披露致しますよう。

「もう夏ね、子供があると夏は病気がこわくてね。食中毒、赤痢、疫痢、おこわい」

「そうですね、お子様の場合、赤痢菌はすぐ疫痢の症状を起しますものね」

「ねえ、どんな具合になるの、そしてどうい

う手当したらいいの、教えて」

「いいえ奥様、これだけゆきとどいた環境なら大丈夫ですわ」

「駄目よ、主人はどうしても外でお食事するでしょう、何時菌を持ち帰らないともかぎらないわ」

「そうですね、大人は抵抗力があるから少々の菌でも平気ですけど、お子様は抵抗力がないから、よく発病しますわね。まず突然熱が出て今まで元気よく遊んでいたのが、急にグッタリしてゴロゴロ寝だしたら、あぶないですわね。はじめは下痢もしませんけど、やがて下痢がはじまり、顔は青ざめ、ひきつけるお子さんもあります。早くお医者さんに見せれば、今はクロマイで先ず大丈夫ですけど便の粘液が血便になったら、大変ですわね」

「昼間ならいいけど、夜中なんかだったら、お医者さんはなかなか起きてくれないし、どう手当したら、いいかしら？」

「素人、といつては失礼ですけど、素人療法はほんとに危険ですわ、先ずやっていいのは浣腸でしょうね、浣腸をかけてお腹を空にしてあげて、朝になったら一番にお医者さんにかけてつけることですわ」

「ああ、浣腸ね、浣腸といえば、貴女なんか

お仕事柄しよっちゅうするんでしょね」

「ええ、もう毎日ですわ、どうして？」

「でも、あれ嫌ね、される方は——」

「そうでしょうね、私達なんか、何とも思っ
てませんけど」

「そりゃそうかも知れないけど、私、嫌だったわ、される身になって考えてあげたこと、
おありになる？」

「そうね、女学生なんか、一寸かわいそうになることもあるけど、奥様も御経験おありになりますの」

「あらいやだ、貴女看護婦さんでしょう、ほ
ら、お産の時よ」

「ああ、陣痛促進のね」

「事もなげね、苦しかったわ」

「そうでしょうね、子宮が直腸を圧迫してい
る所へ浣腸しますから」

「どうして病院は、あのすごいのをするん
でしょう」

「すごいのは、ああ、イルリガートルです
の？ グリセリンですと、刺戟が強すぎて腸
粘膜を刺戟しすぎますし、直腸下部だけで、
よく直腸全体が洗えないからですわ」

「それにしても看護婦さんで冷酷ね、おと
ごめんなさいね」

「いいえ、どうぞおかまいなく」

「だって、あれ一杯一リットル位あるん
でしょう。全部入れておいて、我慢しなさいだ
って、我慢できっこないじゃないの」

「ええ、そりゃ教科書通りなんですわ、便秘
してる方と妊娠婦じゃ、条件が違いますもの
ね、臨機応変の処置をとらなくちゃ」

「そうね、でも毎日、多くの患者さんを扱
てらっしゃると、なかなか面白いこともある
でしょうね」

「そうね、いつか、あきた方がいましたっ
け。型どおり、分娩予備室で浣腸して差し上
げたんですのよ。それから分娩室へ入って、
しばらくしたら、"どうも、まだお通じがあ
りそうですから、もう一度浣腸して下さい"
というんです。さっきイルリガートルで洗腸
してありますから、いいとは思ったんですが
もう一度分娩台に仰臥させたまま浣腸してあ
げました。便なんか出やしません。石鹼液が
そのまま下りるだけですの。もう陣痛がはじ
まっているのに、しばらくすると、又、"あの
申し上げにくいんですが、どうもお通じが、
あのもう一度"というんです。"浣腸ですか
もう何も出ませんよ、そんな気分がするん
です。陣痛でいきむでしょう。力が入るから

肛門が押し開かれて、なんか出そうな気がするだけです。大丈夫、お腹の中はもうすっかりきれいですから、安心して」といってもなかなかウンと言わなかったけれど……」

私はハッとしました。てっきり、その人は浣腸マニヤなんだわ、と思いましたけど、それは口にできませんでした。

「赤ちゃんがお産れになったあと、便秘しませんでした？」

「そうなのよ、便秘して、苦しくってね、恥しいから黙ってたけど、とうとう四日目に浣腸されちゃった。個室が満員だもんだから、四人部屋で、みんなの見てる所でしょ、恥しいのなんのって、涙が出ちゃったわ」

「まあ、そりゃお可哀そうに。そんな時には緩下剤を差し上げるか、肛門坐薬をおすすめするんですけど、浣腸が一番てっとり早いですからね。即効ですもの」

「患者できれいな人なんかいると、いじめてやれなんて気持ちになるんじゃない」

「そうですわね、私なんか、もうおばあちゃんであきらめてますけど、うちの若い子なんかで、そんなのいますわ」

「嫉妬ってのかしら、どんないじめ方をするの？」

「こんなこと言っちゃいけないんですけど、お食事をわざと早く下げにいつて、回診ですから早く上って下さいといつてみたり、これは絶対に許されないことなんです、回診の際、わざとドアを半開きにしておいたり、面会の方がみえてる時、規定時間をすぎたら、すぐ追い出したり、もう歩いておトイレに行つてもよいのに、なかなか許さずどうしても便器を使わしたり、いろいろですわ」

「まあ、にらまれたら大変ね、きれいに生れなくてよかったわ、ホホホ、浣腸なんか、どう？」

「ええ、よくやるようですよ。うちの若い子で、好きなのがいてね」

「へえ、好きなのとは？」

「先生の所へ、よくカルテをもってゆくんです。〃先生、何号室の何さん、お通じ三日ありません〃それから一寸おかしいんですよ。きっとウソだろうと思うんですけど、〃お腹が張るっていうんですけど〃こうなれば、先生はきっと〃浣腸してあげて〃というにきまっていますわ」

「なるほどね」

「嬉しそうな顔していそいそと、浣腸器もつてとんでゆきますわ」

「そんな看護婦さんの係に当たったら大変ね」
「私、一度、その子のあとを、そっとつけてみたんですよ、そしたら、ひどいの」
「まあ、どんな風にですの？」

「丁度ファッションモデルが入院したの、一寸きれいでしょ、案の定、その子が浣腸の許可をとったのよ。こりや何かやるなど、それは女の勘というものよ。何気ない様子でドアの外で様子をうかがっていたの。そんなこととは知らず、ずい分いじめてたわ。普通なら蒲団の裾を半分程めくって、横臥させ、パンティを一寸ずり下げるだけですむのに、夏だったけど、蒲団は全部とってしまい、パンティを完全にぬがせて下半身をすっかり露出させたらしいの。しかも『おおむけにねて下さい。両足をあげて、ひざをかかえて下さい』って言うてるのをみると、丁度赤ちゃんのおむつを替える時のように、膝を折りまげて、あげさせて、手でかかえさせてるのね。これじゃ、若いファッションモデルですもの、いくら相手が女でも恥しかったでしょうね。イリリガートルの嘴管を挿入するのも、わざとゆっくりやってるらしいの。『駄目ですよ、そんなにお腹に力を入れちゃ、ハイ、深呼吸して、一つ、二つ、三つ、ハイ、力をぬいて

駄目、駄目、もう一度、ハイ、深呼吸、一つ二つ、三つ』なんて、やってるんですもの。注入してからが大変、『我慢して下さい、十分間です』、十分って言ったは大変ですわ、五分位したら、もう我慢出来ないと思えて、よくは聞えないんですけど、さかんに許してくれって言うてるらしいんです。その度に、『いけません、もう少しですから、我慢して下さい。早く排便すると、浣腸の目的を達しませんから、もう一度浣腸しなければなりません。ですから、もう少し我慢して下さい』ってばげましてるんです。とうとう、患者さんの呻き声がしてくる始末、余程私、入って

ゆこうと思ったんですけど、看護婦同志でしょ、あとで変なことになってるものと思ひ、それに、たかが浣腸ですもの、害になるわけでもなし、そのままにしましたっけ。やっと便器を当ててましたけど、普通は排便中は室外に出るんですけど、案の定、じっとそばで見たららしいですわ。」

「まあ、ひどいのね」

「これは私の経験ですけど、困ったことがありましたわ。女子高校生に、浣腸してあげる最中でした。午後四時頃だったでしゅうか、丁度学校の帰り時間なんでのね。同級生のボーイフレンドでしょう。ノックもしないでサ

ッとドアを開けて、お見舞に来たんです。お尻を丸出しにして、浣腸中でしょ、あわてて私は身体でおおってあげましたけれど、瞬間全部見えてしまったでしょう。『今、処置中ですから、あとにして下さい』といったら、あわてて外に出ていきましたっけ。患者さんはシクシク泣き出すし、私は困ってしまいました、

懸賞（告白と手記と体験） 原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

☆規定☆

一、真実味溢れる告白、どうしても発表してみたいという自らの手記、或は自分で体験された貴重な事実を盛り上げた体験記を広く読者の皆さまの中から求めます。文章の巧みさよりも、実際に体験されたもので

あるという真実の裏付のあるものが大切だと思ひます。従って必ず自作のものであることは勿論、未発表のものに限ります。

二、枚数には制限はありません。用紙も必ずしも原稿用紙でなくとも結構です。締切日も別にやかましくきめませんから、いつでも、どしどしお寄せ下さい。入選作は最近号に掲載の上、賞金をお送りします。応募原稿は読者原稿と区別するため第一頁に「懸賞告白」とお書き下さい。

から、足の先が一寸見えたかもしれないけれど、大丈夫ですよ。何ですか、大きくなってみともない。大丈夫ですよ』とは言っておげたものの、これは大失敗でしたわ。そのボーイフレンド、お菓子と花束、私にあずけると、真赤な顔して、よろしく伝えてくれて小声で云って逃げるようにして帰ってしまいましたっけ。その後、どうしたか、今でも私気がかりですわ」

「そうお、みんな純情なのね」

「あ、もう五時だわ、大変なおしゃべりしちゃって、晩のお支度しなくちゃ、やがて主人が帰ってきますわ」

「あら、私もそうだわ、マーケットへ御一緒にしない？」

こうした裏話が、時々聞けるごく親しいおつき合いなのです。今度はどんなお話が出るか、今から楽しみでございます。



連載小説

花

と

蛇

〔3〕

花 卷 京 太 郎

落花紛々

遠山家の運転手、川井が遠山家にもどって来たのは、もう明け方であった。

「一体、今まで何処に行っていたのだ」

と、遠山隆義は、まだ起きていて、ガレージの所までナイトガウンを着たまま近づいて来ると、激しい口調でいうのだ。勿論、遠山隆義が、ぐっすり寝られる筈はない。静子の事と桂子の事が気がかりで、寝不足のため、

顔は土色になっている。

「はい。奥さんの行方を何とか見つけ出そうと、あっちこち走り廻って来たのです」

と川井は平然とした顔つきで答える。

「それで、何か手がかりがつかめたか？」

と隆義は、せきこんで尋ねるのだった。

「残念ながら、今のところ、全く——」

と、川井は、面目なさそうに答えた。

——俺は、今まで、手前の可愛い女房をたっぷり楽しんで来たのだ。——と心の中で舌を出す川井であった。

隆義は、苦しそうな顔を見ると、

「そうか、やっぱり駄目だったか」

と、力なくいい、

「仕方がない。明日は、警察へ相談しよう」

と、屋敷の方へひきかえす。

川井は、勝手にしやがれ、と部屋へもどり頭から布団をかぶったが、いよいよ警察沙汰になるのだと思うと、ぐずぐず出来ない、と、あせった気持ちになった。

それにしても、静子っていう女は、いい体をしてやがる、と、川井は、銀子の隠れ家で

静子を征服した時の情況をも一度想い浮かべるのである。

はちきれるばかりの豊満な乳房、なめらかな雪肌、弾力のある肉づきのいいヒップ、川井は、愚連隊当時、スケこましをやっていたぐらいの色事師で、数え切れない程の女を泣かしてきたが、静子夫人のような見事な肉体の女に出喰わした事は一度もなかった。

それに普通では、とうてい手の出ない高嶺の花である。相手の女が容貌といい、肉体といい、ずば抜けていればいるだけ、トコトンまで責めあげるといのが、色事師のやり方だ。

いよいよ、逃れる術はないと観念した時の静子夫人の眼を閉じた、神々しいばかりの美しさが、川井の脳裡に浮び上ってくる。

二つの枕の布団の上にあぐらを組んで、煙草をくゆらしている前に、麻縄で後手に縛りあげられた静子夫人が、神妙に坐っているのだ。かつては自分の主人であった彼女が。

川井は、のっそりと立上って、そんな静子夫人の背後へまわり、そっと、夫人の肩に手をやる。観念したとはいえ、いよいよ使用人風情の、しかも愚連隊あがりの男に肉体を与えるのだと思うと、口惜しさに、かっと思

逆流する静子夫人である。

「さ、奥さん。こっちへ来るんだよ」

と、川井は夫人を抱き上げて、せんべい布団の上へ乗せようとする。

「川田さん。お願い。いう事を聞くから、この縄だけは解いて——」

「駄目だね。奥さんが完全に俺のものになってから解いてあげるよ」

静子夫人は、涙にうるんだ瞳をあげて、

「川田さん。私、私、おトイレへ行きたいの。だから、お願い、縄を解いて——」

と、川井は、押入れを開けて、洗面器を取り出した。

夫人は、それを見ると、真赤な顔になって嫌、嫌、と首を振る。

「ぜいたくいうんじゃないよ。このボロ屋にや奥さんのいうようなトイレなんかねえよ。

さ、がまんしていちゃ体に悪い。早くすましちまいな」

眼の前へ、洗面器を置かれた夫人は、あまりの屈辱に、もう泣く気力さえなかった。

「何をぐずぐずしているんだよ。後の始末はしてあげるから、早くすましてしまいな」

川田は、夫人の消えいるような姿をニヤニヤして眺め、縄を解いてやろうともしない。

気位の高い令夫人が、おまるの代用にされた洗面器の前で、もじもじ尿意を耐えている図が面白くてしょうがないのだ。

静子夫人は、必死に唇を噛み、大腿をびったり合わせて、首を垂れ、何とか、耐えきろうとしていたが、いよいよ限界にきた。

——ああ、どうしよう、と夫人は激しく首を振り、川井に、哀願の眼を向け、

「川井さん、さ、最後をお願いです。しばらく部屋の外へ出ていて！」

だが、川井は、せせら笑うだけだった。

「今日から夫婦じゃないか、遠慮しっこなしにしようよ」

女にとって、死ぬ程恥しい姿を川田に目撃される口惜しさ。だが、静子夫人は、もう耐え切る力はなかった。——。

——そんな場面を川田は思い出しながら、まんじりともせず、眼はさえて、仲々眠られなかった。

俺は、とうとう天下の美女を自分のものにしたんだぞ、と、いうにいわれぬ優越感が、こみあがってくる。と同時に、あの美女を森田組に売る約束をした自分が、如何にも残忍な男に思われ出し、ふと、罪悪感めいたものが胸に來た。

「畜生、俺は、本当にあの女に惚れちゃったんだな」

と、川田は、何度もつぶやいては、髪の毛をかきむしるのだった。

探偵の山崎が遠山家にやって来たのは、昼前であった。ブルーのスーツを着た京子という女秘書を連れていた。彼女は、二十三才、二重まぶたの、エキゾチックな美人で、重大な情報をキャッチし、山崎と一緒に遠山老人にそれを報告に来たのである。

山崎は、遠山隆義にいうのである。

「実は社長。この京子さんが、大変なニュースをつかんでくれました。京子さんは、この三日間、新宿のズベ公達の中に混って、色々内偵をしてくれたんですが、マリ子という葉桜団の一人と親しくなったんです。」

遠山隆義は、体を乗り出して、

「うん、そ、それで、何か静子達の手がかりがつかめたか」

と、せきこむ。

京子が、それに対していった。

「マリの話では、今日、葉桜団は、森田組へある金目になるものを運びこむ、というのです。私は、それは、きっと奥さんかお嬢さんの事ではないかと思うのです」

「うん、なるほど。しかし、マリという女がよくそれまで君に話したもんだね」

と、隆義がいうと、

「私、葉桜団に入団したのです」

と、腕をまくって、隆義に見せた。柔軟な白い腕のつけ根あたりに、桜の刺青がしてある。

「マリというズベ公が、新宿の愚連隊に因縁をつけられていたので私が救ってやったのです。すると、マリが喜んで、ぜひ、葉桜団に入ってくれというものですから、それで、私、今日、団長の銀子というのに逢うことになっていきます。恐らく、葉桜団の隠れ家を今日はつきとめられると思いますわ」

京子は、今年大学を卒業して山崎探偵事務所所に務めたのであり、在学当時は、男の学生達と一緒に唐手を学んだ。女であるが、二段の腕前で、マリが愚連隊にいじめられているのを見て助けに入った京子は、ちんぴら三人を唐手でのしてしまったのである。マリが、ぜひ葉桜団に入ってくれと京子を誘ったのも、京子の腕力を見込んだからであろう。

隆義は、京子の手を握ると、

「お願いだ。何とか静子と桂子を救い出してくれたまえ。この通りだ」

と、隆義は、今度は、京子に対し、手を合わすのであった。

「社長、どうぞ御心配なく、私、どんなことがあっても奥さんとお嬢さんは救い出しますわ。だから、警察に知らせるのだけは、どうか、ここ一、二日待って下さい」

警察へ知らせるという事は、探偵長、山崎の面子を潰す事になる。それで、秘書である京子は、隆義に頼んだのだ。

「うん。俺だって、静子か桂子の命にかかわる事だし、新聞沙汰になる事はしたくない。すべて、君に任すよ」

と、隆義は、何度もうなづくのであった。

美人探偵京子の活躍

「さあ、アーンと口を開いて」

朱実は、焼飯をスプーンに盛り、静子夫人の口へ持っていく。夫人は、何時かと同じように、柱を背にして、あぐら縛りにされ、ズベ公達に食事させられているのだ。相変らず、一庁の布切の着用も許されぬままの静子夫人は、もう彼女達に抵抗する気力も失ったかのように小さく口を開いて、ズベ公達に食べさ

せられるものを食べ、飲まされるものを飲んで
いる。

「さて、今度は桂子の番だ。口をあけな」

柱のうしろには、桂子が縛りつけられていた。夫人と同じく、素っ裸をうしろ手に縛りあげられ、足は、あぐら縛り。

「二人とも、よく噛んで食べなきゃ駄目よ」

スベ公達は、静子夫人と桂子が、羞しげに口を動かして食べているのを面白そうに眺めている。

「はい。朝食は、これでおわり、ごちそうさまをいいな」

銀子は、縄に締めあげられている静子夫人の乳房を指でピンとはじき笑いながらいう。

「——ごちそうさま」

静子夫人は、首を垂れて、小さくいうのだった。

「大分、素直になったわね。それなら、森田組へ行ってからも大丈夫だわ」

エリ子が、そうだったので、静子夫人は、ふと顔をあげた。

「それは、どういう意味なのですの」

と、おろおろしながら聞く。

「なんだ。あんた、昨日、川田さんに抱かれながら、その話、聞かなかったの」

静子夫人は、顔を紅潮させてうつ向いた。

もう、自分は、あの卑劣な川田のため、夫

の前に出られない女になったのだと、昨夜の地獄のような川田との一刻を思い起し、体をすくませてしまふのだった。

「森田組にね、あんたの身柄を売ったのよ。

脅迫の権利をゆずったってわけよ。森田組は、あんたの御主人から三百万取ったなら、そのお金を分配して組は解散するらしいわ。だからどうせ稼ぎ得てわけで、奥さんと桂子の秘密写真なんかをうんと作っておいて、相当儲けるつもりらしいわよ」

静子夫人は、予期もしなかったことに、心臓が止るほどの恐怖を感じた。川田は、自分を凌辱したその上、秘密写真密造団に売り飛ばしたのだ。鬼畜にも等しい彼の仕打ちに、静子夫人は、激しく嗚咽し出す。

「泣いたって、仕方がないさ。あんたの新しい旦那さんがした事だものね。それより、昨夜、旦那さんは、どんな風に可愛がってくれたか、それを聞かしなよ」

と、朱実はからかう。エリ子も銀子も、静

子夫人の美しい頬を指でつつきながら、
「昨夜は明け方近くまで、奥さん、悩ましい声の出しつづけじゃないか。あたい達、全く

寝られやしなかったじゃないか」

と、からかうのだ。

「満更でもなかったようね。ね、すっかり聞かせてよ」

と、エリ子は静子夫人の尻をつねったりするのだ。そんな話を桂子にも聞かれている辛さ、静子夫人は舌でも噛み切りたい気持だ。

その時、表に車の停る音。

「おや、うわさをすれば、なんとやらだね。奥さん、御主人が見えたわよ」

入って来たのは、川田であった。

「よう色男」

と、スベ公達は、川田を冷やかす。

「へっへ、昨夜は、とんだ御世話になったな」

と、川田は上機嫌で、手みやげに持って来た果物を銀子に渡すと、静子夫人の前にかがみ、

「奥さん、気分はどうだい。おっと、もう奥さんなんていっちゃおかしいな。お前さんはもう今日から俺の女なんだからな。静子って呼ぶぜ」

と、夫人の両肩に手をかけ、スベ公達の前で、てれる事もなく、夫人の顔に自分の顔を近づける。

「どういふわけか、静子夫人は、川田に対すると、もうどうしようもなくなる。一度、崩れた女というものは、こうも、もろくなってしまうのか、悪魔だ、鬼畜だと憎悪で一杯なのに、ふと、備えを忘れて、彼のペースに引きずりこまれてしまう。何時の間にか、静子夫人は、川田の唇に我が唇を合わせていた。上気して、ズベ公達が哄笑しているのも、てんで耳に入らない。」

ようやく静子夫人は我にかえり、自意識がよみがえって、急に恥しくなり、顔を横に伏せてしまうのだった。

「大したもんだね。昨夜一晩で、この令夫人をなびかせてしまったからね。全く、あんたは、典型的な色事師だよ。」

と、銀子が感心したようにいう。

「へっへへ、俺の味を知った女は、俺なしには暮せなくなるのさ。」



「川田は、ぬけぬけと、ズベ公達にそんな事をいってるのだ。」

静子夫人は、真赤な顔して首を垂れてはいるが、川田のいう事は耳にいや応なしに入ってきて来る。両手さえ自由なれば耳を覆ってしまいたかった。

「さてと、そろそろ森田組へ運ばなきゃならねえな」

と、川田は、静子夫人の体を柱から外し、あぐら縛りの縄を解くと、さ、立ちな、と、縄尻をとる。後手に縛った縄は解こうとはしないのだ。

「どうして連れて行くんだい。裸のままじゃ具合が悪いだろう」
「なあに、自動車の荷物入れに押し込むんだ。きゅうくつだろうが、一寸の間の辛抱だ」

と、川田は、ポケットから、手拭を取出し

「さあ、猿轡をはめるから、アーンと口を開きな」

静子夫人は、涙の光る瞳を川田に向け

「川田さん。あんまりです。あんまりだわ」と、肩を震わす。そんな恐しい所へ自分を送りこもうという川田に、精一杯の恨みの眼を送ると

「なにをいってんだ。二人が世帯を持つにや、お前にも少しは働いてもらわなきゃ困るぜ。それとも、何かい。お前は、俺とあんな仲にまでなっておきながら、おめおめと遠山のヂヂイの所へ帰れる気でいるのかい」

川田は睨みつけるように夫人の顔を見た。あんな仲にまでなっておきながら——と川田にきめつけられてみると、川田のいう通り、もうおめおめと遠山の前へ出られぬ体になった自分を静子夫人は感じるのだった。

ああ、一体、私は、どうしたらいいのか、と、再び、がっくり首を落す静子夫人の前へ川田は、手拭を払げて立つと

「時間がないんだ。さあ、アーンと口を開いて——」

「お願いです。何か着るものを——」

「何か着たって、どうせ、向こうへ行きや裸にされるんだ。それに、ここじゃ奥さんの着るものは何にもねえ。みんな遠山家へ持ち運んじまったんだ」

「それじゃ、せめて、腰だけでも——」

静子夫人は、涙を流しながら哀願する。

「仕様がねえな。おい。銀子、何かはかすものはねえか」

銀子は、ニヤニヤしながらいう。

「あたい達は、出すものは舌を出すのも嫌だね。いいじゃないか。そのまま、連れておいきよ」

と、わざと、夫人にいじわるをするのだ。

「そうだね。おしめカバーは汚れちゃってるし、どう、メンスバンドならあるわよ」

と、エリ子がくつくつ笑いながらいう。

「いいや、それでも。ないよりはましだろう」

川田も、笑いながらいう。

エリ子はメンスバンドを持ち出して来た。

「嫌、嫌よ。あんまりだわ」

静子夫人は、畳の上に坐りこみ、そんなものはかされる事を恐れて、上体をかがめるのであったが、

「ぜいたくいうのじゃないよ」

と、エリ子に朱実、銀子までが寄りたかり

夫人の腰にそれを装着してしまった。

「さあ、それでいいだろう。では、口を開いて——」

と、川田は再び、手拭を静子夫人の鼻に近づける。眼を閉じた静子夫人は、観念したよ

う口を開いた。ハンケチを無理やり押込んでその上から猿轡をかませた川田は、夫人の足首を縄で縛る。そして、両手を開けてすくい上げるよう夫人を抱きあげ、表へ運んだ。

銀子達が、車の荷物入れのふたを開ける。

その中に夫人を押し込んだ川田は、

「ちよつとの間の辛抱だ。おとなしくしていいんだよ」

といって笑った。その車は、遠山家の自家用車で、静子夫人が買物の行きかえりに、使っていたものだが、今は、その荷物箱に、押込められる身となったのである。

メンスバンドを無理やりにはめられ、縛り上げられている静子夫人は、えびのように体を小さくしている。美しい顔は、鼻を覆うばかりに猿轡をされ、切長の、涙にうるんだ瞳を哀願するように、ニヤニヤ眺めている川田に向けるのだった。

「さ、行こうか」

川田はボタンとふたを閉め、鍵をかける。

川田の車が見えなくなるまで、銀子達は見送っていたが、

「桂子の方は、どうやって運ぶのだい。姐さん」

と、エリ子が銀子に聞いた。

「今夜、あたい達で運んで行こうよ。山登りでもする恰好で、リュックサックに押し込んで行きゃいいよ」

と、銀子は答えるのだった。川田は、森田組から、一旦は、遠山家に戻らなければならぬ。だから、桂子まで運び込む閑がないのだ。

ズベ公達は、あばら屋に引返し、柱を背にあぐら縛いされている桂子の前へごろごろ寝はらばったりしながら、

「桂子、いよいよお別れだね。森田組へ行ったら、ママと二人、一生懸命働くんだよ」

と笑いながらいうのだった。桂子は、首を垂れたまま、もうこうしたズベ公達に反抗する気力もないようだった。

そこへ、姐さん、ただ今、といって戸を開け入って来たのは、銀子の妹のマリだった。

「まあ、マリ、お前、一体どこをうろついてたんだい。今、私達は大きな仕事の最中なんだよ。こんなヤバイ時に一人歩きする馬鹿があるかい。」

と、銀子は眼をつりあげて叱る。

「その通り、とんでもないヤバイ目に逢ったんだよ。だけど、京子っていう姐さんに救ってもらってね」

マリは、そういつて、すぐ、戸の外へ声をかけ、

「お京姐さん、入っといでよ」

と、呼ぶ。のっそり外から入って来たのは派手なストラックスをはき、チューインガムを矢鱈にかんでいる背のスラリとした女だが、いうまでもなく、山崎探偵長の秘書京子の変装した姿である。

「こんな所へ、他所ものを連れて来る奴があるかい！」

と、銀子も朱美も、きつとした顔でマリを叱り、警戒した眼つきを京子に送ったが、マリは一生懸命弁じ立てる。

「姉さん、私が保障するよ。この人は、葉桜団を売るような人じゃないわ。それより、私からすすめて葉桜団に入団してもらったんだよ、ほら。」

と、マリは、京子の服のそでをめくりあげ葉桜団の紋章である桜の刺青を出して見せるのだった。そして、マリは、この京子という女が如何に唐手が強いかという事を語り、救われたいきさつをしゃべり出す。葉桜団にとって彼女を加わる事は、大きなプラスになるというのだ。

「お前がそうまでいうのなら——」

と、銀子は、京子の入団をようやく許可する。

「ちっとぐらいのタタキやカツアゲなら、何時だってやりませう。どうぞ、目にかけてやっておくんなさい」

と、京子は、団長の銀子に挨拶した。相当年期の入った不良に思えたのだろう。銀子も「なんとなく、お前さんは頼りになりそうだ。しっかりやってくれ。それから、マリを助けてやってくれて、有難う。お礼をいうよ」と、好意的な態度に出た。京子は、心中、ほっとした気持ちになったのである。

ふと、横手を見た京子はギョッとなった。柱を背に、無残にも素っ裸のまま縛りあげられている少女がいたからで、これは、遠山家のお嬢さんだとすぐにわかったが、何でもない顔つきになり、

「団長、そこに縛られているスケは一体何なんです。掟を破った私刑ですか」と聞く。

銀子はうなずいて、まあ、そんなもんさ、といったが、

「あんたも今日からアタイ達の仲間だから、一通り、今の仕事を話してやるよ」

と、遠山家の夫人、及び娘を誘拐、森田組

へ売り渡しの計画などの一切を説明し出した。

京子は、眼をギラギラさせて、銀子の話を聞く。

「成程、さすがは葉桜団ですね。やることが大きいや」

と、京子は、わざと感心したようなポーズをとった。

浣腸地獄図

ある実業家の大きな屋敷の一部を森田組は借り、そこを本拠としているのだった。屋敷の一部を森田組に解放している。いわば、この愚連隊のスポンサーである田代一平は、昔森田組に事業上の援助を受けた事があって、その義理で、落目の彼等を援助しているのであるが、森田組も、そのかわりに田代一平に色々な刺戟を提供し、猟奇的な快楽をもたらせている。秘密ショウ、秘密写真製造が、彼等の本業なのであるから、田代一平が、そういった種の楽しみに、夜ごと心をときめかすことが出来るようになったのである。

「社長、すばらしく、いい玉が入荷しました

ぜ、一寸、ごらんになってみませんか」

田代一平が、居間でくつろいでいると、森田組の乾分の一人、武次という男がノックをして入って来るなり、そういった。

そうかね、と好色な一平は、武次のあとについて、森田組に貸している奥の離れに向かった。一平は、五十才で、これまで数回妻を持ったが、その都度、逃げられてしまっている。変質的なところがあって、三カ月と妻となった女は耐えられなくなり、家を飛び出していくのだ。だから、彼は孤独で、森田組に慰められているようなものだった。

十畳の部屋に、親分の幹造を中心に、森田組は昼間から、賑やかに酒盛りをやっていたが、一平が入って来たのを見ると、全員、一せいに坐り直した恰好で

「やあ、社長、おいでなさいまし」

と、彼のために席を開け、さあ、まずは一杯、受けて下さい、と一平の手にコップをわたし、幹造は一升びんの酒をなみなみと注ぐのである。

「何だね。昼間から、大変な御機嫌じゃないか」

と、一平がコップを口に当てるようにしていうと、

「へえ、ちょっとやそっとじゃ手に入らぬ上玉が入荷したんです」

と、一平の耳に口を当てるようにすると、「それが、どういう女だと思います。社長。遠山隆義夫人の静子っていう絶世の美人ですぜ」

「えっ、ほ、ほんとうか」

一平は、コップを置くと幹造の顔を見た。

遠山隆義は、一平にとっては、いささか不快な思い出がある。飯田市の郊外の広大な土地の落札に一平は必死になっていた頃、横から飛び出て来たような遠山が金があるのにまかせて業者達の出す条件を丸呑みにして、あっさりと手を打ち、一平は、とびに油あげを持っていかれた恰好になったのだ。その後、ある社会事業団体の慈善パーティに一平が出席した時、遠山隆義も来ていて、最近、結婚したという美貌の静子夫人を同伴していた。一平は遠山の前に出るのも業腹だった故、遠目に隅のテーブルから眺めていただけであったが、静子夫人の輝くばかりに美しい容貌は、今でも一平の脳裡にきざみつけられている。その夫人が、森田組の手中に落ちたというのだから、一平は、恐ろしいような、わくわくするような何ともいわれぬ気分になったので

ある。大仕事をやるのだから、百万ばかり何とか都合してくれと数日前幹造に頼まれて、一平は、思い切って出してやったが、それはこの夫人誘拐に必要な金だったのかと、一平は、やっとわかった。

やがて——親分、入ってもようございますか、という声がし、襖が開いて、森田組数人の幹部に取り囲まれるようにして、乳白色の素肌をキリキリ後手に麻縄で縛りあげられた静子夫人が引き立てられて来た。夫人の縄尻をとっているのは、川田である。

静子夫人は鼻まで隠れるように猿轡をかまされ、腰には、ゴムのメンスバンドをはかされているだけといった屈辱的な姿であった。「床の間の柱に立たしな」

幹造が川田にいう。へえ、と川田は、羞恥に身を小さくしようとする夫人の背をつつき、座敷の中を床の間へと突き立てて行く。円座を組んで坐る男達は、引き立てられていく静子夫人の豊かな肉づきのヒップが、歩む毎、かすかに左右に揺れるのをニヤニヤしながら見つめるのであった。

床の間へ上らされた夫人は、男達の方へ向かされ、柱を背に縛りつけられる。川田は、別の縄を出すと、夫人の足元にしゃがみ、彼

女の両足も揃えて、がっしりと柱に縛りつけた。

「どうです。社長。顔もいいが、体もすばらしいじゃありませんか」

と、幹造は、一平の顔を見ながらいう。一平は、眼をギラギラさせて、喰い入るように夫人の均整のとれた体を眺めているのだ。

川田は、夫人の猿轡を外してやる。彼女は口につめこまれたハンカチを舌で押し出し、川田は、べっとり唾液で濡れたそれをひき出してやっていた。

「この奥さん、今、メンスなのかい」

幹造が、夫人の腰の異様なゴムを見て川田に聞く。

「いえ、何かはかせてくれというのですが、あいにく、こいつしかなかったんで——」

川田が答えると、男達は、どっと笑った。夫人は、真赤な顔になり固く眼を閉じる。

彼女にとっては、地獄に落ち、鬼の前に引き出されたといった心境だろう。

「そんな恰好の悪いものは、とってあげな。可哀そうに腰をもじもじして恥しがってるじゃねえか」

幹造にいわれて、川田は、夫人の腰から、ゴムバンドをナイフで切りとり剥ぎ取った。

「全く、すばらしいじゃないか、親分」

一平は、静子夫人の姿体を穴のあくほど眺めていたが、感極まったように声を出した。

「百万ならいい買い物でしょう。うまくいきや遠山から身代金三百万はひっぱり出せるんです。まかり間違ったって、これだけの女でさあ。仕込んでショウに出したり、写真を作って売ったりしても大当り間違いなしです」

幹造は、そういいながら、内懷から、百万円の札束を出し、川田を呼ぶ。

いそいそと幹造の前へ、もみ手をするように近づいて来た川田に、幹造は金を渡す。

「へい、こりやどうも——」

と、札の枚数を数えて川田は、それを内ポケットにしまうと、

「ところで親分、遠山の娘、桂子の方も、間もなく葉桜団が、ここへ連れこんで参ります。が、どうでしょう。こいつの方は、三十万というところで——」

「厚釜しい奴だな。そんなものサービスしておけよ」

「いえ、親分、何しろ、葉桜団のズベは、がっちりしてやがるんで——それに、桂子ってのも、ピチピチして、この静子とはまた違った味のあるいい玉ですがね」

川田がしきりに幹造にねだっているのを聞いていた一平が

「いいじゃないか。その三十万俺が出そう。遠山の夫人と娘を、仕込んで秘密シヨウに出すんだ。面白いものが出来るぜ、親分」

と、一平は、すぐに小切手を書き、川田に渡してやる。

「こいつは、どうも、へっへへ」

川田は一平にペコペコ頭を下げて、それを押し頂くようにしてポケットへしまふ。一平にしてみれば、これで、遠山隆義に対して昔の恨みが返せるわけだと、三十万の金もさして惜しくはなかった。

「うまい儲けが出来たじゃないか」と幹造は、川田の肩をポンとたたき

「そのかわり、せっかく社長も、こうしておいでになる事だ。何か酒の席の余興を、この遠山夫人にさせな」

と、いう。唄をうたわせるなり、踊りをさせるなり、何でもいい、幹造は、川田が夫人と普通の関係



ではない事を見抜いて注文をつける。

「まだ仕込みが足りねえので、そういう事は、無理だと思うのですが——」

と川田は、床の間の柱を背になだれている夫人を見ながらいったが

「そうだ。浣腸はどうです。それなら、葉桜団に監禁中、この奥さん、経験済みですよ」

「面白い。そいつは見ものだ」
一平が体を乗り出すようにしていった。

せっかくだから、そいつを撮影しておこうじゃないか、という事になり、そういったことが本職の森田組の乾分達は、八ミリの撮影機や大型のカメラなどを持ち込んで来て、ライトの調節などを事務的にやり始める。

「嫌よ、嫌。お願いです。ああ、嫌」

静子夫人は、激しく首を振り、自由のきかぬ裸身を悶えさせてい

る。野卑な男達の酒の余興にそんな事をされるだけでも、氣を失う程の辱しさに、彼等は、それを刻明に撮影機カメラで写しとるというのだ。そして好奇的な人間に売ったり入場料をとって見せたりするのだらう。想像するだけでも頭に血がのぼる。

座敷の中央に大きなビニールの布が敷かれる。一本の縄が天井から、つり下げられ、それに青竹が垂平につなぎとめられて、ビニールの上へ仰臥させた女の両足をこの青竹の両端へ開いて縛りつけばよいと、川田と森田組の乾分達はカメラの位置を計りながら、賑やかに相談しているのだ。

「親分、浣腸器が見当らねえ」

と、乾分の一人が部屋の中へ入って来ていった。

「馬鹿野郎、肝心のものがなくちゃ仕方がねえじゃないか。もっと、よく探して来い」

幹造にどなられた乾分は、再び表へ出て行く。

静子夫人は、恐しい浣腸器が彼等に見つけ出されない事を心から祈った。救われる方法はそれよりないのだ。

座敷の中央には、カメラも配置され、二人の男が洗面器の中で石けん水をぬるま湯でと

かし、浣腸器の到着を待っている。

静子夫人は、がっくりと首を垂れ、柱にびったりと押しつけられた両足にかけられている非情な麻縄を眺めながら、血の出るほど唇をかんでいた。息ずまるような何分かが過ぎ急に襖が激しい音を立てて開く。浣腸器を探しに倉庫へ入っていた乾分が帰って来たのだ。ハットとして、思わず静子夫人は顔をあげた。

「ありましたよ。親分。おまけに便器まで見つけました」

男は、ガラス製の大きな浣腸器とブリキ製の便器を手にしているのである。

「ああ——」

と、静子夫人は、絶望の眼を閉じ、激しくすすりあげる。

川田がニヤニヤしながら夫人に近づいてくる。しゃがんで夫人の足首の縄をとき、彼女の体を柱からはずすと、その場に腰を落してしまった夫人の背後へ廻り

「少し、縄がゆるんだようだな」

と、手につばを吐き、再び、がっしりと彼女を後手に縛り直し

「さ、皆さん、お待ちかねだ。立ちな」

と、縄尻をとって、夫人を立ち上らせ、すべすべした背中を突いて座敷の中央へ歩ませ

る。夫人は、よろよろと歩み出したが、ふと羞恥に染まった顔をうしろの川田へ向け、涙にうるんだ切長の瞳で哀願するように川田を見る。

「心配しなくても、あんたの浣腸は他の者にはさせねえ。俺がしてやるから安心しな」

川田は、そんな事をいいながら、夫人を遂にビニールの布の前までひき立てる。

待ちかまえていたように、布の周囲に介添人のように坐っていた男三人が、静子夫人の白い艶やかな肩や胴に手をかけて、布の上に強引に仰臥させる。

「別嬪さんの顔を、しっかり写さなきゃ駄目だぜ」

と、幹造が酒に混った眼をガラガラ光らせていった。

羞恥と屈辱の極に、顔を必死に横へ伏せようとすると夫人のあごに両手をかけて、正面へ向けさせた川田は

「そんな悲しげな顔をせず、にっこり笑ってみなよ」

とからかう。川田の手に溶液の一杯入った浣腸器が手渡された。

「待ってました」

と、周囲で酒を飲む男達は、手をたたき。カメラのレンズは近ずき、八ミリは回転を開始した。



MS対話

芝居の稽古

中野 三郎

人物

アパート経営兼管理人——山田利夫

間借人——テレビ女優——小野静江

小野静江の恋人——田中好宏

①

利夫——「小野さん、一寸」

静江——「何さ」

「あの、部屋代を……」

「うるさいわね。私、今忙しいのよ。」

「でも、もう半年もたまっていくんです。」

「それがどうしたのさ。」

「せめて、一月分でも……」

「しつこいわね。私、これからデートに行く

のよ。邪魔しないでよ」

②

利夫——「小野さん、あんまりです」

静江——「何がさ」

「少しでいいから、払って下さい。」

「うるさいわね。」

「……………」

「ふん、知らないと思ってるの？ お前、私

に惚れてんだらう？」

「……………」

「うふふ、図星ね、アッハハッハ」

③

利夫——「小野さん、あの……」

静江——「何よ、はっきりいったら、どう

なの？」

「……実は……あの……」

「実は私の馬になりたいんでしょう」

「……………」

「アッハハハ、よし、馬にしてやる。その代り、つぶれたら承知しないわよ。そうね、罰として10万円頂くわ。いい？」

「10万円？」

「そうさ、10万位、お前にとっちゃ、はした金だろう。さあ、馬になれ。乗りつぶしてやるから。」

「ハイ」

「どっこいしょ。さあ歩け。もっと早く。ハイッハイッ、ドウドウ、ハッハッハッ」

④

静江——「うふふ、とうとう、つぶれたわね。うふふ。」

利夫——「ううー、苦しい、降りて。」

「ダメ、くやしかったら起き上ってごらん」

「ゆるして……」

「そんなら二十万呉れる？」

「二十万、10万じゃなかったのか？」

「そうよ、二十万に変更したのよ」

「それじゃ、約束が……」

「うるさいわね。いいわ、あんたがそういうなら、私、このままいつまでも降りないわ」

「く、くるしい……」

「そしてさ、お前が無抵抗になった時、お前

の頭を床に押しつけてやるから。こんな風にさ、それ……」

「う、う、う……。」

「どうだ、参ったか？」

「ま、ま、まいった。」

「二十万よこすか」

「よ、よこす。」

「うふふ……。」

⑤

利夫——「静江さん、昨日のテレビはすばらしかったですね」

静江——「あら、お前でも私のテレビ見る事があるの。へーえ」

「いや、本当によかったですね。特にあのラブシーンはすごかったですね。」

「すごい筈よ。本当の恋人同士だもん。」

「え、なんですか？」

「いや、何でもないわよ。ところでさ、テレビで私の恋人役をやった人、どう思う？」

「ああ、あの田中好宏さんですね、いや、いい俳優ですよ、若くて男前はいいし。」

「お前、田中好宏、好きかい」

「ええ、もう私は前から田中さんの大ファンでして。いつ見てもいいですな。」

「田中さん、近い中にここへ来るわよ。」

「えッ？本当ですか？」

「本当よ、私と田中さんは、よく恋人役をやるでしょう。だから割合仲が良いのよ。お前に紹介してあげてもいいわ」

「本当ですか、是非お願いします。まるで夢のようです。」

⑥

静江——「お前、明日、いよいよ田中さん来るわよ。」

利夫——「え？本当ですか」

「お前の事も話したら、彼すごく感心していたわ。彼もお前と会ってみたいってー」

「まるで夢みたいです。」

「それでさ、実は彼が明日私のところへ来るのよ。この次のテレビドラマの稽古に来るのよ。よかったら、お前も一緒に稽古しない」

「え？私がですか」

「そうよ、実はね、今度のドラマでは、私と彼の他にもう一人主役がいるんだけど、その人が明日、用事があってどうしても来られないのよ。ねえ、お前、その人の代りをしてみない？」

「いや、その私でよかったら、喜んで……」

「そう、じゃ、お願いするわ」

「で、私の役というのは、どんな役で？」

「とても、いい役よ、大金持。」

「大金持？」

「そう。或る大会社の社長で、大金持の老人が美人のBGに首ったけなの。結婚を申込むが彼女はなかなかうんといわない。そこで老人は全財産を彼女に与えるが、彼女は金だけ貰って老人を捨てて恋人と結婚してしまう。

傷心の老人は一人さびしく自殺する。……という話さ。」

「なかなか面白そうですね。是非やらせて下さい。」

「ところでさ。彼女は最初から金だけが目あてだったので、後くされがないように現金を要求したのさ。つまり小切手なんかでは後で面倒な事が起った時、彼女が銀行から金を引き出したという事になるのはまずいのさ。で現ナマで三百万円が、直接老人の手から渡されるんだが、お前三百万位持ってるだろう」

「ええ、そりゃ、銀行の残はいつもそのくらいだったら有りますよ」

「じゃ、現金で揃えてくれる？」

「しかし、どうして？」

「明日の稽古に使いたいのさ、老人役のお前がBG後の私に三百万円渡すシーンさ。やっぱり本物を使った方が迫力が出るように思う」

のよ。田中もそういつてるのよ。」

「田中さんがそうおっしゃるんでしたら、そうします。では、これから銀行へ行って現金を出してきますから」

「うふふふ」

⑦

静江「いい？　そこでお前は私の前にひざまづいて、そうそう、私と結婚して下さい。あなた様なしでは生きてゆけません。」とい

うのよ、分った。さあ。」

利夫「私と結婚して下さい。あなた様なしでは生きてゆけません。」

「うッ」

「うふふ、これでも少しは加減してるのよ。

本番の時はさ、ハイヒールで顔を力一杯蹴りつけるんだから。さて次はどうするんだったかなあ？　そうだ、倒れたお前の頭をハイヒールで踏んづけるんだったわ、よいしょ」

「うッ」

「ふふう、いいさまだわ、ここへ、田中さんあんたが入ってくるのよ」

田中「やあ、千恵さん」

静江「あら、いらっしやい。いま、こいつ

をのしてるのよ。こいつたら、まるでダニみたい。しつこいいたら、ありゃしないわ。」

「せいぜい痛めつけてやるんだね」

「ねえ、あなたキッス」

「そのままでかい？」

「そうよ、面白いんじゃない？」

「ようし、馬上キッスか」

「うふふ」

⑧

利夫「ああ苦しかった。まるで本当に殺されるのかと思いましたよ。頭がまだガンガン痛みますよ。私の頭を踏台にして恋人とキッスするなんて、静江さん、あなたもずい分残酷ですね」

「ふふふ、お芝居だもん、仕方ないわ。それより、次を続けましょうよ。」

「次は、どうするんですか？」

「ええと、そう、老社長が最後の手段として三百万円持ってくるところよ。お前、三百万用意してきたらうね」

「ハイ、それはもう、持って参りました」

「では、それを私の前に置いて、ひざまづいてこう言うのよ。私は死ぬ程あなたを愛しています。これをすべてあなたに、さしあげます。分った？」

「ハイ」

「全部一万円札ネ。そこに重ねておくのよ。そうそう。」

「私は死ぬ程あなたを愛しています。これをすべてあなたにさしあげます。」

「あらそう、では頂いときます。うふふ。田中さん、これしまつて。」

「あの……」

「心配しないでよ。今、お芝居のけいこしてなんだから。脚本通りしなくちゃ。」

「ハイ」

「次にお前は私の足に抱きついて、結婚して下さい。って言うのよ」

「私と結婚して下さい。」

「しつこいわね。誰がお前なんかと結婚してやるものか、このうす馬鹿野郎。こうしてやる」

「うフ、うううっ、痛い痛い、そんなになにも縛らなくとも……。」

「ははア、今頃気がついたか、このウスノロ野郎、三百万円は有難く頂戴しとくよ。じゃ、アバヨ」

「ううう、待ってくれ、この縄をほどこくれ、頼む」

(完)



旅館「白樺荘」での奴隷生活

白樺荘には、大小十個の客室と、広い綺麗な庭がありました。使用人は、男の板前一人の他は皆女性で台所に二人、お座敷係としておすみさんを入れて四人です。其他に庭番兼風呂番として相当なおじいさんが一人居りました。

小さくはあっても、設備の整った、サービスのよい立派な温泉旅館の様でした。女中頭のおすみさんの下で、其の日から追い使われることとなりましたが、奴隷の私にやらされる仕事と云っては、内外の掃除、大きな物の洗濯、そして重い物の持ち運び、お客様のはき物の手入れ位と相場が決して居ます。女中達は、自分達が楽にな

長篇SM小説

宇宙のどこかで

△或る無期徒刑囚の告白から▽

佐 治 麻 造

ったので喜んで居る様子でした。殊に誰でも嫌がる便所掃除や浴室磨きを、一手に引受けて黙々とやる道具が出来た訳で、大分暇になったお座敷女中達に対して台所の連中が不平を云う有様でした。奥様の御方針で、お客様に出す料理はもとより、食器類にも奴隷の手を触れさせない様に、との事です。台所の女達がぶつぶつ云うのも無理はありません。それで、お座敷女中達は、時々甘い物等を恵んで呉れたりしましたが、肝心の私の餌、つまり残り物を掌握して居る台所の女中達には食物の事で、しょっ中苛められました。餌の中に唾を吐かれたり、地面からじかに食べさせられたりするのは未だしも、ひどい時は塩をしたたま混ぜられたり、小便を入れられたりしました。奥様に訴えたり等しようものなら、直ちに量を減ら

したり、絶食させたりするのです。私が夜繋がる所が台所の隣りです。彼女達にとっては苛め放題の訳でした。

或朝、ジート低く鳴る時間錠の音に眼覚めた私はむしろの上に起直って眼をこすりました。柱に鎖で取付けられた細長い鋼鉄の箱の一端にある環が私の鼻環を一晚中くわえて居る訳で、朝の六時になると錠が開いて、私を柱から解放するのです。胸や背や脇腹に残る痛みに昨夜の事を思い出しました。奴隷の私は大抵午後十時には、おすみさんかお芳ちゃんの手で、柱に鼻を時間錠で繋がれて寝る事を許される訳なのですが、昨夜はおそく迄台所が忙しく、何か取りに来たお春さんが、寝て居る私に腹を立てて、足蹴にただけでは気が納まらず、上半身を裸にしてゴムホースでたたか撲りつけたのです。手向い等とはとてもない事、口返えすらないで黙って撲られて居ましたが、本当に口惜しいと思った事でした。

「今日はおすみさんは、朝おそい番だなあ。すると、用便させて貰えるのは中々だな。」

と考え乍ら、昨夜お春さんが取上げて放り上げたままの古ぼんてんを、積み上げた空箱の上から背伸びして取って着ました。

起きるとすぐに、廊下の拭掃除、それから庭の掃除と決められて居ます。空腹なので、台所のごみ箱を横眼で覗みますが、台所の女達は、私の盗み喰いを発見するのに意地悪い巧妙さを持って居ますから、減多なことでは手をつけられません。ゆったりとした間取りの室々がシンと静まって居る家の中を、お客様の眠りの邪魔にならない様に気をつけ乍ら這いずり回って磨き立てました。奥様や女中達が使用する便所もピカピカに磨き上げて溜息をつきます。勿体ない、奴隷の私も、此の便所を使う事が許されて居るのですが、革猿

又の錠を外して頂かない事にはどうしようもありません。出ようとする私と入れ違いに、奥様が寝巻姿で髪を撫でつけ乍ら入って来ました。

「あら、もう働いてるの？ 御苦労さんねえ。」

お願い申上げれば、やさしい奥様の事です。から、革猿又の錠を外しては下さるに違いありませんが、錠を預かって居るおすみさんを起さねばなりませんし、とてもその様な我儘を申上げる気にはなれず、黙ってひれ伏して居る私の頭上で扉がボタンと閉まる音がしました。古草履をはいて庭に出ますと、小雨がしとしとと降って居ましたが、庭の掃除は雨が降ろうと火が降ろうと、しなければなりません。大切にに使わせて頂いて居る古タオルを、革猿又のポケットから取出して頭からかぶり、落葉の始末を初めました。広い庭を隅から隅迄這い回りますと、革猿又の内へ雨が流れ込んで来て気持ちが悪くて堪りませんでした。

「しかし、手足が自由なのは、何と楽なんだろう。もうこれで鎖錠なしで一ヶ月近くも暮らせて頂いたんだなあ。」

と奥様の御慈悲が沁々と有難く身に沁みる様でした。

「早く済まさないとお客様がお眼覚めになる。」

と思つて、しとどに濡れた古タオルを絞っては顔や首筋を拭き拭き漸く片付けて帰り掛けますと、庭に面した客室の窓がガラリと開いて、寝乱れた頭の若い女が、ピンクのネグリジェの肩も露わに顔をのぞかせました。お客様のお顔を見る事は奥様から禁じられて居ますし、お客様に対する態度もきびしく言い渡されて居ますので、その場で水溜りの中に膝と両手をついてお辞儀をしました。

「あら、あなた。今日は雨よ。詰らないわねえ。折角見物しようと

思ってたのに……」

土下座した私にお客様が気付いて、何かお言葉を掛けて下さればよし、若し黙殺された場合には少くとも十数える間は平伏した後、暫く膝で歩いて其場を離れねばならないのです。口を利く等は以ての外のことです。若い女客は眼下の地面で雨に打たれて平伏して居る私に気付かない様なので、膝で歩いて立去ろうと身を少し起した時。

「おや？ あんた何？」

といぶかしげな声が降って来ました。

「ああ、この奴隷なのね。着物きてるし、鎖はつけてないし、額の番号と鼻環を見なきゃ分らないわ。けど、その頭、何と綺麗にツルツルに剃り上げたものねえ。さ、早くお行き。目障りよ。そんな生意気な恰好をしてさ。」

台所の軒下で上半身を拭い絞ったままの古ばんでんを再び着て、台所におそろおそろ入りますと、鯉節を削って居たお春さんが、

「何をグズグズしたんだい？ ホラ、そこに餌がおいであるよ。」

と、土間の片隅の古洗面器を顎で示しました。おいしそうな匂いが立ちこめて、ガスレンジの上に並んだ釜や鍋は湯気を立てて居ました。炊き立ての御飯の香気が鼻を打って腹がグーと鳴りました。汚物の様にゴチャ混ぜにされた残飯を手で掴んでガツつこうとした途端

「これ、三太!! 今朝は手を使わずに喰べるんだよ。」

とお春さんに叱りつけられました。命じられるまま、両手を後ろで組んで、古洗面器にじかに口をつけて食べる私の姿を、彼女は真白な御飯をお釜から移し替え乍ら笑って眺めて居るのでした。

「そんな御馳走を喰べられる分際じゃないんだよ。お前は。有難涙をこぼして頂かないと口が裂けるわよ。そうだろ？」

「ハ、ハイ。そうでございます。勿体ないことでございます。あ、昨夜は有難うございました。」

「さっさと喰べたらね、流しの下水口が詰ったらしいから潜って掃除するんだよ。」

「今すぐにですか？ こんな雨が降るのに。それに、此の猿又を脱がせて頂かないと汚れますし……」

「何だって？ 汚れたら洗やいいじゃないか。下水溝は膝迄しか流れてやしないよ。さっきちゃんと見てあるんだから。いいかい、おすみさんの用の前に済ませなきゃ承知しないよ。」

「……ハイ……」

台所の外側の下水溝の中で膝迄汚水に漬って、雨に背中を打たれ乍ら、排水孔の掃除をして居ますと流石に体が冷えて便意が堪え難い程になって来ました。以後、炭坑主の妾宅で奴隷奉公をして居ました時には、日に一度の排泄が許されるだけでしたが余り苦痛に思ったことはありませんでした。しかしその時は飲食物を制限されて居りましたし、水を飲む等と云う事は滅多に許されることではなかった訳で今の様に自由に水を飲ませて頂けると、どうしても必要以上に吞んでしまいます。云わば自業自得の苦しみなのですが、一刻も早く猿又を脱がせて貰い度くて額に脂汗を浮べ乍ら、時々じっと立ちすくんで耐えるのでした。

「済んだのかい？」

「ハイ、済みましてございます。」

「お客様はそろそろお発ちの方もあるよ。」部屋にはすべて浴室と便

所が付属して居り空になった部屋から掃除して回りました。奥様がおやかましいので、それこそ舐めた様に綺麗にしなければなりません。腰を曲げて浴室や便所の床を這いずり回りますと、本当に洩れそうになってしまい、時々手を休めて喘ぎました。二つ目の部屋のを済ませた私は体を震わせ乍ら検査を待ちました。部屋の中を片付けて居る二人の若い女中さん達は、時々油を売ってキャーキャー笑い興じて居ますが、中々検査に来て呉れません。便器を眼前にして居る私は無駄とは知りつつも膝の上に繞って居る鉄環に指をかけて引き上げようとしたが、ものの二寸とは上げない中に腿につかえてしまいました。

「済んだの？ お前ほんとに手際よく早いねえ。」

やっと出て来た若い女中が覗き込みました。

「この三太はね、こんなことばかりさせられて居たんだって。慣れてるのよ。」

頬の真赤なもう一人の女中さんが掃除器のコードを巻き乍ら云いました。

「お、お願いでございます。もう辛抱出来ません。お慈悲ですからおすみ様を起して下さいまし。」

私は膝まずいて両手を合わせて頼みました。

「あら、おすみ姐さんならとくに起きてるわよ。さっきお前を探してブツブツ云ってたわ。」

「けど可哀想じゃない？ 見てごらんよ、雨に濡れて上衣がビショ濡れになってるし……」

「そうねえ。じゃおすみ姐さんにそう云って来てやるわ。ちょっとお待ち」

丁度そこへおすみさんが顔を出して

「おや、三太。どこで何してたのさ。怠けると承知しないよ。お玄関の敷居が泥だらけになったままじゃないか。」

いきなり激しい平手打ちが両頬に加えられ、思わず両手を挙げて顔を押えようとしますと、

「あら、手を動かしたりして、手向う気なの？ だからいつも両手は括ってかなきゃいけないのね。じっとしてる事、出来ないのかい？」

「手、手向い等、飛んでもございませぬ。怠けて居たのでは決してないんです。お赦下さいまし。あの……お春様が、あの……」

「何だって？ お春さんの云う事はきいて、私の云いつけは、どうでもいいと云うのかい？」

眉を吊上げた彼女は再び力一杯のビンタを私に加えました。不動の姿勢で殴られ終えて足許に額をすりつけてお赦しを願う私の頭を力一杯蹴飛ばし踏みつけた彼女は、

「ここはもう済んだの？『白菊』のお客様が今お発ちになったわ。さっさと片付けておしまい!!」

「ええ。三太!!お立ち。」

尻を蹴られた私は起き上ろうとしましたが、身動きすると溢れて来そうで全身を硬くさせて歯を喰いしりました。

「あ、そうだわ。お姐さん、三太がもう我慢出来ないって……」

「何が？ ああ、そうか。これ三太。駄目々々。もう一部屋済ましてからよ。さっさとお行き。」

「お、お慈悲で……ござい……ます。お慈……悲を……」

死物狂いに哀願する私の姿を見下ろして、おすみ様も漸く哀れに

なって下さったのか。

「フン。仕様がないわねえ。そら……」

袂から鍵を取出して、ひれ伏したままの私の腰の辺りに身を屈めました。ピンと音がして腰を締めつけた鉄鎖が緩み私は息を詰め乍らそろりそろりと這い出しました。

「おや？ちょっとお待ち。」

私の左足のくるぶしの辺りがボンと蹴られ

「これは何なの？ 家の中に上がる時には手足を綺麗にしなきゃ駄目じゃないの。奥様からも云われてるだろ。泥をつけたままで今迄動き回ってたのかい。馬鹿ね、ほんとに。」

よく洗ったつもりでしたが、下水の底の汚泥が残って居たのでした。

「罰として擦ってやるからお立ち。上衣を脱いで両手を挙げて!!

グズグズせずに早くしないと、今日一日脱がせてやらないよ。」

彼女は今錠を解いたばかりの腰の鎖に手を掛けて再び締めつけようとするのです。悲鳴を挙げた私は死物狂いの努力で膝をガクガクさせつつ立ち上ろうとしました。

「あら、顔が真青じゃないの？ ね、お姐さん、勘弁してやったら？」

頬の赤い女中さんが哀れんで呉れました。

「フフフじゃ先に行つていいで」

気が緩んでしまつて、ともすればへたり込んでそのまま洩らしてしまいそうになるのを漸く辿り着いて、そしてホツとして蘇生の思いが致しました。フーッと息を吐きますと、何故か全身が震えて来て歯がガチガチ鳴って止まりませんでした。革猿股を手で押えて急

いで戻って来ますと

「三太。ちょっとそれを下ろして真直ぐに立ってごらん。検査だよ。」

「ハイ。」

「ウン。しっかり嵌まつてる様ね。」

ギョツと腰の鎖が締めつけられ、後ろでガチリと錠が鳴りました。

「ありがとうございます。それではお手数ですが、お願い申し上げます。」

私は上衣を脱いで丸めて持ったまま、両手を挙げました。

「あら、何なの？」

「ハイ。さっき、罰を下さる様におききましたものでございますから。足の汚れは洗って参りました。」

「そうだったわね。擦ってやる筈だったのね。フフフ、神妙によくおぼえてるものねえ。感心したわ。」

おすみさんはニッコリと笑いました。

「堪忍してやるわ。第一こんな廊下で擦ったりしたら、お客様が驚いてしまうわ。声を出すなと云ったって、これだけは無理なもの。」
「ねえ、お姐さん。何故鞭で打たないの？ 声を立てさせないのだったら、嵌口具もあるし。あっちの方で、やればいいじゃないですか？」

「そらだわ。第一、ここじゃ奴隷を甘やかせ過ぎるわ。よそじゃ、何かと云うと鞭でビシビシ打ってるわよ。鞭痕のない奴隷なんて見たことないわ。ねええ。」

二人の若い女中達は口を揃えて云いました。

「私もそう思うんだけどさ、この奥様はとてもお優しい方だろ。私達にも有難い位だわ。だから、鞭は絶対にいけないってさ。三太、もういいから上衣を着て……」

腋の下や脇腹を擦ぐられ身をよじって苦しまねばならないと覚悟して居た私は、赦されていそいそと、はんてんの袖に手を通しました。

「奥様はね、鞭で打たれ乍ら過ぎた事があるって御自分で云ってらしたけど本当かしら？　だから、その痛さはよく知ってるって」

「私も聞いたけど、冗談だと思うわ。」

「あんた達、無駄口叩いてないで、さっさと仕事をおしよ。白菊の間だよ。」

次から次にと定められた仕事の合間に飛び入りの用をも云いつけられ、キリキリとこまねずみの様に働いた私が、漸く昼食を与えられて一息入れて居ますと、昨夜おそく見えたらしい旦那様がお帰りになる姿と、それを送って出られる奥様の姿がちらと見えました。旦那様は県庁所在地の市の有力者で、県の政界の大立物でもある実業家の方だと云うことです。

午後になって雨も上がり陽が射して来ました。空き部屋のガラス障子を磨いて居た私は、呼ばれて奥様のお供をして外出することになりました。既に外出着をお召しになった奥様が内玄関でお待ちでした。

「三太。ちょっと私について来ておくれ。旦那様がね、どうしても今日中に配って来いとおっしゃるのよ。雨が降ったのでタクシー出払ってるらしいし、今日は女中達も忙しい……。夕方、多勢お見えになるの。それに荷物も重いしねえ。私、奴隷を連れて歩くの

嫌なんだけど仕方ないのよ。荷物はこれよ。」

奥様のお供をするのに嫌も応もありません。仕事が大分残ってるんだけど、帰ってから馬力をかけてやらなきゃ、と考え乍ら大きな風呂敷包みを丁度行商人がよくやる様に、結び目を胸の前にして背負いました。

「あら、今朝の雨で濡れたのね。未だ乾いてないじゃないの。何か着替えをその中を探しておいてやるわね。あ、それから仕事の方は心配しなく共いいのよ、おすみさんに云っとくからね。」と飽く迄もおやさしい奥様でした。

「奥様。はき物はこれでいいのですか。雨上りですわよ。」

「いいのよ、お芳ちゃん。道はいい所ばかりだから。草履で沢山よ。さ三太。出掛けましょう。重いだろう？」

「ハイ、あの奥様。外に出るのでございましたら、手足をこのままじゃ……」

「ああ、そうだったわね。えーと……」

「奥様。ここに出してありますよ。」

こましゃくれた小娘が木の小箱を重そうに持ち出して来て蓋を取りました。彼女は今日は珍らしくスエーターにストラックス姿です。箱の中には奴隷用の戒具が鈍く光って居ました。

「私が嵌めてやるわ。」

小娘は油で磨かれた殆んど真新しいままの足錠をガラガラと引き出して私の前にくしゃがみました。

「じっと立ってるのよ。」

重い荷物を背に少し両足を開いて前屈みに立ちすくんで居る私の両足首にそれぞれ鉄環が嵌められてグツと喰い込みました。鉄環は

五十センチ程の鎖で繋いであります。

「お芳ちゃん。あんまりきつく嵌めないでやってよ。手は私がするわ。三太。手をお出し。可哀想だけど……」

手錠の環の片方の付根を右手に握った奥様が眉をひそめ乍らおっしゃいました。白くふくよかな奥様の右手の下に短く垂れた他の一方の環がキラリと私の眼を射しました。握った環を私の右手首にあてがって奥様がグッと押しつけられますと、シャッと音がして環の半分がクルリと素早く回転し、ガチッと下から錠の部分に喰い入ります。

「そっちの手もよ。此の手錠、少し鎖が短い様ね。これじゃ自分で嵌めるのは一寸難しいわね。」

左手首に嵌められる時、私の左手の先をお握りになった奥様の手の柔い感触に、私は全身をピクリと震わせてしまいました。そして私の眼の前で俯向いた奥様の乳色のうなじが豊かな黒髪越しに見えて眼が昏みそうでした。

両端に錠前の付いた長さ五六センチの鎖で手錠の中央と足錠の鎖の中央とが結ばれました。

「も少し屈むのよ。」

革紐の先端の金具を右手に持って小娘が云います。

「あら、お芳ちゃん、鼻につけるのは勘弁しておやり。腰の後ろにつけといて頂戴。」

「だって……曳き繩は鼻につけるのが一番便利だと思いますわ。」

小娘は奥様の言葉には構うことなく、指先に持った金具を私の鼻環に力チリと嵌めてしまいました。革紐は約一米で他端にプラスチックの握りが附いて居ます。手錠足錠を結んだ鎖と、その鎖で上

方へ吊られて居る足錠の鎖の重量が前で垂らした両手にずしりと感じられました。何十日振りかの鎖錠です。うなだれた鼻の先にもブラリと長い革紐が垂れ下がり、久し振りでみじめな心持になりました。けれども当然のことです。

「さ、おいで」

奥様に鼻繩を曳かれて外に出ますと、未だ濡れて居るアスファルトの道に陽が光って陽炎が立って居ました。先に立って裾捌きも鮮かに歩く奥様の足許の白足袋を眼に泌みる様に見詰め乍ら、足の鎖をガチャガチャ鳴らして居る私を振り返って

「歩き難いだろ？　もう少しゆっくり歩いて上げようか。」

やさしい言葉に私は眼頭が熱くなりました。

「……ありがとうございます。何分にも長い間自由にさせて頂いて居りましたので……。それに、少しばかり強く締められて居る様なので痛くて。申し訳ございません。」

「あの子、矢張り思い切り締めつけたのね。仕様のない子なこと。」

けど鍵持って来てないのよ。辛抱おし。」

「ハ、ハイ。それはもう……」

普通の足錠の枷の様に広い幅の鉄環ではなく第一種足錠に似た構造の鉄枷を、小娘とは云え力一杯締めつけられ、そして弛むことは決してないので、歩き初めて十分も経たない中に歯を喰いしめる様な苦痛に苛なまれて来ました。時々振り向く奥様に御心配を掛けまいと額に脂汗を滲ませて懸命に曳かれて歩く私の姿を見て浴衣姿の二人の女が行きずりに嘲けりました。

「あら、ごらんよ。奴隷の癖に何か穿いてるじゃないの。」

「それにさ、人間並みに着物なんか着せて貰ってさ。」

「けど、あの頭はどう？、ピカピカ光ってるじゃない？」

「あれは禿げてゐるのじゃないわね。年は未だ四十台の男ね」

女達はジロジロ眺めて追い越して行きました。胸に掛けた風呂敷の結び目が次第に下にずれて背負い難くなりましたので、膝を曲げ腰を落して漸く届く両手で以て工合を直して居ますと、どうしても遅れ勝ちになって鼻繩はピンと張ってしまいました。奥様は立止って振り向き

「どうしたの？ 足が痛くて歩けないのかい。」

「イ、イエ……ちょっと……」

大抵なら革鞭の二つ三つを喰う所です。背の風呂敷包みをゆすり上げて再び足の鎖を鳴らし初めました。緩く上り坂になって居た道はいよいよ山手に差し掛かり、あたりは豪壮な邸宅や粹をこらした旅館、ホテル等が散在して居ました。とある一軒の旅館の裏口のベルを押した奥様は、出て来た女中と二言三言話しをして私を塀の中に曳き入れ私が身をくねらせて大きな置石の上に置いた風呂敷包の中から紙包み一つ取出して、

「ここで待っていい」

と家の中に入って行きました。私はしゃがんで足首の鉄環を出来るだけずらせて、痛めつけられた箇所を指先で撫で乍ら待ちました。あたりは全く森閑と静まり、私が手を動かす度に触れ合う鎖の音が気になる程です。朝の雨で濡れた私の上衣も既に乾いてのどかな日光を浴びてうずくまった私は居眠りしそうでした。

「フフフ、眠っちゃ駄目よ。さ、起きて」

奥様の声にはね起きた私は、風呂敷包みを結び直して居る奥様を見て、

「あ、私が致します。申し訳ございません。」

あわてて両手を前に突出したままで足を踏み出してしまい上に吊られた足鎖につまずいて膝をついて倒れました。そのまま膝でいざり寄って手伝おうとしましたが、ままたぬ両手の不自由さは齒ざしりし度い程です。

「ホホホ、いいのよ。手錠のままじゃ無理よ。私がするからいいわ。ほら、済んだよ。背負って。」

ゆるく結んだ風呂敷の結び目を頭に掛けて頂いた私は、前屈みに立った途端、足首でこじった鉄環の痛さに低く呻きました。

「御ゆっくりなされば、よろしいのに。」

「ええ、でもこれから方々に回らなきゃなりませんので。」

女中に送られて外に出た奥様は、更に山手の方に向いました。あちらこちらと六軒ばかり回ると荷物が空になり、大きな風呂敷をタスキ掛けに結びつけて貰った私は、夕暗が迫る道を奥様に曳かれて帰りました。重い荷物はなくなりましたが、足錠の痛さは益々激しくなり、時々堪え切れなくなって呻き声を洩らしました。しかし大分歩いて疲れたのか、帰途を急ぐ奥様はもはや振り向きもなさらないで鼻繩をグイグイ引張って行かれるのでした。お優しい奥様に此の様に扱われますと、今更の様に自分の身の程が思い知らされて、ひきつれる鼻の痛さと共に涙がポロポロ流れました。矢張り奴隷は奴隷なんだ、奥様をお怒りする等でもない事だと我身に悲しく言い聞かせ、せめて転んだりして御手間をとらせては申し訳ないと必死になって脚を動かすのでした。

漸く帰りついた白樺荘には、既に定員以上の客が到着して居て、私は鎖錠を解かれるや否や、御客達の靴磨や下着類の洗濯に追い使

われた末、忙しげに現われたおすみさんに面倒臭そうに物置に繋がれ、とうとう用便もさせて貰えず、餌にもありつけずに一夜を過ごしたのです。

隣の旅館の女奴隷

満員のお客は二晩泊って朝発ちしました。

玄関の床に膝まずいた私は、次々と現われる男達に靴を揃え靴べらを差出し、そして靴の紐を結んでやらねばなりません。

「それじゃねえよ。ほら、その茶色のだ。すっかりしろ、薄ノロ奴!!」

間違つた私の頭上で若い男が罵りました。

「おや、貴様、これでも磨いたつもりか？下足の手入れはどうせ貴様の仕事なんだろう？」

爪先の僅かな泥を目に留めた若い男が怒鳴って靴下の片足を挙げて私の頭を蹴飛ばしました。其の靴下も私が洗ってやったものです。蹴転がされた私はすぐに起直って額を床にすりつけました。

「何をボヤボヤしてるんだ。早く紐を結ばないか!!」

口惜しさで指がブルブル震えましたが致し方ありません。

「あら、サーさんたら、何を怒鳴ってらっしゃるの？ 奴隷なんかに構ったりして見っともないじゃありません？ これ三太、次の方が待ってらっしゃるじゃないの。」

愛嬌を振りまいて居たおすみさんがとりなして呉れました。

「やれやれ、やっと済んだわ。皆、御苦労さんだったねえ。」

「ねえ奥様。旦那様は今度国会に立候補なさるんでしょ？ 今のお客様達はその関係で招待なさったんじゃないませんか？」

「あら、おすみさん、どうして知ってるの？」

「だって皆様のお話を伺ってれば分りますわ。」

「そうお。けど秘密よ。まだ誰にも云わないでね。」

奥様達の立話を聞いて一昨日配って歩いた品物も、それだなど知りました。しかし奴隷には何の関係もないことです。

「三太。お前、さっきお客様に叱られてたそうじゃないの？ お靴をよく手入れしとかなかったんだって!! 駄目じゃないか。え？」

「ハ、ハイ。奥様。申し訳ございません。」

「それに此の間から気が付いてるんだけど、お客様にお貸しする下駄の手入れだってよくないのが、ちょいちょいあるわ。骨惜しみますと……」

奥様に珍らしくきつい眼で睨みつけられた私は心から震え上りました。確かに近頃は、寛大な扱いに馴れて甘え過ぎて居る事は自分でも分って居ります。早い話が朝時間錠が鼻環を放した後でも、すぐには起きないで怠けて寝て居る事がよくあるのです。

「よく身の程をわきまえて骨身惜しまず働かないと売飛ばしてしまわうよ。私はね、思い切るのは早い方なんだから。」

「こんな楽な奴隷勤めはないと思うがいいわ。働きさえすれば人間並みの暮しをさせて貰えるじゃないのさ。」

おすみさんも口を出して私を叱りました。

「ハ、ハイ。ハイ。おっしゃる通りでございます。お慈悲でございますから、ここで働かせてやって下さいまし。」

「分ったらいいのよ。横手の石垣の外の溝を綺麗にしておいで。もう汚れた頃よ。」

「ハイ」

はね起きて裏口から横手に回りました。白樺荘の前面は大きな舗装道路、裏側は静かな林で、側面の一方に通用門があり、反対側の側面は低い石垣を隔てて細い道が通って居ます。更にその細い道を挟んで隣りの旅館の高い石垣がそびえて居りました。私が細い道に出て見ますと、隣りの旅館の石垣の外で女奴隷が一人、草をむしって居ます。隣りの旅館は扱いがきびしいのでしょうか、黒い革褌を錠前で以て嵌めこまれただけの姿で頭は坊主刈りにされて居ました。いや、扱いがきびしいではありません。これが当り前の事なのです。陽に灼けた彼女の全身の肌には靴痕が無数について居り、首には黒ずんだ鉄の首環、両足首の幅の広い頑丈な鉄枷を繋ぐ鎖はびっくりする程太く重そうで、更に右足首の枷に繋いだ鎖の端についた鉄丸が草の中に半ば隠れて転がって居ます。

私の足音を耳にした彼女はビクツとして、休めて居た手を動かして、足の鉄丸をゴロゴロと曳き摺りました。私の姿を盗み見して鼻環を確めて安心したらしい女奴隷は、7と赤く数字をマークされた背中を伸ばし、両手を差上げてあくびし乍ら私の方に体をねじ向けました。やや小柄で乳房の大きな三十前の女です。勝気らしい顔立ちで額にも番号を刷られ、乳房の上部に三条の真新しい鞭痕が真赤に走って居ました。あくびした口を押えた両手首も手錠で痛められた痕が痛々し足鎖の中央を腰枷に吊った短い鎖のため脚を伸ばせない彼女はジャラジャラと鎖を鳴らせて膝を地面について私を見ました。

「あんたも奴隷らしいわね。鼻環もついてるし、額に番号がゴチャゴチャ刷ってあるし。」

「そうさ。此の白樺荘の奴隷さ。お前は、その家で使われてるんだ

な。」

「そうよ。けど、あんたとこの御主人様は一体どんな人なの？ 戒具もなしに外に出したりして……。おまけに着物なんか着せて貰ってる男奴隷なんて滅多にお眼に掛かれる代物じゃないわ。」

「フッフ、羨ましいか。」

「何さ。男の癖にそんなダラダラした恰好して。私なんぞ、女でもホラごらんよ。此の足鎖の太いこと、どう？ おまけに鉄丸迄つけられてんだよ。」

女奴隷は眼をクルクルさせて、妙な所で自慢をしました。

「フッフ、強がり云うのはよせよ。辛いだろうな、同情してやるよ。けどな、俺だってつい三月ばかり前迄は本当に辛い目に会わせられ通しだったんだからな。ま、その埋め合わせさね。」

「フン。で、何をしてブチ込まれたのさ。私が睨んだ所じゃや、お前は懲役上りだね。こうされてから何年になるの？」

彼女は両手を重ねて手錠を嵌められる仕草をして訊ねました。

「そうさね、もうかれこれ十五年になるかなあ。なあに詰らないことでブチ込まれたのさ。」

「そうかえ。私はね、亭主が甲斐性なしでさ、別れようにも別れて呉れないし、仕方ないから男を作って逃げ出したら追掛けて来やがったんでね。男と一緒になって殺しちまったんだよ。手を下した男は死刑で私は三十年だってさ。七年程勤めたら奴隷にして出して呉れたよ。それでここに連れて来られたんだけど……。とても長くは置いては呉れそうもないわ。それに精神的には監獄よりも辛いしね。私だけ特に苛めるのよ。ああ、畜生め、せめて脚を伸ばす位のこと伸ばさせやがれ。」

彼女は足鎖を吊上げた鎖を口惜しそうに握って口走りました。女客のあられない姿は、しょっ中見掛けはするものの、分際の相違を骨身に叩込まれて居るお陰でそんなにも感じはしない私でしたが、久し振りに同じ奴隷の身の異性の肌を眼前に眺めますと心身が昂ぶって来るのをどうしようもありません。そしてあの「アパート」でのこと、特に可愛かった女奴隷3号の体を思い出した途端、苦痛と切なさの呻いて眼をそむけてしまいました。

「フッフ可哀想に。矢張りあの錠だけは嵌められてるらしいわね。月に何回位……」

私を面白そうにからかいかけた女奴隷は突然

「……あっ、来やがった。こんなに早く来るなんて……」

とあわてふためいて草むしりを再び始めました。うろたえるのも道理で二十米程向うの通用門が突然開いて赤い前垂れ姿の女中らしい婦人が足早に近付いて来たのでした。私の方をジロリと眺めた女中は、

「七号。何してたのさ。え？ 今迄かかってそれだけかい？ お前はもう見込ないね。」

後に回して居た右手に握った革鞭を矢庭に振り上げてヒュッと空に鳴らし、自分には関係ないと知って居る私迄がビクツとしてしまいました。

「あっ、お、お赦し下さいまし。何分にも脚が……」

「フッフ脚がどうしたって？ 草むしりは手でやるものよ。お前は足で出来るの？」

ピシッと革鞭が女奴隷の背中に鳴ります。

「ヒューヒュー……」

「大きな声を出すとお客様が御迷惑だと教えてあるだろ。それ、もう一つ」

「……ヒュー……」

女奴隷は太腿に炸裂した鞭の痛みを押殺した悲鳴で必死に耐えました。

「うっかりしてたけど、草むしり位手錠嵌めとかなきゃね。お前みたいな図太い女奴隷は見たことないからねえ。手を出して……」

左手に持って居た手錠を右手に持ち替えた女中は威丈高に云い渡しました。女奴隷は悲しそうな上目使いで、女中の右手の手錠を見上げましたが、両手は反射的に動いて手首を揃えて差出して居ります。手錠を取出されれば両手を揃えて出すか或いは後を向いて両手を後に回すのが囚われの身の哀れな慣わしなのです。バシッ、バシッと大きな音を立てて女奴隷の両手首に喰込んだ手錠の環を、更に上から握って強く強く締めつけた女中は、環がカチッともう一穴余計に嵌まり込んだ音を聞いて、頬に冷笑を浮べて手を放しました。

「……う……いいたい……いいたいわ……ウウッ……」

「何よ、その口の利き方は!! 痛いだけかい？」

「……ウ……ありがたい……とう……ございました。」

「ホホホ、そうして草むしりするといいわ。ずうっと向うの端迄よ。むしりであるじゃない？ おひる迄に済まさないよ、今度こそひどいわよ。分ってるね。ホラ。」

差伸べたままの両手の甲に一鞭当てられた女奴隷は、身をよじりくねらせて咽喉の奥で泣きました。

「おい。早くしないとひどい目に会うんじゃないのか？ 早く始めろよ。」

女中が通用門に消えたのを見て私は注意してやりました。

「畜生!! こんなにきつく嵌めやがって。指が動きやしない。」

「フッフ、俺なんざな、その上に其の手錠を鼻環にひっ付けられて、やらされたぜ。グズグズしてないでやったらどうだ? それとも、とことん抗らってふてくされて見るかい?」

私はわざと意地悪く云ってやりました。女奴隷は流石に涙ぐんで「ねえ、お願いだから少し手伝ってよ。こんな……とても出来やしないわ。お願い。」

私は黙って自分が命じられた仕事をやり始め、彼女も嗚咽乍ら這いずり初めました。時々重い鉄丸をゴロゴロと引きずる音が聞え、両手首の苦痛に耐えかねては地面に突伏して呻く哀れな声を耳にしますと、矢張り少し可哀想になった私は、半分以上も手伝ってやりました。

「ありがと。ほんとに助かったわ。けど羨ましいわえ、手も足も括られて居ないなんて。ああ、痛い。もう手首が千切れそうよ。」

「痛いだろうな。其の式の手錠をあの手荒に締められちゃ全く堪らないで。けど足錠がその式でなくてよかったじゃないか。」

「ほんとね。フーッ、ねえ、お札に私のお乳触らせて上げる。」

私は、はけ場のない怒に耐え兼ねて、女奴隷の頬を思い切り撲ってしまいました。しまった誰かに見付けられたら大変だと思つてうろたえる私に彼女は泣笑いし乍ら

「ごめんね。あんたの気持分るわ。ついうっかりしてたのよ。夜になると私達はね、男も女も同じ奴隷部屋に入れられるの。男達、気が狂いそうに苦しむわ。」

しやべり乍ら、私の上衣についた草を取ろうとして

「あら、もう指が動かない。ああ、早く外して欲しいわ。」

道ばたにジャラジャラと坐り込んだ彼女は両手首にガッキと喰い入った手錠の環をくわえて白い歯でガチガチと噛み、そして手首を舌で舐め乍ら身もだえしたのでした。

多勢のお客が帰って、其の後始末もあらかた済んだ台所の土間で、お春さん達になぶられ苛められ乍ら漸く昼食を終えた私は直ちに起って貸下駄の手入れを初めました。手入れが悪いと今朝叱られたばかりです。二十足程の下駄を内庭の井戸端に持ち出して丹念に洗い磨き立て、緒のゆるんだのは締め直して風通しの良い所に立て掛けて居ますと半分程済ませた時、おすみさんに呼ばれました。

「お客様が体を流して欲しいって。大浴場の方よ。お爺さんは疲れて寝てるから。」

大浴場の方は風呂番のお爺さんの担当ですが、いつも手伝わされて居ますし、お客様の体を流すのも、ちょいちょいさせられて居ます。粹を凝らして広々とした大浴場のほのかな湯気の中でタオルを巻いた頭が一つ後ろを向けて湯舟に浮いて居ました。ミルク色の首筋から肩にかけての曲線で女性と知って溜息が出ました。気配で振り向く様子にあわてて眼を伏せて膝をつき

「お体を流させて頂きに参りました。」

「あら、そうお。」

湯を全身から滴たらせて腰掛を引き寄せる婦人の声は女盛りを感じさせます。

「あら、あんた奴隷なのね。そうそう先刻そう云ってたっけ。」

婦人は前を掩うタオルを除け、腰掛けるのを止めて一隅に設けた休息台に近寄りました。

「此のマットをようく洗って。」

「あの、毎日よく洗ってございますけど……」

婦人の背後に膝まずいて白くふつくらとしたふくらはぎの辺りを見詰め乍らつい口答えをしてしまいました。婦人の両脚がクルリと私の方を向きいきなり頭を蹴られました。蹴り倒される拍子に私の視線は上方に動きましたが、彼女は全く意にも介さず、起き直った私の頬をパシッパシッと濡れた手で思い切り撲りました。

「黙って云われた通りすればいいのよ。」

「ハイ。申訳ございません。」

再度タイルの上に蹴倒された私は立上ってマットの上を何度も洗いました。

「もういいわ。お行き。」

じっと横たわった婦人に、一言で追払われた私は額の脂汗を手の甲で拭い乍ら再び下駄の手入れに立戻りました。内庭では奥様が、芝生に寝椅子を持ち出して日向ぼっこをして居ました。

「三太。お気に障る様なことはしなかつただろうね？」

「ハイ。」

「そう。下駄の手入れが済んだらここへおいで。ええともう大分になるわねえ。」

嬉しさに全身を熱くした私が、やがて寝椅子の奥様の傍に正坐した時には奥様はスヤスヤと眠っておいででした。陽除け覆いから、お顔の半分がはみ出して陽に白く輝き、微かに開いた唇や豊かな頬長いまつげ、微風にそよぐおくれ毛、本当に美しくて見惚れる程で私は両手を腿の上において唯じっと身動きもしないで正坐し続けました。そっと見上げますと奥様は安らかに午睡なさって居ります。

再びうなだれて芝生の上に投げ出された奥様の両足をキッチリと包んだ真白い足袋が緑に映えて眼に泌みるのを見詰め「此の足袋も私が洗って差上げたのだ。」と思い乍ら、安らぎの時間が流れるに身を委せました。

「ああいい気持ちに眠ったわ。お前まだそこに居たの？」

フト眼覚めた奥様の声を聞いてビクリと体を震わせて額を地べたにすりつけました。

「ハイ。ありがとうございます。仕事にかかせて頂きます。」

「ホホホ。まあいいじゃないの。今日は暇だし……誰も来なかった？ 何か冷い物持ってきてよ。」

私が捧げ運んだハスス入りジュースを美味しそうに飲み干した奥様は、再び寝椅子に横になり、珍らしくも煙草を吸いつけました。

「ねえお前。誰も本当にしないし、して呉れなくていいんだけど、実はね、私も監獄に入れられた事あるのよ。若い時分のことだけど。戸籍から前科が消えたのは四五年前の話なの。」

ハスス飲料のせい、奥様は口数が多くなりました。

「縛られたり鞭打たれたりする苦しさはよく知ってるの。だからそんな事するの嫌なのよ。お隣りの旅館じゃ、多勢の奴隷をむごく扱ってるらしいわね。私にはとてもあんなこと出来ないわ。」

「……………」

「私って、若い頃は本当に運が悪かったわ。今じゃ何とかやって行ける様になったけど。」

問わず語りに奥様の身の上話が初まりましたが、暫くしてお芳ちゃんが見われて話の腰を折りました。其後、私が奥様とお別れする迄に何回にも分けて聞いたお話しは何れ後程述べさせて頂きます。

息せき切って現われたお芳ちゃんは、私の方を睨みつけた様子でした。

「奥様、奥様。三太ったら、飛んでもないことしてますのよ。」

「何なの。騒々しいわね。」

奥様は二本目の煙草を啣えました。

「あのね、お隣りの女奴隷の仕事を手伝ってやったんですって。」

「何だって？」

マッチを持つ奥様の手がビクリとしました。

「あのね、お隣りの女奴隷の仕事を手伝ってやって、草むしりをし
てやったんだって……」

「どこの草むしりをなの？ いつの話？」

「今日のおひる前の事なのよ。お隣の石垣の外の草をむしったので
すわ。」

寝椅子から身を起した奥様の手が、いきなり私の頬に飛んで来ま
した。お隣りの旅館とは仲が悪い事は薄々知って居た私は、三つ四
つと平手打ちを受け乍ら、しまったと思いました。

「それにね、その女奴隷といちゃついてたんだって……。思知らずで
すわねえ。」

「お前、それ本当なの？ え？」

庭下駄を穿き直して立上った奥様の足許にひれ伏した私は身を揉
んでお詫びしました。

「申訳ございません。お赦し下さいまし。いえ、罰を受けさせて下
さいまし。その女奴隷があんまり可哀想だったもので、つい……」

「ともかく、お隣りの仕事をさせるために、お前を買ったんじゃない
のよ。馬鹿!!」

隣りの旅館とは、余程の事があるのでしょう。おやさしい奥様が
私の頭を下駄で踏みつけ踏みつけ、語気も荒く叱りつけました。
煙草の火を肩に押しつけられた私は、飛び上って身もだえしまし
た。

「ちょうど上半身裸なのね。お芳ちゃん、鞭持っといで」

小娘は眼を輝かせて飛んで行きました。此のやさしい奥様をこん
なに迄怒らせたかと思えますと本当に情けなくて悲しくて、鞭を待
つ間もボロボロ涙がこぼれ続けました。

「罰よ。それっ」

革鞭がピシリと背に鳴り私は齒を喰しばって悲鳴を耐えました。
背や脇腹に五つ六つと久し振りの鞭の激痛が皮肉を打ち苛なんぞ遂
に私は悲鳴を洩らしました。

「ヒ、ヒー」

「今度は手をお出し。そんなことをした手を出すのよ。」

差伸べた両手の甲に、片手宛交互に二回三回と鞭が炸裂し、私は
両手を宙に伸ばしたまま、身をもんでヒューヒュー云いました。

「分ったかい？ 今後そんなことするんじゃないのよ。今度そんな
ことしたら……」

「ハ、ハイ……。もう決して致しません。お赦し下さいまし。」

「よし。じゃこれで勘忍して上げる。痛かっただろうね。」

「ありがとうございます。」

「ああ、腕がだるくなったわ。お芳ちゃん、薬を鞭痕に塗っておや
り。」

漸く気の済んだ奥様は一時の腹立ちも鎮まって元のやさしい奥様
に立ち戻られたのでした。

アベック犯罪人

「お芳ちゃん、ちょっと三太の奴を連れて来てよ。用があるのよ。」
おすみさんが生垣の内から声を掛けました。奥様から鞭打ちの罰を受けてからと云うものは、家の外回りの仕事をする時には鼻繩をつけられて監視される事になって居ました。

「ハイ。こら、三太。来い!!」

グイと鼻繩をお芳ちゃんに引かれた私は、生垣の外側の溝から顔を起して家の中に曳かれて入りました。お客様があんまを頼まれたのですが、生憎都合がつかないので私に命じられた訳でした。

裏庭に面した客室の中には余り美人でありませんが男好きする顔立の婦人が座蒲団の上に寝そべて居ました。年の頃は三十七八で、備付のではなく自分で持参したらしい派手な浴衣を崩して着て錆朱の細帯を締め煙草を吹かし乍ら、畳に顔をすり付ける私をジロリと見て連れて来たおすみさんにかすれた様な声で云いました。

「『錠』はよく嵌めてあるの？ 手も綺麗ね？」

「はあ、それはもう大丈夫でございますわ。」

「そうお。じゃ腰から始めて頂戴な。」

婦人客は灰皿を引寄せて腹這いになりました。

「じゃ、おっしゃる通りにやるんだよ。おや、足をよく洗っていないのね。いくら云ってもお前は……」

おすみさんは私の頭を小突いて立去りました。婦人客の体はよく脂肪がついてじんわりと柔かく、豊かな腰の辺りは薄い浴衣を通して指や掌がめり込む程です。

「もっと力を入れて、そうそう」

奥様から革鞭の罰を受けてから、ずっと二十日間ばかり『錠』を外して貰えませんでしたので、頭の芯がズキズキとし低く喘いで思わず力を入れ過ぎますと

「ウッ。痛いじゃないの？ 骨を打るつもりかい。」

起き直った婦人客は浴衣の袖からむっちりした手を振上げて私に激しいビンタを加えました。

「腰はもういいよ。肩を揉んで……」

女中が入って来て、お茶の盆を卓上におきました。

「熱いお茶をどうぞ」

「ありがと。」

「けど奥様。此の男、中々上手でしょ。私達もよくやらせますのでございますよ。お気に障る様なことがございましたら御遠慮なく叱ってやって下さいまし。失礼します。」

婦人客はお茶を啜り乍ら

「うちの人、独りでどこへ行ったのかしら？ おそいわね。私も一緒に行けばよかったわ。」

と独りごちました。

「アッ熱っ!! 熱いじゃないの。馬鹿!!」

気をつけて居たのですが、肩を揉む拍子に彼女の手の茶碗から熱いお茶が膝にこぼれたらしく婦人は大声を立てました。パツとひれ伏してお詫びする私のツルツルの頭に煙草の火が押しつけられ、悲鳴を挙げて身をよじる私の鼻環を左手でしっかりと持った彼女は、くわえた煙草をふかし続け乍ら右手で私の左肩をむき出しにしました。

「じっとしてるのよ。両手を後ろで組んで……」

鼻環を左右に強くねじられ上下に激しく動かされた私はひーひー悲鳴を挙げましたが、更に肩に近付く煙草の火を見て身もだえしてお赦しを乞いました。思わず腕を動かしますと、

「手は後に回してる様に云っただろ。そら」

左肩に当てられた火の熱さを私は脂汗を浮べて忍びました。

「分ったかい。今度は脚よ。」

彼女は座蒲団を枕に仰臥し、紫煙を吹上げました。

「浴衣の上からじゃなくて、じかに揉んでよ。もっと上の方の付根の辺りからの指の先迄ずうっとよ。フッフ、何故眼をつぶるのさ。何考えてるのか知らないけど、苦しそうな顔しないでよ。フッフ、どう？ 私の脚、割と恰好がよくて綺麗だろ。」

内側には所々にキスマークが薄赤く残って居り、私は苦痛に呻きましたが、婦人は下から見上げて冷笑を浮べて、私をからかうのでした。

襖が開いて一人の男が、次の間から入って来ました。

「おや、お帰んなさい。どこを歩き回ってたのさ？」

男は婦人より二つ三つは年下の様子でした。

「中々旅館がないのさ。旅行社で方々当って貰ったんだがね。」

と背広の上衣だけを脱いで放り出し、縁側のガラス障子をガラガラと開いて椅子に坐り込みます。疲れた様な顔つきでした。

「旅館で？ あ、もうここを出るの？ 未だいいじゃないの。」

「大事を取った方がいいよ。新聞に出ないからって、安心は出来ねえ。先ず半年程は様子を見ないと……」

男は私をジロリと見て口を噤みました。

「其の男は奴隷だな。」

「そうよ。あんた、そんな事云ってるけど、どこかで麻雀してたんだろ。度を過ぎると体に毒だよ。あーあ、お前もいいよ。出てお行き!!」

婦人は起き直って襟を裾を直し、大きな欠伸をして男を流し目で見上げました。

「馬鹿云えよ。知らない連中とやったって面白くもないからな。お、ちょっと待った。俺も一つやって貰うかな。何だか肩がこったよ。」

婦人が差出すお茶を一口啜った男が、浴衣に着替えようと椅子から立上った途端でした。廊下に面した扉が開く音が微かに聞えたと思った瞬間、次の間の入口の襖が、そして次には先刻男が少し閉め残して居た此の室の襖がさっと開け放たれました。黒っぽいタイトスカートの婦人を先頭にして眼つきの鋭い二人の男がずかずか入って来て客の男女はさっと顔色を変えました。

「山田三郎と田中とみ子だね？」

先頭の婦人の声が終らぬ中に、男は矢庭に身を翻して脱兎の如く縁側から庭に飛び下り、はだしのまま庭を横切って逃げ去りました。

「抜かったな。素早い奴だ。」

追おうとして直ぐ諦めた男が、舌打ちして室外に急いで立去りました。

「外にもいらっしゃるんでしょ？」

「居るのは居ますがね。まさかと思ってるだろうし二人じゃね、どうも……」

「けどあの恰好じゃ訳ないですわね。えーと、あんた、田中とみ子

「だろ？」

腰が抜けた様に坐り込んで喘いで居た婦人客は、少しは度胸が出て来たらしく

「黙って入って来たりして……あなた達一体何なのさ。扉に鍵かかってたでしょ？」

「私達は警察の者よ。兎も角あんた、田中とみ子だね？ 黙ってるなら、そうと認めるわよ。」

「……」

「田中雄作謀殺の容疑で逮捕します。ホラ逮捕状よ。」

「私、私知りませんわ。何の証拠が……」

婦人客は真青になって喘ぎました。

「うまく謀らんだけど、駄目よ。ホホホ。ともかく一緒に来るのよ。」

婦人刑事は肩に掛けたバッグから手錠を取り出し、婦人客はハッと腰を浮かせかけました。

「手錠かけるんじゃないよ。」

婦人刑事の左手が素早く動いて田中とみ子の右掌を掴んだと思うと、バシッと金属音が響いて右手首に手錠が嵌まって居ました。

「アッ、堪忍して……。ああ、お願いですから着替えて下さいませんか？」

浮かせかけた尻を再びべったりと畳についたとみ子は、婦人刑事を見上げて泣声で頼みましたが、

「ホホホ、どんな立派な着物に着替えるつもりか知らないけど、もう当分着なくても済むわよ。さ、立って……」

右手に嵌まった手錠を引張られてよろよろと立ち上ったとみ子は

虚脱した様な様子で左手首を、もう一個の環の方へ自ら近寄せました。金属音と共に両肩がガククリと落ちました。両手鎖を押えて腰縄をヒタリと打たれたとみ子は

「堪忍して……。堪忍して下さいまし……」

と身を揉んで啜り泣き、よろよろと崩おれかけましたが、手早く身体検査を終えた婦人刑事に激しく頬を平手打ちされて悲鳴を挙げました。両手の鉄環が触れ合ってガチガチ鳴ります。

「ヒーツ……。撲るなんて……」

「メソメソしてないで、さ、来るんだよ。」

私は隅の方で小さくなって坐って居ましたが、がっくりとうなだれた女が腰縄を取られて曳かれて行くのを見て、どんな悪い事をしたのにせよ、可哀想な気がしました。

「いやあ、お手柄お手柄。流石は名捜査課長だったお父上の娘さんですわい。亡くなったお父上もさぞお喜びでしょうて。」

それ迄黙って立って居た年配の刑事が大声で云いました。

「あら、そんなこと。未だ漸く一人前になりかかった所ですわ。この署の皆さんがお力添えして下さいったお陰です。」

「いやいや、ホシの所在を割出したカンなど、ほんとに大したもんですわい。これで遠方からわざわざ出張って来られた甲斐があったと云うものですな。」

「本当にいろいろと……。けど、男の方を逃がしちゃって……」

「ハハハ、あれは私共の責任ですよ。うっかりしてましたわい。しかしもう時間の問題ですて。」

縄尻を握った左手で、女の腰をグッと押した婦人刑事は誇らしげに

「さ、行くのよ」

と更に肩の辺りを突飛ばしました。

よろめいた女はしゃくり上げ乍ら、上体を思い切り前に屈めて両眼の涙を手の甲で拭い拭い次の間に消えました。

「あら！」

入口の辺りで奥様の息を呑む声が聞えました。

「男の方は逃げ出したんですってね？」

若い女中も二三人来て居るらしい様子です。

「あ、奥さんですな。此の女の浴衣はお宅のじゃありませんか？」

若しそうだったら直ぐお返ししますが……」

「うちのじゃありませんわ。持っていりましたんでしょ。ねえ奥様。」

「ええ。若しうちの浴衣だとしても返してなんか要りませんわ。それより、あの荷物なんか……？」

「ああ、後程押収しに来させますよ。」

人々の話声に混って、女の嗚咽の音が次第に遠くなりました。

「三太!! 何ボンヤリしてるの? 今のお客様の荷物を一まとめにお願いします。」

ほんやり片隅に坐ったままだった私は、不意に入って来られた奥様に叱りつけられました。

「あんなお客に泊まられちゃって、ほんとに迷惑だわ。新聞に出るだろうし店の名に関わるわ。」

奥様はいつになく不きげん極まる様子で室の中を見回し私の頭を小突いて当り散らかして立去りました。

そこらの物をトランクやスーツケースに詰め込んだり、風呂敷に包んだりして始末しておりますと、チョコレートボンボンが出て来

ました。

ここに来てからは、奥様や女中さん達から古くなった菓子等はしよつ中頂いて居ましたし、箱も半分以上空になって居りますので、軽い気持で四五個平げてしまいました。絶えて久しく口にしなければアルコール分が強烈に咽喉に灼きつききました。忽ち全身が火照って来て「しまった」と思いましたが、もうおそく暫くして又やって来られた奥様に見咎められてしまいました。

「もう済んだの? あら、お前、真赤な顔して……。まさか酔ってるんじゃないだろうね。どうしたの? あ矢張り酔ってるんだわ、あ!!」

ボンボン数個分のウィスキー位で、こんなに酔が回るとは全く意外でした。ありのままを申上げてお詫びしましたが、御きげんの悪い奥様はいつになく激しくお叱りになりました。

「お客様の物を黙って盗み喰いするなんて一体どう云う了見なの? うちじゃ物も碌に喰べさせてやって居ないとても云うのかい? 顔を上げて!!」

ピシリピシリと両頬にビンタが飛びました。私は酔でフラフラし乍ら、奥様がビンタなさり易い様に中腰になって上体を真直ぐに立てて存分に撲って頂きました。

漸くの事で一応は赦して頂けましたが、其の日はとうとう食事を与えて貰えず、物置部屋の柱に鼻を繋がれてしまいました。隣りの台所から漂って来る匂いに腹をグーグー鳴らせ乍ら横になった私は悲しく申訳なくてホロホロと泣いてしまったのでした。

(未完)

△アブ随筆▽

お 臍 あ れ こ れ

南 方 佳 男

さきごろ私の家に同居している高校二年生の末の妹が、私に内緒で妻にアブラ薬を貸してほしいといってきた事があった。

「どんな傷につけるの？」
と妻が訊くと

「どんな薬でもいいから……」
と傷の事をいわない。

私が親がわりをしているので、妻も私の手前、妹の傷くらいは知っておかなくては、としつこく訊ねたらしい。そうしたら

「もう貸してもらわんでもいい」
となかなか反抗的な口ぶり。そうまでい

うなら妻も追及できず
「ひどい怪我でなかったらいいのよ」

とペニシリン軟膏を貸してやった。

「たいしたことないのよ。こんなにピンピンしてるんやもん」

そういわれてみると、なるほど妹は元気そのもの。

「おかしな人。あんまりかくすけん、よけい心配するやないの」

と妻がたしなめると

「フフ……というのが恥かしかつたのや。だって、お臍のまわりが赤うなってヒリヒリするだけやもん」

ととうとう白状した。

セブン、ティーンの心理といおうか、こちらが疑わば口をつぐむくせに、気にしていな

いと知るとスラスラとしゃべった。

「きょうね。お友だちと、ガマン比べたのよ。お臍の上に氷の塊を置いて、誰が一番長い時間辛抱するかっていうゲームなの」

「マア、馬鹿げたこと」

「案外面白いのよ。ウチ、三十三秒もったのよ。内山さんは三十七秒で一番。ウチは二番やった」

電気冷蔵庫でつくった角砂糖のような氷を一個ずつ臍の上に置くのだそうだ。始めはツーンと頭から爪先まで「つめたい」と感じるようなつめたさだそうだが、ものの十秒もたたない間に痛さにかわってくるんだそうだ。「お灸なんぞすえたら傷跡が残るやろ。氷や

「つたら赤うなるだけで跡が残らんもんな。映画で天井からナイフをぶら下げて、その下に

寝るゲームなんかよりずっと安全やもん」

若い人たち年配では理解できない心理を持

っているものだ。まして女

の子なのだからあきれる。

この話をずっと後になっ

て妻から聞かされ

「二度とやらんように叱っ

ときなさい。何度もやったら

ら臍がシモヤケになるから

と脅しといたらい」

と表向きはあったが、私

は十代の健康な乙女たち大

勢が、そろって仰向けに寝

て、ピチピチ發育したお腹

を一齐につき出し、お臍の

上にチョココンと氷を乗せて

いるユウモラスな姿を想像

しながら、思わず笑ってし

まったものだ。

○

本誌にも近ごろ「お臍」

に関係した作品が多くなっ

た。

この種の作品は、私はよ

く読むのだが、読者全体の

何%の人が興味をもっているかは想像つかない。ただかなり多数の人が興味を持っているような気がする。

といったところで、興味の持ち方なのだが私自身も、まだどこに原因があるか悟り切れない。

私がお臍に興味をもつ理由は二つある。

一つは美的感覚からだ。お腹の中央のアクセサリーとしての美しさからだ。

もう一つは腹部加虐癖からである。臍を中心とした腹部をいじめてやりたい気持ちからである。

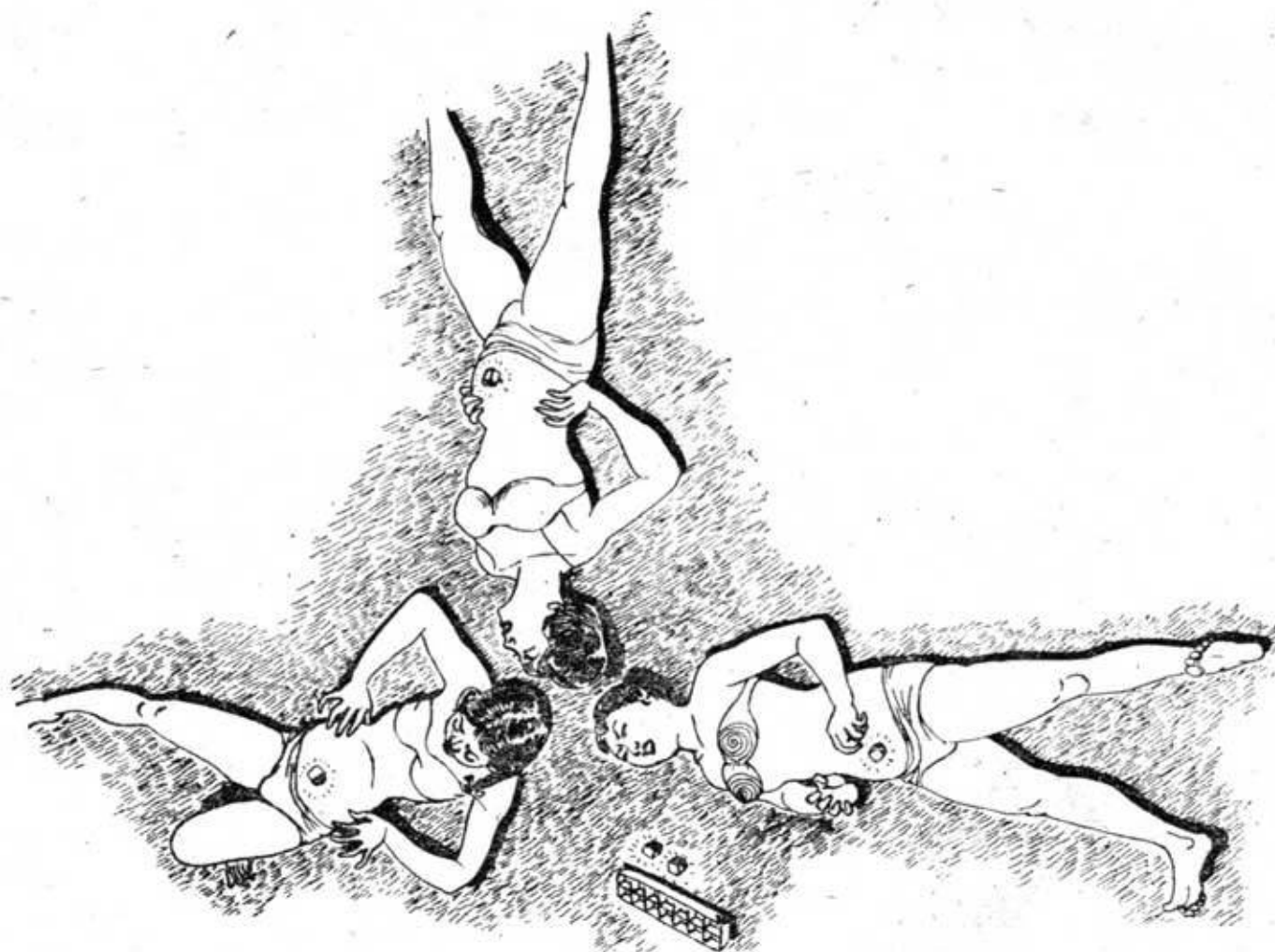
したがって私の場合は、女性の臍だけしか興味を持たない。

だから特定の女性、例えば「映画女優○○のお臍がみたい」とか、美しいモデル嬢のお腹をみて「このモデルを動けないように縛って、臍を中心にチクチクいじめてやりたい」などの考えを持つことがある。

私の臍への興味は、やはりサディズムから誕生していることに違いはない。

したがって、その点を満足させてくれる作品探しには自然熱中してしまうようだ。

これは私の提案なのだが、映画の緊縛速報のような形で、お臍観賞用の映画、雑誌の速



報通信があってもよいのではなからうか。

例えば東宝映画の「月給泥棒」IIおそろくこの文が誌上に出るころは封切されているだろうIIで司葉子がお臍の出た洋服を着る——といったニュースは、新聞や週刊紙でかなりPRされている。しかし私も、彼女がどんなお臍をしているのかまだ知らない。誰が早く彼女のお臍を見る機会のあった人が、早速これを速報すれば、私たちは見る気のなかった映画でも、新しく興味を持って見に行くようになる。

現に十月号で庄司美津彦氏が「若尾文子のお臍が『婚期』の中でクローズアップされ……」と書かれたのを読み、私はこれを見るため、目下セカンド館のスケジュールを調べている有様である。

○

速報の方法はいろいろあり、書き方も個人の好みで違ふだろうが、私の希望では、その型もくわしく説明してもらいたいと思う。

大きく深いお臍、浅く渦巻もわかるようなお臍、縦長いお臍、美人の顔とは不釣り合いな不愛想な形のお臍……いろいろと表現方法もあるかも知れない。

新聞、週刊紙、映画雑誌などから女優のお

臍に接するようなことも少なくない。私が名前を知っている女優のうち、お臍をみたことのある人は三十八人いる。しかしこれが全部映画でみたのではなく、雑誌その他で拝見した人が少なくない。

重山規子（東宝）は今春、週刊アサヒ芸能にのっていた舞台で踊っている写真でお臍を見た。浅く小さなあまり魅力のないお臍だった。

叶順子（大映）も同じような形。この人は作品名は忘れたが映画でストリッパーをやったとき見せているはずだ。（私はその映画をみていない）私はやはり週刊紙のグラビヤで見ている。

若林映子（東宝）北あけみ（東宝）江波杏子（大映）らはことしの水着姿撮影でビキニスタイルを写し、週刊紙や映画雑誌で紹介されているからことさら書くことはあるまい。

最近では、実話雑誌十月号で大勢の肉体派女優の水着写真を扱っている。

ほとんどの女優はスクリーンで対面しているが魚住純子（元新東宝）のお臍に接したのは初めてだ。彼女はたしか「女王蜂の復讐」でストリッパーをやっているはずだが、同映画を見ていないので私としては初めてだ。年

令が年令だから腹に脂肪がまわってあまり魅力を感じなかった。

近代映画十月号では星ナオミ（日活）のビキニ水着姿がある。映画ではあまり接していないが、彼女のセミヌードも多いらしい。若若しく魅力的だ。少し縦長で深くほどほどの大ききの美しい臍だ。

昔話になるが、中島そのみ（東宝）三条魔子II現在は江梨子に改名（大映）の二人も、スクリーンではお臍をみせていないが、雑誌「平凡」でビキニ姿をみせている。二人とも浅い臍。中島そのみは、そのフェイス、声と同様にお臍もマン円く渦巻がみえるほどで、ユーモラスである。三条はあのころまだ十六才。体が子供っぽく魅力に乏しかったが、いまなら美しい臍になっているのじゃあなからうか。

アメリカ帰りのセミ・ヌードダンサー宝みつ子も近く邦画での初めてお臍をみせる。松竹作品「集金旅行」。健康的な大きな臍の魅力をふりまくことだろう。

○

「お臍の渦巻はどちらの方向へ回っているだろう」——フト、こんなことを考えた事があった。

お臍の渦は時計の針の回り方と同じ右回り
だということだ。頭のつむじとも同じ回り
方である。

してみると臍曲りというのは、臍が左巻き
だということになる。

お臍の渦巻が右回りを知ったのは、先だ
って長男が生れた時だ。
病院の看護婦さんが、臍の緒をとるため、
まだ腹にぶら下っている長男の臍の緒をガ
ーゼに包んで左側にねじり、包帯をしていた。

限定版

特別号

案内

第一弾

緊縛フォト

アラベスク

一部 五百円
(略号「あらべ」)

本誌黄金時代のモデル嬢
の素晴らしい緊縛姿態ばかり
を集めた匂うが如くあでや
かなフォト集です。全巻二
十六項目、七十七葉に亘り
文字通り表紙から裏表紙に
至るまで、すべて、緊縛女
体のむせかえるようなム
ードで埋めました。まだお求
めにならないマニヤの方
は、是非コレクションの一
端にお備え下さるよう、お
すすめします。

第三弾

緊縛写真

グラフィック集

一部 五百円
(略号「グラフ」)

絹川文代、大塚啓子、愛
川悦子、桜井葉子、等の本
誌ベテラン・モデル嬢の活
躍による最も優秀にして魅
惑的な緊縛艶姿ばかり百十
五態を集録しましたグラフ
集です。誌上いっばいに盛
り上げる大型グラフィックの迫力
は、きつと皆さまを、この
妖しい縛りムードの中へ誘
い込むことでしょう。是非
皆さまの一見をおすすめい
たします。

第四弾

緊縛フォトと

緊縛画集帖

一部 五百円
(略号「別特」)

三十六葉に及ぶ四馬孝画
の傑作画集のケンランた
る開陳に加えて、本誌新人
モデルである四方清美、花
本京子、柳初子、山路ミ
子、館典子、熱海容子、前
本妙子、浜千代子、大井小
夜子、加茂良子等の新鮮な
悦虐姿態と、加賀利江子、
藤田節子、萩千恵子、桜井
葉子、絹川文代、大塚啓子
須川令子などの代表的ポー
ズを加えました。

こうしておくとは体の左側に臍の緒がとれて落
るのだそう。臍の緒と腹との接点を左にね
じっておくのだから、渦巻が時計の針と同じ
回り方となるわけだ。

これはほとんど臍の緒処理の定義となつて
いることらしいから、ほとんどの人のお臍は
右巻きといえると思う。

臍の形というものは、人間生れてから死ぬ
まで同じ形をとすとは限らないようだ。手
近い例をあげるようだが、私の妻などは長男
を生む前と後とで臍の形が変ってしまった。

以前は大きく深い臍だったが、いまではす
っかり浅い臍になっている。妊娠中にのびた
腹の皮が十分に縮まらないのかも知れない。

また自身の臍は反対に浅く縦長い形だった
が、最近は深く横広くなって、大きなマン円
い形となった。三、四年前までは十五貫くら
いだった体重が二十貫を越えたので、その分
だけ腹に脂肪がたまつた。腹の皮に余裕があ
ったのか妻のように肉付きと比例せず、むし
ろ臍の周囲の肉が増えてアナを深くしたよう
になった。

「臍占い」などというのも、この種の体調の
変化などを統計にとつて割り出したものだろ
うと想像する。

『懸賞告白』応募作品

刺^{いれ}青^{ずみ}恋^{れん}慕^ぼ

宮 島 悟 郎

誰にも話さず、ソツと胸の中にしまっておく、そんな話があるものです。

貴誌の皆様にはボクの此の気持が、分っていただけると思い、心に鞭打って拙い筆を執りました。

ボクは二十四才の中肉中背の青年です。容貌は飛び切り上等ではなく、醜い方でもありません。性質はどちらかといえば温和しい、内気な極く普通の青年を想像して下さい。

三男坊ではありますが、実家が裕福なので、会社に勤めている現在も、月々いくばくかの送金を受けています。横浜桜木町駅近くに、割合高級なアパートの一つを貸り受け、気儘

な独り暮らしを楽しんでおりました。

そう……去年の夏頃迄は独り暮らしだったのです。

ボクには唯一つだけ、人にいえない秘密がありました。他人の、それも男の肌彫られた刺青を見ないと、その晩はよく眠れないのです。

ほんとうは自分の肌に彫りたいのですが、特異体質のため、それが出来ないのです、その強い願望が他人の肌の刺青に対して、烈しく執着するのでしょうか？

風呂が好きよりも、そこで客の刺青を賞美したい一念から、銭湯には毎晩行きます。

あの辺の風呂屋は繁華街の中にある為か、固定客とフリの客が半々位の割合です。

顔見知りの客の、刺青が湯気にボツと生き返った様になり、身体の動きにつれて、変化するのを鑑賞するのが唯一の喜びでした。

フリの客の中に、胸や背や股に刺青があるのを発見した時の喜びは又格別です。色や図柄を喰い入る程みつめて興奮する気持は、とても筆では尽くせません。

唯、ボクが何時も残念に思うのは、二十代の青年達に本格的な刺青を彫っている者が余り見当らぬ事です。

若いイイ身体を眺め乍ら、その背中や腕に

刺青の色々な図柄を空想しながら、湯舟の中で独り悦に入っている事もありました。

若い人でも二の腕や股にハートとかトラップの模様を入れたのを見掛けますが、やはり日本古来の物の方が味わいがあります。

年配の方の中には、りっぱな彫り物が多く見られます。背中から腰、股にかけて、ほとんど総刺青をしたのは、さすがにリッパで、二色ぼかしの彫りの色など年を経た今も鮮かで、その肌に光沢があり、しわが無かったら、さぞ見事だろうと思わず溜息が出る事もあります。

日頃せっせと古本屋などを漁り、刺青について書物を色々と揃えました。その中で、大好きな図柄がありました。

それは腕から背・・・内股にかけての二色ぼかしの図柄でした。(ぼかしというのは柄の中まで隈なく彫り込んであるものです)

歌舞伎の「暫」というのを御存知でしょうか、巖のような男丈夫が、重い武器に身をかけたため、大見得を切っている図が背中に彫ってあります。

顔は朱と青で隈取った恐ろしい表情で、右手を高々とあげて鉄扇を振り上げています。その腕や、ふん張った両脚は巨根のようにた

くましく。威風は辺りをはらっています。

腕と背の上部には桜花の図案が、又腰から股にかけては雲と竜が彫ってありました。

ボクは未だ、それを彫っている実物の人間を見た事ありません。一生に一度でいいから、見たいと、その事は一番大きな夢でありました。

話は元に戻ります。去年の夏、その銭湯の湯舟に浸りながら、洗い場に背を向けている。四十年輩の見なれた男の刺青に見惚れて居りました。女装の賊、弁天小僧の絵でした。技術も仲々巧みで、常客の中では屈指の刺青です。

その時、目の前の蛇口の前に蹲って肩に湯を流している若い男が、刺青をしているのに気が付きました。ハッとして男をよく見ましたが新顔でした。

こちらからは横向きなので、腕と股の図柄だけ見えたが、桜花と雲と竜であり。夢にまで見たあの彫り物に似ていたのです。

僕は胸がドキドキし、あわてて、浴槽から出ると男の後を通る時、ソッと背中中に目を遣りました。驚くではありませんか、何時かの本に載っていたのと、そっくり同じ絵が生き生きとそこに彫られてあったのです。

暫くして、男は湯舟の方へ歩いて行きました。その後姿の何と美しかった事でしよう。

男にしては体毛が少なく餅肌と云いたいようなすべすべした白い肌が、汐風でこんがり焼けていました。身体は小柄の方ですが肉付きが良く、肉体労働をしている為か、腕や肩の辺りには豊かな筋肉が所々に盛り上って実にたくましい上体をしています。腹部は良く締って脇腹から下腹部にかけて、縄のような筋肉が走っているのが見えました。

尻は肥満してもいず、骨張ってもいず、二つの円みが歩くたびにプリプリと動いていました。ボクは風呂から上るばかりなのですが、どうしても此の儘帰れず、洗い場にぐずぐずしていたのです。何という偶然でしょう。青年は湯舟から出ると、スタスタと隣りの洗い場に坐りました。

「心此処に在らず」とは此の事を云うのでしよう。唯洗っている風を装って、チラチラと横目を使い、男の刺青にばかり気を取られて居りました。

小さなボクにどうしてその様な口が利けたのか今もわかりません。「見事な刺青だな」思わず声を掛けていました。

知らない男に声をかけられて、ムツとした

表情でしたが、ボクが刺青に大感心した様子が読み取れたのでしよう。十九の時に之れを彫ったなどと話し乍ら次第に打ちつけて来ました。

そして、とうとう背中まで流させて貰いました。人間誰でも賞められて悪い気はしません。まして入れ墨をする時の苦痛は大へんなものだと聞いています。それ丈に刺青に対して誇りと愛着を持つのでしよう。自分の子供のように思っているそれを賞められれば、背中立流させる位の気持を起すのは人情というものでしょう。

ボクはワクワクしながら丁寧に肩を流しました。紅にホテツた肌が一際艶を帯び、そこに彫られた人物が生き返った様に躍動します。鮮かな朱と青が肌に浮き上って、心をうばわれる美しさでした。

手で押すと弾き返すような肌は、その男のエネルギーを感じさせます。溢れ出る若さが力強い武者姿に如何にもマッチして、これ程に彫ってある絵と、彫られている身体とがぴったりと調和がとれているのは、今迄見た事がありませんでした。

風呂から一緒に上る頃は既に親しくなっておりました。男の職業は沖仲仕でした。

それ迄身体に気を奪われて容貌をよく見ませんでした。が、仲々キリリとした表情で、目が澄んでおり、笑うと白い歯が口元にのぞいて愛嬌があります。

沖仲仕の服装をみると小柄のせい、あの堂々たる刺青の貫録は無くなり、平凡な男に変わります。

会社員等で洋服を着た時はりっぱで、裸になると貧弱な人がありますが、その男の場合には反対に、裸になって初めて値打がわかるのです。こんなのを「男らしい男」と云うのでしょうか。

湯上りのビールは実に良いものです。屋台で焼き鳥をサカナに杯を交し、二人は親友になっっていました。

男の名前は加根男と云い、年齢は二十三才で、定まった住居は無く、転々と簡易旅館に宿泊しているのだそうです。ボクのアパートと一緒に暮そうと誘うと、最初はジョウダンと思ったのか笑っていましたが、真面目な話だと分って、心を動かし初めました。今晚知り合ったばかりの相手であり、仕事も生活もまるっきりちがうので、迷惑だと考えたのか、仲々決心しかねていたようですが、ボクの熱意に半分負けた形でとうとう承諾したの

です。

ボクの行為を皆様は無謀だと考えられますか？ ボク自身はすっかりその刺青男に心を奪われてしまっていました。

この儘別れたら、二度とあの彫り物を目にする事は出来ないかもしれない。理想の刺青を毎日眺められるのなら、どんな犠牲を払っても惜しくない。これは偽りのないその時の気持でした。

その夜から加根男とボクの生活が初まりました。

沖仲仕は朝は未明に出掛け、夕方早く終わります。ボクが会社から戻る迄に、それ迄使用していなかったガス風呂を加根男は湧かして待っています。

二人で肩を流し合ったり、フザケてハシヤイだり浴槽で過すのは楽しく。仕事のつらい事も忘れる程です。

風呂から出ると、六尺褌を加根男に締めてやります。ボクは前からの愛用者ですが、加根男はサル又を用いていたのを止めさせ、毎晩風呂の後でボクが締めてやる事に決めました。股間をキリリと締め上げ、よじる様に細く腰で結び上げると、真白い褌が小麦色の肌によく合って、勇ましい彫り物と一体となり

これ程似合う服装は外には考えられない程です。

二人はそのままの姿で夜を過します。ボク

が夕飯を用意すると、今まで一品料理ばかりに馴染んでいたの、喜んで食べるのですがそれを眺めているとボクの食慾も旺んになります。独り身には味わえぬ家庭団らんに似たものをボク達も持つようになりました。

部屋代はボクが持ち食事代を少しだけ貰うことにしました。

沖仲仕は日当で、相当の稼ぎになりますが雨の日は働けないので、毎日いくらかづつ預り、何かの用意に貯える事に決めました。口数が少ない男なので、過去の事は語りませんが、色々躓いた人生を

経て来たのは事実で、もう少し落着いたら、車の運転を習得したいなどと云って、励みを

出して、毎日働いて居りました。出して、毎日働いて居りました。

した。

「未だ気持が、そこ迄行っ居ないから」。

こんな風な返事でお茶を濁しましたが、内心ギクリと致しました。これ迄に、女を欲しいと切実に思った事がないと気付いたのです。刺青の肌に熱中していても、男色には興味が無いと思っていました。加根男と暮す中に、その考えがグラついて来ました。

刺青だけに執着していたのが、何時の間にか、身体全部イヤ心までも惚れ込んでしまっていました。急にガス風呂を湧かすようにしたのも、実を云えば、人数が二人になったという理由からでは無く。加根男の身体を誰にも見せたくなく独占慾の現れでした。



× × ×
こんな事もありました。

アパートは二部屋ですが、洋間が一つ有るので、四畳半に休みます。大層暑くね苦しい夜で二人は六尺褥一つでした。

眠っている加根男がボクの方へ転げて来ると、右足を股間に乗せかけて来ました。俯付せの形で右腕も腹の上に投げかけています。

身体半分がボクの上にかぶさった様なねぞうでした。電灯をつけていたので、背中や腕の刺青が妖しい光を放っています。ボクは何故か興奮して動悸が烈しくなってきたのを覚えしました。加根男が目を覚まして気付きはしないかと、喜びと不安の入り混った妙な気分でした。

数分の後、向うへころがつていきました。が、その後でも尚先刻接触した部分の痛みに近い感触を想い起して、気も狂わんばかりの興奮の中におりました。

× × ×
何時しか夏も終り、街路樹も黄ばみ初め、夜は虫の声が耳をうつ候になっていました。その日は会社の仕事が忙しく、夜半過ぎまで残業する予定で会社に出掛けました。

ところが思ったより早目に片付いて、アパ

ートの玄関に立った時は十時過ぎだったでしょうか。

洋間には何時もの加根男の姿が見えず、襖の向うで、人の気配を感じました。思わず襖に手を掛けた時、加根男の何か云う声と、鞭の音と女の悲鳴を聞いたのです。

細目に開けた襖をその儘、ボクは中を覗き見していました。

荒い息をしながら加根男は褥一つの恰好で女を鞭打っています。こちらに背を向けた仁王のような姿、今晚は何か異様な殺気を含んでいます。

革の鞭は女の背やももを、ピシピシと打っています。

縮緬の派手な着物と金糸を鏤めた帯が乱暴に部屋の隅に投げ出されていました。加根男が無理に脱がせたのでしょう。

ピンクの長繻絆の衿元は大きくはだけ、豊かな乳房が覗いていました。

二十五、六でしうか粹な作りで、髪は洋風だが色白で面長の風な感じでした。

加根男の身体が鞭の上下で烈しく動く、刺青が魔性の生き物のように恐ろしく見えます。背中や腰は汗でねっとりぬれ、朱と青の所々が銀に光っておりました。

最初の間は、おそろしい光景に身も竦み心も凍る思いでしたが、やや落着くと、二人がボクの帰宅を気付かぬのを幸に、むさばる様に眺めていました。

女が鞭の痛みに耐えかねて、声を立て、身もだえる姿は何とも云えず艶かしく、加根男は人が変わった様に獐犷な目つきで、此の獲物に向って容赦なく責めを加えています。

女は悶絶寸前になる程身体を責められながら、逃げ出そうとしないのは矢張り加根男に心を奪われているからだと思いました。

アパートをそっと抜け出すと、秋風の吹きぬける街をあてもなく歩きました。あの光景を思い返すと、嫉妬の炎がむらむらと燃え初め、苦い大きな塊が胸元に支えているように、何度も大声で嘔鳴りました。どの位時間が過ぎたのでしょうか。気持も収まり、女も既に帰ったろうと、家路につきました。

矢張り女は居ず、加根男は軀をかいて眠っていました。満足し切ったその姿を眺めている中に、先刻の嫉妬心が又もや胸を突き上げて来て、理性を失い枕元の鞭を握って、無我夢中にピシピシと彼の背を打擲しておりました。

痛みにハッと目を覚ましたものの咄嗟に事

情がのみ込めず、途惑っていた瞬時の後、はげしい憎悪の形相で、胸倉に飛び込んでくると、物も云わず右腕を捻り上げ鞭は加根男の手に奪い返されておりました。小柄でも猛獣の如き腕力には所詮かないません。

その上ボクの身体は逞しい加根男の腰に引っかけられて、車投げでイヤという程畳に投げつけられ数秒間息もつけない有様でした。

その間に身ぐるみ剥がされ禪一つで後手に縛り上げられてしまっていました。

先刻の女と同じ鞭責めに会ってボクは無念の気持で胸が張り裂ける様でした。

之れが肉親のように情をかけた人間の為すべき仕打ちでしょうか。

寧猛な鞭は身体中隈なくびしびしと打ち込んで来ます。骨の芯に痺れる痛みを堪ええ、ボクはうめいていました。

所々の肌が裂け血が流れ、それが汗に混ってヒリヒリと灼ける痛みに叩いている中に次第に苦痛が遠のき、頭がボヤけ、身体が宙に浮く様に感じている中、突然恍惚の境地に踏み込んで居ました。

どの位の時間が経ったのでしょうか。

気が付くと、ボクの身体は楽になっていました。目の前に加根男が神妙に正坐していま

す。取り乱して乱暴を加えたのを詫びているのでした。眠っているところを打たれたので、カッとしたと云うのです。然し恩を受けたボクにこの様な背信行為をしたので、これ以上厄介は受けられないので、お暇したいと云うのでした。

ボクは、先刻女を責めているのを見た話し、あの女と手を切るならば、この儘一緒に暮らしたいと希望を云ったのです。

加根男の話によると、女は港町の酒場に勤めており、少し前に知り合い。お互いに責めが好きなので交際しているが、何時でも手は切ると云うのでした。加根男は、サドの傾向が強く、充分に女を鞭打たないと満足出来ない性質なのです。

然し男を鞭で打つ興味はなく、先刻の乱暴は突発的な感情の発作で、あんな行為は今後決してしないと誓いました。

長縄絆の女と刺青の男の鞭打ちの幻想的なシーンは今もボクの脳裏に去来します。

ボクが加根男に打たれている時も、フッとあの女になって責められている錯覚を覚えた程でした。ボク達二人にこんなに深く結びついてしまったあの女から、どうして容易に手を切る事が出来るでしょうか？

而しその夜は、女についての事はその儘にしておきました。加根男の決心を翻がえす為に、夜明け迄ボクは話し続けました。

とうとう加根男が続けて此処に住む事を約束して呉れた時、僕は天にも昇る心地だったので。その時、嬉しさのあまり、六尺禪の加根男の身体に抱きつきたい欲望を抑えるのに苦労しました。

同性愛の経験のない方は、此の話を読んで変に思われるかも知れません。男同志の愛情も、深くなれば、異性のそれと何ら変わりません。正常な男が心底女に惚れて感ずる愛情や憎しみ、恋故の苦悩を想像していただければ、それがそっくりその儘、ボクの加根男に対する気持なのです。

ボクが今まで誰にも話したことのない、自分の胸のなかにソツとしまっておいた話なのです。誰も信じてくれないかも知れません。

しかし、現実の世の中には、信じがたいと思われることにも、本当のことがあるものです。それがボクの今の話なのです。

夜も大変更けて参りました。その後の出来事は、又次の機会に話させていただくとして、一先ず筆を置きます。



海で拾った 空の浣腸器

渡 部 か ね

盛夏の一日、私は東京の熱暑をさけ、外房の海に遊びました。

早目に新鮮な魚料理の数々に舌つつみをうった私は浜辺へ散歩に出ました。

西果や夕陽はの丘にかくれようとし、太平洋に面した九十九里浜には白い波がくだけるばかり、日中、あれほどの海水浴客でにぎわった浜も、今は散策する人影もまれに、寄せては返す波の音のみでした。

広い砂浜には、打ちあげられた海藻が、波

打ち際から十米ぐらいの所に、波打ち際と平行にくねくねと一線をなしています。満潮の時には、恐らくここまで水がくるのでしょう。あてどもなく、砂をふみしめる私の足下にピンクに光る小さな物体を認めた時の驚き、おお、それは私の常に愛撫する軽便浣腸器の空ではありませんか。

思わず私はそれを拾い上げようとして、ハッとなりました。あたりに誰にも見られてはいないかしら、そっとみまわしましたが、あたりには、人影もない、急いで私は悪い事をする人のように、その空の軽便浣腸器を拾いあげました。

掌にすっぽり入ってしまう小さなピンクの浣腸器、それにはアイデアル浣腸Ⅱ大阪府布施市とありました。

先端には小さな穴があけられ、そこには砂が黒くつまっていました。誰が用いたのでしょうか。いやいやをする子供を、お母さんがおさえつけてした浣腸かしら、便秘になやむうら若い乙女が、人しれずトイレで用いたのかもしれない。或は私のようなマニアの愛玩したものかもしれない。

何れにせよ、私にとっては、誰の肛門にふれたものであっても、もうそれは不潔といっ

た観念をこえたものなのです。身近な、それはそれは親しい愛玩物なのです。

どこからどうしてこの海岸に流れついたのでしょうか。そっと押してみたら、海水が一滴二滴ジクジクとしたたりおちました。

もうポリエチレン特有の弾力と光沢が可成り失われています。恐らく、トイレから下水から川、川から海へと流れ流れて、ここ九十九里の浜に打ちあげられるまでには長い長い旅をしてきたことでしょう。色あせた空の浣腸器、私は限らない愛惜の情を感じたのでした。

その浣腸器をにぎりしめ、三步、五歩と歩を進めた私は、又、足下に別の浣腸器を認めた驚き、さっきのは海藻の影に、今度は、半分かけた下駄の脇にころがっていました。

二つもあった、その驚きは、そのすぐ先のマヨネーズの空と並んで三つ目の浣腸器で、驚きから今度は大いなる期待に発展したのです。

よし注意してさがしてみよう、これです。二つ目は十グラム入りの子供用イチジク浣腸でした。三つ目は二十グラム入りの大人用イチジク浣腸でした。ふとみると、普通、浣腸器は両端の窪みに穴をあけるのに、これは先

端に穴があけてあります。恐らく、あまり軽便浣腸を使ったことのない方と思われるました。

こうなると私はもうじつとして居られなくなりまして。あたりに人気のない夕刻を幸いに、打ち上げられた海藻、屑、の線をたどって、空の浣腸器を拾い歩いたのでした。

そのあることあること、海岸線二キロ位の間になんと十二個の空の浣腸器を拾い集めたのです。

やはり一番名前の通ったイチジク浣腸が最も多く八個を数え、アイデアル浣腸が二個、オロナイン浣腸が一個、中に、私のはじめてみた明治浣腸Ⅱ東京神田Ⅱというのが一個あったのは、マニアとして大変な喜びでした。

それに先端の穴の明け方が夫々違うのも、用いた人が何となくしのばれて面白うございました。

きちんと両面にあけている人は、軽便浣腸を使いなれている人でしょう。片方だけの人ははじめての人か、或は子供の病気がひきつけないのであわてたのかも知れません。先端に明けている人は、注意書もよまないあわて者かも知れません。そんな想像をするだけでも楽しいことでした。

拾った順に、記念にもなる事と思って一応表にしてみました。

昭和三十七年七月二八日 千葉九十九里浜

1.	アイデアル	20瓦入	先端に穴
2.	イチジク	10瓦入	両面
3.	イチジク	20瓦入	先端
4.	オロナイン	20瓦入	片面
5.	イチジク	10瓦入	片面(片面不完全)
6.	イチジク	10瓦入	両面
7.	イチジク	20瓦入	先端及片面
8.	明治	10瓦入	両面
9.	イチジク	10瓦入	両面
10.	アイデアル	10瓦入	先端
11.	イチジク	10瓦入	両面
12.	イチジク	10瓦入	両面

となります。私達マニアにとっては、軽便浣腸といえは二十グラムが当り前と思っていた所、子供用の十グラム入りが案外多いのにも驚かされました。たった十グラムではたとえ子供でも、あまりききめがないでしょう。

空の浣腸器ですっかりポケットがふくらんでしまった私は宿に帰るなり、愛用のオリンパスで撮影したのが同封の写真です。あまり小さくて分りにくいかも知れませんが、

素人の写真、お笑覧下さいませ。撮影設備もない旅館の事故、調度まで入ってしまっただけは、ずかしいものでございます。

長年、毎年、どこかの海に出かける私ですが、こんな素晴らしい経験は実ははじめてでした。丁度九十九里が東京と近い関係もあって、然も何か潮流との関係、或は地元の河川との関係か、何故この浜に、こんなに軽便浣腸が流れついたのか分りません。

でも、潮の関係でしょう、満潮にのってか波打際と丁度平行に、海藻と共に、古下駄、ジュースのポリエチ袋、ポリエチのシャンプーの空、マヨネーズの空、等が数多く、一列に並んで打ちあげられているのを見ると、中に空気を含んだ空の軽便浣腸が打ちあげられるのも、あながち不思議ではないと思われました。

宿に帰ってから、私は夜の更けるのも忘れて、今集めて来た空の軽便浣腸の数々をもて遊ぶのでした。

又、来年も、必ずこの海にこよう、そして一年の間に、又いくつか打ちあげられるに相違ない空の浣腸器を集めよう、こんな事を考えている中に、私は深いねむりに落ちたことでした。

映画時評

松竹

『切腹』に就いて

須藤 律 夫

松竹は、目下上映中の『切腹』に『ハラキリ』と言う題名をつけ、世界各国に向けて輸出する為め宣伝に大奮闘と言う。斜陽産業と言われている映画界は、三十三年の動員数十一億をピークとして、最近の一年略々六億と半減し、今年下期から漸く減退の歩みが止ったかに見えるが、果して海外市場の開拓が成るかどうか、それは兎に角この映画『切腹』に関する各紙の批評をとり纏めてみよう。

○

描写は重厚で強烈

あと味がスッキリしない(報知)

小林正樹監督の時代劇と言う丈でも話題だが、黒沢明に対抗しようとする強烈重厚な描

写で押しまくっている点でも、大評判が予想される力作である。原作は滝口康彦の小説『異聞浪人記』脚本は橋本忍。嘉永七年の中秋、江戸の井伊家上屋敷に芸州福島浪人津雲半四郎(仲代達矢)が、食うに困って切腹し度いから玄關先を訪れる場面から始まる。面接した家老(三国連太郎)は、切腹を口実に金品を恵んで貰う連中がふえて困ると、最近の一例を語る。見せしめの為め若い浪人(石浜朗)を残酷に切腹させた話である。平然と切腹の用意をととのえた半四郎は介錯人に井伊家の剣客(丹波哲郎)を指名するが、出勤していない。そこで第二、第三の人物を指名するが、その二人も欠勤。彼等を待つ間、半四郎は身の上を語り始める。切腹させられ

た若い浪人は半四郎の娘(岩下志麻)の夫で、重病の妻子を医者に診察させる金がないので、切腹ブームにあやかろうとして失敗、半四郎は井伊家の残忍な処置を怒って乗り込んで来たという次第。

切腹なるものを通じて武士とその背後の封建思想を皮肉ったこの内容は面白い。が、映画としては『小味なもの』を『力んだ大作』にしすぎた感じが強い。ナラタージュ形式は興味をひきたてるに適切な話術ではあるが、この作品の場合は飛躍性がなく、予想出来る展開なので、意外な面白さがない。主人公半四郎の行動が正義に見えないのも損で、観客は誰の味方をしていいのか戸惑う。勿論登場する武士全部を否定するのが意図であろう

が、あと味はよくない。

小林監督は若い浪人が竹光で無理に切腹する場面、その他の血みどろなリアリズム描写で強烈なショックを作り出しているが、日本人の筆者が見てもツライ。半四郎が丹波外二名と順々に対決する場面が冴えないのは、剣劇の快味とリアリズムの間で迷った為めと推理する。(双葉十三郎)

武士道の悲劇「切腹」

小林監督重厚な初の時代劇

(毎日)

寛永の初め、失業浪人が巷に溢れていた頃食いつめた浪人達の間で「門前寸借」と言うのがはやった。大名屋敷の玄関先で切腹すると見せかけ、その断わり料に幾らかの金をせしめる、と言う一種のタカリの行為だ。それをにがにがしく思っていた井伊家の家老は、或る日、門前に来た若い浪人に強引に切腹させた。それから数日後、今度は津雲半四郎と言う中年の浪人が、同じ用事でやって来た。(中略) ハラキリが武士道にとって、名誉ある行為とされていた時代の話だが、その武士道と言うものが、どの様に人間性を押し殺していたか。映画はテーマの焦点をそこに絞っ

て、切腹をめぐる武士の悲劇を描き出して見せる。井伊家の家老や剣客達によって、竹光で詰め腹を切らされた若い浪人は、実はこの半四郎の娘のムコ、病気の妻子をかかえ、せっば詰っての「門前拝借」だったのだが、非情な井伊家の処置によって殺された。その抗議にと乗り出した半四郎が、切腹を前にしての家老との対決で、事の次第を明るみに出す。

(中略) 全編を通じて重厚で、密度の高い画面(撮影、宮島義勇)が、この浪人一家の悲劇を印象的に描き出し、武士道への鋭い批判を投げかけている。またラストの大殺陣は、日本映画としては珍らしいチャンバラ・リアリズム。半四郎が剣客彦九郎と白刃で渡り合う決斗シーンと共に、この映画の見どころだ。但し若い浪人の切腹場面はリアリズムの度がすぎた。(草壁久四郎)

演出、演技に厚み

「切腹」II 松竹作品 (スポ・ニチ)

今日では「サムライ精神」を美化して考える向きが多い。切腹は名誉を重んずるサムライのシンボルとさえなっているが、之は決してそうではなかった筈だ……と言う認識に立って作られた時代劇である。(中略)……切

腹シーン、殺陣場面は『椿三十郎』の三船敏郎、仲代の決斗シーン以上の迫力。陰惨すぎる気もするが、ショー化した時代劇などよりはるか、真実感があって、話題になろう。求女や半四郎らが浪人になり生活の基盤を失ったばかりに、サムライの面目を保てなくなるそのあたりが、もう一つ描き足りないのが惜しいが、今日にもつながるテーマをとらえ、サムライの人間性に鋭い目を向けたみごたえのある作品だ。(村田達郎)

外人のみた「切腹」

ミカエル、ロンバルディ

(米人演劇評論家) (報知)

「切腹は武士道の味気なさを皮肉ったものだが、余りにも暗すぎる。見る者を楽しませると言う映画の根本的な要素を忘れて仕舞っているのではなからうか。一つ一つの場面に凝った努力は認めるが、小林監督は黒沢映画に對抗して、余りに「大上段」にふりかぶりすぎた。封建制への批判を汗みどろになって主張しているが、まるでカラ振りに終わっている。こう言うものは、外国人には理解に苦しむし、退屈する。何故なら黒沢作品でも『用心棒』や『椿三十郎』になると外国人はツバ

をのみ込み乍らも退屈しているからだ。日本の映画が外国市場に伸びて行く為めには、飽く迄も共通の人間的なテーマがなければいけない。同じ封建制の武士道を皮肉った作品でも、現在歌舞伎で上演されている『研辰の討たれ』などは、コメディ一乍ら、あだ討の空虚さを見事に出して、作者と観客が一体となって『あっ』と目を見はるような瞬間がある。

る。すべての娯楽芸術は、こう言うものを忘れてはならない。

以上目についたまま、紙数の都合で筆者の意見は他日に譲る事とするが、この外にも週刊現代九月三十日号には批評のあと、この映画の採点と傾向性？とが載っていた。曰く「採点」小林監督の演出は独り相撲的で82

点、仲代達矢、統一感がなく矢張り82点、そして末尾には「向き」切腹マニア向きとあった。蓋し之は男女年令を問わず世の中には、所謂「切腹マニア」なるものが多数存在する事を肯定、示唆するものであろうか？或は単なる諧謔、揶揄なのであろうか？その選択は読者に委ねる事としよう。

(一九六二、九、二三)

女体切腹の構想

保険勧誘員の腹切 扇 芝

結婚後一年、夫に死別したうら若き未亡人が生活のために保険の外交員となる。

ようやく今月も責任額だけを契約し、最後の金額の七十万円を小切手に切ってもらい、ハンドバッグに収めて挨拶もそこそこに帰途についた。

夕暮迫る郊外の山道を歩いている未亡人。折から一台の自家用車が通りかかり、よけようとした彼女の前に停り、バラバラと三人の

屈強な男がとび出し、驚く彼女を抱えるようにして車につれ込む。

手早く猿ぐつわをかますと、声を立てるすべも知らないで、ぐったりとしている彼女を座席の下へ押さえ込み、薄暗くなった山道をひた走りに走ってゆく。山峡の空家に連れ込まれた彼女は、七十万円を入れたハンドバッグは勿論のこと、持物一切を奪われてしまう。そして、着物も帯も引き剥がされて、長襦

袢一枚にされた彼女は、傍らの物置小屋の中へ荒縄で縛られた無惨な姿でほうり込まれてしまう。三人の男たちは、車座になって、誰が第一番に女を物にするか、丁半バクチをはじめ。男たちは持参のウイスキーを口にしなから、何やら声高に争って勝負に熱中している。

疲れにうつらうつらしていた彼女が、ふと気がついた時には、一人の男がニヤニヤ笑いながら彼女に短刀を擬して、自由になれと脅した。きつと、この男が勝負に勝って一番先に彼女を手に入れることになったのだらう。覚悟をきめた彼女は、言うことをきくから縄を解いてくれと頼んだ。男は酔った足をフラフラさせながら、彼女の背後にまわると、短刀で縄を切った。そして、彼女の首へ手を

かけようとしたが、縄の解けた未亡人は、するりと身体をかわしたので男は空をつかんで土間へころがった。その拍手に手にした短刀をころりと落してしまった。

操を守るのは、この時とばかり彼女は早く短刀を拾い、男の胸めがけて柄も通れと突き刺した。それからもう無我夢中でところ嫌わず刺しまくり突きまくった。

隣をのぞくと二人の男は、今の騒ぎも知らず、ウイスキーに酔って口から涎をたらしてぐうぐう眠っている。そっと空家を抜け出し

た彼女は、近くの川原へ出て腰巻もはずして汚れた身体を洗いきよめ、草の上に長襦袢と腰巻を敷いて端座し、潔く自害をしようと決心する。

折柄、十五夜の月は明るく川原を照らし、二十三才の若い未亡人の死を白々と浮き上らしている。全裸のままの彼女は、ついさっき男の鮮血を吸った短刀を擬し、むっちりとした肉のついた臍の下へ、ずぶりとばかり突き立てた。激痛に思わず洩らす「うっ」という呻めき声。健気にも身をもって操を守った彼女は

今は、自分で自分の下腹をかき切つて、亡き夫のもとへ行こうというのである。

そのまま左の脇腹から、じりじりと短刀を右へ引いて一文字にさばいてゆく。

そよそよと川原のススキが秋風になびいて爽やかな中秋名月の夜である。

る。

夜目に白い豊満な未亡人の全裸の姿、右手にした短刀が深々と脇腹に突き立てられ、鮮血が太股から膝へしたたり落ちる。気丈夫な彼女は尚も真一文字に右脇腹へと切りさばいてゆく。下腹は一面からくれない。

『私の潔白は誰よりも地下の夫が知ってくれるだろう。手籠にされようとして、自分の身を守るために一人の男を殺してしまった。これで亡き夫への操は守ることが出来たが、殺人犯としての自分は生きていることが出来ない。今はもう、潔く、腹を切りさばいて独り静かに死んで行こう』

彼女はそう独り言を言って、自分に言いかけると、最後の氣力をふりしぼって、右脇腹に達した短刀を肋骨の下まで切り上げた。

「う、ううう、うむ」

激痛が全身をつつ走ったが、彼女の気はまだ確かだった。しかし、次第にうすれゆく貧血状態の恍惚境の中で、豊満な肉体の自分が全裸のままで、切腹自殺している屍体が発見されたときの光景を想像していた。

身に一糸もまとわぬ川原の屍体は、きっと耳目を衝動さすに違いない。彼女はそのことに一つの期待を抱いて失神した。



マゾ芸術考

女性男装管見

田島直士

若くて美しい女性が男装して登場するのは、洋の東西を通じて、文学、映画、美術などに、多くの例があり、共通の現象のようである。殊に泰平の世がつづくほど、こうした倒錯は増加してくるものだろう。

古今の文学には、いろいろな男装女性の例があるが、私はここで特に個人的な好みから乗馬服姿及びそれに準じるものを挙げてみたい。私個人の考えでは、女性の一番美しい姿は乗馬服及びそれに準じた姿であると思うからである。

まず、私がこうした女性の理想と考えるのは、テオフィル・ゴージェイエ作の「モーパン

嬢」の同名女主人公である。

モーパン嬢は若くて美しい女性だが、世の男性を知りつくすためには、自らも男の姿になって男性に立ち交わなくてはならないと考へ、剣術、馬術をおさめた上に、ある夜騎士に姿をかえて冒険に旅立つのだ。

× × ×

あたしは心も萎えるこのような感動から逃れるために馬に拍車を入れました。……馬はいきなり立って走りました。髪はほとんど真直ぐに後へなびき、マントも、まるで翼が石でできているように、水平にひろがりました。……すると、銀のように澄んだやさ

しい声があたしの耳をうちました。

「マドレーヌ、マドレーヌ、こんなに速くどこへいらっしゃるのよ。あたしはあんたの乙女時代よ、……だけど、あんたはなぜ長靴なんかはいてるの、マドレーヌ、あんたの足はずい分綺麗だったはずよ。それなのに、長靴とズボンと羽根飾のついた大きなお帽子、まるで戦争に行く騎士みたいだわ。なぜそんなに長い剣をぶらさげているの。腿に当って痛いでしょうに、ほんとに妙な身装ねえ」
「あんた、こわいのなら家へお帰りなさい。そしてあたしの花に水をやりたり、鳩の世話をしたりしていなさいよ。だけど、あんたの

考えは間違ってるわよ、こういう上等な羅紗の服を着ている方が、あんたの薄物やリンネルよりも、ずっと安全なのよ。長靴をはいていれば、あたしが綺麗な足をしているのを人に見られないでしょうし、劔は身を衛るためだし、帽子の上にひらひらしている羽根は、あたしの耳に贗物の恋歌をうたいに来る鶯をおどかすためのよ」(田辺貞之助訳)

こうして颯爽と男性に変身したモーパン嬢は、ある館の若い娘から熾烈に愛され結婚の申込みまで受ける。当然のことながら断ったことから、その娘の兄の騎士と心ならずも決斗をするが、これを倒して、最後に彼女を女と見破った詩人に一夜身をまかせたのち、再び冒険の旅に立ってゆくという筋で、いたるところ、美しいエロチシズムがちりばめられ

ている。

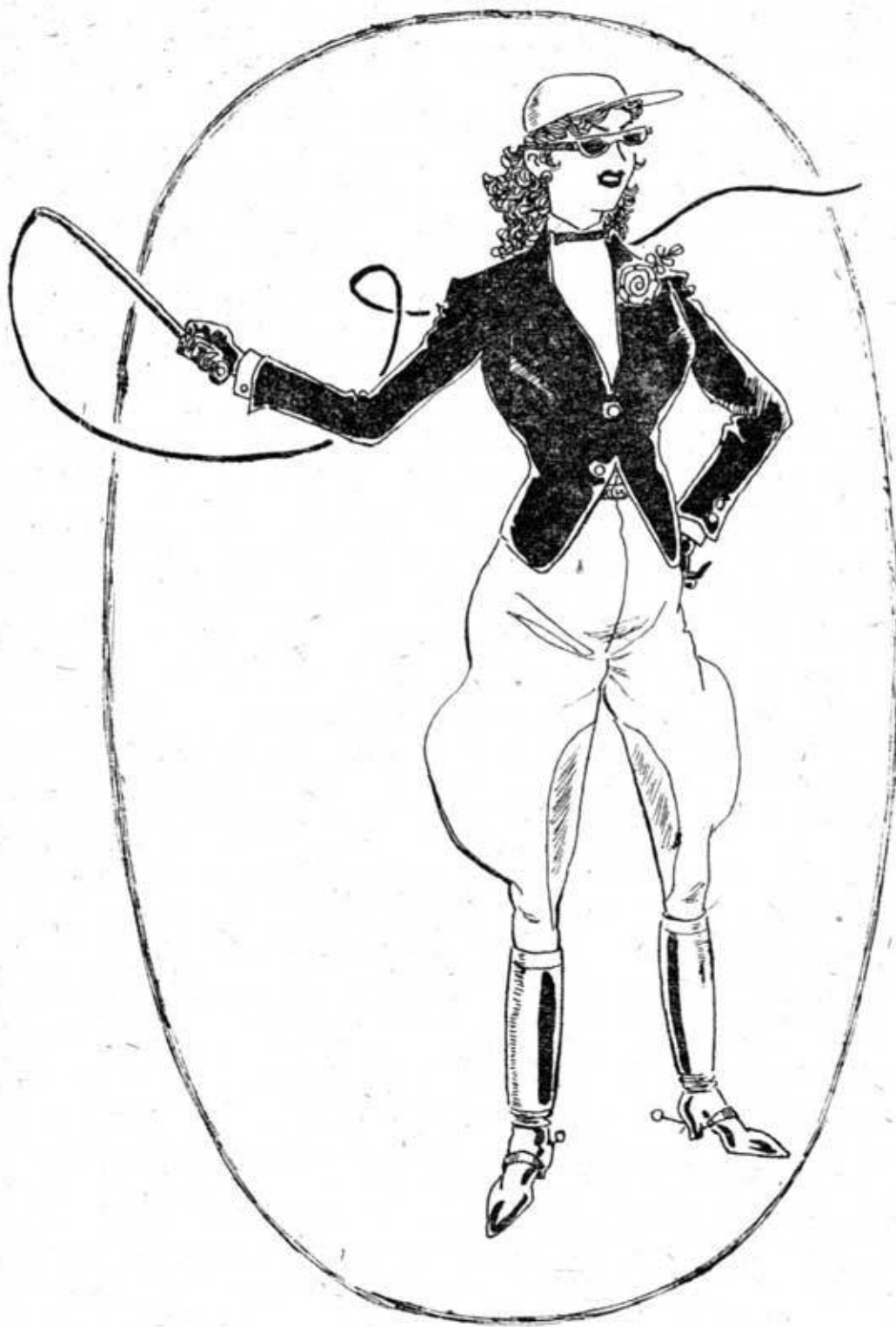
この舞台は、しなやかな女性が男装を容易に出来る十七世紀にとつてあるが、実際のモデルがあつたようである。

ラファディオ・ハーンの「東西文学評論」中の「女劔客」等によって、これを見ると彼女はアルマニヤック伯爵の秘書の子で、セラヌという劔術の師匠につき、細劔を振うことを身につけ、それによって身をたてていたが、歌手として舞台に立つことを思い立ち、かなりの成功をした。

彼女は「モーパン嬢」と同じく平常から男装していたが、顔のやさしさ、胸のふくらみなど、女らしさをどうしてもかくせず、腕自慢の男が大丈夫と思って、ちよいちよいからかった。しかし大丈夫だったためしはなかった。のみならず、誰も相手にしない時は、彼女から喧嘩を売った。

或る日、三人の脚本家を大勢の前で痛烈に侮辱した。案の定、激怒した三人の男に、彼女は思う壺とばかり叫んだ。

「あんたたち、あたしが気のすむようにしてあげますわ、一人一人かかって来てもいいし三人束になって来てもいいことよ。どちらでも、あたしには同じだわ」



三人は一時にかかっていった。モーパンは鼻唄まじりに三人をあしらった末、順々になで切りにして血祭に上げた。こうして彼女は決斗が日課となり、多い時には一日に五人の荒くれ男を殺傷した。

彼女の名声を聞いたパリ一流の名剣士が試合を申込んできた。相手は冠せつきの剣では素直に参ったとはいわなかったが、「それは冠せをとって」と彼女にいわれて、すごすごに去ったという。

この優雅にも猛き女騎士は、私にとっては愛慕の対象であり、残念ながら他に匹敵するものを見ない。

さて、乗馬服姿の女性を描き出している我邦の小説の例をあげて見よう。

まず岸田国士の「鞭を鳴らす女」の主人公である。彼女は陸軍将校の妹で、主人公がこの兄を訪ねて馬場にいくと黒のベレーに同色の乗馬服に黒光りのする長靴、手には竹の鞭をしならせ、さわやかに笑う「アメリカ風のおとこむすめ」である。

彼女は主人公から、ややとうとつな求愛を受けた時、この鞭で男を打つことになる。

中河与一の「愛恋無限」には智子という女性が登場するが、彼女は牧場で会った青年と

対抗意識をもって馬で競走した挙句、心がとけ合う。

二人で草原で休む時に長靴をぬぐうとするが、足にくっついてぬけない。男が手伝って木につかまらせた上で靴をひっぱりと

『靴の中から奇麗なベッコウのようにそれ上った靴下の足が出て来た。足の匂いがした。それだ脱衣した女の匂いのような匂いと思われた』とあり、長靴と足の関係をこれほどエロチックに美しく描いた例を余り知らない。

野上弥生子の長篇「迷路」には多津江という資産家の娘が登場する。才色兼備で外国語に堪能な現代女性で、主人公省三の幼なじみだが、二人いれば男の省三が押され気味である。

次の一節は省三が友人と軽井沢の林道を歩いていて、多津枝と婚約者が馬でやってくるのに出会う所である。

……対の栗毛に乗った若い男女を浮き上らせた、と思うと高いさええした声がひびいた。

「省三さん」

女は多津枝であった。呼ばれた省三と多津枝がそれと気がついた時には、彼女は手綱をきゅっと引き締め膝まではまった乗馬靴で身軽

く飛びおりていた。……

着ている乗馬服と対のまっ白なりネンの、競走用のような鳥打の深い庇の下から、彼女の黒い耀やかな眼で二人を等分に眺め、つんとして見せてから、帰京を終列車にのぼして今夜一緒に訪ねて来いといった……」

× × ×

いかにも自我が強いらしい描写だが、今までに上げられた文学作品の女性は、いずれも男性と同等若しくはそれ以上の能力をもって高圧的に出てくるタイプで、長靴を愛するにと、「権力への意志」を象徴しているように思われる。

所で次に私が見た範囲内での映画に登場した、このタイプの女性を挙げて見たい。

小説において、「モーパン嬢」を挙げた如く、ここには私の好尚が多分に入ってきて来るを得ない。ここで、私の女性理想像は、長靴をはき、長剣を帯びていることが条件なので勿論乗馬姿も高い評価を与えるが、よりモーパンのな女性像にひかれるのだ。

その意味で印象に強烈なのは、「剣豪ダルトニアン」に出てくるモーリン・オハラである。この映画で彼女はアラミスの一人娘として、他の三銃士の息子たちに交っての大奮斗

だった。全篇二三のシーンを除いて、殆んど膝まである長靴に長剣という「モーパン」のままの姿で登場する。

ある時は漆黒のビロード、ある時は茶色の胴着、というように服の方は変わるが、最後に敵の本陣に特使に化けて潜入する時、恐らくは途中で特使を襲って倒した末に奪った服という設定だろうが、当然、彼女用にぴっちり合わされたもので紫がかった青色の厚地の服を着ている。

肩からななめに特使の肩章を凛としてつけ長靴もこの時は特に凛然とする程、美しくみがき上げられ、敵将の前に立ちほだかり、事が露見すると澄んだ声で不敵に笑い、丁々発止剣の舞となる。全く獅子（女獅子？）奮迅の末、コーネル・ワイルドのダルトニアンに一番の強敵をゆずって花を持たせ、同時に敵将二人に止めをさし、剣（実際には血まみれであろう）を手にしたまま、ワイルドと艶然と唇を交すという、きわめて官能的な面もある。

この映画で彼女は女王のために命をささげる健気な女性というように描かれているが、演技はこの冒険を非常に楽しんでいるという感じが強く、こっちの方が正しいのではない

かと、私には思われた。後日、宝塚で那智わたる、藤里美保、内重のぼるが「三銃士」をやったが、舞台写真だけでいたく失望してしまった。

次に同じくモーリンが亡きエロール・フリンと共演した「すべての旗にそむいて」もきわめて似通った扮装で登場する。この方は女海賊でフリンの海軍大尉と恋をして仲間の海賊を裏切ることになる。

チャンバラのシーンは最後だけであるが、エピソードとして女と甘くみて言い寄った輩下の海賊に決斗を申し込んで一発でしとめるということが語られたり、フリン大尉と海賊の腕くらべの時、卑劣な手段をとろうとした海賊の兇器をピストルで射落したり、中々の鉄火ぶりを見て、長靴姿の女にびっくりしていると思った。

同じ系統のものとしては「女海賊アン」のジーン・ピーターズ。「セビリヤの女海賊」のジャン・マリア・カナレがある。

前者は跳足の場面が多いので失望、後者は美しく、しかも剣にも強く中々雄々しいのだが、グラマーすぎるのと、リアルなとで難がある。

長靴姿の女傑の登場するものとして、は西

部劇というジャンルがあるが、この方では、「平原児」のジーン・アーサー。「大砂塵」のジョーン・クロフィード。名は知らぬ群小女優による「早射ち女拳銃」「拳銃稼業」などを挙げるに止めよう。

最近の西部劇は乗馬ズボンに長靴というのが少くなっているので、題名に惹かれて見に行き損をすることが多い。TVの「アニーよ銃をとれ」もスカート姿である。

単なる乗馬姿として印象的なものに「維納の別れ」のリストの恋人になるコレット・マルシャンがある。彼女はコサック兵のような服装をしたり狂気のように馬に拍車を入れて酷使したり、かなり興味が多いものがある。又同じ音楽映画で古い「未完成交響楽」にはシューベルトを愛しながら挑戦的な公爵令嬢がかなり心を惹く長靴姿で登場する。

さて一方、日本に眼をうつすと、きわめて少く、特にモーパン型の女性の映画は後述する時代的に舞台をとらない限り、見あたらない。まず、その中からでも選ぶとなると、高倉みゆきの何本かの作品が、これに当ろうか。デビュー作の「戦雲アジアの女王」は封切り当時、あまりいいと思わなかったが、今度TVの名画座にかけられたのを見て、かな

り良さをみとめた。

特に盛装をして部下に訓辞をしたり、サーベルを吊って思い沈んでいる所などよく、軍服の肩から革バンドで双眼鏡を吊っているのもいいと思った。「女間諜曉の挑戦」は勇ましさを表に出したもので、冒頭馬上から敵の間諜を仕止めるシーンなど、息をのんでしまった。黒のジャンパー、白のズボンの平常の姿は行動的な女性のいさぎよさが出てよかった。「東支那海の女傑」は、半長靴の妙な姿で失望だった。一場面、海軍の要人と面会する時に、膝まである長靴に手に鞭のようなものを持って現れたが、どうしてあれで通さなかったかと思う。

乗馬だけのシーンとしては、大映「花嫁立候補」の矢島ひろ子ら三人と、松竹「花嫁の抵抗」の小山明子、有沢正子のそれぞれ一人の男のためにレースをやるという勇ましいものだった。

変った所では、新東宝「女軍医と偽狂人」がある。この中でソビエトの軍医になったヘレン・ヒギンスがカーキ色の軍服に黒の長靴という戦争中の日本軍人のような姿で出て来たが、これなど藤山秀緒女史の書かれるシリーズなどが連想されて面白かった。

次に、日本映画にはモーパン型の女性は少く、時代劇の姿で現われるのではないかと先程書いた。私の考えでは、むしろかつらに手甲脚絆、大腿を出したやくざ姿は、ギリシヤ悲劇のバスキンにも通じる一種の悲壮美の世界であり、これが現代の乗馬服姿に匹敵するのではないかと思うのだ。

これは一昨年をピークにかなり出て、今年は寥々たるものであるが、この中では三十三年、新東宝「大暴れ女俠客陣」の宇治みさ子一位だと思う。これは「お好み映画館」で見かえしても、そう感じたのだ。いささか哀愁を帯びた清潔な表情はむしろがよく似合い立ちまわりも引きしまっていた。この場合も余りグラマーは却ってよくない。

「おけさ歌えば」の水谷良重も発育がよすぎでよくなかった。又、東宝「灰神楽三太郎シリーズ」の中田康子も同様である。古いところでは、二十九年東映「火の車お万」の月丘千秋。恐らく月丘としては後にも先にも、はじめたろうが、美人だけに凄艶なものだった。三十五年大映でつくった「お嬢さん三度笠」では、仁木多鶴子、宮川和子より可憐なところがある弓恵子、真城千都世がよかったし、東宝「泣きとうござんす」の浜美枝もよ

かった。拾いものでは「雲の上団五郎一座」の筑波久子の女剣劇女優役であった。美空ひばりのものは、男性化しすぎてよくない。このジャンルでも、女優は清純型、聖女型がびったりなのだ。一見相矛盾する要素が美しさをより上げていく。

ここでちょっと変ったものを紹介しよう。

これは新劇俳優座日曜劇場、五、六、七月公演のゴールド・ニ作「一度に二人の主人を持つてば」である。この中に決斗で死んだ兄に変装して恋人に会いに来る若い女ヘアトリーチニが登場するが、彼女は終始、黒いビロードの服、帽子、膝の上までくる長靴に長剣を帯びている。

召使いの手違いから、恋人が死んだと思ひ込んだ彼女は、これも又同じ召使いから彼女が死んだと思込まされた恋人と同じ場所で死ぬとする瞬間を互いを見出し、ハッピーエンドになるが、秋暎場では上衣をぬいで白いシャツになったベアトリーチェが短刀を胸に当てんとする。(こうした場面、藤山氏に何らかのインスピレーションを与えないであらうか)又、恋人をみとめあった後で、彼女は外出する用意をしに奥に入るが、ここで女姿にはならず、騎士の盛装をして来て、恋人に

「いつになったら女姿に返ってくれるのだ」と嘆かせ、更に意気揚々と出かけた先が、彼女を男に間違えて、恋を抱いた一人娘のところで、女であることをはっきりさせた上で、又、抱き合い、相手の娘の恋人に、「女と判っている、そんな恰好だと、変な気持ちになるよ」といわせる。

つまりこの劇を通じてベアトリーチェは一度も女姿になることはないわけで、一寸珍しい例ではないかと思う。この役を元東宝の河

内桃子が中々魅力的に演じていた。

最後に、日本映画界は、もう少し女優の長靴姿を出してもいいのではないかと思う。川島芳子など、何度映画化されても面白い題材だし、今まで川路龍子、高倉みゆきによって演じられたが、白川由美や藤山陽子などの固い感じの女優にやらせて見たい。

又、鰐淵晴子や岩下志麻のジャンヌ・ダルクというのも魅力的だと思う。ハムレットなどもフランスの名女優サラ・ベルナールがや

り、本邦では若き水谷八重子が演じたことがある。(因みに八重子は新派で川島芳子を演じ、更に一昨年は「女剣戟朝霧一座」という劇で国定忠治をやった。私の知る限り、乗馬服と俠客姿の両面を演じたのは、彼女だけでマゾ芸術考としては彼女をマークすべきだろう。) これなども、もっととり上げて見てもいいのではないか。以上、私のとぼしい知識を動員して書いてみたが、見落しもあるう。御教示を乞う。

〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集

大名刺判 (9×6.5) 印画紙焼付

各組一枚一組 (全部送料共)

Y 6	Y 5	Y 4	Y 3	Y 2	Y 1	五十組	四十組	三十組	二十組	十組	五組	一組
麗しの緊縛裸像	浴室股間縛り	見事な飾り物	観念した胡座	乱れ黒髪裸見本	全裸荷造縛しぼり	五十枚	四十枚	三十枚	二十枚	十枚	五枚	一枚
(愛川悦子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	二〇〇〇円	一七五〇円	一四〇〇円	一〇〇〇円	五五〇円	三〇〇円	八〇円

Y 7	Y 8	Y 9	Y 10	Y 11	Y 12	Y 13	Y 14	Y 15	Y 16	Y 17	Y 18	Y 19	Y 20	Y 21	Y 22
逆十字後手縛	裸身の捕われ人	逆エビ後手足吊り	全裸ねの縛り	なまめかしき緊縛	全裸フトンむし	蒲団責裸またぎ	初々しき裸全身像	ヌード股間縛り	全裸脚拳股間縛	セーラー後手縛	庭園ヌード縛り	全裸全身自慢	豊満双丘くらべ	追いつめられた裸女	遅ましきヒソプ
(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(田中芳代)	(花坂道子)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(岩井知子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)	(愛川悦子)

Y 23	Y 24	Y 25	Y 26	Y 27	Y 28	Y 29	Y 30	Y 31	Y 32	Y 33	Y 34	Y 35	Y 36	Y 37	Y 38	Y 39	Y 40	Y 41
大の字晒し	縛り正面正坐	胸のポリウム自慢	麗人受難の巻	もうこれで許して	むしろれたズロース	全裸縛りの全身	鎮座する縛り女神	囚女後手柱縛り	全裸強烈股間縛	ベツド縛りのポーズ	開股一番一直線	縛り腰巻色模様	亀甲股間縛正面	全裸椅子またぎ	妖艶闇のしぼり	椅子またぎ裸後手	強烈後手首縛締	ハダカ縛り人形
(絹川文代)	(絹川文代)	(愛川悦子)	(益田房子)	(益田房子)	(花坂道子)	(平野笑子)	(平野笑子)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(田原美佐子)	(絹川文代)

Y 42	Y 43	Y 44	Y 45	Y 46	Y 47	Y 48	Y 49	Y 50	Y 51	Y 52	Y 53	Y 54	Y 55	Y 56	Y 57	Y 58	Y 59	Y 60
濃艶ハダカ縛り	あられもなき開股	全裸変形股間正面	後手立木縛り	全裸後手壁ハリツケ	全裸寝台羞恥責め	振袖令嬢後手責め	長襦袢後手縛り	ワンピース縛り	手吊り裸身の乱舞	柱縛り観念の図	不行儀姿態の美	カメラに晒す全裸	緊縛女体の開陳	膨隆突出した臀部	前手錠全裸像	股間縛開股の絵	聖壇のさらし者	エビ責めの表情
(絹川文代)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(村井知可子)	(愛川悦子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(花坂道子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(大塚啓子)	(絹川文代)	(絹川文代)	(絹川文代)

△読者投稿△

ゴムマニヤの弁

斎藤七郎



世にゴムマニヤなるものがある。防水布
なかんずくゴム引きされた製品には異常な
憧憬をもってこれを愛撫するという感覚を
もった人達である。

むろん、その感覚は一般人のそれとは大
分異ったものであり、それだけに必要以上
な劣等感や自己意識を持って居り、一般人
に対しては、自分のその異常性になるべく
隠くそう隠くそうと努力している。それは
あたかも緊縛に対するそれと非常に類似し
ているが、緊縛程同類が多くないだけに、
一層ひた隠しにする傾向は著しいものが
ある。

かくして自分だけが異常であると思ひこ
み悩み苦しんでいるわけであるが、さてこ
のゴムマニヤも実は意外に多く、しかも大
抵は緊縛マニヤと重複して居り「類は類る

呼ぶ」の例えで奇譚クラブなどのおかげ
で、次々に世に現れ出ようとしているのだ。
自分も又その一人であり緊縛に対する憧
憬とともにこのゴムに対する愛着の念は絶
ちがたい。奇譚クラブなるものを初めて手
にしたのは昭和三十年、その三月号であつ
た。そこに並んでいる緊縛写真やその絵や
文以上に私を魅了したものは「みずしま・
まもる」なる人の懸賞原稿入選第四席「汗
について」という一文だった。

ああゴムに執着を持っているのは、自分
ばかりではなかったという安心感ととも
に、どんなにして彼はそのプレイをたのし
んでいるかという好奇心にあふれた意欲を
もって、それをむさぼり読んだものだった。
しかし彼の場合は意外に広く、ゴムととも
にビニール等の防水布にも関心を持って居

り、特に後半はそれで文を費してしまったのは、まことに惜しまれました。

その後、勤めの関係で転任し、どうしても奇譚クラブを手にする機会がなく、あってもゴムマニヤをよるこぼせるようなものは運悪く手にすることが出来なかった。唯旅行先で古本屋から手に入れた悦特第四集の古川裕子の「わが心の記」でわずかに一行ゴムのレインコートなる字句を見つけ、その一行の為にこれを買ったおぼえがある。

最近になって奇譚クラブの手にすることも容易になり、緊縛写真も豊富に拝見することが出来るようになったものの、ゴム引のレインコートの上から緊縛したものが無いというのはどうしたことか、或いは私の不勉強のせいで実はそんな写真は昔にもう出尽くしているのか。一番腹が立ったのは昨年の十二月号で辻村という人が竹野ひろ子というゴムマニヤを、おれはゴムは好きでないからという不遜な一言でもって彼女の希望は入れずに唯の緊縛写真だけ撮ったという、同じゴムマニヤとして断じて許せぬ文（ひろ子緊縛記）を読んだ時である。

いかに自分がそのマニヤでないからといっ

て、他人の趣好を尊重せぬという事が許されてよいであろうか。これを読んだ時、私は心の底からいきどおりを覚えた、こんなもってこいのモデルが現われたら、なおさらのこと、早速一回でもゴムマニヤ待望のスタイル（ゴム引レインコート、或いはゴム合羽の上からの緊縛）で撮るべきではなかったのか。

そもそも私共ゴムマニヤは、このゴム衣からの緊縛スタイルを求めればこそ、書店で奇譚クラブ誌の写真を立ち見しようとするのである。最近号は残念乍ら、そういった写真は見えない。わずかにゴムのレインコートならぬおしめスタイルのもの（昨年六月号のゴム帽子、本年一月号のおしめ、カバー、ガール）ぐらいである。

表紙に堂々とレインコート姿を出した一昨年十月号も内容はビニール製のレインコートの緊縛があったきり。しかし文章の方は古川裕子なる名だたるゴムマニヤの文（私はその載ったという旧刊号が欲しい）は再登場しないとはいえ、前述の竹野ひろ子さん「ゴムのオムツカバーでくるまれ、レインコートを着せられたら」という再録

文を始め、五月号の砂本利夫なる人の「ゴム製囚衣の魅力」そして今度十月号の梅川幸子さんの「ゴムマニヤのプレイ」といかにゴムマニヤが多くいて、そして満たされぬそのムードに飢え且つ情熱をもやしているかがうかがえると思う。殊にこの梅川女史の一文を見て、その徹底したプレイへの態度に感激し、心の底からゴムマニヤ万才を叫んだのである。

今、本誌に御願いたしたいことは唯一つ、ゴムマニヤを無視しないでくれということ。いかに多くの人がゴム引きの上から緊縛された写真はないかと期待しながら、奇譚クラブをめくっているかということである。又ゴムマニヤ向きの、例えば「古川裕子」とか「みずしま・まもる」のそういった文のある既刊誌の目録を掲示してもらいたいということである。

以上、自分の好みに走るの急なあまり、暴言を吐いた個所もあるが、何卒マニヤの妄言として御容謝願いたい。

△編集部注▽

本文に対しての読者からの感想文なり批評文なりをお待ちします。

「深い山荘のアトリエにて」

中 原 勲

……「私が日展出品のためのスケッチを、この静かな山荘に取りに来たときに三人の女学生を縛った話である」……

師はわざわざ私のために師のアトリエを提
供してくれ、この周辺の風景をすべてマス
ターして来いと私はおおせっかかった。師が
自信を持って言っただけにさすが景色の良い
所である。

コンモリとした山の中腹からロマンチック
な湖畔が見え、林の中には、まだ人気の少な
い別荘がポツンと赤、青、黄などの派手な屋
根をのぞかせている。師も保養がてらのアト
リエらしくベランダにソファなどのなかなか

モダンな建物である。

私はさっそくスケッチブックを持って湖ま
での小道を下った。その小道沿いにかあいい
小川があつて岸边にはつつじの赤い花が緑の
中に混つていた。顔をこするような緑のササ
をはねのけ樹々の奥からの小鳥の声や、リズ
ミカルなせせらぎの音を聞きつつ小走りに降
りてくると、もう林の向うに湖がチラチラと
見える。道は急になだらかになって林に入る。
白い同じような細い木々が沈黙を守ってジッ
としている中に、新芽の香りがほのぼのと漂
ってくる。ここにも楽しそうな小鳥の声がし
て、一面のつつじの花を時おりふるわせてい

る。私はさっそくスケッチブックを取りあげ
て、林の中を見まわすと、なんだろう？ 白
い布切れのようなものが、フワフワと舞つて
いるのが木々の隙間から見える。

私はスケッチブックをたたんでどうせ湖の
方だからと思いながら林を抜ける。と広い湖
にとび出た。青い水は、山々をもう一度写つ
して向う岸のコンモリした森の中にまで染み
込んでいようだった。左側の山が水に入り
込んだところに高い岩の壁があつて、今にも
森の緑がすべり落ちそうなのが気に入って、
今度は改めてエンピツを走らせた。描いてい
るうちに、ふとさっきの事が気にかかったの
でふり向くと軽快な服装の少女がちょうど、

蝶々を捕りそこねたところだった。菜の花畑の向うで白い清潔なショートパンツから子鹿のようにあげた足と、蝶々を捕りそこねた網を持つ手つきが、いかにも純心な少女を思わせた。

私は再び視線をこつゝ岩壁に向けてエンピツを走らせた。よく見ると向う側にも2、3の別装らしき建物と人家の屋根が見える。この山のふもとに小さな温泉町があるが、それよりも、この湖と山々に魅せられてモダンな別荘が建ち並んだのだらうと思った。遠くの間の中からゆるやかにボートが現われたが、その波紋がここまで広がって来そうな静かな湖だ。時々手にとるようにボートからの女の声が聞こえてくる。

私は又清潔な少女をふり返って見た。今度はかなり近くつつじの咲く藪の中でスイと浮いたシオカラトンボに抜き足さし足で近づいて今にも網をかむせようとしているところだった。花がむき出しの白い足の肌に反映して美しい。うまくいくかなと思って見ていると突然「キヤーツ」と叫んで網をすっぱかしてころんでしまった。トンボがスイと舞って逃げる。口に手を当てたまま足をすくめ長い髪が揺れている他、なにひとつ動くものがない。

い。ヘビをふんづけたナ。私はこちらに背を向けている彼女に、そっと近よって行った。「どうしました？」私は、わきの下から手を入れて彼女を起してやった。意外に彼女の乳房はふっくらとしている。

「ヘビが……まだ居るワ。」とショートパンツを払いながら、ふと顔をあげ視線があうとポツと赤くなって

「アラノどうもすみません。」と無意識のうちに私の肩を掴んでいた右手を放した。私は昆虫網をとりあげてバスケットをかけてやった。さっき見たよりまったく大人ではずれた乳房のホックを目の前ではめている。はめ終って髪をサツと後にはねのけると快活な声で「湖にでも出ましょうか。」

「エ？……エエ」私はちよつと面喰らって歩き出した。

「あなた絵画きさんネ。ベレー帽、とってもお似合いよ。」

「いやあ、ベレーかぶるなんて三文画家のしるしです。それより、あなたの服装の方が可愛いですよ。」

「あらノ私これでも大学生なのよ。恋愛だっ

てしているんですから。」

ずいぶん人なつっこいい感じの少女で、初対面の私に盛んに恋愛のことをしゃべりまくる。

「……それでネ。彼氏のラブレターったらないのよ。『僕は、愛の表現に悩みます』だって、だったら接吻ぐらいしてくれればいいのに。だから言っちゃったワ。『私、モヤシみたいな入って大嫌いよ』って。」

「フムフム、それで。」

彼女は得意になって話している。それで結構彼氏が好きらしい。

「だから私とび出して来ちゃったの。ちょうど春休みだし。こんなところへも毎日のように手紙が来るのよ。……（急に顔をあげて）まあノ、すてきノ。」

私は興味深く聞いていたのに湖がひらけると、そんなことケロリと忘れてしまったかのように、胸をはって深呼吸をしている。今年大学に入ったばかりのまだセーラー服気分の抜けきらないオテンバ娘だ。

「坐ってリングでもあがらない？」

「そりゃあ、ありがたい。」

私も彼女の坐った岩の上に腰を下した。彼女はバスケットから印度リングを出して、しなやかな手つきでむき出す。



「あなた、さっきあの岩を描いていらしたんでしょ。私、遠から見てすぐわかったワ。」
 「エエ、なにかこう神秘的なんですよ。」
 「そうよ。『サタンの座』って言うの。あそこで、2、3年前人が死んだワ。今でも時々おぼけが出るんですって……ハイ！」
 彼女はむきたてのリングを半分さし出し

た。暫く二人は黙ってリングを喰う。彼女は太モモからのびた白い足を岩からつき出して、拍子をとるようにして上下に振っている。靴が脱げたら下は真青な水だ。おそらく遠くから見ておれば、ゴツイ岩と彼女のむき出しの足との対照的な姿が、なにか手をさしのべてやりたい気持になるのだろう。

——こんな人を縛ったら——

彼女は一口食べたリングを、ポーンと湖に投げるとフィと私の方を見て

「私の家はあそこよ。」ときどった手つきで林の上の方を指す。どうやら赤い屋根の真中から四角いエントツの見えるオランダ風の別荘を指しているらしい。

「なんだ、僕の家はそのすぐ上のホラ、平べったい屋根の見える家ですよ。」

「じゃあ、あなたK先生のお弟子さん？」

「まあそういうところかな。」

「そう、K先生よく私の家へいらしたワ。絵葉書みたいな絵を描く気のいい先生だワ。シヤロック・ホームズみたいなパイプくわえてユーモアたっぷりネ。」

「ハハハ、トンボみたいな眼でさ。」

「そうなのよ。キョトーンと、とほけてんのよネ。でも、あんな先生のお弟子さんじゃ、

一生浮かばれないワよ。」

「ヤッ、コイツ言ったナア。」

「イヤーン。」

彼女は私がサタンのような手つきで飛びかかる真似をすると、胸を抱きしめて、いたずらっぽい目付きを私に向けた。可愛い！まったく可愛い。このまま、飛びついて

行つて縛つてしまおうか」と考えた。

「イヤよ。そんないつまでも見つめちゃ」

「ハハハ、ごめんごめん。」

私は角ばった指の力を抜いて手をおろすと、君をモデルにして油絵を一枚描いてみたいというような事を言った。彼女はちよつと躊躇していたが、それからわたしの家へ来たらと言った。

その晩、私は彼女の別荘の夕食に招待された。ちよつと左まきじゃないかと思われる女中と彼女の祖母と三人暮しだ。

「おばあちゃま。今日この方に、私、ヘビを踏んづけちゃった時、助けていただいたの。お礼言つてよ。」

「おばあちゃま」と称する人が、ばかいてねいに頭を下げるので、ちよつと面喰つた。ブドウ酒を飲んだり夜11時近くまで話し込んでしまった。彼女が春子という名前である事や、もう2、3日すると同じ学校の友達が二人来るといふことも聞かされた。そして彼女の和服姿の絵を一枚描いてくれるよう頼まれてしまった。話はトントン拍子にはずんで、明日の午後、私のアトリエに来ると約束して、私は一人っきりのアトリエに帰って行

った。

その翌朝早く、村の子供がとりたての牛乳と新聞を届けに来たほか、また静かな自然の空気につつまれる。牛乳とパンで軽い食事をすまし、新聞を読んだりアトリエの整理をしたりするうちに、もうそろそろ約束の午後になって来た。うっすらとした陽ざしが、山、森、林、湖にたちこめて温かい午後になりそうだ。

私は20号カンバスの位置と彼女の坐るべき椅子の用意を終えると、のんびりたばこをふかして木々の中に消える小道を見ながら窓辺に寝そべっていた。

やがて彼女は濃い緑のほっそりとした和服になにか黄色や赤の果物や花の入った籠をかついて来て、私を見あげるなり、わざと疲れてフウフウだという足どりを見せた。大きな夏みかんが一つころがり落ちた。

「やあー。今行くよ。」

「早くウー。」

私は、窓から飛び降りて、彼女をアトリエまで案内した。

「おばあちゃまったら、暑くて仕方がないのにこんな厚ぼつたい着物、着せるんだもの。」

おまけに果物や花をバックに入れて貰いなさいだって。」

「じゃ、ちようどいいや。食べながら描こう。」

「そうよ。」
ドッカとソファに坐わるとハンケチで顔を盛んにあおいでいる。私はそのまわりに、夏ミカン、リンゴ、花などをばらまいて、ちよつと足の位置を整えるとそのまま彼女のデッサンし始めた。いつの間にか手を膝の上において私の方を見ている。髪の毛もきれいにとかされて、頬もほんのりと紅く、小さく割れた胸元からは、糸のやうな首飾りがキラキラと光っている。なるほど上品なお嬢さんらしい眼ざしである。その眼を床の上にくらべている一個の夏みかに落させて改めて私は姿の構図をとる。紅い頬に長いまつげ。つやのある髪が肩まで長く、ほとんど胸をおさえられて呼吸する毎に動く胸もと、それを強調するかのよう、無雑作にしめられたやわらかい感じの帯、太モモの形そのままを伝える緑の着物が足もとまでのびて、少し大きめのスリッパでとめられている。ころがっている果物と花。そこにゆったりとした和服姿の女。私は師のまったく絵葉書のような絵に反発して、ただ彼女の呼吸の響きが伝わって来そう

な雰囲気はこの絵を仕上げようと思った。

そう思って私はただ、彼女の胸もとだけを見ていた。息苦しいような沈黙が続いた。私はいつの間にか彼女の伏目が眠ってしまったような気がした。同時にあのきつい帯を少しゆるめてやろうと思った。

私はソーッと彼女に近づきささやくように言った。

「君。」

彼女は、やっぱりうとうとしていたらしく私が側に坐った気配と声に驚いたように「なに？」という眼付きでふり返った。

「帯が強いようだ。少しゆるめたら……？」

彼女はちよつといぶかしい顔をしたが、ゆつくりうなずくと静かに後に手をまわして来た。極端にむき出しにされた着物からの白い両手が裏がえしにされて結び目を解こうとしている。私は一ッコマがほどけた時、ソーッとその両手をつかまえた。長い髪が揺れて彼女は顔を上げる。

「ネ、君。このまま縛られてみないか？」

一瞬後にいる私の方をふり向いて身体をくねらせたが、すかさず

「ネ？ちよつとの間だよ。すぐほどけるよう

に縛るから。……僕は君が好きになった。男

に愛するものを見つけると動けないように縛っておきたい心があるんだ。だから、ネ？

いいだろう？」

彼女は返事のかわりに、全身の力を抜いてしまった。私はおもむろに半分解かれた帯で彼女の両手を縛ろうとすると

「待って！」

私は思わず手をはなしてしまった。

「時計取るから。」と言って、すばやくはずして床の上におくとサッと両手を後にまわして来た。私はホッとして残った帯で白い両手を一重、二重、三重にいてねいに縛った。

「さあ、ほどけますか？」

彼女は平気よとばかり解こうとするが、ただ上半身をくねうだけで、どうにもならない。私は紐を捜しにソファを立った。

「まだ縛んの？」

「そうサ。」

「あーん、ほどいてエとれないわア。」と例の彼女らしい甘い悲鳴をあげる。

「だめだめ。」と私は果物を押さえてあった

細い紐を手にとると、

「綱を捜しに行っている隙に逃げられると困るからナ。」と意地悪そうに言いながら簡単に

足首も縛っておいた。

「かんにん、かんにん。もうほどいてよオ。」

私はそういう毎に「だめだめ」と言っつさつと風呂場のドアを開けた。確かナイロンの干し物綱が、つるさがっていたはず。それをなんなく見つけると、両端の金具を取って一本の綱にすると出がけに手拭を取ってもどって来た。もうこちらのものだ。彼女は負けない気になって、盛んに身をよじらしている。そして私が片手にナイロンの綱、片手に手拭をぶら下げているのを見ると怒ったように怖い眼で睨んだ。

「さあノ裸にしちゃうぞオ。」

「あーん負けたワ負けたワ。もうほどいてよオ。」

「だめだめ……さあ、お嬢ちゃんノさるぐつわをしましうネ。」と私は手拭いを四ツにおって後からまわす。顔を横に振って逃げようとするがだめ。とうとうさるぐつわをされると、おとなしくなってしまう。私はそのまま後から手をつつ込んでずらして行く。の重ねから手をつつ込んでずらして行く。

ていねいに、バナナをはぐようにしてゆくと、ポツカリと丸い肩が現らわれて来る。今度は肩から着物をおろして行く。そのままは

げるだけはぐと青っぽい透明のシュミーズにふっくらとした乳房がおどっている。上半身はスベスベしたシュミーズだけ。私はなおもそれを人差指で少しおろす。

彼女はまったく無抵抗。私はナイロンの綱をとりあげると静かに前にまわして、一番ふっくらとしたところへまず一本まわし、次にその下へまわすとグッと絞めた。

「ウッ……」彼女はさるぐつわをされたままあごを突き出す。さらにもう一重。私はそれを背すじのところでもまとめると今度は帯で縛られた両手の一方をはずして、しっかりとくる。着物がタラリと下る。帯を抜いて腰のあたりをパッとめくると完全に下着一枚になつてしまった。着物がソファからすべり落ちる。

白いあの時の足がスーッとこのびて細い紐で縛られている。私は残った綱を足首までのばし前の紐を解いて改めて三重に縛る。まだ3尺ほど残っている。私は「くの字型」になつた足のひざこざうも、又それで縛ってしまった。

「さあ、よし。ほどけるもん、ならほどこでござらん。」と、たばこに火をつけて安楽椅子に坐わると、彼女はうっすらと眼を開けても

がく。

「ムムム……」

ソファの上なので余りもがけない。起き上がろうとするのだがもう少しというところで力尽きて仰向けに倒れてしまう。柔かい乳房に細い綱がくい込んで、激しく呼吸するたびにしまつて行くようだ。ソファの上に下着一枚でさるぐつわをされて手も足も縛られて寝ている彼女を私はスケッチし出した。

彼女はフィとこちらを向いかた描れていると知るとわざと身を動かす。それが全身を縛られた彼女のできる唯一の抵抗なのだろう。

「コラ、スケッチをしているから動くナ。」

彼女は気味がいいワというように、さるぐつわの中からクスクスと笑う。

「ヨーシ、それならあの柱にくくりつけちゃうぞ。」と言うと彼女をソファから降して後手に縛られた結び目を掴むとちょうど氷屋が氷をチョンとひっかけて引っぱって行くようにして柱までひきづって行く。いつの間にかさるぐつわがゆるんで、

「ヤーン 痛いーっ。」

と悲鳴をあげる。そんなことおかまえなしに柱までひっぱって行くと両足の綱を解く。すかさず、その綱をグイと引っ張りあげると

キヤと悲鳴をあげたが、ヨロヨロと起き上ってくる。そこを彼女の3尺帯で少しつりあげ気味にしておいて柱に縛りつけてしまう。彼女は足が自由になったのでバタバタさせる。私はそのまま後から脇腹に手をあてるとスーッと下へ降ろして行く。

「……」

胸下から腰のふくらみ太モモの感触。足首までおろすと、たれ下がっているナイロンの綱で二重、三重にしっかりと柱に固定させる。もう白いのびた足が、わずかにモジモジと動くだけである。

「サテと。」

私は起き上って彼女の顔を見る。

「先生っていちわるネ。女の子を裸にして縛るなんて。」

「もっと意地悪くしてやろうか。」

と言うと、さるぐつわをゆわいなおしてホウキで身体中を掃いてやった。彼女は顔を激しく横に振って、

「やめて……やめて。」

ぐったりなところまで柱につないである帯をゆるめると崩れるように前に倒れる。十字に縛られた後手の底で激しく呼吸をしている。(シュミーズ)がほとんどめくれてしま

って太モモが窓からの夕日に赤く反映する。私は又もとどろりに彼女を縛ると3間ほど放れた安楽椅子にもどる。

「さあ、ここまで来れば許してやるよ。」

彼女はくやしそうに床に転がされたまま、こちらを見ていたが、やがて身をくねらせて近づいてくる。

「ホラノ もう一息。」

後手に縛られた両手の指がニワトリの足みたいにつむいた背中の上につき出ている。私も床の上にひじ鉄砲について暗くなりかけた部屋の中で、今はもう乳房も丸出しになつて縛られている彼女を見ていた。彼女は動かない。夕陽のために女のくねった身体がはつきりと、光と影で形づけられている。不思議なもので、なんだか自分も縛られてみたくなつてしまった。

彼女はゆるんださるぐつわの中から乾いた声で言う。

「もう、ここまででかんべんしてセンセエ。」
「オッ又先生と呼んだナ。じゃあ先生の言うとおりに、先生の所まで来るんだナ。」

と言うと「ハイハイ。」と深いため息をついて可愛い女は不自由な身をくねらせて、少しずつ私のところまで近づいて来た。

……その後、二、三日のうちに、彼女がすなおに手をまわすようになった頃、彼女の友達、夏子と秋子がやって来た。駅まで迎えに行った時、私はもうこんな遊びは出来ないだろうと思つたが、あにはからんや、私はこの二人の少女をも縛ることになったのである。……

その日の午前中、我々は泳ぎたくなるような好天に恵まれて湖で海賊ごっこをして遊んだ。春子は私に白いハンケチにドクロの絵を描かせると側で竹棒を手に、ソワソワしている。夏子と秋子の二人もハイキングにでかけたり、昆虫採集をするうちに、すっかり私になつてしまった。

彼女達ははしゃぎである。「先生先生。」とやたら女学生は、そう呼びたいのである。春子はドクロの旗が出来るやいなや奇声を張りあげて2、3回ふりまわすとボートにたて、私と二人で先に湖の中ほどにすべり出た。夏子と秋子のボートを追いかける。むこうをこいで行く夏子は、トランジスタ・ガールと言うのか、それでいてなかなか整った身体をしている。どちらかというと春子に似たオテンバ娘だ。又こちらをふりかえりふりかえり盛んに急がせている秋子は、枯葉のように、やせ型でどこか憂いのある美人である。二人もやはり豪家の娘らしく無鉄砲にはしゃぐ中にも、どこか気品のある少女達だ。少女達の甲高い声が、この湖をとり囲む山々にこだまする。

「先生ノ もう少しよ。」
「ヨシノ」

私もはりきらないわけにはいかない。

「キャーッ 来たワ。」

「がんばってナッコちゃん。」

夏子と秋子がキャアキャア叫びながら逃げて行く。

「戦闘準備ノ」

春子は近づく、私にこがせたままオールを放して後に坐っている秋子めがけて水をかける。秋子も負けずにかける。とうとう夏子もオールをすっぱかして水をかける。夏子は両手でかける。

「ワァーっ。先生ノ」

春子はもうビショビショになって応援を頼む。皆んな濡れネズミになってかけっこするうちに二隻のボートが横づけになると、夏子は突然。

「やぶれかぶれ。海賊船に殴り込みだア。」

と言つてのり込、でくる。たちまち春子ととつくみあいになって、ショートパンツから抜き出た4本の足をバタバタさせて、上になつたり下になつたり格闘だ。私はその隙に秋子のいるボートにのり移ると、静かにこぎ出す。と、春子が悲鳴をあげて落ちる。夏子がボートから立ちあがって歓声をあげる。やがて春子はばかり顔を出すと叫ぶ、

「どうせ落ちたんなら泳いじゃえ。」

「ヨシ。それなら水の中で勝負勝負。」

と夏子がキレイなフォームで飛び込む。秋子はとてもおかしようにケラケラ笑っている。私は暫し啞然としてオールの手をといてオールの手を忘れてしまったほどだ。でも彼女らは、水泳が達者らしく水の中でふざけあっている。私は安心してオールに力を入れて秋子に乗せたまま「サタンの座」の方へ向つてこぎ出す。

「アッ、アコちゃんがさらわれたァー。」

という声がもうからり放れたところで聞こえる。二人共ボートの方へ泳ぎ出したところだった。

秋子はキレイである。声が健康的であるかわりに表情は病的で、その動作に力が感じないほどしなやかだ。秋子は笑いながらふり返

えると

「気持がいいワァ。」

と片手を水につこんでボートの中にすきとおるような白い足をなげ出している。「サタンの座」を回ると向う側に抜けられる洞窟がある。私は舳先をそちらに向けて2度、3度勢いよくこいで暗い洞窟の中にすべり込んで行つた。急にヒヤッとする空気になって秋子は「ヤッホー。ホッホッホッ」と奇声をあげる。丸い声が反響する。水の音。かなり暗くなったころ私はオールをあげた。

昼過ぎになつたので、皆は上陸して春子の別荘にもどり食事をした。春子と夏子は着換えをして出て来た。同じようなワン・ピースだ。二人ともぬれた髪のつやが又一段と美しい。春子などはまだ風呂場にいる時から大きな声で「おばあちゃま」に今日の海賊遊びのことをしゃべっている。夏子は夏子でサンドイッチを片手に、いっしょになってしゃべり散らしている。「おばあちゃま」も「まあ、まあ。」と笑顔で「こんな子供達ですから。」と私に言う。皆んなまったく朗らかだ。秋子も笑っている。

楽しい食事がすむと私はその足で下町まで

絵具を買ってくるからと言つて出かけた。山道を下りながらあの秋子と夏子も、春子のように縛ってしまおうという策略を考え続けたが結局町の本屋に行つたら「奇譚クラブ」を手に入れてそれを何気なく彼女等に見せてうまきっかけをつくろうと考えついた。

町に着くとさっそく本屋で捜したが、それは見つからなかった。ガッカリして小道を登つて来ると無性に荒い縄で縛られた女共の写真がちらついて、ますます足が重くなつてしまった。ようやくの思いでアトリエまで来ると、かすかに家の中に人の気配がする。私は玄関から入るのをやめて、柵を乗り越え裏口から入った。するとアトリエのドアの中から春子の声がする。

「秋子！ お前は先生と何をしていた。白状おし！」

私はそつと鍵穴からのぞくと、そこには夏子が黒いシュミーズ一枚で柱に両手を高くあげたまま縛りつけられている。春子はショートパンツに私の派手なポロシャツをひっかけ、て細いバンドをぶら下げている。

秋子はいかにそうに両手、両足をいっしょに縛られて春子の眼の高さにまでつり下げられている。長い髪がダラリと宙に浮いている。

今揺れている。

「秋子さん。あなたは、あの暗い洞窟の中で何をされたの？」

急にいいいな声になってつり下げられた秋子を見ながら後手に組んで回り出した。そしてお尻が丸出しになっている方へ行くと彼女はムチをふりあげて打った。ビシッ。

「……ゆるして……ゆるして……」

春子自身多少興奮している。

「だめよ。さあ今度は夏子の番よ。」

夏子は少しおじけついて顔を横にふる。

「私は、なにもしないワ。」

「だめだめ、先生、あなたの身体ばかり見ていらしたワ。裸にするのよ。」

「やめてよ春子さん。先生が来たら、どうするの？ 恥かしいわ。やめてよ。」

「だめだめ。」

春子は私の口調で、夏子の真黒のシュミーズの肩の紐を切ると膝について、スソを握むと徐々に剥いでいく。丸い乳房がポコンと出たかと思うとなおもシュミーズは下げられて腰のあたりもおかまいなしにズリ下される。足もとまで来ると春子は、ひったくるようにして、抜きとると丸めてポンと遠くへはかす。そして短かい紐で、夏子の足を縛りにかかっ

た。

私は手に持っていたスケッチブックと油絵具を静かに降すと、ソツとドアを開けて中に入る。そして傍らにあったナワを手にとると両手に丸く渡して、こちらに背を向けている春子に近づく。夏子はそれに気付いたが黙っている。春子は、盛んに夏子の足首を縛っている。

「夏子だって、容赦しませんからネ。ムチで思いきりぶってやるから。」

私は「それ！」と言うと彼女の胸もろとも両腕をナワで押さえる。

「アッ、先生？」

春子は驚いたように言ったが、私だとわかると押さえられたまま「よかったワア。」とため息をもらす。

「秋子をよくもひどいめに、あわせたナ。ひどいぞオ。」と私は低い声で言うと、春子の片手を後にまわす。

「待って。私も裸になるわ。いいでしょ？」

と言うとサツと腕をふりはなして本当にパンティ一枚になってしまった。私は多少驚いたが、なによりも、両手、両足を一まとめにされて、つり下げられている秋子を降してやった。彼女は、綱を解いてやっても、まだ暫

らくは、グッタリとしている。私はそのまま抱いて安楽椅子に寝かしてやると「センセ」と甘ったるい声で手をさしのべる。一応彼女のその手も、簡単に縛っておく。当の春子は夏子に向って、

「何たまげてんの？ 私、この遊び、先生に教えてもらったのよ。さっ先生。」

「ヨーシ、いい覚悟だ。こちらに来い。夏子もお前も、この女奴隷船から逃げようとは、太い奴等だ。」

わざと大い声で言うと、春子の両手を前で縛って秋子のかわりにつるさげる。夏子もいっしょにひったくって来て同じ綱に、両手を高くあげて、縛る。両手をつり下げられたまま二人は、互いの身体をおつけあったりしてふざけている。夏子も秋子も変った意味で安心したようだ。私は、なるべく長いナワを一本選ぶと、そのまま二人を前むきにして容赦なく二人共いっぺんに、ぐるぐると胸から腰に、そして二人の膝の真上に一本通すと、グイとあげて、ピタリと二ツの肉体がくっつくようにもう一周回してキリリと結ぶ。太モモから足首までも、荒いナワでまいて、二人の足首をそろえようと、無雑作に、三重ぐらいまいて縛る。

「もっときつくう。」

「ヨシヨシ。」

私は手拭いとタオルを持って来て、今まではお体裁でしていたさるぐつわを本式にした。二人の口の中にタオルをつっこんで、その上から手拭いでおさえてしまう。まったく声は出ない。

「ムムム……。」

さすがの二人も少しあわてたようだ。私はおもむろに綱を引くと、二人の足の親指だけが、かろうじて床についているぐらいにまで引っぱりあげた。二人の胸はお互いの乳房でおさえつけられ、その上にさらに私の太いパンドでしめつけしておく。

「さあ、始めるぞ。」

ピシッ ピシッ。

「ムムムム。」

「ムムッ。」

二人は一体となって、身をくねらせる。又打つ。

ピシッ ピシッ。

そのうちに手かげんする気持がなくなつて今度は思いきり打ってやろうと思った。秋子をあんなひどいめにあわせたのだからと思つて秋子の方をふりかえると、っすら笑つたと

ている。ウィンクもした。私はうなづくと、皮の細いバンドを捜しにあたりを見まわす。床の上に、彼女等のショトパンツだのシュミーズだの、スカートだのが、部屋いっぱい散らばっている。黒い丈夫そうなバンドが見つかった。

「さあ、今度は少しきついぞ。奴隷船から逃ぎ出そうとすれば、こうだという見せしめのためだ。覚悟は出来たか。」と言うと二人は黙って天井を見ている。瞬間！

ピシッーピシッーピシッ

「アウッ……。」

「ムッ……。」

ふつくらとしたお尻と背中にうまくあたると、歯切れの良い音がする。私はなおも打ち続ける。

ピシッピシッ……ピシッピシッ……

二人は「やめて、やめて。」といっしようにけんめい、さるぐつをされた顔を横にふる。

「なに？ まだまだだア。よし。」

と言うと又思いきり打つ。激しく又首を振る。さすがの秋子も痛々しい眼付きで見ている。まったくこのところ春子も夏子も、身体をくっつけられて、ぐるぐる巻きに縛られてはどうしようもないのだ。声に出ないし、動け

るところは頭しかない。

「もうやめてくれカネ？」と言うと「ウンウン。」と二人はそろって首をたてにふる。

「じゃあ。もっと打つか。」

とぼけて言う二人はもう身を、もがくだけだ。ひとまとめにされた四本の手首が、いっばいに引き上げられてがんじょうに縛られている。私は二人の背中にかかっているバンドをはずし、もう一度ずつ思いきりムチをふるった。ブーンとうなりをたてる。

ピシッ……ピシッ……

二人はもう完全にグロッキーだ。つないでいる綱の端をサツと解くとスルスルとゆるんで、二人は芋虫のようにドウと床に倒れる。少しの間動いていたが、やがて動かなくなつたのでさるぐつわだけは取ってやった。

「ハアハア。」と二人は、互いの顔をおしつけて、互いの肩から首を出して息をきらしている。私は次に秋子もやってやろうかと思つたが、椅子の中で、すくんでいるので、それはやめにして、風呂場であそばうと思いついて、彼女等を、そのままにして風呂をわかし。手をふきながら出てくると、三人のナワをほく。

「さあ、みんな。風呂にでも入って汗を流そ

う。」

「ひどかったワ。先生ったら……。」

解かれた二人は手や足をさすっている。その時、私はかがんで集めたナワを巻いていたのだ。と突然、春子が、

「それっ。先生を縛っちゃえ！」と三人は飛びついて来た。そのひょう子に私は倒れてしまった。誰だかわからない乳房が、顔にかぶさる。シャツは破れる。

「反乱だア。」

と誰かの声がして、キヤアキヤア私に組みついてくる。私は縛られてやろうかナと思っただが、まず夏子の手首を掴むと意外に抵抗しないのに気付いて「ハハーン」と思って次々に縛りあげていった。春子の足を縛った時、私の足も秋子が、いっしょうけんめい縛っている。でも腕は自由だ。必死になっている秋子をつかまえると「キヤア」と言って逃げ出してしまった。残ったのは秋子一人だ。

「アコちゃん、早くっ。」

私はすばやく、半縛りの足をほどこにかか。秋子も負けずに春子の手をほどこうとしている。私の方が早い。気付いた秋子は逃げ出す。

「アコノがんばって！」

夏子と春子が叫ぶ。秋子と私の追いかけて。彼女は、とうとう部屋の隅に追つめられて手を震わせている。

「もうだめですぞオ。」

私は、紐を手いっぱい広げると彼女に飛びついて行った。

「いやーン。」

彼女は私の腕の下をうまく通り抜けると今度は、ドアを開けて風呂場に逃げ込んだ。シメタノ。私は、ようやくそこで秋子を捕える。と、すでに用意しておいた竹竿に両手を前に縛りつけると足はそろえて水道の蛇口に結んで、仰向けに寝転ろがした。竹竿の両端をしつかり固定させると、Y字型になった秋子は「先生には、かなわないワ。」と笑いながら言う。私も笑いながら、洗面器に少しぬるくした湯をザブッとかけてやった。

「ヒヤァッ。」

向うの部屋で夏子と春子の声がする。

「アコちゃん。捕まったのーっ。」

私は、意気揚々とアトリエにもどると二人の足を解いて後手に一本の紐でつないだ。

「反逆など企だてた奴は誰だ。皆同罪だ。」

と二人を風呂場まで連れて来た。

「ヤード。アコちゃんの恰好！」

「案外いい身体してんのネ。」

「ひやかすのはやめてよ。」

と太モモをモジモジ動かす。

「私、アコのとなり。」

私は三人共じ恰好に並べて柔いタオルや手拭で両手、両足をそろえてゆわえた。私もこの時ばかり湯ぶねの湯を少し水でうめて、三人めがけて、ザブンザブンとかけてやる。三人共、キヤツキヤツ言っ縛られているくせに大はしゃぎである。

「先生エ。もっとう。」

「夏子も。」

「秋子も。」

私も面白くなって、めくらめっぽうにかけ。やがて、タイルばりの風呂場が湯気でいっぱいたちこめる。

——俺もまだ若い彼女らも

これからいろいろなこと
によるこんだり、泣いた
りするのだ。

なんと、彼女らは健やかに育っていることだ！
それにひきかえ自分は
でもない。

世の中にこんな楽しい
ことがあったのだ——
私は妙に感傷的な気持ちになった。
湯気が、ゆるやかにたちこめて来た。

輝くように、むっちりとした肌、小麦色の
健康色にはちきれそうな肌、白くて静脈のす
けて見えそうな肌。
どれもこれも、湯水の洗礼を受けて、から
だいっぱい、水滴を弾きかえして、はしゃい
ると、手のひらにいっぱい泡を立てていた。
湯気にむせながら。

〔新版〕女体悦虐フォト七十選

Z組七十集

大手札判印画紙(9×13㎝)焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1	ゴム猿轡	(梨花悠紀子)
Z 2	囚女六三号	(柳初子)
Z 3	猪手足吊り	(梨花悠紀子)
Z 4	逆エビ縛り	(大塚啓子)
Z 5	ローソク責	(東浦ひかる)
Z 6	豊臀責め	(絹川文代)
Z 7	淫らな縛り	(愛川悦子)

Z 8	ザリガニ	(梨花悠紀子)
Z 9	引き回し	(東浦ひかる)
Z 10	全裸後手縛	(加茂良子)
Z 11	豊満被虐	(大井小夜子)
Z 12	黒髪いじめ	(大塚啓子)
Z 13	足吊り嬌態	(絹川文代)
Z 14	黒縄高手小手	(四方清美)
Z 15	強烈荒縄責	(梨花悠紀子)
Z 16	喰込む白縄	(東浦ひかる)
Z 17	くの字の足指	(桜井葉子)
Z 18	裸身の受縄	(前本妙子)
Z 19	無茶な猿轡	(竹野ひろ子)
Z 20	ハリツケ	(梨花悠紀子)
Z 21	臍なぶり	(大塚啓子)
Z 22	逆手足吊り	(東浦ひかる)
Z 23	美肌いじめ	(絹川文代)
Z 24	鼻ゼメ仰向	(加茂良子)
Z 25	恐怖の瞬間	(若原明子)

Z 26	火箸責め	(梨花悠紀子)
Z 27	全裸海老責め	(熱海容子)
Z 28	ベッドの痴態	(絹川文代)
Z 29	足の裏操り	(大塚啓子)
Z 30	閨の女体飾	(竹野ひろ子)
Z 31	首絞めゼメ	(大塚啓子)
Z 32	鼻孔責め	(若原明子)
Z 33	悦虐放心	(梨花悠紀子)
Z 34	手枷足ぐさり	(四方清美)
Z 35	寝室のプレイ	(花本京子)
Z 36	猿轡の妙味	(梨花悠紀子)
Z 37	首縄柱しばり	(絹川文代)
Z 38	巻煙草責め	(大塚啓子)
Z 39	尻立てポーズ	(桜井葉子)
Z 40	エビ責	(東浦ひかる)
Z 41	彼女の好物	(竹野ひろ子)
Z 42	ワンピース	(花本京子)
Z 43	荒縄竹棒責	(梨花悠紀子)
Z 44	浣腸責ポーズ	(大塚啓子)
Z 45	鏡に映す裸	(山路ミヨ子)
Z 46	苦悶に喘ぐ	(大塚啓子)
Z 47	酔後の緊縛	(絹川文代)
Z 48	逆十字エビ	(大塚啓子)

Z 49	全裸猿轡	(東浦ひかる)
Z 50	欄間宙吊り	(梨花悠紀子)
Z 51	全裸逆エビ縛	(絹川文代)
Z 52	荒縄仕置室	(梨花悠紀子)
Z 53	庭園の惨虐	(館典子)
Z 54	被虐の果て	(大塚啓子)
Z 55	痛めた全裸像	(大塚啓子)
Z 56	鏡の中の全裸	(愛川悦子)
Z 57	セーラー服	(梨花悠紀子)
Z 58	檻の緊縛裸体	(愛川悦子)
Z 59	全裸股間縛り	(絹川文代)
Z 60	オムツ逆エビ	(田中芳代)
Z 61	胴縄の重量感	(桜井葉子)
Z 62	ゴム人形	(竹野ひろ子)
Z 63	縄トゲ責め	(梨花悠紀子)
Z 64	女大生恥態	(田中芳代)
Z 65	白肌全裸縛り	(絹川文代)
Z 66	強制的開股縛	(絹川文代)
Z 67	強烈的全裸晒	(愛川悦子)
Z 68	亀甲乳房責	(梨花悠紀子)
Z 69	ベッドの悶え	(愛川悦子)
Z 70	恥しさに耐えて	(館典子)



最近大映で封切られた市川雷蔵、新人藤村志保主演に依る「斬る」と云う映画をみたが私の様なマゾ愛好者、美女決闘讃美者にとってまさに垂涎に値する数カットがあり、二度ならず三度も見に行つたものである。

映画の筋はとりたてて目新しいものではなく、数寄な運命の下に生れた一青年剣士の短い半生を描いたものだが、そのトップシーンと中程に、私のアイドル「大奥裸女決斗」張りの格闘場面があり、近來の映画には真に珍

映画に観る

アブ空想の世界

中西均哉

《大映映画「斬る」のシーンより》

しい貴重な数カットであつた。

トップシーンに正装した美しい奥女中が一人、廊下を皆足袋の色もクッキリと静々と歩いてゆく。(新人藤村志保、劇中富士子と云い寢所に休んでいる大奥の局の命を奪いに忍んでいるところ)

やがて襖をスーと開いて部屋の中へ入ると広い美しい部屋の中央部に、これ又贅沢な寝具と真白な寝巻につつまれた目指す局若松が静かに眠っている。

富士子は音もなく襖を閉め終るとピタリと正座して、ジーと鋭い眼差しで寝ている若松の局を眺めていたが、「国の為、お部屋様のお命頂戴仕ります」と凛とした声で叫ぶと素早く腰帯の間に手をやるやキラリと短刀が抜きはなされていた。

若松の局は、その声にハッと眼を覚すと、本能的に逃れようと身を起すが、直ぐ眼の前に必死の形相の富士子が短刀を手に迫っている。ここで殺そうとする者、殺されまいとす

る者との死もの狂いの格闘が行われる。

若松の局は懸命に逃れようとするが、富士子の切先に鋭く肩を切られ、腕を突かれ段々に弱ってゆく。庭の方まで逃れるが、ついに追いつかれ、ものに蹠いてドウと仰向けに転ってしまう。

富士子は得たりとばかりに、あわてて起き上ろうと蹴く局のお腹の上あたりにズシッとばかりのしかかるや、動けないようにしっかりと押さえつけ「エイッ」と短刀を咽喉めがけて突き刺す。「ギャッ」と悲鳴を上げて富士子の袂の袖を引きちぎらんばかりに掴んで哀れな最後の抵抗をしていた局の指がバラバラと解れる。

富士子は、そのままの姿勢でかなり長い間止めを刺して、局の顔を上から見下していたが、もう大丈夫と思ったのか、グッと短刀を咽喉から引き抜き組敷いていた局の身体から立ち上る。

この種のシーンとしては、かなり長い時間であり、マゾ派にとっては貴重なものであったが、何せ映画の事だから、ある種の制約があり、若干もの足りなさを感じるのは、止むを得ない事かも知れない。

そこで私の空想癖がもくもくと頭をもたげ

てくるのである。

庭まで逃れてきた若松の局は、ものに蹠いてドウとばかりに転んでしまう。あわてて起き上ろうとするが、そうはさせじと素早くのしかかってくる富士子の若さに張り切れんばかりのビチビチした身体に圧倒されそうになる。

手傷を受けたとはいえ、大奥の局、多少の武芸は心得えいる。「えいッ」と紅唇をついて出る烈迫の気合と共に、グッと跳ね返し今度は局が上になってのしかかり、富士子の短刀を奪おうと必死にもみあう。

富士子は組敷かれながらも、短刀だけは渡してはと、左手で局の衿元を引蹴み腰と脚に全力をこれでガバッと跳ね返す。こうして上になり下になり、文字通り命をかけての組打ちとなった。

両者の着物は汗と泥と血にまみれ、美しかった髪の毛も今はバラバラに乱れ、正に凄惨の一語に尽きる決斗である。やがて、この決斗にも勝負が決まる時が来た。

富士子が若松の局をズッシリと組み敷いていたのである。善戦空しく局はもう精も根も使い果していた。自分の身体の上に馬乗りに跨っている富士子の重い身体を跳ね返す力は

なかった。所詮は体力の相違であろうか、富士子の若々しい逞ましい身体は、大奥の局という自尊心、意地を完全に圧倒し征服してしまったのである。

富士子は勝ち誇った様に腰を左右にゆすつて跳ね返えさせないように圧しつつ組み敷き、短刀の鋭い切先をピタリと咽喉に押しつけてしまった。

局は顔を仰向けにのけぞらせ、少しでも短刀の切先から逃れようと蹴きに蹴くけれどもこうズッシリと組み敷かれてしまったのは、どうにもならない。

「如何に殿を咬す悪女とは申せ、大奥のお部屋様ともあろう御人、この期に及んで見苦しき真似をなされますな、不憫ながら自分からの悪業の報い、貴女様の首級、この富士子が確かに申し受けまする」

と言うと、もう一度短刀を振り上げるや自分の尻の下で口惜しように足掻く局の咽喉元へジリジリと下してゆく。局はなおも富士子の短刀を握っている右手首を左手で必死に支え、押し返えそうと最後の抵抗を試みる。がどうしてもならない、鋭い短刀の切先は眼前に大きく迫っている。

(ああ、妾の命もこれで終いなのか、この奥

女中の手にかかって首を上げられてしまうの
だろうか、そんな馬鹿な、そんな馬鹿なこと
があつて、たまる……ウウツ

咽喉元に冷たいものが触れたと同時に、焼
火箸を突き刺された様な熱痛が走って消えて



〈読者のアイデア〉

緊縛カレンダー

『一年の女』

大 中 忠

「一年の女」と題する写真集の、こんな企
画はいかがでしょうか。特にカラーで。

○一月 雪

縛られて積雪の上に横たわる女。赤の腰
巻一枚、後手。乳房を片方、雪に没した姿
指先が青白くなりかかっている。

○二月 みそぎ

白衣一枚で両手を上に伸して縛られ、滝

いった……

富士子は短刀の柄を拳も通れとばかり深々
と止めを刺し通したまま、断末魔の苦しみに
足掻く局の顔を上からジッと見下していた
が、やがてガツクリと動かなくなったのを確

に打たれる。杭に縛りつける。髪は長く垂
らしたまま。前景にみぞれを降らすと尚良
い。

○三月 雛 祭

十二単衣、(もしくはそれに似た衣裳)
で後手に縛られ、台上に坐るお姫様、頭に
は冠、前景に桃の花。

○四月 入 学

かめると、スーッと短刀を引き抜き

「お約束通り首級頂戴つかまります」

と言うと、左手で局の乱れた前髪を引掴み

血にまみれた短刀を局の右耳の下あたりに当
てがい、ググクと刺し通しながら、右に引回
す。何条たまろう。局の柔い嬬やかな首はゴ
ロリと胴体から斬り放されてしまったのだ。

かくて両美女の血みどろな格闘も勝負が決
したのであった。勝者と敗者。勝負の世界の
なんと厳しい事であろうか。勝った富士子は
力の限り争った末に首級を上げたよろこびと
興奮に豊頬を赤らめ、瞳はキラキラと星のよ
うに輝やき膝元にころがつている局の首級を
勝ち誇ったように見下している。

敗れた局は必死の抵抗も空しく、ついに身
首がところを変えられ、首のない胴体は今な
お、どっかりと勝者に組み敷かれ、無惨にも
掻き切られた生首は勝者の優越感、征服欲を
満たす為、冷たく地面にころがされているの
であった。

やがて我に返った富士子は、局の血と泥に
まみれた着物を短刀で切りさくと、左手で局
の首級をムズと掴み、しっかり押さえながら、
グルグルと押し包むのであった。

富士子の姿は闇に消えて行った。後には首

セーラー服(新しいもの)の女学生。後手に縛り上げられて道を歩く、お河童か、三つ編みの髪がよい。

○五月 端午の節句

鯉のぼりと同じ柱に逆吊りにされる女性。又は鍾馗さまに責められる女も良い。

○六月 梅雨

庭の立木に立ったまま後手に縛りつけられる女、必ず全裸。なめくじ等をはわすと面白い。勿論、雨が降っていること。

○七月 登山

革の登山靴、長靴下、ショーツ(デニムなどの荒い布地)袖をまくり上げた色物のワイシャツ、汚れたチョッキ、重いリュック。両手を腰の後で、ザイルで縛られ腰にも巻かれている。この姿で山を登る。

○八月 海水浴

水着姿(競泳に使う地味なスタイル)で、飛込台に磔。足首の辺りを波が洗う。乳房の下にも縄がかかり、体を持ち上げている。

○九月 台風

高台(海に面した所)の立木に縛りつけられた女性。肌着一枚。それもボロボロになっている。正面から強い風と雨、髪が激しく後に流されている。

○十月 ハイキング

青空の美しい丘の上。女性はショーツに半袖のブラウス、横にぬいだカーディガン。両手は後手。あぐらをかいて足首を縛り合わされている。赤いソックス白の運動靴。前に缶詰やコップ、食器など。

○十一月 結婚

洋式の花嫁白い衣裳の上から後手に、がんじがらめ。白い布を敷いたヴァージン・ロードをうつ向き加減に歩く。

○十二月 クリスマス

サンタクロースの衣裳。ただし赤の短いスカートにブーツ姿。クリスマスストウリーに両手を拡げて縛りつけられ、脚も、太ももと足首を揃えて縛られている。トウリーに玩具や、ローソク、前にも玩具。女の子を配すれば、もっと良い。

のない哀れな死骸だけが薄暗い地面に残されていた。

私はこの映画を観て、何か爽快な満足感に陶醉する自分を見出したものである。

一つには美しい女性同志が命を掛けた格闘の末、遂に相手の止めを刺すまでの躍動美が強く私の視覚を満足させたものであり一つは最近「神奈川県児童福祉審議会」等より兎角の要請があったとの事から、若しかすると「大奥裸女決斗」「女性組打ち」等が何らかの形で圧迫を受け、近い将来、全く廃止の破目をみなければならぬのではないかと云う不安感がきれいに除去された喜びである。

「映倫」と云う自他共に認める審議会が、映画「斬る」を通し全国幾百万の観客層に美女決斗シーンを提供している以上、奇クに於いても、前向きな姿勢で我が道を歩むに誰憚るところがあるのか。

裸女の血斗、血斗の末挙げられた生首、等大奥を背景とした美女の決斗のイメージに対して関心を持つ私達の念願を、どうか誌上に具現して下さいよう期待する。

同好の志を共に益々奇クの成長発展を祈りたいものである。

△フイクション△

ガラスに憑かれた男

二 木 良 雄

○

春の陽光を受けて真白に輝く白砂に、なだらかな彎曲を描いて瀬戸の内海がヒタヒタ柔くよせている。

見上げる崖に松の木々がヒシとよりそって此処では、もう早い蟬が鳴いていた。

自慢のポニーテールを、さわやかな海風になびかせて、青い岩の上にたったトシは、崖の小道を登る人影に、憎しみの瞳を投げっていた。

——いやな奴ったら、ありやしない。誰があんな事なんかしてやるもんか——

露骨に嫌悪の情をみせて、その後姿にトシはつばを吐きかけた。昨夜、夫の富吉は大変な事を提案したのだ。

自分の身体に、こすれば良いじゃないか、自分の身体だけじゃ面白くないなんて、今じゃ、あたしの身体までにさ、あんなものをこすりつけやがって、本当にあんな事を好く男ってあるのかしら。——

トシはくさくさして、やけに頭をかいいた。そのとき、「トシさーん」と呼んで隣の穴から栄一が頭を出してきた。

崖の岩肌に海水が永い間に浸食して出来た

らしい洞窟が幾つかある。それに何日の頃からか、家のない人が住み出して、今ではその中の二つを富吉夫婦と栄一が一つずつ使っているのだった。

栄一も富吉と同じく失業者だが、此の方は未だ独身だ。

「どうしたね、そんな処で。そりゃそうと、昨夜は大変だったね、皆聞えたぜ」

「穴の外で聞いていたんだろう。本当に男って皆、そんなんだね、あーイヤダイヤダ」

「ガラスの粉袋で、あんたの身体をさするんだって聞いたぜ。トシさん、やってもらった

かい」

栄一はにやにやした。

「誰がそんな。本当にあの変り者にや、泣か

されるよ」

「富さんは何故、あんなことをするんだい、

富さんは、身体中、ガラスの粉だらけじゃな

いか」

「知らないよ、気持が良いんだ
ろうよ」

「あいつは、ガラスビンの破片
(かけら)を毎日毎日破ってい
るね、よく根の続くことだよ。

あれを袋に入れて身体をこする
なんて、どうかと思うぜ、あと
で皮膚に入った粉を針でつつき
出すんだってね、本当かい」

栄一は意地悪くトシの顔をの
ぞいて笑う。トシはぶいと外を
向いた。

昨夜からの富吉の願いを、と
うとう聞いてやらなかった事を
思い出して、またつばを吐いた。

「トシさんだって、万更でもな
いんだろう。そら、其処にガラ
スの粉が喰っついてるぜ」

栄一はトシの明けっぱなしの
胸を指してからかった。

「止してよ、もういやだよ」

胸をさすりながら、トシはその時、ふっと

栄一の若い顔を見つめた。栄一が彼女にひた
むきな好意をよせている事を、トシは知るす
ぎるほど知っていた。

トシも時々栄一を富吉と比べて考えている
事がよくあった。だが、それだけの事だけだ
った。

——女が望めば、どんな男でも厭とは云わ
ない筈——。

今、トシはそんな事を考えていた。

——もう、あの男と別れても良いな——。

富吉の事を考えてみる。

「よくねていないのだろう。俺の穴に来たら
どうだ。サントリがあるぜ」

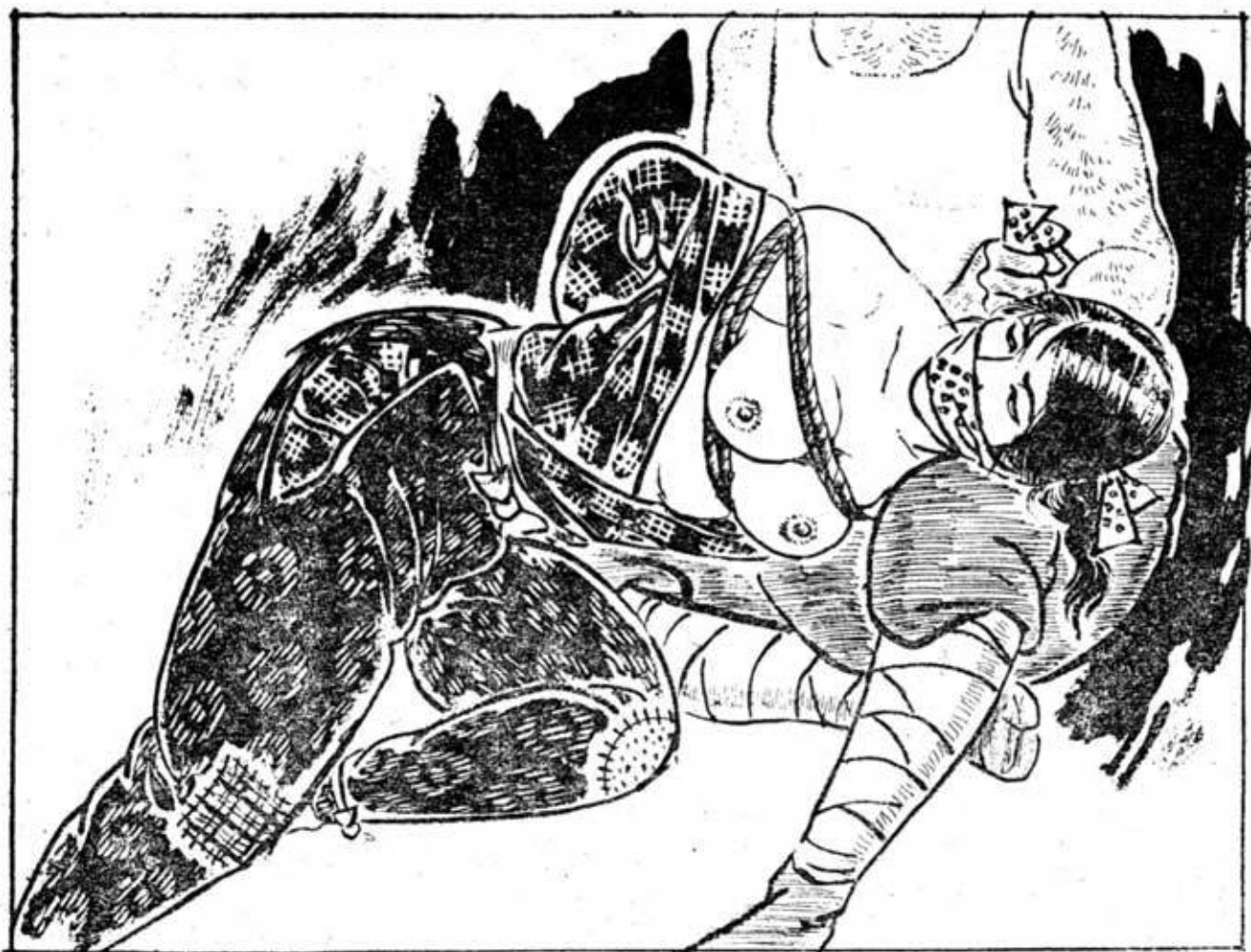
栄一は卑屈な笑みをうかべて、トシの手を
とった。トシはその手を払わなかった。彼女
の気持はきまったらしい。

「俺はガラスを使わねえからな」

栄一は、トシをすでに手に入れたように言
う。

「止しとくれ、その話は——」

トシはさっさと先にたった。そして自分た
ちの穴の前になると、呆氣にとられている栄
一を目でまねいた。



それから三日目の夜。

雨はなかったが、風の強い晩だった。

裸ローソクの、ほの暗くゆらめく穴の中から男女の声がくぐもった。

「お前さん、何も括らなくても、良いじゃないか」

「やかましいやい、畜生、今日は、どうしてもやるんだ」

何をやるというのだろう。きりきりと後手首に巻きつく荒縄にトシはうめいた。

荒縄は首を回って高手小手にした手首でとめられる。ギリッと荒縄がのどに喰い入ってトシの目がとび出すようにグッと開く。

たしかに今宵の富吉は、いつもと違っていい。すねにきずを持つトシはどきりとした。

今日のトシは縛られているのだ。トシが縛られたら、誰が富吉を楽しめますのか、誰がガラス粉入り袋をすりつけるのだ。富吉の体へ、そして誰が針をさすのだ。

トシの面をかすかな恐怖がはしった。栄一との事がとっさに脳裏をかすめ、まさかと思った。

「あんた、どうしたの、今日は？」

口を手拭で掩いにくる富吉の手をあごで防ぎながら、トシはくぐもり声で富吉の様子を

うかがう。

せせら笑いをうかべた富吉は、ぎりっと手拭いでトシのあごを一しめ締め上げると、

「聞きたいか、俺を盲だと思ってやがるのかやい、三日前の昼、お前、ここで何にした、隣の栄一と何していた、やい、言ってみろ」

ああ、富吉は知っていたのだ。

裸ローソクの淡い光が仁王立ちになっている富吉の姿を、デコボコだらけの洞窟の壁にいびつにうつし出している。

その目は青い火がもえているようだ。一

「だって、お前さん——」

あわてたトシはベン解しようとして、絶句した。狂気じみた富吉を意外に思ったのだった。たった一度の過ちがばれたという事よりも、あの痴愚で気の弱い富吉が、この様に怒るとは意外だった。

口尻によだれをためた暗緑色にゆがんだ、その顔をみている中に、恐怖感がみるみる倍加してきて、トシは思わずヒィッと声を上げてしまった。

これがいけなかった。ひき込まれるような富吉はニタリとするとヒロポン中毒者特有のやせた黒い手にトシの黒髪をぐっとつかみ込む。富吉にとっては、トシの浮気など、実は

どうでも良かったのだ。

原始時代と同じ穴居生活をしていると、人間としての感覚が原始時代にもどるのか、富吉も又、文明社会の道義やしきたりを失っていた。彼にはそんなものは必要なかった。ただ原始人に通ずる直截的な官能があるだけだった。

富吉はあの日、トシに行おうとして果さなかったものを、今、行おうとしているのだ。彼はこの好機をとらえた。逸してはならぬ。今こそ。これが彼の偽装の怒りの原因なのだった。その怒りの形相の裏に、千載一遇の好機を得た彼の喜悦の面が、ニタリニタリと舌なめずりをしているのだ。

富吉の身体はガタガタと音を立てる。わし掴みにした毛髪をねじると、トシの顔をあおむかせた。

「分っているだろうな、仕置をしてやるぞ」

片手でトシの太ももを強く叩いた。

「あー、あんた、本当にガラスを使うつもりなの、ああ、許して、許して、ねえ」

トシは泣きわめき騒いだ。あごを激しくうごかして手拭を外すと更に哀願した。

「あんた、あんたったら、もうしないから、かんにんして、ねえ、お願い」

必死に足をねじり合せて縛られた手首をねじって反りかえる。引きたおされて、なお起き上ろうとするトシの頭に片足を掛けて、わらの中にグツと踏み込むと腹の上に逆またがりに馬のりになった。

富吉の手はかたわらの木綿袋をゆっくりと取り上げる。コンモリと繁った松林を頂いた海辺の崖の下に汐騒の音にまじって、するどい女の悲鳴が断続する。

○

翌朝、富吉がいつものようにガラスのくずを拾いに出ると、トシは青ぶくれた顔をかまわずに穴の外に栄一を呼び出した。

「何時まで暗い処にいるんだい、早くおいでよ、外は良い天気だよ」

穴から這い出てきた栄一は、トシの明らかに打たれたあとのある顔をみると、いつものような卑屈な笑をうかべた顔を少し緊張させた。

「やられたんだよ、昨夜、とうとう」

トシはギリッと歯を鳴して涙をうかべた。

栄一は「やっぱりV」といったような顔をして、黙ってトシの顔をじろじろ眺めた。

「口惜しいよ、あんたのおかげだよ」

「俺は知らねえよ」

「何を言ってるのさ、あのことがばれたんだよッ」

栄一はさすがにあわてた。

「で、富さんは、俺の事を何と言ったのか？」

「殺してやるとき」

「何にッ、誰が。あんなヨイヨイに——」

言葉とは反対に栄一の声はふるえてしまった。

やらなければ、やられる。——この簡単な

法則は彼等の場合とて例外ではない。

姦夫姦婦は協議した。

その夜、トシは気嫌よく富吉にミリンをまぜた焼酎をのませた。

酔ったところを忍んできた栄一と二人で用意の棒でメッタヤタラと打ちすえて、半死半生の目にあわした富吉を、俵でも締めるように足を掛けて荒縄でグルグル巻きに縛り上げてしまった予定の行動である。

——もう大丈夫——

姦夫姦婦は顔を見合せてニタリとした。

片手にローソクをかかげたトシは、笑いが止まらぬといった顔で、そのしつとりとしたなめらかな足の裏を、富吉のひげだらけの顔の上にのせた。

「おい、富さん、こうされて気分はどう？」

昨夜は、よくもあたしを馬鹿におしだね。亭主だと思って我慢していりゃ、いい気になって、よくも、よくも——

トシは力をこめて、ギューギューと富吉の顔を踏みつけた。

そこへ栄一が昼間富吉が集めてきたガラスの粉を入れた木綿の袋を持ってきて、「これをどうする？」

と、けしかけるように笑いかけた。

「ガラスの粉を身体中にまぶしてやろう。お前さんの大好きな遊びなんだよ、たんと、たんのうおし。それで死ねたら、お前さんの本望だろう。さあ、目から始めるよッ」

死んだようになっていく富吉にも、それが聞えたのか、トシの足の裏でびくりとする。

悪魔の舌を思わす裸ローソクの赤い火が、チラチラともれて岩壁を這う。鬼気は洞窟内に満ちて、今まさに救いのない折檻が開幕されようとしている。

やがて、洞窟には号泣と狂笑とが充満することだろう。

(終)

最新代理部分讓品案内

女体緊縛フオトの部

一、//大の字//逆さ吊り

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(つり) モデル 梨花悠紀子

責めの中で吊りが一番好きだという梨花悠紀子を逆さ吊りの大の字に両足をいっぱいに広げさせた強烈な吊り責めフオト。

二、立木 //宙縛り//

大中判印画紙 三枚一組 四〇〇円

略号(くた) モデル 梨花悠紀子

荒縄が全身にぐるぐると喰い込み、立木に高々と宙じばりになった悠紀子の足場のない足先だけが徒らに苦痛にうごめいている。

三、凄惨 //乳房責//

大手札印画紙 三枚一組 二五〇円

略号(とい) モデル 梨花悠紀子

ヒョウタンのように根元を縄でくびられてもうこれ以上大きくならないという極限まで虐たげられた乳房の大写し写真。

四、//妊婦の緊縛//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(にむ) モデル 某女

読者の紹介で得た妊娠中の若い女性をモデ

ルとして、その胸や腹を緊縛した写真。誌上に掲載しないという約束の稀少作品。

五、//全裸の仕置//

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号(すお) モデル 東浦ひかる

マゾの遍歴から。より強烈な試練の庭に立ちたいと願う東浦ひかるの最も新しい生感をここに、あからさまに紹介したいと思う。

女体切腹フオトの部

一、血紅女体自害

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひち) モデル 大塚啓子

白鞘の短刀を豊満な下腹へぐさりと突き立てて、きりりと臍下を切り裂き、溢れる血汐がしたたり落ちる凄まじくも美しい光景。

二、女体切腹マンダラ

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(あま) モデル 甘木春子外

あるマニヤが同好者の女性をモデルとして野外にて自らその女性の腹部を切り裂いてゆく有様を撮影した血紅利用の切腹写真。

三、悲愴女体自決

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひい) モデル 大塚啓子

真白い肌に突き立てられる氷のような九寸五分の脇差。臍下に、乳房に、咽喉元に最期のとどめは容赦なく加えられてゆく。

四、哀艶女体割腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(かつ) モデル 梨花悠紀子

正面向いて両膝を立て、或は右膝を一步踏み出して全身の力を両手にこめ、ううう、とばかり無垢の柔肌に突っ立てる刃先。

五、凄惨血紅女体立腹

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(ひさ) モデル 大塚啓子

柱を背にして立ち壮絶な立腹を演じるさまを豊富な血紅を用いて刻々と変りゆく経過と苦悶と哀切の表情を捉えた血汐のフオト。

六、苦悶切腹表情

大手札印画紙 五枚一組 五〇〇円

略号(せく) モデル 梨花悠紀子

切腹によって起る激痛による苦悶の表情を真迫的に描写しようとして、顔面は勿論、手足の指先に至るまで刻明に写した作品。

フェチ・フオトの部

一、バンド着用フオト

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号(めい) モデル 梨花悠紀子

メンスバンド・マニヤ待望のバンド着用のありさまを刻明且つ鮮明に美しいモデル嬢によって、あらゆる場面をごらんいただけます。

二、バンド着用の縛り（後手）

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号（めろ） モデル 梨花悠紀子

後手高手小手にメンスバンドを着けられた女性の口も鼻も、猿ぐつわとしての替ゴムがムンムンするゴム特有の臭気を放っている。

三、バンド着用の縛り（前手）

大手札印画紙 四枚一組 三〇〇円

略号（めは） モデル 梨花悠紀子

バンドや替ゴム着用の部分を殊更鮮明に大写しするための前手しぼりによる脚拳ポーズ等、のびやかな下肢の動きは美しい。

四、女性の六尺褌

大手札印画紙 五枚一組 四〇〇円

略号（ろく） モデル 大塚啓子

晒の六尺褌をきりりと締めた裸女が、正面背面、横臥、側面とフンドシ着用の女体をあらゆる角度からキャッチしたマニヤ向作品。

五、ゴム・マニヤ

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号（こむ） モデル 梨花悠紀子

ヌメヌメとした生ゴムのタッチとあの特有の臭気にむせびながら、頭の先から手足の先までゴムづくめのゴムフェチの女体。

六、メンス・バンド

大手札印画紙四枚 一組 四〇〇円

略号（めす） モデル 梨花悠紀子

両の自由を奪われてしまったのは、もう強制的に装着させられたメンスバンドをはずすことも出来ない。鮮鋭なレンズはシワの一つも見逃すまいとフィルムに印してゆく。

七、ゴムカバー着縛り

大手札 三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号（かは）

ぬめぬめとしたアメゴムのオシメ・カバーが身の自由にならぬ下半身にはかされてこれから排泄の汚辱にむせばんとするカバー・プレイの三場面。ゴムの臭気が鼻の先に匂ってくる迫力。

八、脱がされたバンド

大手札 二枚一組 二五〇円

梨花悠紀子 略号（めに）

見るのは勿論のこと、手にとるのさえ恥しいメンスバンドを他人の手で脱がされるといふのは、なんといういらだたしいことだろう。でも、後手に括られてるんだもの。仕方がないわ。

九、アテゴムの猿ぐつわ

大手札 二枚一組 二五〇円

梨花悠紀子 略号（めほ）

後手にしぼられた身体には、メンスバンドをはかされ、口には、バンドのアテゴムが鼻も口もすっぽりと掩いかぶさって猿ぐつわをかまされている息ぐるしくも又、悩ましい陶酔のひとつとき。

Mフオトの部

一、足で戴く珍味

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号（くさ） モデル 絹川文代外

足の指に挟んだお菓子をもそのまま直接口で受けて戴くのは、マゾヒストの夢にまで描いた幸福の構図ではなからうか。

二、靴の下にうごめく

大手札印画紙 二枚一組 二五〇円

略号（くつ） モデル 絹川文代外

鋭く尖ったハイヒールの靴先が、或は踵が口の中へぐつと押し込まれる汚辱の瞬間。床に転った顔を踏みにじる非情な靴の裏。

特殊趣向フオトの部

一、絞首処刑

大手札印画紙 三枚一組 三〇〇円

略号（こう） モデル 絹川文代

後手に縛られたフンドシ一本の裸の女首には絞首刑の縄が垂れ下り、脇腹には白刃が突きたてられて血汐が溢れる苦悶の形相。

二、鼻料理

大手札印画紙 六枚一組 六〇〇円

略号（はか） モデル 大塚啓子

若い女の鼻に対して、これでもか、これでもかと、いろいろの苛虐が手をかえ品をかえて加えられてゆく鼻マニヤの作品。

◎お申込みは「略号」にてお願いします。



○ 日一日と秋らしくなつて参りました。KK愛読者の皆様、そしてゴムマニヤの皆様如何にお過して御座居ますか。私は京都市内に住む二十六才の独身BGで御座居ます。KK誌の再発行されました時、「汗」と云うテーマで大人用オシメカバーを着用なさるお話が記されて居りましたが、以来本月十月号まで、ずっとKKを拝読致して居りますが、私同様のマニヤの方が意外にも多く居られるのにびっくり致したり、又反面うれしく思つて居りました。十月号に「ゴムマニヤのプレイ」と題して

発表なさいました京都市右京区にお住いの柳川幸子様始め、全国のゴムマニヤの皆様、親しいお便りお待ち致して居ります。又、カバーが御入用の方が御座居ましたら、お便り下さいませ、四、五枚位でしたら、余分に所持致して居りますから。ではマニヤの皆様、今後共どうかよろしく。(京都市中京区八佐藤良子V)

○ 貴所益々御清栄のこととお慶び申し上げます。降而、私事多年貴誌を愛読する者ですが、気付いた点や希望を申し述べます。御参考になれば何よりです。一時現在すたれる傾向にあると云われますが、男性を悩殺して狂気させる女の下着、「おこし」についての取材記事や写真を多くのせて欲しいことです。小説「宇宙のどこかで」なども女囚には輝より、サラシやネルの「おこし」をさせるようにしたら面白いと思います。僕はネルの「お腰」が大好きで、妻には寝むときは、いつも必ず真赤なもののピンク、時にはデシン、サラシと浴衣地の寝衣の下には「おこし」をさせるようにしています。すたれかけたといつても、それはむしろ地方のことで、秋冬は難

波、曾根崎、梅新など大阪神戸辺りでは、素人の娘さんや若奥さんで桃色のネルの「おこし」をしているのを非常に多く見かけますし、夏分、東京、岡山、広島あたりでは、浴衣の下にサラシやピンクデシンの「おこし」や「蹴出し」が圧倒的です。白い浴衣の下帯から五寸乃至一尺位が上のサラシ部分で丁度お尻のすぐ上あたりから、濃い桃色の「おこし」がにじんだり、すけて見えるのは、何とも云えないたのしい気持です。又、黒の「明石」の下に「緋じりめんの蹴出し」の赤が京阪神の粋筋の若い人に時に見かけます。通勤途上に、三十過ぎの美人の若奥さんの家があり、その人は真夏の

ほかは、いつも桃色のネルのお腰を巻いています。時には、その上に真赤な都おこしをしたりしていますが、若い人のおこしはいいものです。色気があって、男の本能を刺戟するこんな下着が地方で見られなくなるのは残念なことです。有吉佐和子さんや鯨岡阿美子さんのような知的な人も長じゅばんの下は「じゅばん」と「おこし」をいつもしていると自らいっていますが、本当は如何に「おこし」が好ましいものかということの裏付けと思います。山田五十鈴さんは絶対にパンツをはかずサラシのおこし党のようです。それから終戦迄の女囚の服装について、わかったら誌上で御紹介して下さい。

避暑地の切腹

(略号 せむ)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 絹川 文代

海岸近い有名な水浴場の貸別荘の二階の一室で、失恋した美貌の令嬢が、最後の海水浴を終えた上で、いさぎよく女ながらも切腹して、この世に別れを告げようとす。水着の上から、ぎりぎり短刀を引きまわすと、ナイロンの布はさっと切り開かれて、真白い肌

からは紅の血潮が溢れ出る。更に切り続ける刃、水着の布は肌と共に破れてゆく。流れる血汐の海。やがて鳩落ちにも刃先は加えられて、苦悶と苦痛は足先にまで伝わり、全身エビのように折れまがるといった血紅使用のロマンチックな女体切腹の場面。

たしか三田庸子氏の著書によれば、夏は上衣をぬいで「じゅばん」と「腰巻」だけにし、これを夏衣としていたが、このいでたちは女の夏姿として、最も下品だから改めたとおったように思いますが、色や地など調べれば面白いではないでしょうか。明治末から大正にかけては、女囚の頭髪は櫛巻にさせていたようですが、この辺も調べて下さい。(明治初めは兵庫だったそうですが)、日本髪(ことに丸髷かつら下地八楽屋銀杏V銀杏返し、櫛巻)とおこしは永久に

江戸(東京)の下町の情緒を伝えるものとして通人の愛好するものではないでしょうか。藤原あきささんも若い頃は櫛巻を愛好していたそうです。今でも浅草など下町の人はパンツをはかずサラシの湯文地をしめ、冬はその上に本ネルとチリメンの紐なし「裾除け」をすくと聞きます。山の手は湯文地、はだじゅばんこそ少ないが「おこし」そのものは非常に多いそうです。東京の新ばしの芸者さんは、現在どの位「おこし」をしているか知りませんが、京都の舞妓さん

は全部パンツをはかず、一番下がサラシの腰巻き、その上が裾除けで、夏は淡桃色、冬は緋じりめんだそうです。スリッパやシューミーズは大嫌いです。日本古来の「粹」を象徴する「おこし」を若い婦人も和服のときは皆着用するような流行に戻るように、そういった記事や小説や写真を沢山のせて下さるよう希望します。おこし一つで捕縄を打たれたり、女看守に髪を櫛巻きにすることを強制されたりする場面をお願いします。(神戸△高田三郎△)

腸露出 「無念腹」 女体切腹図譜

A5判(本誌の大きさ)感光紙焼付 十枚一組 八〇〇円

モデル……大塚啓子 略号(せ10)

やわらかなヘソ下の肌に今や深々と刃を突き立てれば、溢れる血汐は、唐くれないに、とびちり、腸が切口から、むくりむくりと盛り上ってくる。無念の形相も物凄く、血に染った手に更に力をこめて引きまわせば、腸は刃のきりきりと皮膚をさき皮下脂肪を割け、肉を切るにつれて、みるみる創口いっぱいひろがってくる。

左手で腸を押えながら右脇腹まで切りさいてゆくと、刃を抜いて、今度は下腹からみぞおちまで一気に凄惨な十文字腹。今まで試みられなかった腸露出の有様を今回はじめて写真化した女体切腹フォトの決定版ともいうべき迫力のある連続写真集である。凄絶、女体切腹フォトの決定版として自信を以ておすすめできる切腹フォト集です。

水野淑子君、十月号の読者通

信、面白く拝読しました。読んでゆく中にS子と同様君を責めたい様な気もしましたが、案外忽ち悲鳴をあげるのではないですか。Mといっても一度に急に責めればこたえるもので、やはり徐々に馴らさねばならぬのではないかと思えますが、如何でしょうか。只S子はMでないため、その辺のところは不明ですが、然し現在私の行う責めは相当強烈です。S子はMでないため、身体に傷のつく様なムチ打ち等はしておりませんが、私の責めの中の一つを書きますから、君の参考にして下さい。先ず

服装から云いますと、年中薄着を強います。例えば寒中公園を散歩する時、オーバーの下の上半身を裸身にして、手首を肩の方へ捻り上げて歩きます。緊縛は半月か十日に一度位の割で行いますが、その時は勿論全裸です。縄は細い革紐か、ベネシャンブラインドの調節用の細いナイロン紐を使用します。縛り方は只縄を巻くだけでなしに、一回毎に腕を締めつけ且つ手首は肩迄捻じ上げます。その為S子は私の手を借りなくても後は自分の耳をつかむ所迄手首があがります。腕は紐の巻きついたつけ根から赤く青く色が変わり手首は濃緑色になって参り、首繩の所が赤くなって参ります。只困るのは紐のあとかたが何時迄もとれないので袖のない服を着せるわけにはゆかず困ります。S子又は後の一人のT子との体談は後日にゆずるとも、もう一つ困る事があります。私は三十九才のサラリーマンですが、Sに興味をもってから、Sのみにしか興味がつらならず、家庭の方はうまくゆきません。之は妻はMでないのは勿論ですが、全然私に協力しないことです。その為夫婦生活に全然興味が湧かなくなり、代りに私の縛り方は段々念

生理帯シリーズ

A6判感光紙焼付

二十枚一組 一〇〇〇円

略号(め20)

バンドマニアのために、ここに、パンティ型バンド、ズロース型バンド並にパンネットの三種の生理帯の着脱フोटを大塚啓子嬢を煩して特にトイレを背景にして作成しました。

「パンネット」の特長

一、ウーリーナイロンでネット状に作っておりますから、アン

が入ってくるようになりました。

淑子君にお願いしたいことは、私は生来非常に筆不精ですが今後毎月読者通信に書きますから、Mとしての君の気持等を書いて下されば幸いです。尚、私の希望の服装の一つを書いておきますから、若し本当にMであれば実行に移しては如何ですか。即ち下着は年間を通じてナイロン・パンティ、ブラジャーのみ。スカートはひざの出るタイト・スカートに五分袖以下の上衣又はワンピース、オーバーは冬でも薄地の布地で前はダブルボタン、襟なし、袖は七分袖、袖

ネナプキンと併用すれば絶対ズレません。

二、布地を使わず伸縮自由で、どなたにもピッタリ、スタイルをくずしません。

三、軽くて、ムレません。

四、価格が安く、五色ありますから、毎日とりかえてご使用になれます。

五、小さくたたためて、携帯にも便利です。

おしゃれな生理帯を全裸の女体に着脱するさまを順を追って前後左右からカメラの視点を当てた生理帯シリーズです。

口広く、袖の付根も出来るだけ広くしたものです。若し出来る自信があれば読者通信にて御知らせ下さい。(神戸三宮八山田道夫)

十月号の発売を待ち、直ちに拝見、先ず表紙の美しいのに感服しました。黒とグリーンを主調にした誠に見事なもの、他に類を見ません。次に編集者の方に最大の感謝を捧げたいのは、雄松比良彦氏の女斗美小説「高校女子相撲選手権大会」の掲載をして頂いたことです。私達女斗美愛好者の希望を満して頂いている御誌の中で、雄

松氏の今回の作品は近來の大ヒットです。空想小説と銘打っておりませんが、すぐれた描写力で、ヒロイン小林文代を中心とした牝鹿の様な女子高校生の試合の情景がビビットに描かれ、殊に取組の有様など目に見える様です。それにいかにも高校生らしい清純な、可愛らしい、それでいて大人にはエロシズムを感じさせる女子選手達の描写、今までに私はこんな女斗美小説を見たことがありません。輝の前下りを前陣に折り込む時に戦の女神、アテナの鳥、梟の漫画を締め込んだり、大将同志の戦で惜しくも敗れて砂まみれになった花房多津子に走り寄って砂を払い落してやって、その肩に頼ずりして涙ぐむ小林文代に恋をしたくなりしました。編集長様及び雄松氏に切望いたします。スポーツとしての立場から描かれたこの種のシリーズを何卒次々と連載して頂きたく存じます。又、女子相撲教典を執筆途上で亡くなられた雄松氏の畏友K氏の御遺族の方の御許可を得て、御誌上に一部でも発表して頂けたら、私達も無上の喜びである上に、K氏の御遺志もある程度達せられるのではないかと思います。次号からは是非雄松氏に御

執筆願いたいのは、相星女子高校を中心とした十月号掲載と恐らく同時に行われたと思われる個人選手権決定戦の情景、又は相星女子高校の外村先生を部長とする相撲部員の大会に備えての練習の有様、更に十月号御作品中に見られた社会人女子選手権大会に於ける団体、個人の決勝戦等に就いて、同氏の迫真の描写力と空想力とで、実戦の目のあたりに見る様な傑作、名作を引続き見せて頂きたいく存じます。(東京八雪崎京人)

暑い夏も終りスガスガしい秋の足音を聞く好季節となりました。編集部奇巧の皆様も御壮健で張りきっておられることと存じます。私達マゾもお蔭様にて毎月の御企画に満足しておりますが、秋の特集として「天高く馬肥ゆ」の号として真の奇なるマゾの企画を御採用下さるようお願いいたします。それは、七〇キロ、八〇キロ、九〇キロの豊満な肉体を持つ女性のモデルさんを探訪していただきたいのです。同じ馬乗りプレイにしても、四五キロ程度よりも八〇キロ、九〇キロでは其の感じ方に隔段の差異があります。肩車の姿態もよし、九〇キロを抱きかかえてもち

上げて写真に向うのも相当苦痛であらうと思う。又、背中や腹上に立ち上る姿勢もよし、出来れば一本足の力カシの如く、片足を前に上げて、腹上又は背上に立つプレイも面白いとは思いませんか。マゾとしての実感を出すのでしたら、ムチやその他のセメ道具もあれば、豊満な肉体を使つての「せめ」も有効なものだと考えます。豊満な肉体に魅力を感じる私は、後者のマゾを希望いたします。私其のモデルになつて、マゾの程度を試してみたいと希望しています。写真としてのものは、出来得るもののみで結構ですが、一応アイデアとして書いてみます。一、あお向けに倒れている男性の腹上に豊満な肉体がまたがり、両太ももで其の顔をしめつける。又は首をヒップでおさえつける。又は顔面にヒップをのせる。(相当のセメになること請合)二、あお向けの男性の腹上に、両足又は片足で立つ、之は時間が経てば次第に苦痛となる。三、あお向けの男性の腹上で豊満な肉体の女性が美容体操やさか立ちを行う。それに耐えるところにマゾとしての精神がひそんでいることと思われまふ。同じく男性が腹ばいの姿勢の背中

の上でも、同様なことと思うが、腹と背とでは、どの位の相違があるか、苦痛の点私自身が試してみたいとも考えています。四、又、九〇キロの豊満な肉体を両の手で抱き上げて、どの位の時間辛抱できるものか、写真と共に特集記事我希望いたします。プレイとしては、豊満な肉体の女性とヤセ型のマゾ男性を一組として、男性は腹ばいでも、あお向けでも、長く倒れている上に、豊満な女性が立ち上り、二組が敵味方に分れて、棒おしの要頭で、お互いにタタミの上におとしくらをしてプレイを楽しむ法もあります。又、前の一、二のシーンを使得二組が争つてもよし、又、九〇キロの女性を抱き上げて、室中を歩きまわり時間の多い男性を勝ちとするなど、今までと変つたマゾの行動ではありませんか。附録写真として九〇キロ位の女性に着物姿で日本髪を用いチャリズムのリバイバル・エロチックを添えていただきたいのです。又、其の姿で和装のまま自転車乗りもチャリズム的要素が多分にあると思います。このようなアイデアを採用されることを希望いたします。(会津若松市八冬川山男)

浣腸関連資料

自分ではくバンド (略号はく)

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

誰いらない自分ひとりの部屋で、ひそかにメンス・バンドを穿いてみる。月に一度は御厄介になる女の必需品ではあるけれど、今こうして、つくずくと眺めながら自分の身に着けてみると、言うにいわれぬ奇妙な気持が湧いてくる。

生理のときに穿くからだろうかそれとも、この布とゴムとで出来上った下着に、何か不思議な魅力でもあるのだろうか。私のこのバンドをつけた姿をよく見て頂戴。私のこの秘密のポーズは、私の部屋の鏡とカメラのレンズだけが知っている。

モデル 梨花悠紀子

○
上野で御分れした婦人の方へ。私は去る九月の中旬、ふとした事で貴女様にお会い致し、いろいろSMの事に就きお話し合つた者で

すが、あのあと御電話頂いてから、あの店を出て、附近を二時間程貴女様を求めて探しましたが、遂に再会出来ず、淋しく帰宅致しました。その翌週も、翌々週も、

○オシメ浣腸責

大手札四枚一組 三〇〇円

略号(せち) 大塚 啓子

ガラス製三〇CC浣腸器、エネマシリンジを用いて浣腸を施したモデル嬢にオシメカバーをつけさせ、後手に縛つて自由を奪うと忽ち激しい便意が七転八倒の苦しみとなつて全身をさいなむ。その有様を執拗にカメラは狙つてゆく。

○オシメカバー着用と

浣腸連続フオート

大手札十二枚一組 九〇〇円

略号(ちし)

これは或るオシメ浣腸マニヤのアイデアによつて連続撮影した十二枚続きの組写真です。即ちパンティを脱した若い女性が30CCのガラス製浣腸器によつて浣腸を施し、やがてオシメを当てて総ゴム製のオシメカバーを着用して、排泄するに至るまでの経過を刻明に描写したものであります。

同所へ行ってみましたが、貴女様の御姿はなく、何故あの日に、御会い出来なかったかと残念でたまりません。そこで又誌上を借りて貴女様の御情を頂き度く御会い致し度いと御願ひ申し上げるわけでありませう。その折、貴女様の御提案のあった件は、私もある程度御受け出来る自信も出来て参りました。あの日の貴女様の和服が良く御似合で、あの冷たいまなざしと素晴らしい耳たぶの美しさは今でも忘れられません。是非私の願ひをお叶え下さい。顔乗り、足なめETCにて、私をいじめぬいて下さい。そう云う意味で十一月の四日以後の日曜日に、此の前に御会いした時刻に、御別れした店で御待ちしております。(葛飾八早川代一V)

○ 沢田かおる様、読者通信欄にて貴女様の御便りを、拝見いたしました。小生は中年の公務員です。以前から貴女のような方に御会いしたく思つて居りました。幸い御地に近い、といつてもバスにて四時間ぐらいかかりますが、十一月二日夕方七時頃、伊豆急下田駅改札口のあたりで御待ちいたして居りますので、よろしく御願ひ致します。

ます。目印として手さげかばんの所に白いハンカチを結んで居ります。ぜひ御足労を御願ひしたいと心から望んでおります。(伊豆M生)

○ 十一月号を拝読致しました。いつも毎号を楽しくよんでおりますが、近年益々素晴らしい写真と多彩な「サドよみもの」に小生心よりうれしく思うと同時に、貴社のご発展をよろこびと致すところでございます。十一月号で特に良かったのは、体験小説の芝利吉氏の「悦虐の宿」で、これほど私の心にぴたりしたよみものは、他にありません。実はこういう宿があれば、一つ貴社でお世話願ひたいと思うくらいです。(本当ですよ!) 勿論お金次第でありましようが、名古屋市中村区は未だお目にかかったり、体験したことがないので、それだけに、「大阪はいいなあ」と痛感している小生です。芝利吉氏のペンは、正にサド愛好者にとつて、この上もない鋭い筆で、その女の「受縛」を心ゆくまでも、書いておられて大いに満足です。次に花巻京太郎氏の「花と蛇」これも静子夫人の危機が描かれており、財閥家の美しい夫人が不良

自刃悶絶

(略号
(せよ))

大手札型印画紙焼付

五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚啓子

豊満な肉づきをみせている下腹を脇差で掻き切ると溢れる血潮が(血紅使用)臍の下一面をくれないに彩る。今はもう覚悟の切腹であるから、力いっぱい深々と腸に至るまで刃を突き刺し、自刃の恍惚感に陶醉するのであった。

腰まで垂れる黒髪の大塚啓子が豊かな姿態をくねらせて、切腹の痛手に悶絶する光景。

ダブル切腹

(略号
(せる))

大手札型印画紙焼付

二枚一組 二五〇円

モデル 絹川文代、大塚啓子

すでに切腹し果てた啓子は、絶命した渾一本の裸身を長々と晒している。文代はその死骸の上に跨がり、自分も又、彼女のあとを追って、臍の下へ深々と刃を突き立てる。一瞬電撃のように全身に走る疼痛、しかし、健気にも氣をとり直し、勇をふるってかさばいてゆく文代の雄々しい六尺渾一本の男まさりの切腹ポーズ

団に捕われて、顔なじみの運転手に無理やり女になることを強要され、しばられたまま床入りとなるシーン、全く頂けるよみもので「女の危機」がよく出ている。花巻氏の次号の作品を大いに楽しみにしております。美しい写真集、ベテラン絹川文代嬢のサルグツワ、黒ヒモ姿は表情がよい。だがヒモの使い方、もっとぎっちり、まとめてしばってほしいものです。その意味では、後のページの方がよかったが、サルグツワがなただけに惜しい。今さら、小生如きが申し上げるまでもなく、女をしばり上げたら、必ずサルグツワをかまして頂きたい。大きく、そして固く鼻の上までも、これが一番美しい女の姿だと思ふ。そして全裸よりも半裸、白か黒のパンティをみせる。或るズロースを見える女の姿こそ、男性達を悩殺すること必至です。こういった意味でも、毎号を楽しく読んでゐる小生、どうか古き一読者がいることをお忘れなく。次号を又々たのしみにお待ちしております。(名古屋市中村区八原弥一郎V)

○ 奇クの皆様、此度貴誌の通信欄を拝見しましてお便り申し上げるものです。私は浣腸に興味を持っている者です。皆様の体験告白等を見せて頂き、私も大變為めになりました。私の浣腸歴はまだ二年少々です。無花果浣腸に始まり、次に硝子製の器具へ進み、現在ではエネマシリンジも併用しています。グリセリン、サイダー、食塩水、ビール等は一通り行って来ました。まだ石鹼水を用いた事があります。石鹼の種類、及び溶かす分量等教えて頂けませんでしょうか。水、食塩水では二〇〇cc

裸女争闘場面

略号 (らし)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 田中芳代、愛川悦子

禪一本の若々しい裸女二人が互いに相手に止めをさそうと、あられもない姿を展開して根かぎり争う場面。胴絞め、ヘッドロック、腕とり、押え込みなどの手を使って相手の顔を自分のお尻の下に敷いてしまおうと争うメトミファ、女斗ファン並に女性のサドマゾに關心をお持ちの方及び女相撲ファンの方に捧げる。

ぐらゐは浣腸したことがあります。あの痛烈なまでの緊張感はいただけでも、ぞくぞくとします。現在一人で行っていただきますので、誰か御指導下さる方はお便り下さいませんか、読者通信及び奇クの御発展をお祈りします。(福岡八佐田T坊V)

○ 私はある会社の社員です。年は今年満三十八才です。夫婦生活をして、もう十年にもなります。毎日平凡な生活をしていると、倦怠期というのでしょうか、何か刺激のあるといひますか、スリルがあるといひますか、変った体験

変態強盗侵入

略号 (こと)

大手札型印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

モデル 絹川 文代

外出から帰った一人居の美女の目の前に、突然ニユツと現れたアブ強盗、驚いて口もきけぬ彼女の細腕をとるや逆手に捻じ上げるや次々と彼女の晴衣をはがしてゆくのであった。晴衣を長襦袢をはがされた女の白い胸や膝、荒々しい縄は後手ばかりか胸から二の腕へも無惨にかけられてゆく。縄にもだえ、いたぶられつくす美女と悪魔の如き強盗とのコントラスト。

をしてみたいと考えておりましたところ、先日、友人より貴社発行の奇クを拝見致しまして、とてもあの緊縛フォトには感心致しました。帰宅して早速家内に話しました。一向に同調してくれそうもありません。大体が家内はその方面には理解のもてそうなタイプではありませんでしたので、大きな期待は持っておりませんでした。折角話したのに、ニベもなくはねつけられては、面白くありません。それで、私の緊縛プレイの相手をして下さるような適当な方居られませんか、居られましたら御一報下さい。家内は子供と一緒に今月いっぱい千葉の実家へ帰って居ります。出来なれば、滝れい子様にも一度御会いたく思っております。(東京八香川京一V)

○ 若々しい女体はどの部分をとっても、我々男性を魅了せずにはおかないものでありますが、私は殊の外に女性の乳房に対して愛着を持つ男です。街で行きかう女の顔を見るより先に先ず豊かな胸のふくらみに視線をやります。そこにくくよかな乳房が、ブラウスをぐっと持ち上げて居るときは、その

胸が見えなくなるまで眼が離れません。その衣服の下には、ゆさゆさと大きく揺れる乳房があるのだと想像すると、私は狂わんばかりに、愛著を感じるのです。私の只今の実感としては、大きく張りきれるばかりにふくらんだ乳房をぐっと握り、自分の思うままに責めてみたいという切ないまでの願いを持ってあります。六〇年の10月号に、桜井葉子さんのあの巨大な乳房をグラビヤに発見し、又先日は六二年の8・9月号で、その乳房を再び発見した時、他の本等には目もくれず、買って帰りまして。そしてその夜は、私の目を心を休ませてくれる乳房、乳房を眺めては、母の乳房を思い出して眠りにつきました。桜井葉子さんのあの大きな乳房を思いきりいじめてみたい。赤黒い大きな乳うん、可愛い乳首、ありとあらゆる責めを思うままに加えてみたいと思ひます。乳房に自信のある女性の方便りを待つと共に乳房を責めるチャンスにあたえて下さい。(大阪八今津広一V)

○ 朝晩めっきり秋らしくなってきました。皆様お変わりございませんか。十月号の読者通信で、佐川

奈津子様の下僕募集、大変面白く
思いました。昨年、田沼氏でした
か、奇譚クラブの読者でマスラオ
派出夫会を作ったという提案が
ありましたが、佐川様の下僕募集
は、その具体的な表れだと思いま
す。マゾの中にも、いろいろある
のですが、単にプレイして満足す
るのと、下僕として或いは奴隷と
してときには男女中として女王様
や女御主人様に奉仕することも愉
しいものです。私もマゾとして精
神的に女性に仕える職業が、男性
にもあっていいと思っています。
嬉しいことには、昨今での、男の
美容師から、看護夫（免許には看
護婦）鎌倉で出現した男女中（マ
スラオ）と女の世界に男も進出し
ています。美容師や看護婦は或る
程度一般化していますが、男女中
はそこまではいっていません。今
度の佐川様の呼びかけで、大阪で
も男女中が普及すれば、大変嬉し
いと思います。それで私も下僕
（男女中）として奴隷として佐川
様にお仕えしたいと思えますので
御連絡方法をお教え下さい。私も
今までに女御主人様にスリッパ一
枚で立たされたり、エプロンをか
けて買物にいかされたり、或る程
度の召使としての訓練を受けまし

た。特に召使いの制服は男女を問
わずスリッパ一枚というのは大変
よいことだと思えます。特に男の
子はスリッパを着せられると女王
様の前におとなしくなります。エ
プロンをかけて買物にいかされる
と、だんだん女性的な気持ちに飼育
されるそうです。今年の一月に東
京で女王様の召使い募集がありま
したが、大変大勢の人々が応募し
たそうです。そのときは試験制度
にして下さい。私はきつと十分期
待にそえると思います。重ねて御
連絡の方法をお願いします。私は
今、料理学校へ通っております。
（大阪、豊中八森正夫）

秋冷の候読者の皆様お元気で
す。毎号待遠い思いで待っている
机上に十一月号が届きました。そ
の中でも「世界に於ける刑罰の種
々相」に興味深く読み返していま
す。私はこのような刑罰ものには
特に興味を持っており、口絵や写
真等にもいろいろ求めるのですが
思うような収獲がありません。い
つも頭の中でその情景を創作して
楽しんでいられるのです。生首シリ
ーズについても首を切り離される瞬
間とか、髪を掴まれて血をたらし
ながら高く揚げられた美女の生首

今月の新版

強烈エビ責

略号

（えひ）

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 水本 茂美

野性美を帯びた水本茂美を全裸
に引きむしった上で足首と背中に
吊り上った後手首とを連結させて
グイグイ足で踏みつけて締め上げ
たエビ責り、一分、五分、十分と
経つうちに流石の水本嬢も全身か
ら脂汗をふき出して、ううう、と
苦悶の呻めきを出してもだえると
ころを、すかさずキャッチした。

ゴム衣緊縛

略号

（みす）

大手札型印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 水本 茂美

アメゴムのヌメヌメしたゴムズ
ロースが汗ばんだ肌にネチャネチ
ヤとねばりつく。容赦のない縄さ
ばきは彼女の弾力性のある肌を腰
のあたりから二つ折りにして、力
いっぱい締めつける。むき出しの
はりきった尻には、びっちりとし
ムズロースが貼りついて、徐々に
噴き出してきた汗によって、ぬめ
りにぬめりぬく。

を期待していたので、少々迫力に
欠ける恨みがないでもありません。
私がこのような生首ファンにな
ったのには理由があるのです。
小学生の時、満州で住んでいた
頃、家へ良く遊びに来た関東軍の
兵隊から匪賊の処刑写真を数多く
見せられて以来、すっかりそれに
とりつかれ二十数年後の今日で
も、その写真が頭の中にこびりつ
いています。その中でも二人の女
匪賊—といっても、この二人は匪
賊の頭目に使われていた姑娘のこ
とでしたが—の処刑写真はまざま
ざと目の前に浮びます。一人は二

十三、四才で一人はまだ十五、六
才位の姑娘でしたが、その処刑が
三枚の写真に収められていまし
た。最初の一枚は処刑の前、他の
匪賊達を処刑する間二人を梟して
いるところで、二人の女は全裸に
され後手に縛られて二本の杭に立
たされ、その周囲には何れも後手
に縛られた匪賊達がごろごろ転が
され処刑の順番を待っており、そ
の匪賊達が綿入れのズボンやシャ
ツ一枚で下半身裸体である中で、女である
為か二人は一糸まとわぬ白い裸身
のまま立っていました。二枚目の

ものは二人が荒むしろの上に後手に縛られた儘並べられて座っており、そのむしろも血のりで黒くなっていました。二人の前には大きな首穴が黒く口をあけており無数の首が積み重なっており、周囲には軍服姿の兵隊達が取巻いて談笑している様子で、二人の女は髪を乱して泣き叫んでいる場面でした。三枚目は首穴に切落された二つの女の首が、それまでに切落された匪賊達の多数の首の上に転がっており、穴のふちにのめっている二つの裸身は互に首の切口を穴に差し出して両足をやや開き加減にうつぶしている場面でした。二

人の女匪賊についてはその三枚でしたが、彼女等の首も他の匪賊等の首と同様に町の中央広場に赤煉瓦を積んで作った台の上に梟さきつめた満人達への見せしめの為の梟場に投げ出されたものと思います。このようにして生首ファンになった私は結婚数年後の今日、すっかり妻を自分好みに仕込んでしまい、二人のプレイを楽しんでいます。「世界に於ける刑罰の種々相」も早速妻と二人で私達のプレイに取入れていますが、二人では効果の少ないものもあり同様な御夫婦が居ないものかと考えてもみ

ます。二組の夫婦が合同すれば責め、処刑ともに充実して楽しめると思います。誰方か御指導下さいませんか。(和歌山県新宮市八K夫妻)

○

貴社益々御盛栄の段お喜び申し上げます。小生奇クを愛読致し早や八年になります。小生女性切腹マニヤです。毎月奇クの発行が待ち遠しくなります。一度でもよいから女性の方とプレイを楽しみたいと思っておりますが、十月号の読者通信にて大阪の水野淑子様の事を読み失礼とは思いましたがペンを取りました。なにとぞ編集部の方のお力により水野様を紹介していただけないでしょうか、ぜひお願い致します。又ほかの方で女性の方おみえになったらお願い致します。小生身長一六二センチ体重五五キロ、二十八才のS男性です。かつてながらよろしくお願い致します。(大阪八共和S生)

○

はじめに投書させていただきます。奇クを愛読してより三年に成ります中年の男性です。私は年少の頃より軍隊、某団体と男だけの世界に暮らしてまいりました。特に某団体に居りました時は、十手術

と早繩術を身につけさせまして、多少繩に対する心得もありましたが、奇クを拝見してより女性が繩に對して苦しむ様をグラビヤにて見るにつけ、前に繩を使用した事があるためなのかは知りませんが、我身の手にて女性を縛りつけてみたい思ひにかられましたが、私の身辺には同好者が見当りません。ま、奇クのグラビヤにて心になぐさめとして居りました処、読者通信を拝見して小生と同じ悩みを持つ人が毎月投書して居ることを知り、私も仲間に入れていただきたく悪筆をふるいました。読者のみなさま、マゾヒストの女性のかた、私の友だちになってください。私はサド性の強い男です。読者でマゾヒストの女性よりの便りを待ちます。(埼玉県入間郡八望月正雄)

○

初めてお便りします。白表紙時代からのファンです。眠っていた私のSの夢をさましたのは貴誌です。有難うございます。いえ、皮肉ではありません、本当です。さうにも不満な点が一つあります。浣腸物が少ないということです。いつも小品が一編乃至二編の事だけ

本誌最近号在庫案内

△新装特大号より以降▽

昭和35年10月号	(定価一四〇円)
昭和35年11月号	(売切)
昭和35年12月号	(定価一四〇円)
昭和36年新年号	(定価一五〇円)
昭和36年2月号	(定価一五〇円)
昭和36年3月号	(定価一五〇円)
昭和36年4月号	(定価一五〇円)
昭和36年5月号	(定価一五〇円)
昭和36年6月号	(定価一五〇円)
昭和36年7月号	(定価一五〇円)
昭和36年8月号	(定価一五〇円)
昭和36年9月号	(定価一五〇円)
昭和36年10月号	(定価二〇〇円)

昭和36年11月号	(定価二〇〇円)
昭和36年12月号	(定価二〇〇円)
昭和37年新年号	(定価二〇〇円)
昭和37年2月号	(定価二〇〇円)
昭和37年3月号	(定価二〇〇円)
昭和37年4月号	(定価二〇〇円)
昭和37年5月号	(定価二〇〇円)
昭和37年6月号	(定価二〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和37年8月号	(定価二〇〇円)
昭和37年9月号	(定価二〇〇円)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(定価二〇〇円)

本誌の最近号は以上の通り在庫しておりから御申込み次第急送申し上げます。

です。浣腸マニヤは決して少いとはいえないでしょう。そこで、こちらで一つ浣腸特集号を出して下さいますか。浣腸小説はもちろん、各国の浣腸風景、めずらしい浣腸器具、薬品の紹介等は非お願ひします。特集号のグラビヤも浣腸写真を公表できる範囲でいいです。から、ギリギリの線まで写して下さい。浣腸される者は常に女性にして下さい。浣腸を施す者は男でも女でも構いません。現代物だけでなく、時代物の浣腸も面白いと思います。器具も正式の浣腸器だけでなく、あらゆる道具、場面を考案して下さい。それから東京都内在住の女性で浣腸を好む人はいないでしょうか。なるべくなら背の余り高くない人で肥っている方、年は二十二、三才まで、若ければ若いだけ結構です。もしいらっしゃいましたら、毎週土曜日千駄谷駅の改札の伝言板の前に昼の十二時半頃、右手に白いハンカチをもって立っています。浣腸を好む女の方、いらっしゃったら、やはり白いハンカチを右手にもっておいで下さい。土曜日の午後、ゆっくりとプレイを楽しみましょう。なお器具薬等持っていればあ

だけ持参してください。又お友達に浣腸を好む人がいらっしゃれば、さそっておいで下さい。写真をとったかったらカメラももって来て結構です。僕の名誉にかけて紳士的にふるまいます。なお千駄ヶ谷駅の改札口は一つです。(東京都渋谷区八山本和彦)

○ 水野淑子さん。10月号に掲載されたお手紙を大変興味深く拝見しました。小生がいつも描いていたイメージにぴったりの方のように思われました。ぜひ文通だけでもしたく思います。小生は二十七才、大阪の商社に勤務しております。残念なことに、編集部では以前から文通の幹施をしていませんので、直接手紙を差し上げることができません。しかし、小生の住所・氏名は編集部にお問い合わせいただけますから、ぜひ連絡してみてください。(京都・水田)

○ 遂に登場した「生首シリーズ」の第一弾！生首マニアの諸兄等と共に、編集部が英断に対し祝杯をあげたいものです。企画、絵ヅラに就いては若干の欲求不満もありますが、とにかく本格的な生首絵図として賞讃に価する出来栄かと存じます。次にいささかの希望

「今月の新版」

和洋争闘場面

略号

(らり)

大手札型印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

モデル 田中芳代、愛川悦子

渾一本に長襦袢を肩にひっかけた田中芳代とシュミーズ一枚の愛川悦子とが、腕を逆にとり、足を逆エビにとり、必死に相争う中、互いに着衣もふっとんでしまい、裸のまま、むしゃぶりついて上になり下になりして格闘する場面。激しい二人の娘の争闘が迫力をもった目のあたりにとび込んでくる裸女争闘場面に続く第二作。

裸女の帯覆面

略号

(ふく)

大手札型印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

豊満な裸女の肉体にはぎりぎりど厳しい縄が掛けられている。顔面には真白いホータイがグルグルとまるで大怪我をした負傷者に対するように巻かれている。白いホータイと緊縛、裸身に施された縄目と顔面のホータイ。このアンパランスを愛好するマニヤの為に。

意見述べますと、①題材からいって当然組絵として扱うべきだと思います。(オフ頁にはなくもがな絵も二、三ございます故、そうしたスペースを割当てたら立派になると思いますが……) ②構図はもっとスッキリしたものをお願いしたい。腰巻姿の美女はともあれ、背後に横たわる胴体美人？は、矢がすりを着ているようにも見え、かつ死ぬまいとしてもがいた最期の瞬間の姿態が甚しく不明確の上、生首の分離感もとぼしいと感じられました。なお注文としては、あながち原作に忠実たれと主張する存念はないのですが、原作中の数少ないヤマバ(例えば首級切断の瞬間、和製サロメの図、生首愛頑のシーンなど)をそれぞれ異なった視点から効果的に強調して戴くことが望ましいと思います(映画のスティールのように) またモデル嬢を使つての裸女血斗写真の実現も強く熱望致します。外部からこの圧力のため誌上に取扱うことが不可能ならば代理部あつかいで結構なのですが……せつかく実現したとはいえず、このシリーズがどの程度続くのか全く薄氷をふむ先々で、少々心配です。『奇ク』

の続く限り中止だけは絶体にしないで欲しいと存じます。なお京洛生、室井英山、杉江美津子、川下米子、KK生、A・A生、黒死館の諸兄並びに同好の皆様がたから、この際ぜひとも、誌上にてお応え下さるよう熱望してやみません。(新潟市寄附町八前川或雄)

○
愛読者の皆様お元気ですか。まず、私の奇クへの希望を書かせていただきます。毎々本欄で読者の方々から云われる事ですが、グラフィア写真が少ない事です。もっとも、写真が多いだけが良いというのではありません。少なければ少ないだけに見ごたえのある充実したものを載せていただきたいと思います。それと読者の方の中にはアマチュアの写真家も居られる事と思います。其の様な方々に奇クへ緊縛写真を発表願いたいと思いますが、編集方針の企画に、其の様は便宜はないものでしょうか。又、各月号別に、モデル嬢に同じ緊縛なり責めを試みて発表するの、各モデル嬢の個性や特異の表情、イメージが湧いてくると思います。今迄各モデルさんの写真を拝見し楽しませていただいておりますが、私の好む新アイデア

を、ご紹介します。まずはじめに、大塚啓子嬢、啓子嬢は私の一番好きなモデルさんです。それ故に強烈な縛りや責めを試みたいと考えます。デッサンお尻、ハチ切れそうな太股と下腹、大きなオッパイ、全くポリウレームの一語に尽きる。又顔が強い責めを好むような特異なもので、生娘そのものの様な感じ。(1)顔が生娘の様なところを利用して、カスリを着用し早乙女に扮し、両手両足を強制的に開かせ、工字型にし、右手と右足の先端に一本の丸太棒で動けないように縛って固定します。左手と左足も同様になります。ハス田のドロ沼に身動きの出来ない啓子嬢を放り投げます。ドロ沼に対し仰向きでもウツ伏せでもかまいません。気持ちの悪いドロ水が着物を浸って全身に伝ります。着衣は他に黒の木綿の極く短いズロースか、月経帯が田舎の生娘の感じが、出て理想的です。勿論、胸、胴も強く縛り、荒ナワを使用。(2)啓子嬢に白衣を着せて看護婦に仕立てます。中学を卒えたばかり又は高校卒えたばかりの見習い看護婦に扮し五枚の組み写真。(1)ストッキ

ングは黒、入院患者に薬を持って来たところが、アッと云う間もなく、クスグリ責めにあってしまふ。四、五人の患者によるクスグリ。一人は足の裏を、一人は脇腹。くすぐったさに身をよじり白衣も乱れ太股露わになり、下着が見えます。(黒の木綿の短いズロース又は月経帯)(2)空いている患者用ベッドに大の字に各々の手足を固定し縛る。白衣のまま、鉄のベツド使用。(3)啓子嬢が或る患者に浣腸をしようとする逆白衣をまくられて無理に押えつけられ浣腸されようとしているところ。(4)風呂に、あまり入れない患者を白衣の啓子嬢が清拭をしているうち足をすべらして白衣を湯でグショグショにしてしまふ。そこを患者達用意したロープで縛り、浴槽に沈めようとする。(5)六人部屋の病室に斜めに太いロープを啓子嬢の丁度腰の辺の高さに張り、パンテ

ィー又はズロース一枚の啓子嬢にロープをまたがせ、両足首を石の重りで縛る。両手は自由で、手での平均をとってロープを往復させる。脱がされた白衣、スリッパ、ストッキングはロープに掛けておく。白い三角きんは頭に付けてたまま。(3)、啓子嬢の下半身を太いロープで下腹から足のツマ先迄全然肌を見せないように密着してロープを巻く。両足一緒でなく各々別にロープを巻く、上半身ハダカ。今迄の啓子嬢の股間責め縛りの写真よりヒントを得ました。扱て、8・9月合併号の本欄で長野市の新川登様の女性読者による「私の下着の種類」案に賛成です。色柄、寸法、何日間位で取り変えるかとか、下着に感ずる体験、空想等を発表していただけたならと思います。又、女装家にも下着の種類についてドシドシ発表していただきたいと思います。又、十月号の獅子鼻明氏の「奴隷志願」楽しく読みました。8・9月号近藤一氏の幻想物語「涙を捨てた女たち」は毎号載せてほしいのですが、モデル嬢への手紙文を募り本誌に載せてモデル嬢からの回答がもらえれば回答も載せてほしいのです。最後に千葉県にお住いのサド女性の方で、ご連絡下されば左記の奉仕をする事を誓います。
(千葉八間泉好男)

○
先般梅川幸子氏の記事を拝見致し私も多年にわたるゴム合羽コレクターとして一筆呈上いたしました。私は海軍軍医として先般の戦歴に参加し生死の域をさまよい身をもって国難に捧げてまいりました

「優秀緊縛フオト紹介」

乳房責 (きよ)

大手札型印画紙焼付
三枚一組 二五〇円
モデル 四方 清美

全く凄絶な責めである。裸にむかれた首から二の腕、胸、腹にはピンクの綿ロープがきびしくからまり、身動きならぬ女体の背後にはプライヤーを手にした辻村隆が可憐な乳房を思いきり挟む。忽ち上る悲鳴も、きびしく嚙まされた猿ぐつわに消される。苦悶の表情は見る者をして思わず手に汗をにぎる。乳房責の圧巻、責めの圧巻である。

女囚独居 (はつ)

大手札型印画紙焼付
三枚一組 二五〇円
モデル 柳 初子

哀愁を帯びた柳初子の美しい顔(十一月号巻頭口絵参照)が女囚六三号の囚衣をまとい、前手縛りに手首と肘とを括られて独房に幽閉された表情。そして手と足がアップで美しく描き出されている。陰惨な囚女の雰囲気モデルの美しさによって、ほのぼのとしたロマンチック・サジズムが発揮されている。

吊られた美女 (けい)

大手札型印画紙焼付
三枚一組 二五〇円
モデル 絹川 文代

豪華なシャンデリヤに両手首を括られて吊り下げられている全裸の美女は、身をくねらせてこの華やかにも甘く厳しいムードに就いている。うねうねともだえる裸身は見物人によって隅から隅まで眺められ、次第次第に増してくる苦痛は彼女の羞恥心を徐々に剥ぎとってゆく。

首縄と腰縄 (せつ)

大手札型印画紙焼付
三枚一組 二五〇円
モデル 大塚 啓子

一点のシミもないスベスベとした柔肌の太塚啓子嬢が湯上りの全裸の肌を惜しげもなくさらけ出して後手高小手しぼりに首縄と腰縄を併用した縄目に足の先から長髪の前にも緊張させたサジ・ムード満点の素晴らしく美しいフोट。恍惚とした表情、凄艶なながしめ。あきらめきった諦観の表情。

だが、何分にも人生の青春を精力のはけ場もなく、つれづれに思いついたのは口が偶然の機会となつたのでしょうか、戦後十七年の今日、完全なるマニヤとして筆をとる、広く愛好者諸氏に告白致します。それは五月雨のふる夜でした。何かの用で雨外被をかぶり、船上に出ますと、急に妄ろうと色情がもえ立ち、懸命に意識して忘れようとしてもおさえられず、この時のゴムの肌をつたわってくる生温かなぬめりは何にかえられぬ楽しみとなりました。それから、数カ月は、何事もなくすみましたが、或る海戦時、それはスコールの激しい時でした。戦友はつぎつぎ敵の機銃ソウシャに斃れ、私は軍医としての任務を全うせんがため、処置に追われましたが、その時、雨に濡れた外被を戦友の体よりはがして処置をする私の手に、ゴム引合羽の感触が、あの日のことを思い出され、それからあとは、がむしゃらに外被をめぐっては処置してゆきました。そして敗戦を迎え、平和な日々を送る中に、去る日、古川裕子氏の記事を古本屋の店頭にあった貴誌の一頁から拝見し、世の中には私と同様な愛好者があったのかと意を強く

しました。先ず、私のコレクションと、その利用方法について述べますと、一、ゴム引雨外被、通常市販されて居りますゴム引きの黒の合羽で、うら地は本綿の黄色又はカッ色のをもっております。製品名はハト又は日の丸製。二、ゴム引のズボン、黒色にてうら木綿地、三、ゴム長グツ、四、ゴム引布二米程、まず右の品を用意してゴム引のズボンをはき、ゴム引布二米を半分において褌となし長グツをはきマントをまとい、フードをかぶり、雨の夜を歩きまわりますと、ゴムの褌をつたわった肌の温か味は自然にマントの表へ通じ、ゴム特有の香がしてまいります。この時こそ、私は人生最良の喜びと満足感にしたるのであります。最後に私の念願としては、死後火葬の時には、ゴム引のズボンをはき、身にはゴム合羽のマントをまといせられ、此の世からおさらばしたいものと常に念じております。(京都市人S生)

○ 小生は奇クを愛読し始めたのはつい半年ほど前のことですが、10月号で土丸大三様の「おしめへの幻想」に心をひかれ夢中で読みました。女性の尿には小生も特に

興味があり、一度でもいいから女性にオシメカバーをさせてみたいと願っています。残念ながら同好の女性にめぐり合いません。どなたか遺尿癖の有る女性で（遺尿癖がなくてもかまいませんし又、夜尿癖の有る方でも結構です）小生の希望を満してくれませんか。あまり小生のような尿フェチの方は居ない様ですが、もし一人でも同好の方がいらっしゃいましたら、お便り下さい。又、同性の方でも意見等交換しようではありませんか。又小生、サジストの性格も多分に有り、縛り方にも興味があります。それから読者の中で、大人用のオシメカバーで不用（そんな不用のものはないと思います）がの物を分けて下さる方はありませんか。御一報下さい。（札幌市南五条八高宮健児）

○ 京都の山田様、大阪の石本様、そしてクリーニング屋の木村様、名古屋の服部様、その他の方々から、私の通信にお呼びかけ下さいましてほんとうにありがとうございます。心から御礼申し上げます。プレイ上の私の奴隷と共に服部さんにお会いするつもりで御ざいました。あいにく出来なくて

残念でした。今日はお呼びかけ下さった方々にお礼として、私の奴隷の飼育方法の一端を御紹介しましょう。それがプラスになるか、マイナスになるかを考えずに……：。——せがむ様に「女王様、もうかんにんして下さい」と奴隷T君が言葉を発したのは、見かねて、さるぐつわをといてやった時でした。口の中から私のきのう身につけていた真赤なパンティを取り出してやると、一はやく発したこの言葉。いつも、うれしい、うれしいとひいひいって喜ぶ彼であるのに——。「T、私はね、まだ物足りないのだよ、お前をいじめるのは、これからさ——、ここで皆様、私はTがにくくて、やっているんではありません。Tがほんとうは、こういうマゾ性格で、こんなにはずかしめられることが、明日への活力を力一ぱい発揮してくれるからなのです。こんな理解のある奴隷奉仕をしてくれる奴隷を持った私は、おそらく世間で一番幸せです。（名古屋八北緋紗子）

○ 水野淑子様、十一月号を見て驚きました。あまり多くの人々から貴女に呼びかけておられるので、

とても僕などはだめだと思いましたが。ある方は橋蔵型とか又色々な人がありますね。でも僕はプレイをする前に普通の御交際を願いたく思います。貴女と文通又はお合いして僕の性格や貴女の事をよく知り合ってプレイの事や一生の事などを語り合いたく思います。僕も結婚などを考えなければならぬ年（二十六才）になりましたが、自分の性格を理解してくれる女性をと日ごろから考えています。もし貴女が僕を理解でき御交際出来ますれば一生の幸福だと思えます。貴女も結婚の事などをお考えの事と思しますのでぜひ御返信願います。（京都市八山田坂夫）

○ はじめて御便りさせていただき。私は御誌を手にとるまで、自分自身の性癖を他人にはない特異なものとして一人悩んでいたものでございます。それが御誌により読者通信欄により、世の中には多数の同じ悩みを持つ方がいらっしゃるのを知り、お便りさせていただく気持ちになりました。女の身であり又勤務先の眼もございまして住所本名など、まだ明らかにする訳にはまいりませんが、このお答え、呼びかけに応じて、どな

たかお友だちを得たいと存じております。もし左記条件お読みの上の私の希望をかなえて下さる方がございましたら読者通信欄を通じ連絡方法をお知らせ下さいませ。私は現在、東京郊外に居住、二十七才、ふだんは月並なおとなしい性格と自認しております。○同性の方と一度責め合いたいと空想いたします。全裸開股縛り又は浣腸遊び程度まで。肌を傷つけ合うのは好みません。○男性の方の場合はSMいずれにしても半裸まで。一度乳房をクチャクチャになるまでしばりあげられたら、と自分で縛ってみました。が、やはり虚しい感じがいたしました。異性の方に肌が傷つかない程度に責められるなら応じたいと思います。但し非常に臆病であり細心なので、住所氏名素性の分らない方は、おことわり申し上げます。もちろん遠くへ出かけることも不可能です。約束の日時、場所に黙って出かけ、おたがいにあまりセンサクし合わずに赤の見知らぬ他人としてプレイのみのおつき合いができれば……と身勝手なことを考えます。私SM両方の性癖があるのでではないかしらと思っております。（東京都八山辺まゆみ）

●代理部分讓品総目録(第五号)出来ました。

十円切手封入の上お申込み下されば、折返し急送いたします。

奈良の阿部勇造さま。十一月で私へのお呼びかけ本当にありがとうございました。八、九月号にのせていただきました私の通信はたしか、五、六月頃でしたか、青葉の頃だったかと思ひます。そして貴男様に対してのお便りを書いています今は、もうそろそろ秋風が吹かうという季節です。馴れない都会のこととて親しいお友だちもななく淋しい日々ですが、誌上で貴男様のあたたかい思いやりのある通信を読ませていただきほんとうにうれしく思いました。すぐにでもとんでゆきたい気持です。でも、ほんとうは私、大変な恥かしがり屋なので、お合いできても真赤になつてうつむいてばかりだろうとさつと思ひます。ましてや、そんなたたくさんのグループとかいう男の人たちの中へ、とても行く元氣はございません。貴男様とお二人で、喫茶店なんかでお合ひできたら、と、そんな夢のようなことを考えております。私、ときどき一人で近くの喫茶店、といつても小

さなお店ですけれど、へ行きコーヒーを飲みますが、私にも誰か一人ぐらいの男の方のお友だちがあつたらなあ、と時々思ひます。でも貴男様はきつと失望されると思ひますわ。田舎出ですから色が黒いんですもの。絵や写真を見るのが大好きです。自分ひとり、他の方のおられる前なんかでしたら嫌ですわ。もしお借りできたら、一人でゆっくり見たいのですけど駄目でしょうね。私、どこから見ても、まだまだ幼稚なんだと思ひています。お氣にむいたら、又お便り願ひます。(大阪市八真崎咲子V)

私は白表紙当時より愛読させていただいております農村に住む者です。度々の圧迫にもめげず、踏みつけられても尚立ち上る野草の様な派手ではないが地味で誠実な貴誌の続刊を心より悦んでおります。私は青い灯赤い灯を知らぬ人里離れた農村に住んでおりますが私のような農村に住む、何の慰安も娛樂もない者の愛読者も多くい

〔傑作緊縛フォト紹介〕

全裸後手縛

略号

(みに)

大名刺印画紙焼付

三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

OSミュージックのヌードダンスとして活躍する平野笑子嬢が一条まとわぬすべすべとした姿態にロープをかけられて後手高小手の緊縛ポーズをとらされた嗜虐的な三葉のフォト。

寝台の全裸

略号

(みほ)

大名刺印画紙焼付

三枚一組 二〇〇円

モデル 平野 笑子

ぐっと凹んだお臍、伸びやかな下股、痛さにもだえる太股、投げだされた足の指。厳しい縄目にベッド上で転々ところがりまわる平野笑子嬢の緊縛裸身をとらえた三ポーズ。前作(みに)と共に彼女の全身の美しさを余すところなく露呈した垂涎万丈のフォト。

全裸の羞恥

略号

(みる)

大名刺印画紙焼付

五枚一組 三〇〇円

モデル 田原美佐子

モデルずれのしていない可憐なBGのアルバイト作品。本人の希望によって特に口絵には大々的に掲載しなかったのにお馴染も薄いと思ひますが、清純なフェイスト姿態の田原美佐子嬢が恥しさに耐えて衣服をすっかり脱ぎ去り、繩のいましめに哭くポーズ。

股間しばり

略号

(みと)

大名刺印画紙焼付

五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

顔といい姿態といい、モデルとして一級品に属するベテラン絹川文代嬢が股間しばり、首縄高小手に施されて、開股、仰向、足の指をくの字に曲げてのもたえ、等々、度胸をきめて縄ととり組んだ五つの変化のあるポーズ。

全裸股間縛

略号

(みへ)

大名刺印画紙焼付

五枚一組 三〇〇円

モデル 絹川 文代

全裸になった文代嬢の真白い肌に喰い込む茶とグレイのまんだら夢幻的な股間しばりのムードを全面にはのぼのぼともし出して、見る者をして恍惚境へさそひ込む。

次号（新年号）は十一月二十五日発売いたします。

ることをお忘れなく、続刊刊行に御努力下さるよう特に編集部の方にお願ひ致します。如何に多くの恵まれざる農山村の者が貴誌によって慰められているかということをお考え下さい。私は幼少の頃より国民学校の五、六年頃からの意識しておりますが、女性、女の子の足にあこがれを持ちはじめ、きれいな足を見ると、あの足に踏まれてみたい、けられてみたい。尚その上なめさせていただけたら、どんなに幸せだろうと想うようになり、成人した今日では、そんな思ひは益々つのるばかりです。ヒップ責め、パンティ責め、人間馬人間便器、女性からのあらゆる責めを、残酷な責めを考えます。たとえヒップ責めでチソクしようとして、肌に傷がつこうと決していとません。一生虐待されてドレイとして喰い物にしてやろうという残酷な女性ほど、私にとっては有難いのです。絶対に反抗などはいたしません。誓約しても結構でございます。如何なる女性でもいません。自分は容ぼうには自信はありませんが、五尺五寸、十七

貫五百、色浅黒くて至って頑健です。如何なる酷使にも耐える自信があります。故あって先月来神いたしました。若し私の如き者になぶり者にして使つてやろうという女性の方がございましたら、よろしくお願い致します。とりとめのないことを夢中で書きなぐってしまいお許し下さい。（兵庫県八中田秋男）

十月号で私の軽い思ひつきからの通信に対して早速十一月号にて二、三の通信を寄せられ、この人手のないと騒がれている世の中に奇特な方もいられるものと驚き且つよろこんでおります。このように沢山の人が応募されるのだから、厳しい試験を科して、その中から最も適した人だけを選んだら面白いんじゃないかと思ひました。前にも書きましたように、家はかなり広いので、十人ぐらい採用の上超特大の犬小屋を長屋式に十並べて收容したら、ちょっとした女王様の生活を味わうことができますわね。そうしたら、私もお勤めをやめてドレイたちを集めて毎

日遊び暮そうかしら。昨日、編集部からのお便りでは、その後大分下僕希望者が集ったそうですが、ちょっと意外なくらいです。なんでしたら編集部の方を一夕お招きして志願者のせんこう試験に立ち合つていただけたらと思つたりしています。私はまだなんといつても、その方は一年生ですから、ベテランの方々に御指導していただき、オール・マゾ・ガーデン・パーティーを開いたりしたら面白いだろうと思ひます。お商売のことはすっかりぬきにして、純粋なリクエーションとして。しかし、そうなるマゾの方々も相当腰をすえて揮をしまつていただかないことには、途中でへこたれたりしたら、ぶっこわしです。競争心をあふるるうちにこちらもいたしますが、とにかく、編集部に来て志願者の手紙はこちらへ頂きます。もし編集部の方で渋られても、酔いつぶしてでも頂きますわ。だから、まだ申込まれない方がありましたら十月号の私の通信をごらんになって、どしどし応募して下さい。芦屋の方に一軒恰好の家を見つけてありますから、応募者が多かつたら、その家を購入の上收容してあげます。（大阪八

佐川奈津子）

十一月号、二十五日の発売日を待ちに待って拝見した所、待望の雄松比良彦氏の女斗美小説がないのです。十月号の雄松氏の御作品、新鮮で生々しい女斗美小説の新しい分野を開拓されたものといえましよう。繰り返えし読んで可愛い肉体系の躍動を想像、楽しみました。雄松氏の御言葉の様にいつの日にか、この美しくも壮々な且つエロチックなスポーツを見ることが出来たらと思ひます。小説中の小林文代選手、可愛らしくも勇ましく、「がんばれ」と声援を送ります。雄松氏に是非御願ひしたいのは引続き小林文代嬢の手記の形で、又は他の形ででも結構です。相星女子高校の外村先生を中心とした練習風景やら、その他相撲大会例えば個人位決定戦など御誌々上にシリーズの形で次々発表して頂き度いです。十一月号の読者通信欄の京都、殿田氏も私と同好、嬉しく思ひました。（東京八雪崎京人生）

読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえ、どうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さい。

さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポート・マニヤ通信▽

新聞記事、週刊誌記事等、関心をお持ちの事項、或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、文通、回答などは読者相互間の交歓誌面の許す限り、つとめて掲載いたします。

書下し原稿募集

新しい風俗雑誌として新発足する本誌のため、新鮮にして読者の大歓迎するよう、新鋭の作家をどしどしとお寄せ下さるよう、左記の要項にて募集いたします。どうか奮って御応募下さい。

募集要項

一、原稿の内容は風俗雑誌の尖端をゆく本誌にふさわしいもの。例えば、小説、創作、研究、資料、連珠、告白、紹介、論説、といったもの。始めとして、浣腸、女装、美、身体各部に對する狂女等、関連したもの等を含めます。

一、表紙、口絵、挿絵、或は写真なども努めて掲載したいと考えます。一、原稿の枚数は別に定めません。一、原稿の短さは、便箋や鉛筆がき都合によつては、自由にします。一、未発表のものに限ります。一、掲載可能な作品は、最近号から漸次発表します。一、題材を提出して、寄稿料を御依頼することはありません。一、採用原稿に對しては、相当の原稿料をお支払致します。一、投稿者、一、誌上で匿名は御自由です。一、又、他へ洩すようなことは致しません。一、故御安心下さい。

奇譚クラブ編集部

☆本誌御愛読の契

予約料

一月分	(1冊)	二百円	△送共▽
三月分	(3冊)	六百円	△送共▽
半年分	(6冊)	千二百円	△送共▽

本誌は各地書店にて毎月二十五日一斉に発売致しますが、若し入手困難でしたら、直接発行所へ代金御送りの上お申込み下さい。予約お申込みの場合は発行と同時に、厳重包装の上、急送申し上げます。尚既刊号の内、在庫分は別項に一覧表を掲げてあります故、御注文頂き次第に急送いたします。

☆代理部分譲品についての案内

○本誌代理部分の譲品は、最近分譲品案内並に読者通信欄の記事中に広告してあります。他に「代理部分譲品総目録」を準備しております。一、十円切手同封にてお申込下さい。目録は十円切手同封にてお申込下さい。急送申し上げます。

○雑誌は厳重包装の上、三種便にて、写真類は密封の第一種便にて、その他は第五種便にてお送りいたします。

○代理部に対する御送金は、なるべく現金書留、振替、定額小為替、小為替、切手代用の節は、八円又は十円切手等の小額のものに願います。

本誌に発表した口絵、写真の複写或は無断転載等は固くお断りいたします。

奇譚クラブ 定価二百円

十二月号

(第十六卷第七十一号)

昭和三十一年十一月二十日印刷

昭和三十一年十二月一日発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)

(昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌 第一二二二号)